西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第33集

堂ヶ嶋第2遺跡

妻北土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県西都市教育委員会

堂ヶ嶋第２遺跡全景

17号地下式横穴墓と１号地下式墓寄生型消失円墳

序

西都市教育委員会では、妻北土地区画整理事業に伴い西都市都市計画課より事前調査の依頼を請け、平成12年11月14から平成13年７月21日まで堂ヶ嶋第２遺跡の発掘調査を行いました。本報告書は、その事業の一環で確認された遺跡発掘調査報告書であります。

今回の調査で消失円墳２基をはじめ、地下式横穴墓21基・土壙墓４基・住居跡６軒・掘立柱建物跡など多くの遺構を確認することができました。本地域には国指定特別史跡・西都原古墳群の円墳群が点在し、本遺跡の南東側には平成12年３月に日向国衙跡も確認されました。このように歴史上重要な地域で今回新たに重要な遺跡が確認されたことは、西都市における古墳時代終末期の埋葬儀礼を考える上で、また、南九州独自の墓制である地下式横穴墓の終焉の指標として、今後、大いに活用されるものと思われます。

本調査の実施及び本書の作成に関しまして、様々なご協力を賜りました。特に西都市都市計画課を始め、地権者の方々には予定した期日よりも長期にわたりご協力いただきまして心から感謝いたします。また、調査期間中にご迷惑をお掛けしました地元の皆様を始め、多くの方々のお陰で調査を行うことができました。

本報告が考古学研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた調査指導の先生方、宮崎県教育庁文化課をはじめ、発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々に心から感謝申し上げます。

平成15年３月31日

西都市教育委員会

教育長　黒　木　康　郎

例　　言

1．本書は、西都市都市計画課が妻北土地区画整理事業を実施するに伴い、仮設住宅建設予定地において平成12年11月14日から平成13年７月21日まで実施した、堂ヶ嶋第２遺跡の調査報告書である。

2．本書使用の遺構実測図は、金丸美保、佐伯民孝、篠原時江、杉田ヨシ、疋田はる子、有馬義人、和田理啓、末永幸寿、落合賢一、古屋美樹、小守容子、甲斐晴子、杉尾美千子、銀鏡佳、長谷川明美、津曲大祐、蓑方政幾、筌瀬明宏が作成し、浄書は筌瀬明宏が行った。

3．本書使用の遺物実測図は、津曲大祐、筌瀬明宏が作成した。

4．本書に掲載した遺構・遺物写真は、津曲大祐・筌瀬明宏が撮影した。なお、遺跡の航空写真は㈱スカイサーベイに依頼した。

5．本書の執筆は第Ⅳ章第２節を津曲大祐、それ以外を筌瀬明宏が執筆した。浄書は筌瀬明宏が担当した。

6．本書に使用した方位は、Fig. 1が平面直角座標系第Ⅱ座標系であり、それ以外は磁北である。この地点の磁北は真北より５°25′再編している。

7．本書に使用した標高は海抜絶対高である。

8．堂ヶ嶋地下式横穴墓群は、第Ⅱ章第２節で紹介しているとおり、今日の調査までに３基の地下式横穴墓が所在していることが確認されていたが、その他にも発見例があるとの話から本書では本遺跡の調査で発見されたものに限定して１号から番号を付す。

9．遺物・土層に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版標準土色帳』に準拠した。

目　　次

第Ⅰ章　序説
第１節．調査に至る経緯 …… 1
第２節．調査組織 …… 1

第Ⅱ章　地理的歴史的環境
第１節．堂ヶ嶋第２遺跡の位置と立地条件 …… 2
第２節．周辺遺跡の調査と成果 …… 2

第Ⅲ章　堂ヶ嶋第２遺跡の調査
第１節．試掘調査の方法と結果 …… 9
第２節．調査の方針と方法 …… 9
第３節．調査経過と概要 …… 10
第４節．堂ヶ嶋第２遺跡の遺構と遺物 …… 11
１．古墳時代時代終末期の消失円墳
１号地下式墓寄生型消失円墳 …… 13
１号消失円墳 …… 16
２．古墳時代時代終末期の地下式横穴墓群
１号地下式横穴墓 …… 18
２号地下式横穴墓 …… 20
３号地下式横穴墓 …… 23
４号地下式横穴墓 …… 25
５号地下式横穴墓 …… 28
６号地下式横穴墓 …… 31
７号地下式横穴墓 …… 33
８号地下式横穴墓 …… 35
９･10号地下式横穴墓 …… 38
11号地下式横穴墓 …… 41
12号地下式横穴墓 …… 43
13号地下式横穴墓 …… 45
14号地下式横穴墓 …… 48
15号地下式横穴墓 …… 51
16号地下式横穴墓 …… 53
17号地下式横穴墓 …… 56
18号地下式横穴墓 …… 62
３．古墳時代終末期の土壙墓
１号土壙墓 …… 64

２号土壙墓(馬埋葬土壙) …… 65
３号土壙墓 …… 67
４号土壙墓 …… 68
４．古墳時代終末期の住居跡
１号住居跡 …… 69
２号住居跡 …… 71
５．弥生時代の住居跡
３号住居跡 …… 72
４号住居跡 …… 73
５号住居跡 …… 75
６．中世の住居跡
６号住居跡 …… 75
７．縄文時代の集石遺構
１号集石遺構 …… 76
２号集石遺構 …… 76
８．その他の遺構 …… 77

第Ⅳ章　調査資料の分析と検討
第１節．堂ヶ嶋第２遺跡の全容 …… 87
第２節．堂ヶ嶋第２遺跡出土の須恵器 …… 89
第３節．堂ヶ嶋第２遺跡の地下式横穴墓の構造 …… 93
第４節．地下式横穴墓の変遷課程と終焉 …… 95

報告書抄録

挿図目次

Fig. 1　堂ヶ嶋第２遺跡の位置と周辺遺跡
Fig. 2　西都原４号地下式横穴墓(1/100)
Fig. 3　酒元ノ上横穴墓群遺構配置図(1/300)
Fig. 4　国分地下式横穴墓群遺構配置図(1/800)
Fig. 5　日向国衙跡遺構配置図(1/400)
Fig. 6　土器類の各部名称とトレース例(1/3)
Fig. 7　地下式横穴墓計測基準(1/50)
Fig. 8　地下式横穴墓の各部名称(1/50)
Fig. 9　堂ヶ嶋第２遺跡遺構分布図(1/200)
Fig. 10　１号地下式墓寄生型消失円墳及び周辺実測図(1/200)
Fig. 11　１号地下式墓寄生型消失円墳周溝土層断面図(1/40)
Fig. 12　周溝内須恵器破砕甕実測図(1/20)
Fig. 13　周溝内土師器破砕甕実測図(1/20)
Fig. 14　周溝内出土遺物実測図(1/4、14･15は1/6)
Fig. 15　１号消失円墳及び周辺実測図(1/200)
Fig. 16　１号消失円墳周溝土層断面実測図(1/40)
Fig. 17　１号消失円墳周溝出土遺物実測図(1/4)
Fig. 18　１号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 19　１号地下式横穴墓竪坑土層断面図(1/40)
Fig. 20　１号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 21　１号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4、34のみ1/2)
Fig. 22　２号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 23　２号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 24　２号地下式横穴墓竪坑土層断面図(1/40)

Fig. 25　２号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4、41のみ1/2)
Fig. 26　３号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 27　３号地下式横穴墓竪坑土層断面図(1/40)
Fig. 28　３号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 29　３号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4)
Fig. 30　４号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 31　４号地下式横穴墓竪坑土層断面図(1/40)
Fig. 32　４号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 33　４号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4、63のみ1/2)
Fig. 34　５号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 35　５号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 36　５号地下式横穴墓土層断面図(1/40)
Fig. 37　５号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4、69～71は1/2)
Fig. 38　６号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 39　６号地下式横穴墓土層断面図(1/40)
Fig. 40　６号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4)
Fig. 41　６号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 42　７号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 43　７号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 44　７号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4、85・86は1/2)
Fig. 45　８号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 46　８号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 47　８号地下式横穴墓竪坑土層断面図(1/40)
Fig. 48　８号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4、92のみ1/2)
Fig. 49　９・10号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 50　９・10号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 51　９・10号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4)
Fig. 52　11号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 53　11号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 54　12号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 55　12号地下式横穴墓竪坑土層断面図(1/40)
Fig. 56　12号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 57　12号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4)
Fig. 58　13号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 59　13号地下式横穴墓土層断面図(1/40)
Fig. 60　13号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4、106～108は1/)
Fig. 61　13号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 62　14号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 63　14号地下式横穴墓土層断面図(1/40)
Fig. 64　14号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 65　14号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4、120のみ1/2)
Fig. 66　15号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 67　15号地下式横穴墓閉塞石実測図 (1/40)
Fig. 68　15号地下式横穴墓竪坑土層断面図(1/40)
Fig. 69　15号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 70　15号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4、127のみ1/2)
Fig. 71　16号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 72　16号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 73　16号地下式横穴墓土層断面図(1/40)
Fig. 74　16号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4、131～133は1/2)
Fig. 75　17号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 76　17号地下式横穴墓・竪坑土層断面図(1/60)
Fig. 77　17-1号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 78　17-2号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 79　17-3号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 80　17-4号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 81　17号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/2・1/4)
Fig. 82　18号地下式横穴墓位置図(1/100)
Fig. 83　18号地下式横穴墓竪坑土層断面図(1/40)
Fig. 84　18号地下式横穴墓出土遺物実測図(1/4)
Fig. 85　18号地下式横穴墓実測図(1/40)
Fig. 86　１号土壙墓実測及び土層断面図(1/40)
Fig. 87　１号土壙墓出土遺物実測図(1/4、158・159は1/2)
Fig. 88　２号土壙墓(馬埋葬土壙)実測図(1/40)
Fig. 89　２号土壙墓出土遺物実測図(1/2)
Fig. 90　３号土壙墓実測及び土層断面図(1/40)
Fig. 91　３号土壙墓出土遺物実測図(1/40)
Fig. 92　４号土壙墓実測図(1/40)
Fig. 93　４号土壙墓出土遺物実測図(1/4)
Fig. 94　１号住居跡実測及び土層断面図(1/40)
Fig. 95　１号住居跡出土遺物実測図(1/4)
Fig. 96　２号住居跡実測図(1/40)
Fig. 97　２号住居跡出土遺物実測図(1/4)
Fig. 98　３号住居跡実測及び土層断面図(1/40)
Fig. 99　３号住居跡出土遺物実測図(1/2・1/4)
Fig. 100　４・５号住居跡実測図(1/100)

Fig. 101　4・5号住居跡土層断面図(1/40)
Fig. 102　4・5号住居跡出土遺物実測図(1/4)
Fig. 103　6号住居跡実測及び土層断面図(1/40)
Fig. 104　1号集石遺構実測図(1/40)
Fig. 105　2号集石遺構実測図(1/40)
Fig. 106　2Aグリッド合わせ甕実測図(1/20)
Fig. 107　1Aグリッド及び溝1・2出土遺物実測図(1/4・185～187は1/6)
Fig. 108　牛牧1号墳と地下式横穴墓(1/250)
Fig. 109　坏蓋法量分布図
Fig. 110　坏身法量分布図
Fig. 111　堂ヶ嶋第2遺跡出土須恵器編年試案
Fig. 112　堂ヶ嶋第2遺跡地下式横穴墓変遷推定図

図版目次

巻頭PL.　1　堂ヶ嶋第2遺跡全景
巻頭PL.　2　17号地下式横穴墓と1号地下式墓寄生型消失円墳

PL.　1
1.　堂ヶ嶋第2遺跡全景と周辺
2.　堂ヶ嶋第2遺跡全景
PL.　2
3.　1号地下式墓寄生型消失円墳掘削状況
4.　1号地下式墓寄生型消失円墳完掘状況
PL.　3
5.　1号地下式墓寄生型消失円墳(検出状況)
6.　1号地下式墓寄生型消失円墳周溝北東側土層断面
7.　1号地下式墓寄生型消失円墳周溝南東側土層断面
8.　1号地下式墓寄生型消失円墳周溝南東側土層断面
9.　1号地下式墓寄生型消失円墳周溝北西側土層断面
10.　1号地下式墓寄生型消失円墳周溝北西側須恵器破砕甕
11.　1号地下式墓寄生型消失円墳周溝南東側土師器破砕甕
12.　1号地下式墓寄生型消失円墳周溝南東側土師器破砕甕
PL.　4
13.　1号消失円墳検出状況
14.　1号消失円墳検出状況
15.　1号消失円墳検出状況
16.　1号消失円墳掘削状況
17.　1号消失円墳遺物出土状況
18.　1号消失円墳遺物出土状況
19.　1号消失円墳周溝南側土層断面
20.　1号消失円墳周溝西側土層断面
PL.　5
21.　1号地下式横穴墓玄室上検出状況
22.　1号地下式横穴墓竪坑半裁状況
23.　1号地下式横穴墓竪坑完掘状況
24.　1号地下式横穴墓完掘状況
25.　1号地下式横穴墓遺物出土状況
26.　1号地下式横穴墓遺物出土状況
27.　2号地下式横穴墓竪坑半裁状況
28.　2号地下式横穴墓閉塞状況
PL.　6
29.　2号地下式横穴墓竪坑完掘状況
30.　2号地下式横穴墓竪坑完掘状況
31.　2号地下式横穴墓(羨門から玄室を望む)
32.　3号地下式横穴墓竪坑半裁状況
33.　3号地下式横穴墓竪坑半裁状況
34.　3号地下式横穴墓完掘状況
PL.　7
35.　3号地下式横穴墓遺物出土状況
36.　3号地下式横穴墓遺物出土状況
37.　3号地下式横穴墓(竪坑から玄室を望む)
38.　3号地下式横穴墓(羨門から玄室を望む)
39.　4号地下式横穴墓竪坑半裁状況
40.　4号地下式横穴墓竪坑遺物出土状況

PL. 8

41. 4号地下式横穴墓竪坑土層断面
42. 4号地下式横穴墓竪坑完掘状況
43. 4号地下式横穴墓遺物出土状況(右側壁側)
44. 4号地下式横穴墓遺物出土状況(中央)
45. 4号地下式横穴墓遺物出土状況(左側壁側)

PL. 9

46. 5号地下式横穴墓竪坑半裁状況
47. 5号地下式横穴墓竪坑完掘状況
48. 5号地下式横穴墓遺物出土状況
49. 5号地下式横穴墓鑿痕跡(右側壁側)
50. 5号地下式横穴墓鑿痕跡(左側壁側)
51. 5号地下式横穴墓鑿痕跡(左側壁側)
52. 6号地下式横穴墓半裁状況
53. 6号地下式横穴墓半裁状況

PL. 10

54. 6号地下式横穴墓完掘状況
55. 6号地下式横穴墓遺物出土状況
56. 7号地下式横穴墓遺物出土状況
57. 7号地下式横穴墓遺物出土状況
58. 7号地下式横穴墓遺物出土状況(右側壁側)
59. 7号地下式横穴墓完掘状況

PL. 11

60. 8号地下式横穴墓検出状況
61. 8号地下式横穴墓竪坑土層断面
62. 8号地下式横穴墓竪坑土層断面
63. 8号地下式横穴墓(竪坑から玄室を望む)
64. 8号地下式横穴墓玄室内状況
65. 8号地下式横穴墓玄室内状況
66. 8号地下式横穴墓完掘状況

PL. 12

67. 9号地下式横穴墓玄室内土層堆積状況
68. 9・10号地下式横穴墓全景
69. 9号地下式横穴墓玄室内状況(左側壁側)
70. 9号地下式横穴墓玄室内状況(右側壁側)
71. 9号地下式横穴墓全景
72. 10号地下式横穴墓玄室内状況(右側壁側)
73. 10号地下式横穴墓全景

PL. 13

74. 11号地下式横穴墓全景
75. 11号地下式横穴墓全景
76. 12号地下式横穴墓竪坑土層断面
77. 12号地下式横穴墓閉塞状況
78. 12号地下式横穴墓閉塞状況
79. 12号地下式横穴墓閉塞状況
80. 12号地下式横穴墓玄室内状況

PL. 14

81. 12号地下式横穴墓遺物出土状況
82. 12号地下式横穴墓完掘状況
83. 13号地下式横穴墓竪坑掘削状況
84. 13号地下式横穴墓竪坑半裁状況
85. 13号地下式横穴墓全景
86. 13号地下式横穴墓(羨門から玄室を望む)
87. 13号地下式横穴墓玄室内状況(左側壁側)
88. 13号地下式横穴墓玄室内状況(右側壁側)

PL. 15

89. 14号地下式横穴墓竪坑掘削状況
90. 14号地下式横穴墓竪坑半裁状況
91. 14号地下式横穴墓竪坑完掘状況
92. 14号地下式横穴墓粘土層半裁状況
93. 14号地下式横穴墓(羨門から玄室を望む)
94. 14号地下式横穴墓玄室内状況
95. 15号地下式横穴墓検出状況
96. 15号地下式横穴墓竪坑土層断面

PL. 16

97. 15号地下式横穴墓閉塞状況
98. 15号地下式横穴墓閉塞表面除去後
99. 15号地下式横穴墓完掘状況
100. 15号地下式横穴墓玄室内状況
101. 16号地下式横穴墓検出状況
102. 16号地下式横穴墓竪坑土層断面
103. 16号地下式横穴墓竪坑全景
104. 16号地下式横穴墓(羨門から玄室を望む)

PL. 17

105. 17号地下式横穴墓検出状況
106. 17号地下式横穴墓竪坑半裁状況

107. 17号地下式横穴墓竪坑土層断面
108. 17号地下式横穴墓閉塞前遺物出土状況
109. 17号地下式横穴墓竪坑完掘状況
110. 17号地下式横穴墓閉塞状況
111. 17号地下式横穴墓閉塞状況
112. 17号地下式横穴墓閉塞基底石検出状況
PL. 18
113. 17号地下式横穴墓(竪坑から羨門を望む)
114. 17号地下式横穴墓(玄室側から竪坑を望む)
115. 17号地下式横穴墓全景
116. 17-1号地下式横穴墓玄室内状況
117. 17-2号地下式横穴墓(竪坑から玄室を望む)
PL. 19
118. 17-3号地下式横穴墓(竪坑から玄室を望む)
119. 17-4号地下式横穴墓(竪坑から玄室を望む)
120. 18号地下式横穴墓竪坑半裁状況
121. 18号地下式横穴墓閉塞状況
122. 18号地下式横穴墓閉塞状況
123. 18号地下式横穴墓全景
124. 18号地下式横穴墓遺物出土状況
PL. 20
125. １号土壙墓半裁状況
126. １号土壙墓半裁状況
127. １号土壙墓遺物出土状況
128. １号土壙墓完掘状況
129. ２号土壙墓(馬埋葬土壙)全景
130. ２号土壙墓(馬埋葬土壙)遺物出土状況
PL. 21
131. ３号土壙墓遺物出土状況
132. ４号土壙墓遺物出土状況
133. １号住居跡検出状況
134. １号住居跡遺物出土状況
135. １号住居跡土層断面
136. ２号住居跡全景
137. ３号住居跡遺物出土状況
138. ３号住居跡土層断面
PL. 22
139. ４・５号住居跡検出状況
140. ４・５号住居跡掘削状況
141. ４・５号住居跡掘削状況
142. ６号住居跡掘削状況
143. ２Ａグリッド合わせ甕出土状況
144. ２Ａグリッド合わせ甕上部破片除去後
145. ２Ａグリッド合わせ甕上部破片除去後
PL. 23
146. １・２号集石遺構敷石検出状況
147. １号集石遺構敷石検出状況
148. ２号集石遺構敷石検出状況
149. １Ａグリッド188・189・190出土状況
PL. 24～31
各遺構出土遺物

表　目　次

Tab. 1　堂ヶ嶋第２遺跡地下式横穴墓一覧
Tab. 2　堂ヶ嶋第２遺跡土壙墓一覧
Tab. 3　堂ヶ嶋第２遺跡住居跡一覧
Tab. 4　堂ヶ嶋第２遺跡地下式横穴墓計測値一覧
Tab. 5　堂ヶ嶋第２遺跡出土遺物観察表
Tab. 6　堂ヶ嶋第２遺跡地下式横穴墓の消長表
Tab. 7　地下式横穴墓初葬時と竪坑傾斜角
Tab. 8　地下式横穴墓最終埋葬時と竪坑傾斜角
Tab. 9　地下式横穴墓平面プランと竪坑傾斜角

第Ⅰ章　序　　説

第１節．調査に至る経緯

平成12年８月、西都市都市計画課より西都市大字三宅字堂ヶ嶋における妻北土地区画整理事業に伴う仮設住宅建設予定地の約3,000㎡の埋蔵文化財事前調査願がなされた。

西都市教育委員会では、この周辺一帯に国指定特別史跡・西都原古墳群の一部が点在し、また、以前から周辺で地下式横穴墓や弥生から古墳時代にかけての住居跡など、多くの遺跡が確認されていることから確認調査の必要を認めた。このことから、平成12年11月14日より工事対象区内に2×4mのトレンチを26本設定し、調査を行った。

試掘調査の結果、この調査区は以前、茶畑として利用されていたことから表層は著しく攪乱を受けていたが、その下層に関しては良好に遺存していた。この層上面からは縄文時代から古墳時代の土器片が出土し、工事対象面積全域に生活遺構などが拡がっている可能性が高くなった。

このことから、上記の試掘調査の結果を踏まえ、妻北土地区画整理事業担当課である西都市都市計画課と協議を行い、調査区全面の本発掘調査を実施することとした。

第２節．調査組織

本遺跡の調査にあたって以下の組織を準備した。また、調査・整理作業課程において各方面の協力をお願いした。

調査主体：西都市教育委員会文化課文化財係

教育長	黒木康郎	文化課長	阿万定治
文化課長補佐	奥野拓美	文化財係長	蓑方政幾

調査庶務：鹿嶋修一

調査担当：筌瀬明宏・津曲大祐

調査指導：加藤真二（文化庁文化財記念物課）、日高正晴（西都原古墳研究所長）

調査補助：有馬義人・松永幸寿（新富町教育委員会）、和田理啓・今塩屋毅行・落合賢一・古屋美樹（宮崎県埋蔵文化財センター）、銀鏡佳（九州大学）

調査作業：井上六雄・緒方タケ子・押川ツル・廻田勉・廻田和子・金丸美保・川野照夫・黒木トシ子・児玉征子・佐伯民孝・椎葉重満・椎葉智佐子・篠原時江・杉田ヨシ・関治代・長谷川クミエ・浜田スミ・疋田はる子・光森スミ子・山元浩子・横山ナオ子・和田厚子（以上、西都市発掘作業員）、甲斐晴子・小守容子・杉尾美千子（以上、新富町発掘作業員）

整理作業：杉田英子・中原昭美・長谷川明美

調査・整理にあたり、下記の方々からのご教示・ご指導等を賜った。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

小田富士雄（福岡大学）、水野正好（奈良大学）、柳沢一男（宮崎大学）、大西智和（鹿児島女子短期大学）、中園聡（鹿児島国際大学）、橋本達也（鹿児島大学）、北郷泰道・東憲章・松林豊樹（宮崎県教育委員会）、長津宗重（宮崎県埋蔵文化財センター）、奥村俊久（筑紫野市教育委員会）、石井扶美子（夜須町教育委員会）、塚本敏夫（元興寺文化財研究所）他多数。

第Ⅱ章　地理的歴史的環境

第１節．堂ヶ嶋第２遺跡の位置と立地条件（Fig. １）

西都市街地の西、標高50～80mには通称西都原（さいとばる）と呼ばれる台地がある。この西都原台地は、九州山地から南南東に向かって舌状に細長く延びた洪積世台地である。台地東側には南北帯状に標高約20～30mの中間台地が延び、さらに下ると標高12m程の沖積平野へと至る。西都市街地は、この沖積平野に位置し、この平野の北から東側を宮崎県で第３位の水量を誇る一ツ瀬川が蛇行している。

西都原台地及び中間台地には、陵墓参考地である男狭穂塚・女狭穂塚を始め、前方後円墳30基・方墳１基・円墳278基の大小古墳で構成された国指定特別史跡・西都原古墳群が所在する。これら古墳の他に南九州的墓制とされる地下式横穴墓が台地上に現在までに12基、斜面に墓道が斜めに穿たれ、それに玄室が取り付く横穴墓と地下式横穴墓の折衷型とされるタイプの横穴墓[1]も13基程確認されている。

西都原台地の北西側には、縄文時代早期の集石遺構及び後期の土器片・土錘が多量に確認された宝財原遺跡（ほうざいばる）[2]、台地北東端には弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落群である新立遺跡（しんたて）[3]などが所在している。西都原台地が墓域として選地されてから台地上の生活遺構は極端に減少するが、台地南端の寺原（てらばる）集落には古墳時代の大集落群が所在していることも予想されている。

また、西都原台地東から南東にかけて約30m下った中間台地には、北に日向国衙跡、南東に日向国分尼寺跡（推定）、南に日向国分寺跡が所在している。これら古代の遺跡以外にも、西都原古墳群の一部が点在することから古墳時代の遺構なども多く確認されいる。

堂ヶ嶋第２遺跡は西都原台地下の中間台地北東端（標高約23～25m）に所在する。約10年程前までお茶畑として利用されていたが、調査時には休耕地となっていた。この周辺には、西都原古墳群第243～260号墳（円墳）が所在している。

本遺跡の南東には稚児ヶ池と呼ばれる池があり、池の対岸で平成12年３月に宮崎県教育委員会の調査により日向国衙跡が確定されている。

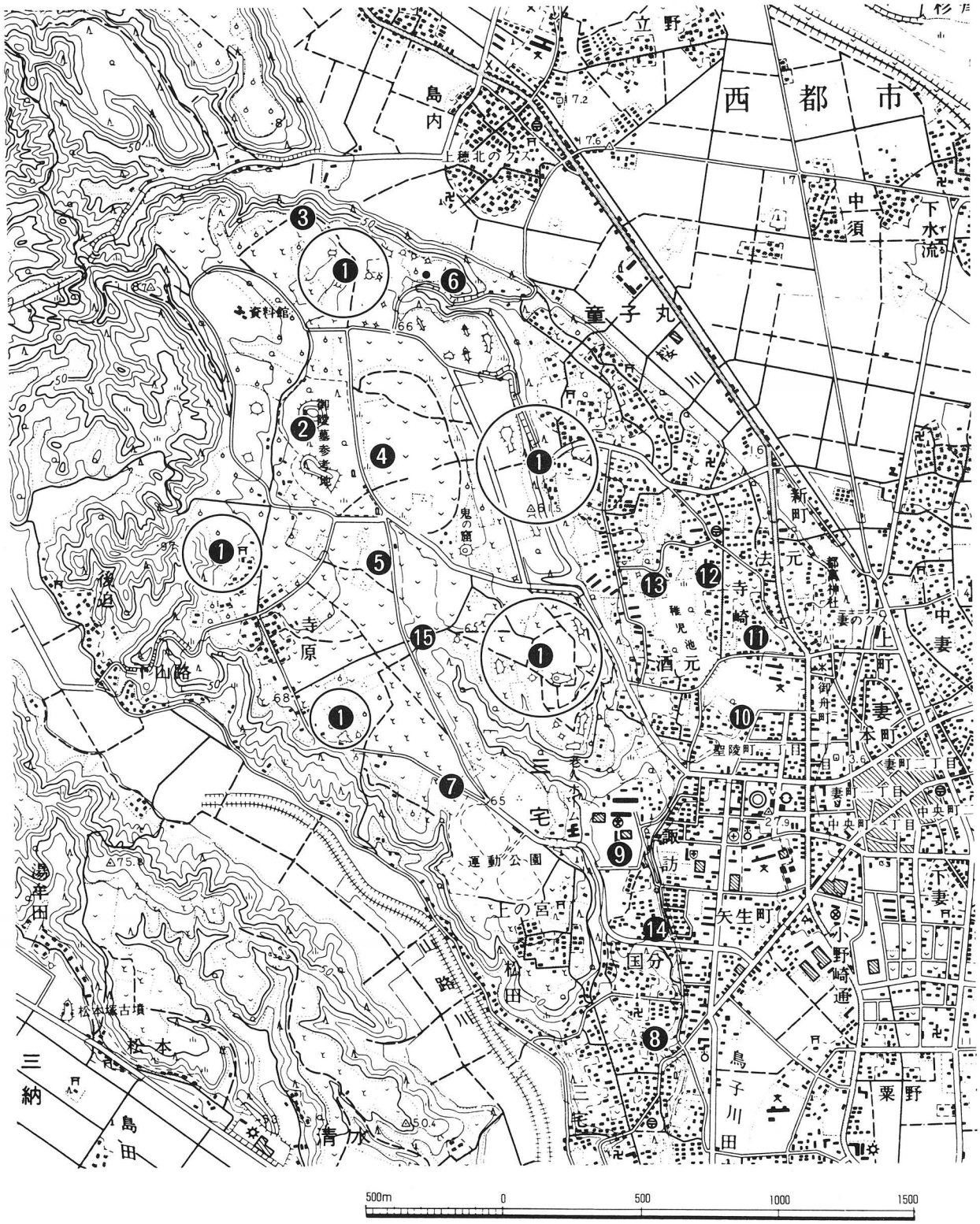
第２節．周辺遺跡の調査と成果

堂ヶ嶋第２遺跡が所在する堂ヶ嶋地区周辺一帯は大字三宅の中に含まれ、前述したように弥生時代から古代にかけての遺跡が多く所在する。しかし、考古学的な調査は、今日まで区画整理事業等の大規模な開発行為が行われなかったことから十分に行われていなかった。

この周辺の調査が最初に行われたのは、日向考古調査団が寺崎遺跡の調査を開始したのに端を発する。その後、堂ヶ嶋第２遺跡の北方に所在する西都原古墳群第245～247号墳の周辺から昭和36年に堂ヶ嶋地下式横穴墓群１号地下式横穴墓、昭和44年に２号地下式横穴墓が、それぞれ玄室の天井陥没により確認されている。また、平成7年度には、西都原古墳群の指定地拡大に伴い、周溝から掘削された地下式横穴墓が１基、竪坑のみ調査されている。

平成２年度には国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査が、平成２～７年度には日向国衙跡範囲確認調査、平成８～11年度には国衙保存整備基礎調査が宮崎県教育委員会により実施されている。

それ以外には、昭和63年に県道高鍋高岡線から寺崎・法元地区に延びる都市計画道路建設時に酒元遺跡の調査が西都市教育委員会により実施されている。



1. 西都原古墳群　2. 陵墓参考地（男狭穂塚・女狭穂塚）　3. 丸山遺跡　4. 西都原遺跡
5. 寺原遺跡　6. 新立遺跡　7. 原口第２遺跡　8. 日向国分寺跡　9. 日向国分尼寺跡
10. 酒元遺跡　11. 寺崎遺跡（日向国衙跡）　12. 寺崎遺跡（昭和23年調査）
13. 堂ヶ嶋第２遺跡　14. 国分遺跡　15. 酒元ノ上横穴墓群

Fig. 1　堂ヶ嶋第２遺跡の位置と周辺遺跡

1．寺崎遺跡[4]

寺崎遺跡は、西都市街地から北へ約700m、稚児ヶ池東の標高20m程の台地上、西都市大字三宅字寺崎他に所在する。この遺跡内には日向国衙跡、また西側の台地上には西都原古墳群が所在する。

寺崎遺跡の調査は、昭和23年に日向考古調査団が実施した調査、その後、平成２～11年度に宮崎県教育委員会が国衙跡確認調査が行われている。ここでは、日向考古調査団の調査に関して記す。

この遺跡の調査では、総面積136㎡にわたり、深さ20～40cmの柱穴状の穴、溝、敷石、方形の穴、焼土、粘土、叩き占められた床面などが混在して確認された。また、出土遺物は、土師器・須恵器片、土錘、硯、倭鏡、石錘、鉄滓などである。この遺跡の性格は、古墳時代後半に住居が営まれ、鎌倉時代から室町時代にかけて経塚らしきものが造られた可能性がある。

2．酒元遺跡[5]

酒元遺跡は、西都市街地から北北西へ約1km、標高約30mの台地上、西都市大字三宅字須先他に所在する。昭和63(1988)年、西都市大字三宅字酒元の平田・童子丸線道路新設工事に伴い、西都市教育委員会が発掘調査を行った。アカホヤ火山灰層を遺構検出面とし、竪穴式住居６軒及び円形・楕円形・長方形の土壙、溝状遺構などが確認された。

住居跡は４本柱と予想され、最小規模の３号が3.5×3.02m、最大規模の２号は5.35×5.67mである。

本遺跡は、出土遺物や遺構から古墳時代中期前半から中期後葉頃に営まれた集落跡である。

また、本遺跡からは高坏が多く出土しており、祭祀色の強い集落跡の可能性が高く、西都原古墳群との関係など当地域における重要な集落として位置づけられる。

3．西都原地下式横穴墓群[6]～[13]（Fig. 2）

西都原地下式横穴墓群は、西都市街地から北へ約１kmの標高約65mの西都原台地上北と南の２箇所に所在が確認されている。

現在までに10度にわたる調査が行われ、合計12基の地下式横穴墓が確認されている。

地下式横穴墓群は、台地北東端の第２・３古墳群に展開する第１集団の11基(2～12号)と西都原台地の南端、酒元ノ上横穴墓群の北側に所在する第２集団の１基(１号)がある。第１集団と第２集団は約１km離れて所在する。また、第２集団の４号は他の地下式横穴墓から北西に約250mほど離れて所在する。

群内の地下式横穴墓は、妻入り長方形有屍床タイプ１基(４号)以外は全て平入りの正方形・長方形、不整形楕円形タイプである。

中でも４号は、妻入り長方形屍床タイプであり、玄室長5.5m、幅2.2m、高さ1.6mの長大な玄室平面形を有する。玄室内には、幅45cm、深さ10cm、長さ350cmの割竹状の粘土床を有し、その中より木片等も多数確認されたことから木棺を有していたと考えられる。また、玄室奥壁及び両側壁に鑿痕跡、両側壁に朱が明瞭に遺存していた。割竹型木棺をもち込んだような粘土床を設けるものには、国富町の六野原地下式横穴墓群２・10・30・34号及び本庄13(宗仙寺12)号の計５基が、また、同様なプラ

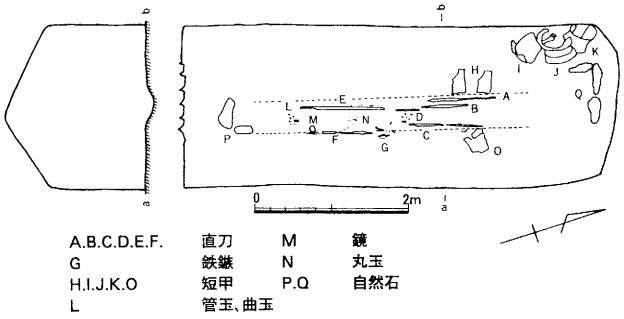


Fig. 2　西都原４号地下式横穴墓 (1/100) 註(７)を一部改変

ンで石により屍床を設けた宮崎市の下北方５号や国富町の本庄14(宗仙寺11)号などが確認されている。

これら地下式横穴墓の年代は５世紀中から後半頃に想定され、高塚墳の内部主体を地下式横穴墓の玄室内に採用したものとして重要である。

各地下式の天井構造は、切妻形・アーチ形などに区分される。竪坑は、方形及び縦長長方形をなす。床面積は2.5～4.5㎡前後の中型タイプがほとんどであり、４号のみ12.1㎡を有する。

閉塞方法に関しては、４・９号は川原石による羨門部閉塞であるが、他のものに関しては板か粘土塊を用いて閉塞を行ったのであろうと思われる。但し、竪坑の羨門部側には、木板をはめ込んだ溝などは確認されていない。粘土塊閉塞の場合は発掘時、羨門部の埋土で明らかになるであろうし、竪坑の土層堆積状況から羨門部側に上層からの流れ込みがある場合に関しては木板閉塞の可能性も高いことから、調査時に十分な検討が必要であろう。

副葬品は、須恵器坏・ハソウ・提瓶・平瓶などの容器を伴うものが多い。但し、４号は短甲・直刀・鉄鏃・鏡・玉類などの豊富な副葬品を有する。これらの遺物から、築造年代に関しては４号が５世紀後半頃の年代が想定されるまた、他の地下式横穴墓は６世紀中頃から７世紀中頃の築造と想定される。

４．酒元ノ上横穴墓群墓群[1] (Fig. 3)

酒元ノ上横穴墓群は、西都市街地から北へ約１kmの標高約65mの西都原台地上南側に所在する。

平成６年、平成５年度から実施されていた圃場整備に伴い、円墳周溝と横穴墓が所在することが確認された。この横穴墓は斜面にやや傾斜をもった墓道を穿ち、それに複数の玄室を伴う。玄室の前には深さ10cm程の方形の窪みが付随するものも確認されており、墓道の構造からも地下式横穴墓と横穴墓の折衷型とされている。調査の結果、６本の墓道が北東側斜面に穿たれていることが確認された。また、6-2号墓からは頭位を南にとった良好な人骨が確認され、須恵器蓋坏を枕にしている。これら玄室は平入り楕円形状の玄室プランであり、天井はドーム形である。これら横穴墓に関しては現在までに４基が調査されたのみであり全容は不明であるが、陶邑TK209型式新段階からTK217型式新段階に築造及び使用されたようである。

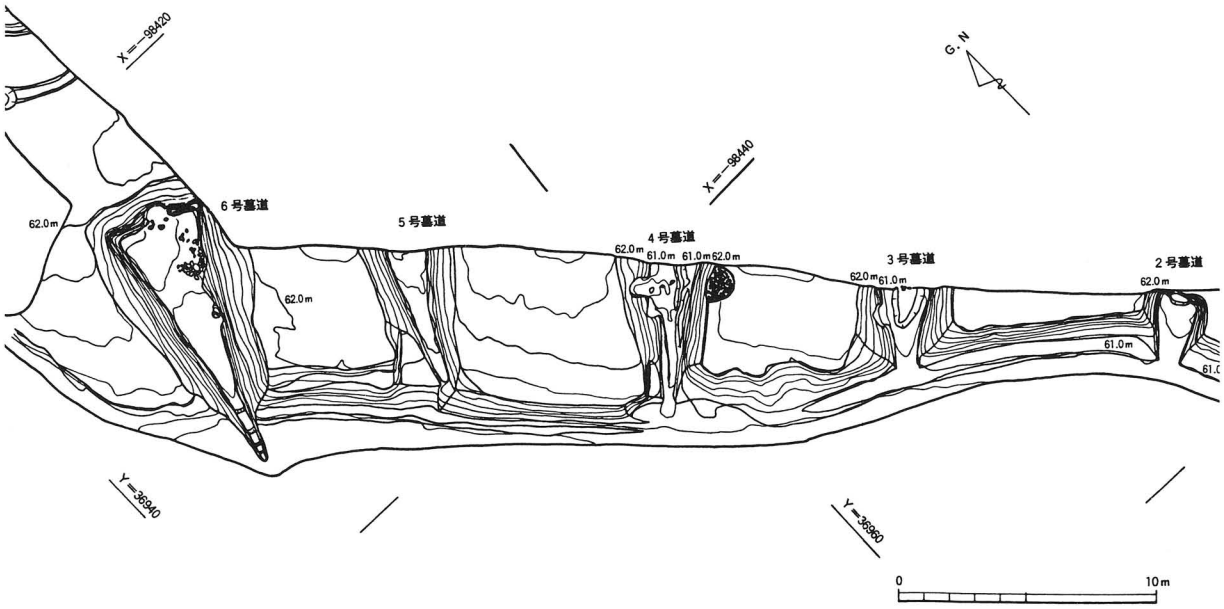


Fig. 3　酒元ノ上横穴墓群遺構配置図 (1/300) 註(1)を一部改変

5．堂ヶ嶋地下式横穴墓群[14]～[16]

堂ヶ嶋地下式横穴墓群は、西都市街地から北へ約１kmの標高24m前後、周辺水田との比高差８mの中間段丘上、今回調査を行った一帯から北側に展開する。

昭和36･44年に周辺がみかん畑として利用され開墾中天井部が崩落し、それぞれ１基、計２基(１・２号)の地下式横穴墓が確認された。これらは墳丘下に寄生しているのか、単独に所在しているのかについては、天井部が陥没して確認されたことから不明である。しかし、１号周辺には西都原第245～247号墳(円墳)が取り巻き245号墳と246号墳の距離が約10mで間に別の古墳が所在する可能性は低いと思われることから、単独で所在していたと考えられる。また、２号もこの周辺から確認されているが検出箇所に関しては明確にできない。また、平成７年度にもう１基竪坑のみ確認であるが円墳周溝内に検出されている。

１号は平入り楕円形プランで竪坑を含む全長は2.38m、奥行0.98m、幅1.5mで高さは不明である。２号は平入り楕円形プランで奥行1.4m、幅2.1m、高さ1.2mの蒲鉾型である。玄室内に10cm程の川原石を全面に敷き詰めてある。１号からは須恵器坏身２点、土師器坏身２点と壷１点、２号からは金環１点が出土したが年代に関しては不明である。

6．国分地下式横穴墓群[16]･[17]（Fig. 4）

西都市街地から北北東へ約0.7kmの一ツ瀬川の氾濫により形成された西都原台地の東側の洪積世台地上標高約35m、周辺水田との比高差24mに所在する。

平成11年度からの継続事業である市営国分住宅新築に伴い工事対象面積2,700㎡を平成12年12月18日～平成13年２月９日に西都市教育委員会が調査を実施した。

本地区の東側に関しては、平成11年度に調査を行っており弥生時代から平安時代にかけての遺物がかなり出土したが、旧国分住宅の基礎工事のため遺構面がかなり攪乱されておりどのような遺跡であるのかの判断は不可能であった。

本地下式横穴墓群も東側同様、旧国分住宅建設時の基礎が縦横無尽に拡がっておりアカホヤ下層までかなり攪乱されていた。確認できた遺構は、消失円墳２基及びそれぞれの周溝から地下式横穴墓が計４基、調査区南側に竪穴式住居跡１軒である。

消失円墳２基に伴うそれぞれの周溝からは、地下式横穴墓が１号消失円墳(直径約14m)の周溝より３基(１～３号)、２号墳(直径約15m)の周溝より１基(４号)検出された。

これらは地下式横穴墓は、４基とも平入り構造であり方形プランないし楕円形プランである。玄室規模は最大のものが２号で約4.55㎡、最小のものが４号で約1.21㎡であった。屋根構造に関しては、１～３号は全て天井一部が崩落していたが、４号はアーチ形である。また、２号には玄室の奥壁及び側壁、玄室中央部に排水溝が確認された。

これら地下式横穴墓の中で最も豊富な副葬品を有するのは１号で、須恵器蓋坏･椀･高坏、耳環、イモガイ製貝輪、環状鏡板付轡、長頸鏃などが出土した。また、人骨もかなり遺存状態は悪かったが確認された。

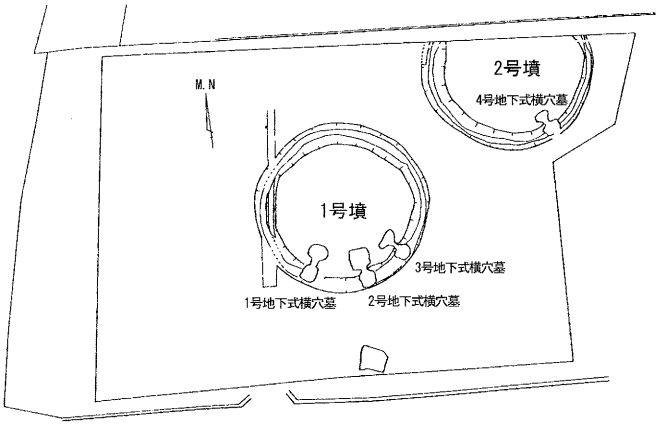


Fig. 4　国分地下式横穴墓群遺構配置図(1/800)

各地下式横穴墓年代は出土遺物から、４号はTK209型式併行期、１～３号はTK217型式併行期頃と推定される。最も面積も狭く、天井も低い不定形楕円形タイプの４号が、これら４基の地下式横穴墓内で最も古い土器を伴うことは、以前から想定されてきた方形から楕円形プランへの変遷という平面形態のみではなく、TK209型式併行期頃にかなり多様な平面形が併用されていたと思われる。

いずれの地下式横穴墓も竪坑が周溝内から掘削されており、玄室は消失円墳の中央方向へ延びていた。地下式横穴墓は消失円墳の南西から南東にかけて配置されており、選地に何らかの規制が働いていたと思われる。これら地下式式横穴墓は古墳周溝がある程度埋まった段階に竪坑を掘削していることなどから消失円墳よりは後出であり、西都原古墳群に祀られた階層よりやや低く、時代的にも若干送れた者達が祖先の古墳に寄生的に墓を造ったのではなかろうかと思われる。

７．国衙･郡衙･古寺跡等の調査[18]～[20]（Fig. ３）

西都市街地の北方、現在、妻神社が所在している北側、日向国衙跡の東側に位置する。この遺跡は、遺跡確認調査の目的で平成２(1990)年に西都市教育委員会が２箇所の調査を行った。調査の結果、I地点から版築状遺構及び敷石遺構、J地区から土坑及び柱穴群が確認されている。また、平成３～４年に宮崎県教育委員会が国衙･郡衙･古寺跡等範囲確認調査で３箇所の調査を行った。その結果、平成４年に調査を行ったA･B地区で柱穴等が確認され、A地区では３点の軒丸瓦、B地区では石帯が出土している。

８．日向国衙跡[21]･[22]

日向国衙跡は西都市街地の北方、標高約20mの中位段丘面上に所在する。西側の丘陵上には特別史跡･西都原古墳群が所在し、また、直線で南方約1.2kmには日向国分寺跡が所在する。日向国衙跡の調査は、日向国衙推定箇所が「古代国府の研究」で宮崎県内の５ヶ所に想定され、内４ヶ所は西都市内に想定された。その後、宮崎県教育委員会により昭和63年から詳細分布調査、範囲確認調査、保存整備基礎調査と13年におよび調査、平成元年度に西都市教育委員会が行った調査の結果、平成12年３月に西都市大字三宅字寺崎･法元地区が日向国衙跡と確定された。現在までに確認されている遺構は、正殿跡、東脇殿跡、築地塀跡などである。但し、創建期の国衙跡は他に所在した可能性が指摘されている。

これらの調査を経て、平成12年３月に約1.8haが指定地の候補となり、現在国指定申請に向かっている。

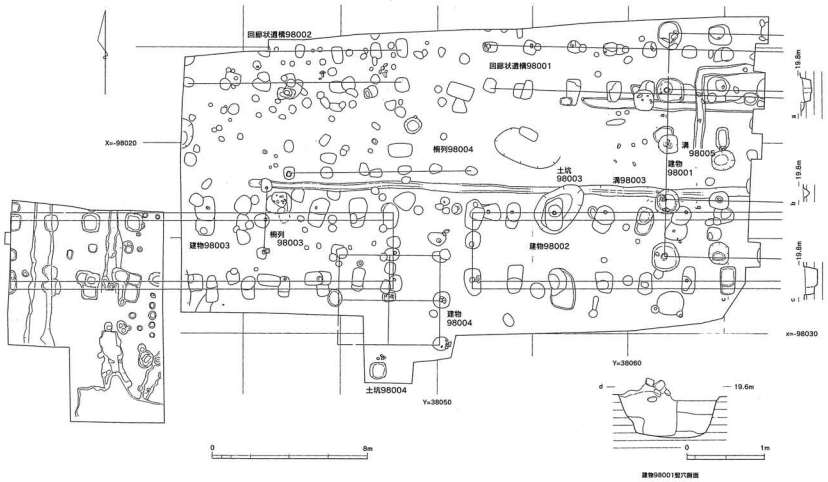


Fig. ５　日向国衙跡遺構配置図（1/400）註(21)を一部改変

9．周辺の試掘確認調査及び地中レーダーによる遺跡確認調査[23]

堂ヶ嶋第２遺跡調査の前に、本遺跡と同様に土地区画整理事業施行の為の事前調査として、酒元地区の約2,300㎡の確認調査を実施した。結果、中世の安養寺跡が所在していることが予想され、仏具などが確認できた。また、堂ヶ嶋第２遺跡調査終了後、土地区画整理事業内全域の遺跡確認調査をトレンチ調査により実施した。トレンチの規模等に関しては空き地面積の大小でまちまちであるが、全体で52地区の調査を行った。結果、ほとんどの箇所で遺跡が確認でき、明らかになったものだけでも消失円墳５基、住居跡61軒、地下式横穴墓１基、集石遺構３基、他に溝状遺構やピットなどが検出された。

また、この確認調査と併行し、西都市都市計画課では掘削不可能である道路や土地に関して地中レーダーによる遺跡探査も行った。結果的には、670箇所もの異常反応が確認され、地下式横穴墓89基などの所在が予想された。

これら確認調査結果、また、本地域は西都原古墳群が点在し、日向国府跡も所在していることからも、全域が大規模な墓域及び古代遺跡の包蔵地であることが明白になった。

（註及び参考文献）

(1) 宮崎県・西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集　1996

(2) 西都市教育委員会「宝財原遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第20集　1994

(3) 〃　「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集　1992

(4) 宮川宗徳「高千穂　阿蘇」－総合学術調査報告－　財団法人神道文化会　1960

(5) 西都市教育委員会「平田・童子丸線道路新設工事に伴う酒元遺跡の埋蔵文化財調査報告」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集　1989

(6) 日野巌「西都原古墳群地下式横穴の遺物配列状態」『日向』第７輯（日向郷土会編）　1932

(7) 日高正晴「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』第43巻４号（日本考古学会）　1958

(8) 日高正晴・茂山護「東立野の地下式九号墳」『宮崎考古』第１号（宮崎考古学会）　1975

(9) 日高正晴「地下式墳（地下式横穴）の始源について」「西都原地下式10号」『西都原古墳研究所・年報』第２号（西都市教育委員会）　1985

(10) 西都市教育委員会『西都原古墳研究所・年報』第２号（西都市教育委員会）　1985

(11) 日高正晴「日向地方における地下式墳の編年的考察」『考古学叢考』下巻（吉川弘文館）　1988

(12) 西都市教育委員会『西都原古墳研究所・年報』第８号　1992

(13) 西都市教育委員会『西都原古墳研究所・年報』第11号　1995

(14) 西都新聞社『西都新聞』第23号　1961

(15) 西都市教育委員会『西都原古墳研究所・年報』第17号　2001

(16) 九州前方後円墳研究会「九州の横穴墓と地下式横穴墓」第Ⅱ分冊-資料編-　2001

(17) 筌瀬明宏「国分遺跡（国分地下式横穴墓群）発掘調査」『宮崎考古学会例会　発表資料』　2001.9

(18) 宮崎県教育委員会『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査概要報告書』Ⅰ～Ⅲ　1989～1991

(19) 〃　『国衙・郡衙・古寺跡等範囲確認調査概要報告書』Ⅰ～Ⅴ　1992～1996

(20) 〃　『国衙保存整備基礎調査概要報告書』Ⅰ～Ⅳ　1997～2001

(21) 〃　『寺崎遺跡』国衙跡保存整備基礎調査報告書　2001

(22) 平成12年３月に宮崎県教育委員会より国衙跡と判断された。現在、国指定申請に向かっている。

(23) 応用地質株式会社『平成13年度妻北土地区画整理事業埋蔵文化財レーダー探査業務（通常）報告書』　2002

(24) 宮崎県『宮崎県史』資料編　考古２　1993

第Ⅲ章　堂ヶ嶋第２遺跡の調査

第１節．試掘調査の方法と結果

堂ヶ嶋第２遺跡の試掘調査は、平成12年11月14日から平成12年11月28日までの10日間行った。

西都市妻北土地区画整理事業に伴う仮設住宅建設予定地の約3,000㎡内に２×４ｍのトレンチを任意に26本設定し、人力で掘削を行った。また、調査対象区は北から南にかけて約３ｍの高低差があり、調査区北端は後世の攪乱で、南端は自然流水でアカホヤ火山灰層が削平されていたことから、暗褐色粘質土層（カシワバン）を遺構検出面とし、それ以外はアカホヤ火山灰層を遺構検出面とした。

試掘調査の結果、この調査区は以前、茶畑として利用されていたことから表層は著しく攪乱を受けていたが、その下層に関してはアカホヤ火山灰層・暗褐色粘質土層（カシワバン）が良好に遺存していた。トレンチからは溝状遺構やピット、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器片等が出土した。

これらの試掘調査の結果から工事対象面積全域にわたり、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が拡がる可能性が高くなったことから、工事対象区内の全面調査を実施することとした。

第２節．調査の方針と方法

堂ヶ嶋第２遺跡の調査にあたって、次のような調査方針を立てて進めることにした。

１．調査対象面積は、前述の試掘調査をもとに工事対象面積の約3,000㎡とした。この平坦面は、戦前から茶畑として活用されており、南東側にやや傾く緩斜面である。この南東側は、稚児ヶ池へと続く斜面、南側は西都原台地からの湧水が稚児ヶ池へと流れ込む谷になっているが、工事による影響がないことから、調査対象区からは外した。

２．調査区全体に古墳時代終末期の地下式横穴墓が群在しており、地下式横穴墓の終焉へのプロセス解明、また、それら地下式横穴墓の構造を探り、当時の葬送儀礼を復元する。

３．墳丘が既に削平されている円墳（以下、地下式墓寄生型消失円墳・消失円墳と呼ぶ。）２基とこの周溝から竪坑を穿ち周溝内外に掘削された地下式横穴墓の関係、また、これら地下式横穴墓と単独で占地する地下式横穴墓の差異の検討。

以上、工事による影響箇所を対象とした調査であったことから、調査期間にも制限があり調査対象時期や対象遺構等も限定する必要があったが、次のような調査方法と作業で取り組んだ。

①遺構検出面はアカホヤ火山灰層を基本とし、この層上面までは重機により掘削を行う。その後は人力で表面精査、掘削を行う。

②全ての遺構及び周辺から出土した遺物は、可能な限り出土地点・出土状況等を図面・写真等で記録し、性格を明らかにする。

③今後、西都原古墳群の指定拡大地として保存する必要性が高いと予想されることから、地下式横穴墓や土壙墓などの遺構に関しては、玄室内の敷石などは除去せず、できるだけ現状保存する目的での調査を実施する。

なお、地下式横穴墓の名称及び計測基準、土器類の各部名称と実測表現は、Fig.６・７・８のように呼ぶことにするので参照されたい。

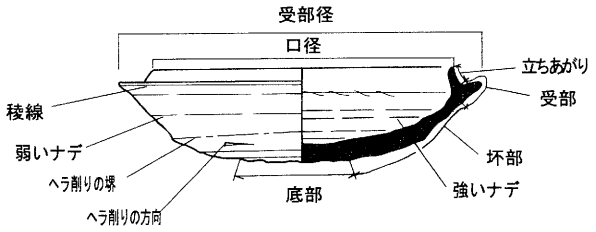


Fig. 6　土器類の各部名称とトレース例 (1/3)

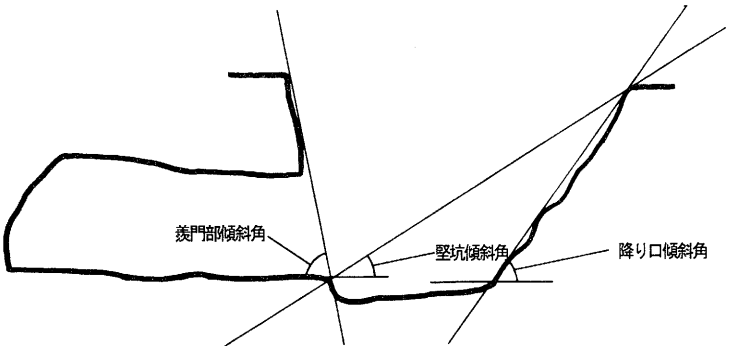


Fig. 7　地下式横穴墓計測基準 (1/50)

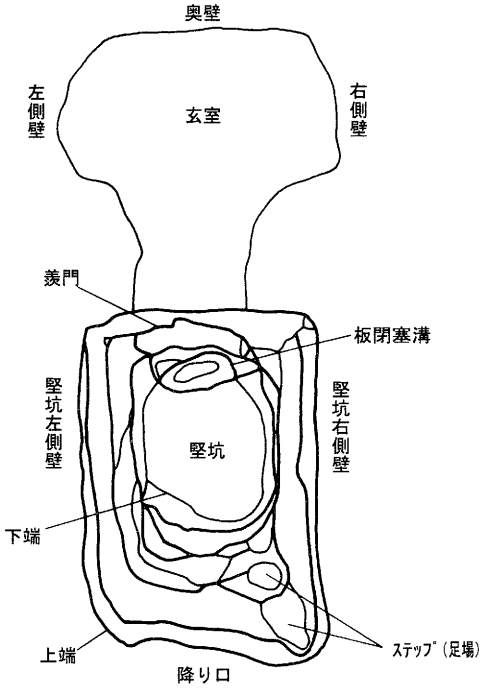


Fig. 8　地下式横穴墓の各部名称 (1/50)

第３節. 調査経過と概要

本調査は、平成12年11月28日から開始した。

まず、この調査区は以前、茶畑として利用されていたことから樹痕及び表土を重機により剥ぎ取る作業から開始した。重機による表土剥ぎ取り作業中に調査区中央部で、重機のキャタピラの一方が沈んだことより地下に空洞箇所があることが明らかになった。したがって、陥没箇所の土を人力で取り上げた結果、床面に礫が敷き詰められており、地下式横穴墓であることが判明した（８号地下式横穴墓)。その後、作業員による人力の遺構検出面精査作業の途中で、調査区南側にも空洞箇所が確認された（15号地下式横穴墓)。上記したように、表土は攪乱が著しかったことからアカホヤ火山灰層及びカシワバン層を遺構検出面とし精査作業を進めた結果、本調査区には地下式墓寄生型消失円墳１基、消失円墳１基、地下式横穴墓21基、土壙墓４基、住居跡６軒、集石遺構２基、溝状遺構数条、柱穴多数などが所在することが明らかになった。

当初予定した遺構数より多くの遺構が確認されたこと、また、調査区全域に地下式横穴墓が所在することなどの理由から当初の調査期間を延長して頂く旨を都市計画課に打診し、当初３月末までを予定していた調査期間を５月末日までに延長して頂いた。しかし、その後の調査で新たに地下式横穴墓２基の所在が確認され、再度調査期間を６月20日まで延長したが、その後も地下式横穴墓が新たに２基確認され、梅雨時期に入り込んだことから調査がスムーズに進まず、最終的には７月21日まで調査期間を延長して頂いた。

工事担当課である都市計画課には再三にわたり調査期間を延長して頂くなど、多大な理解と協力を得て、平成13年７月21日に全ての調査を終了した。

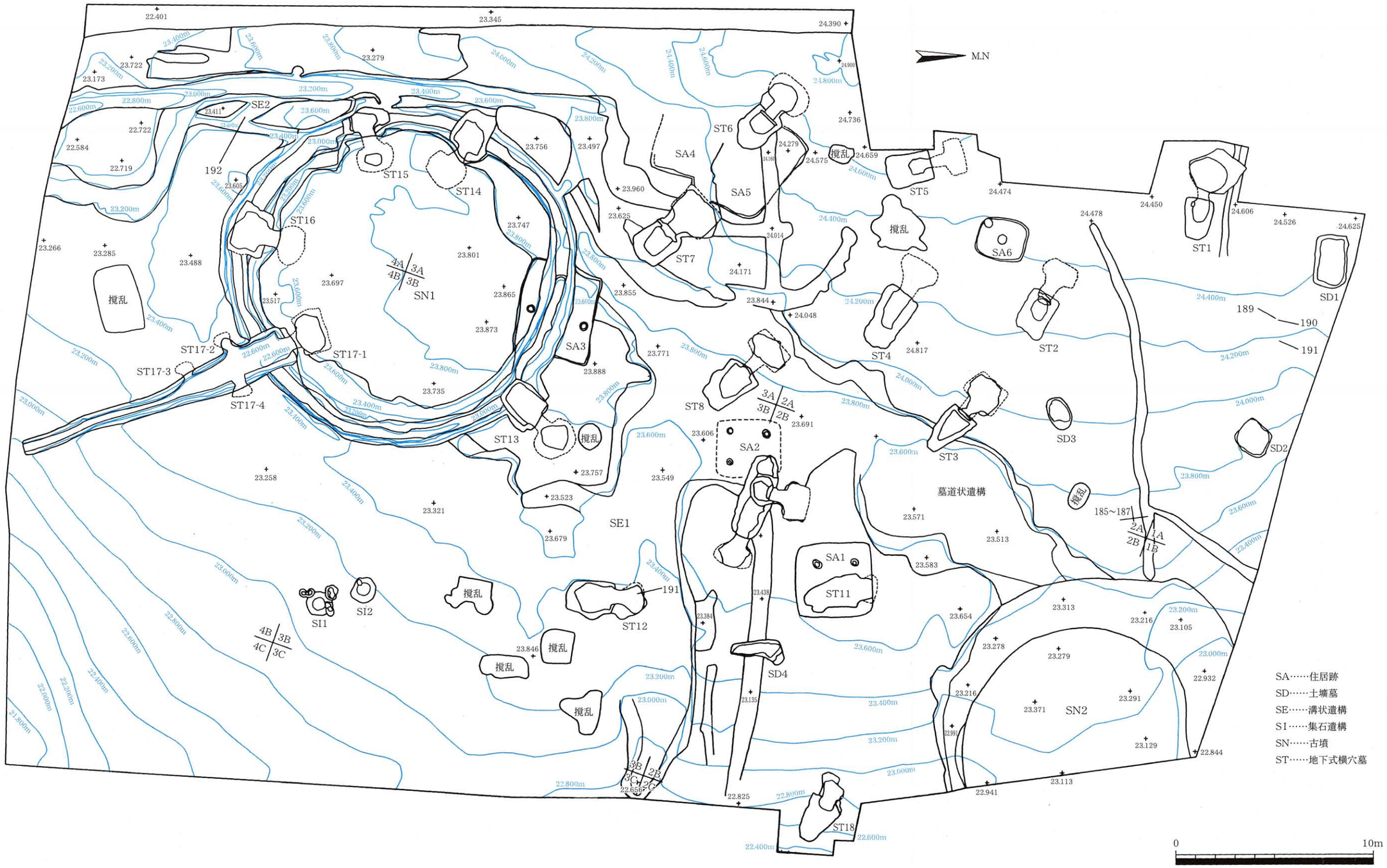


Fig. 9　堂ヶ嶋第２遺跡遺構分布図 (1/200)

第４節．堂ヶ嶋第２遺跡の遺構と遺物

１．古墳時代時代終末期の消失円墳

１号地下式墓寄生型消失円墳[1]（Fig. 10～13）

１）立地

調査区南方中央部、北から南にかけてなだらかに下る緩斜面に検出した消失円墳（墳丘が全て削平された円墳）である。検出面は標高約23.4～23.8ｍである。

２）規模と構造

本墳は、全長東西17ｍ・南北17.8ｍ、墳径約15ｍの消失円墳である。墳丘周囲には幅２～2.8ｍ、深さ60～80㎝程の周溝が全周する。既に盛土が全て削平されていることから、主体部の構造に関しては不明であるが、この時期に横穴式石室を採用していれば、石室堀り方が墳丘基底面中心部に遺存していると予想されることから竪穴系埋葬施設であった可能性が高い。

本墳の周溝からは13～17-1号地下式横穴墓が掘削されており、今回、このような形態の古墳に関して、上記のような名称で呼ぶ。これに関しては、第Ⅳ章第３節で述べる。

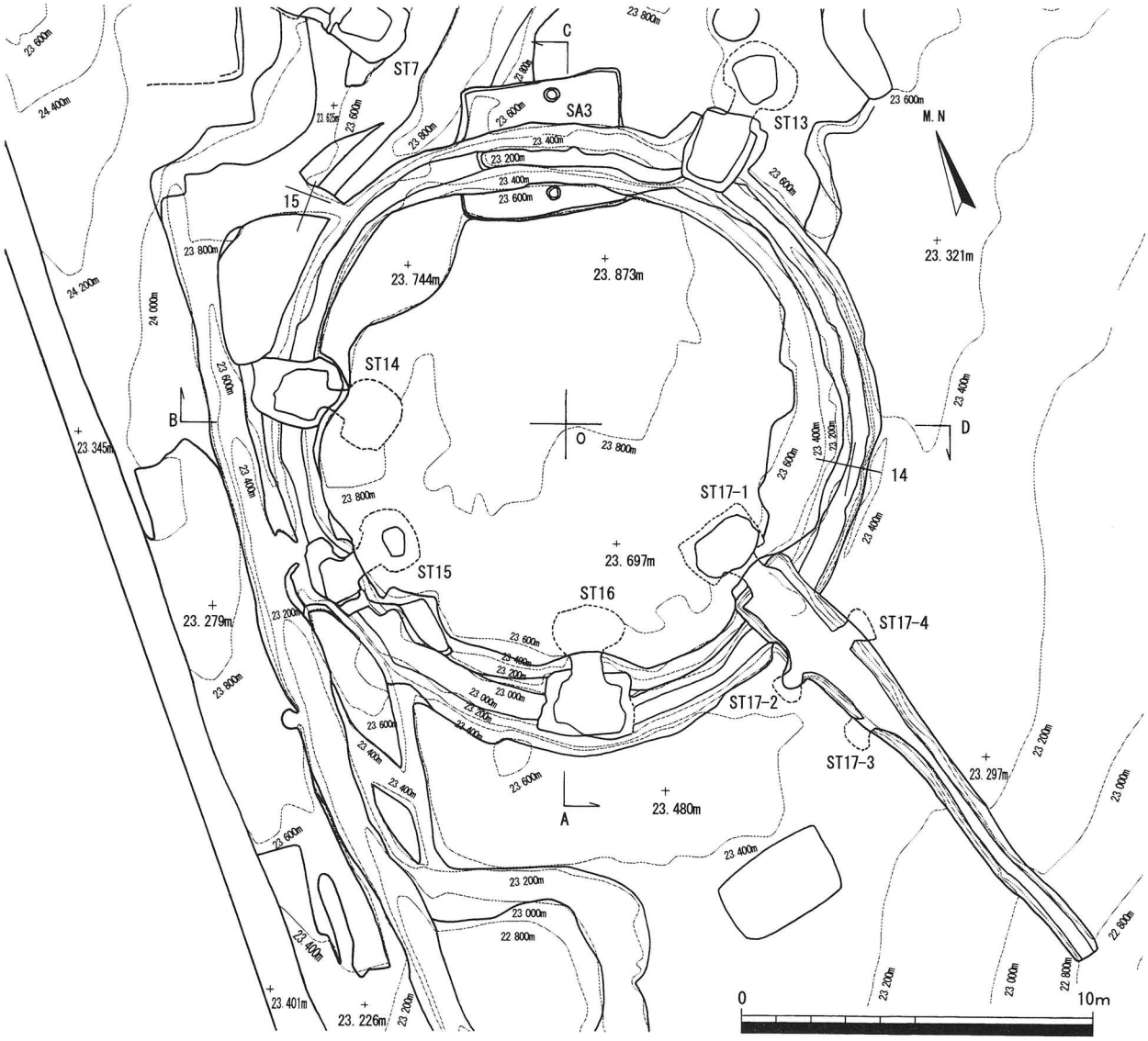


Fig. 10　１号地下式墓寄生型消失円墳及び周辺実測図（1/200）

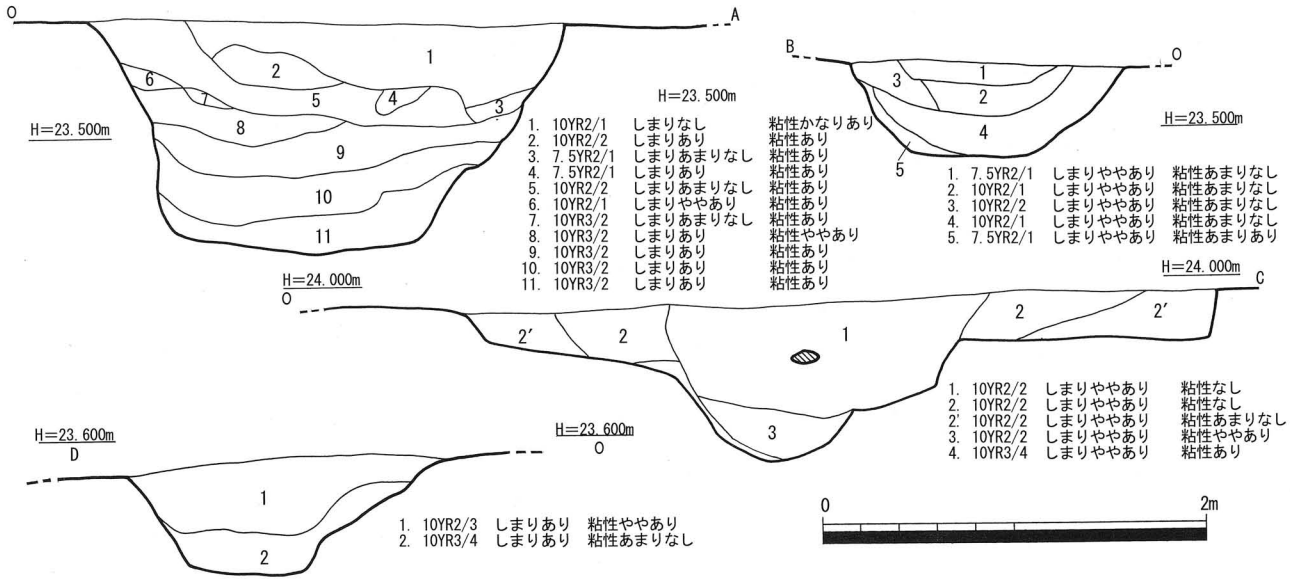


Fig. 11　１号地下式墓寄生型消失円墳周溝土層断面図（1/40）

３）遺物の出土状態

出土遺物は、周溝内に点在して確認された。地下式横穴墓の竪坑検出面上から出土した遺物は、地下式横穴墓が古墳構築後に掘削されたと予想されることから、各地下式横穴墓に伴う遺物として処理した。また、３号竪穴住居跡付近の周溝内から出土した遺物は、弥生土器が含まれていることから時期差を考慮し選別した。

周溝内から出土した遺物は総計58箇所で、内訳は土器片56箇所と頁岩製鏃２である。また、周溝内東側から土師器破砕甕１（14、Fig. 13・14）、また、周溝北西側の溝から須恵器破砕甕１（15、Fig. 12・14）と土師器片２が出土した。これら破砕甕は１号地下式墓寄生型消失円墳を対象とし破砕が行われている可能性が高いことから、この中で取り扱うこととした。また、出土地点数は上記のとおりであるが、小破片であり実測に耐えられないもの、また、接合により同一個体になったものなど15点のみ記載する。また、出土土器の詳細に関してはTab. ５で記すので参照されたい。

13～17-1号地下式横穴墓間の周溝内から出土した遺物は１～３・５～８、17-1号～16号地下式横穴墓間の周溝内から出土した遺物は９・10、15～14号地下式横穴墓間の周溝内から出土した遺物は４、14号地下式横穴墓～３号住居跡間の周溝内から出土した遺物は土師器口縁部片11～13である。

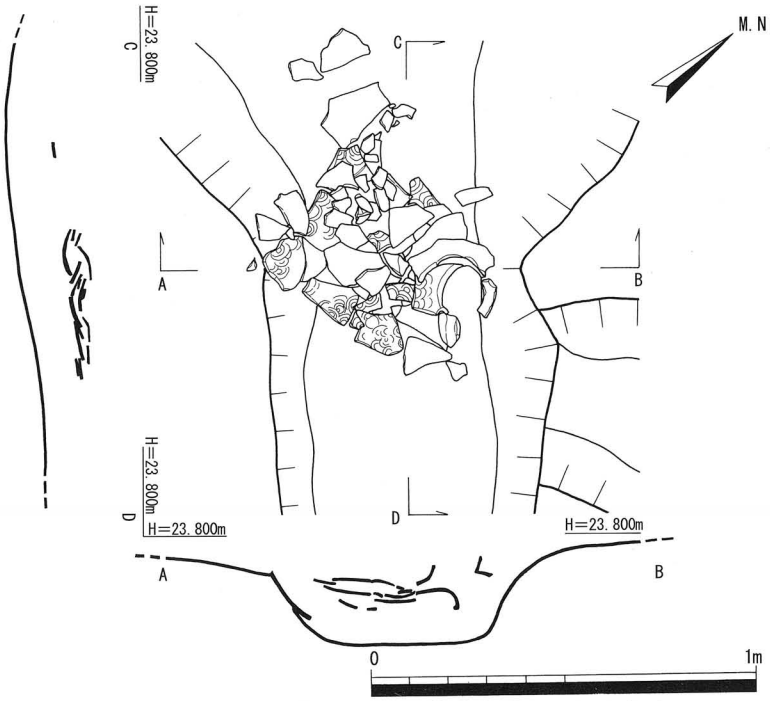


Fig. 12　周溝内須恵器破砕甕実測図（1/20）

4）出土遺物（Fig. 14）

１～５は須恵器坏蓋である。口径は12.3～12.9cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/3程度である。中でも５は口縁部が外側に外反しており、他の蓋とは形状を異にする。６は有蓋高坏蓋と思われる。口径は、11.3cmでヘラ削りの範囲は1/2程度である。７は高坏頸部と思われるが破片であることから頸部径については復元できない。８は高坏脚部である。脚部径は12.6cmで、脚部端に段が付く。９は土師器高坏である。坏部内外面は横ミガキ、脚部に縦ミガキで整形されている。10～13は土師器甕口縁部片である。口縁部復元径は15～22.0cmを測り、口縁部は外反しながら立ち上がり、端部が丸まるもの(10)、ややくの字状に外反し、端部に粘土張り付けが行われているもの(11)、直線的に外反し、端部が尖るもの(13)がある。14は土師器破砕甕である。現存器高は23.8cm程であり、口縁部径は17.6cmである。口縁部から頸

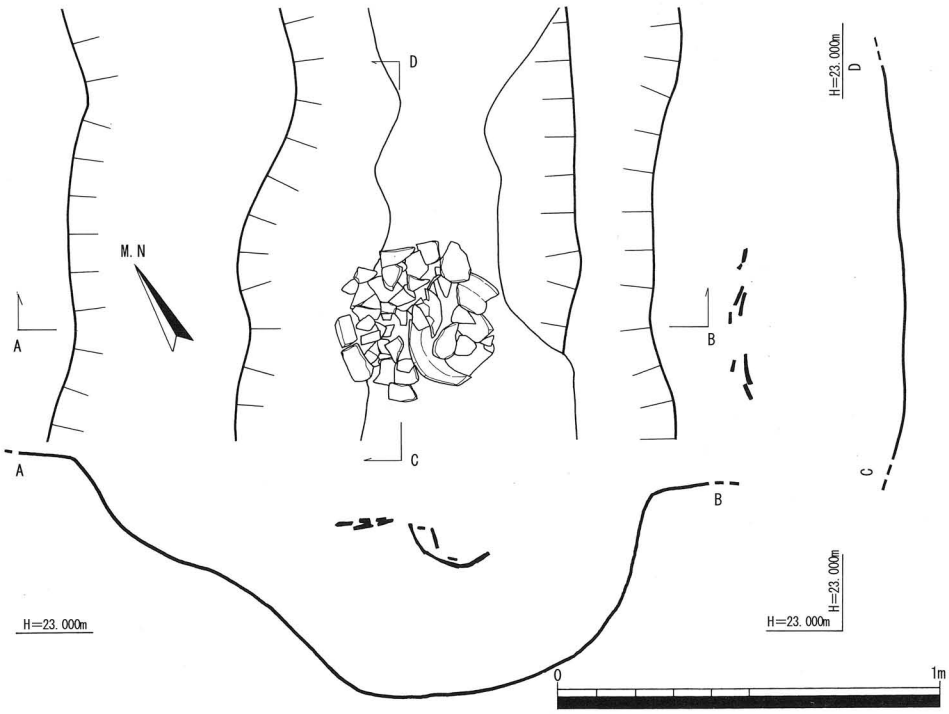


Fig. 13　周溝内土師器破砕甕実測図（1/20）

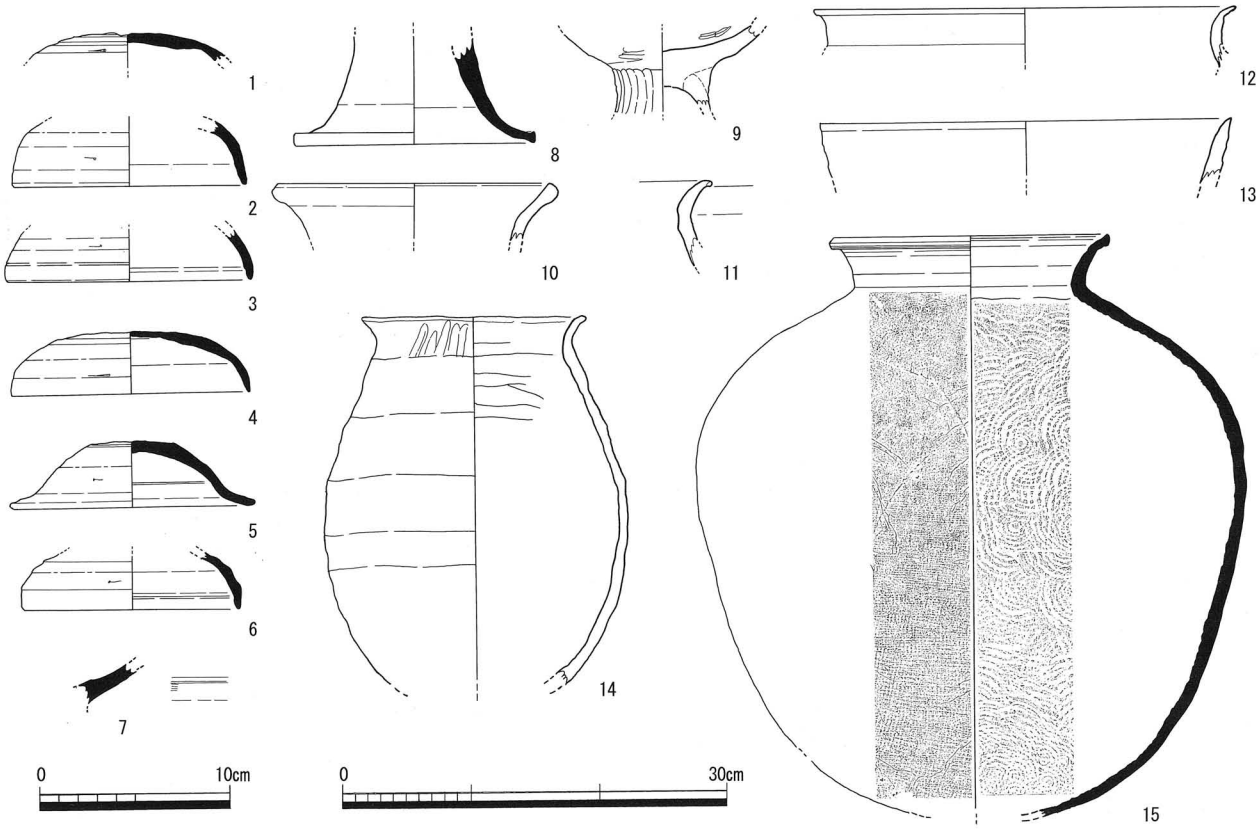


Fig. 14　周溝内出土遺物実測図（1/4、14･15は1/6）

部外面はミガキが施されている。15は須恵器大甕である。頸部～底部外面に格子目叩きが、内部は当て具痕が良好に遺存している。

これら出土遺物から本地下式墓寄生型消失円墳の築造年代は、九州編年ⅣB期からⅤ期、陶邑TK209型式新段階からTK217型式新段階併行期に対応しよう。

1号消失円墳（Fig. 15・16）

1）立地

調査区北方東側隅で全体の1/2程度が検出された消失円墳である。検出面は標高23.0～23.5mである。

2）規模と構造

本墳は、墳丘の全てと周溝も含む東側が既に消失していたことから、復元規模であるが全長径約16.5m、墳長径約12mと思われる。墳丘周囲には幅1.0～4.5mの周溝が廻る。周溝の深さは現状で約20cmと大変浅い。また、1号地下式墓寄生型消失円墳同様、盛土が全て削平されていることから、主体部に関

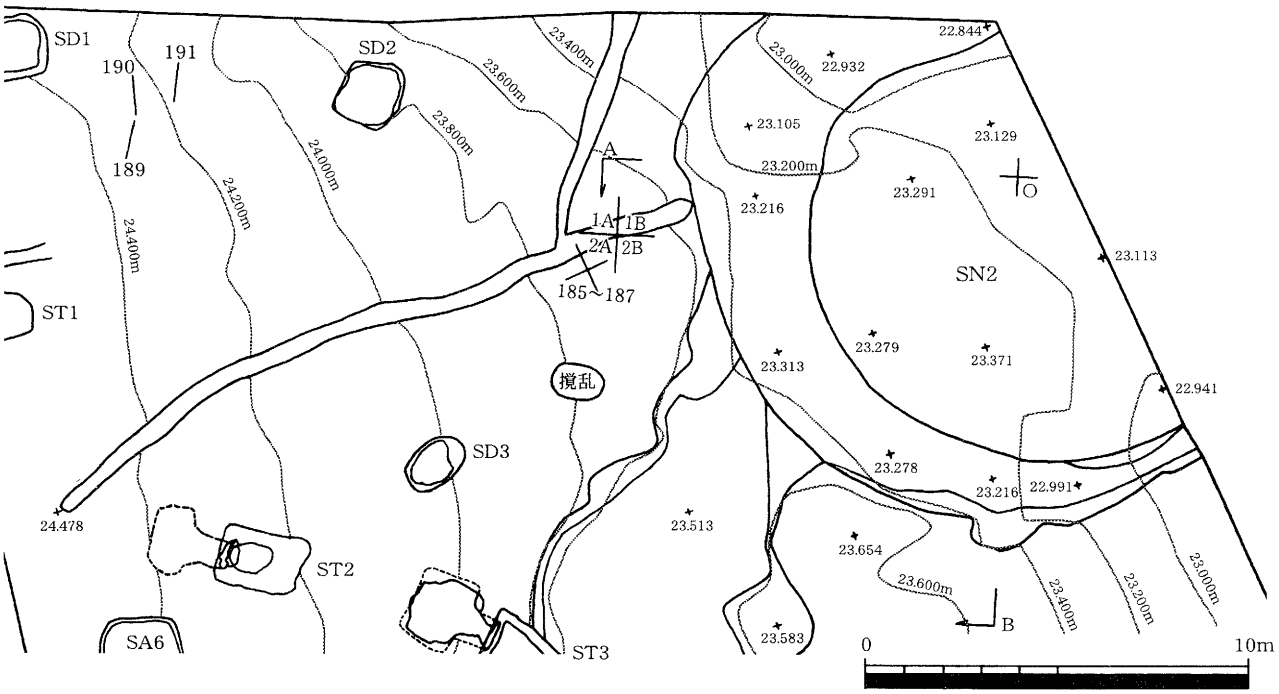


Fig. 15　1号消失円墳及び周辺実測図（1/200）

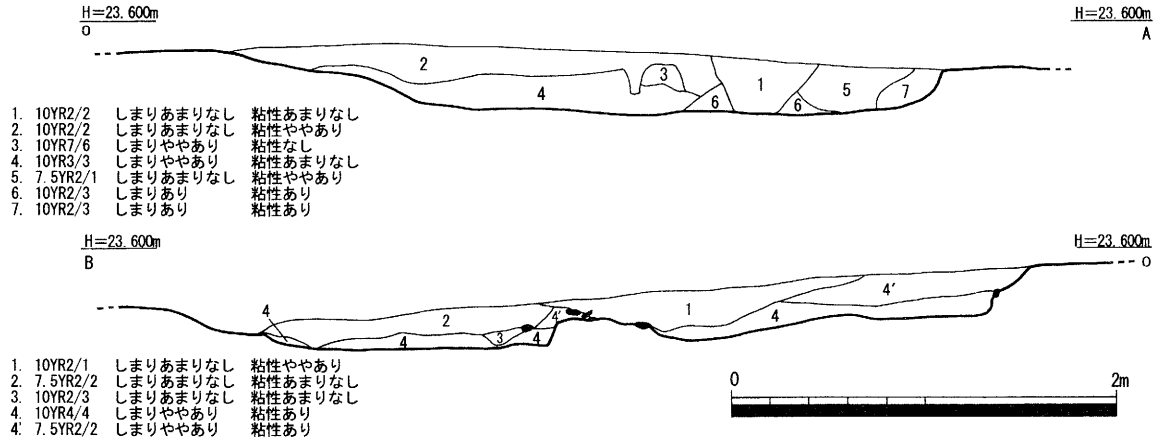


Fig. 16　1号消失円墳周溝土層断面実測図（1/40）

しては全く不明である。但し、１号地下式墓寄生型消失円墳同様に横穴式石室を採用していれば、石室堀り方が墳丘中心部に遺存していると予想されることから竪穴系埋葬施設であった可能性が高い。

３）遺物の出土状態

１号消失円墳周溝内から出土した遺物は総計75箇所で、内訳は土師器･須恵器片74箇所、寛永通宝１である。出土地点数は上記のとおりであるが、小破片であり実測に耐えられないもの、また、接合により同一個体になったものなど、ここでは11点のみ記載する。

４）出土遺物（Fig. 17）

16は周溝南側から出土した須恵器坏蓋である。口径は14.5cm･器高4.1cmを測り、ヘラ削りの範囲は2/5程度である。17は周溝西側から出土した須恵器平瓶と思われる。やや散財して４片が出土し３片のみが接合したが、他の１点は接合できない。底部にはヘラ削りが施され、胴部上面はやや傾く。18は丹塗りの土師器高坏である。彩色は風化のため一部にしか遺存していないが、内外面共に施されていたようである。口径は欠損しており不明であるが、底部最大径は15.8cmを測る。19～26は全て土師器甕片である。19～22は口縁部片で口縁部復元径11.9～21.0cm程である。やや肉厚で曲線状に外反し端部が丸まるもの(19･21)、直線的に立ち上がりくの字状に外反するもの(20)、直線的に外反するもの(22)がある。20･22は端部に粘土張り付けがみられる。23は胴部で、やや胴張りの形状をとり底部はすぼまる。内外面共に板状ナデで調整されている。24～26は底部で、25･26には木の葉紋が遺存している。３個体とも形状が異なり、底部はやや上げ底で削りにより調整されているもの(24)、底部は平底で端部をやや張り出すが丸まるもの(25)、底部がくの字状に開き先が尖るもの(26)などがある。それぞれの底部最大径は24が6.2cm、25が11.0cm、26が13.6cmを測る。

これら出土遺物から本消失円墳築造年代は、九州編年ⅣAからⅣB期、陶邑TK209型式古段階からTK209型式新段階併行期に対応しよう。

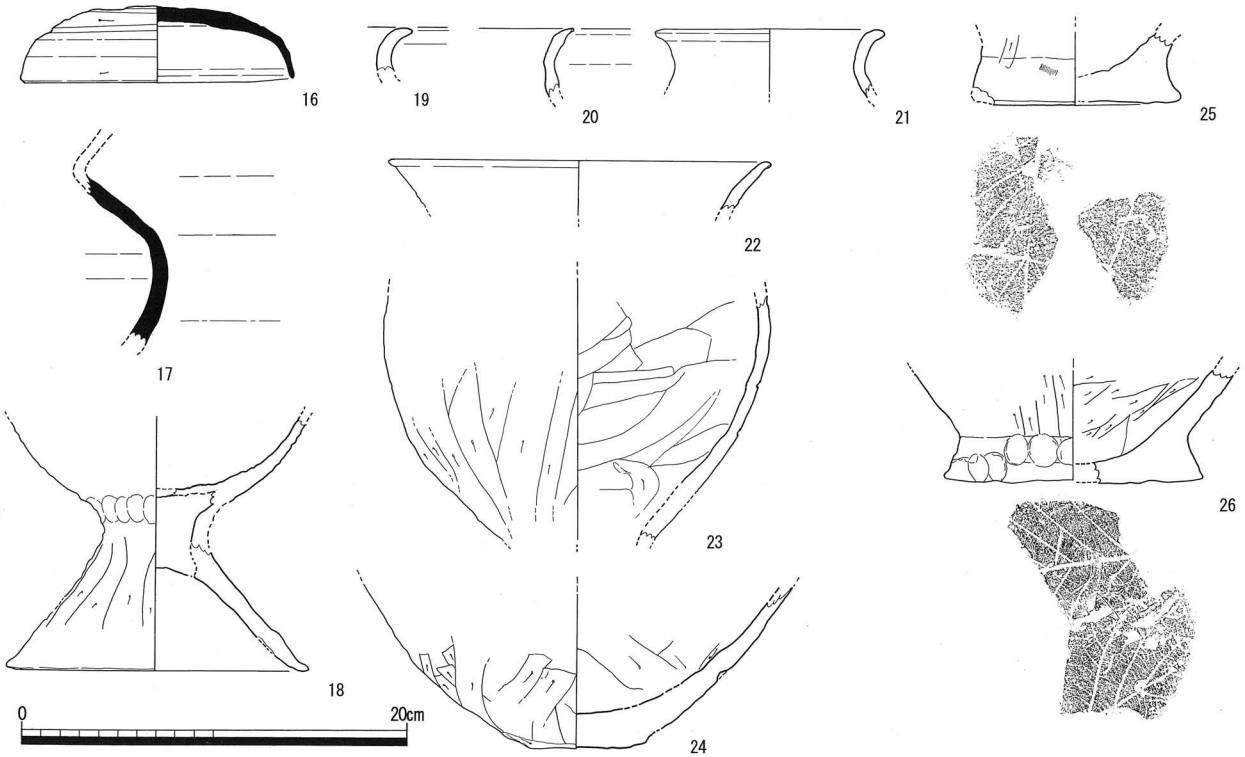


Fig. 17　1号消失円墳周溝出土遺物実測図（1/4）

2．古墳時代時代終末期の地下式横穴墓群

1号地下式横穴墓（Fig. 18～20）

1）立地

調査区北方西側隅に検出した地下式横穴墓である。検出面は標高約24.5～24.55mである。

2）規模と構造

本地下式横穴墓は全長3.86m、玄室奥行1.64m・幅1.97m・高さ不明、玄室床面積3.23㎡の横長楕円形プランを呈す。天井のほとんどは以前の造成で重機により破壊されていたが、辛うじて床面及び玄室中央部から羨門側の側壁は遺存していた。

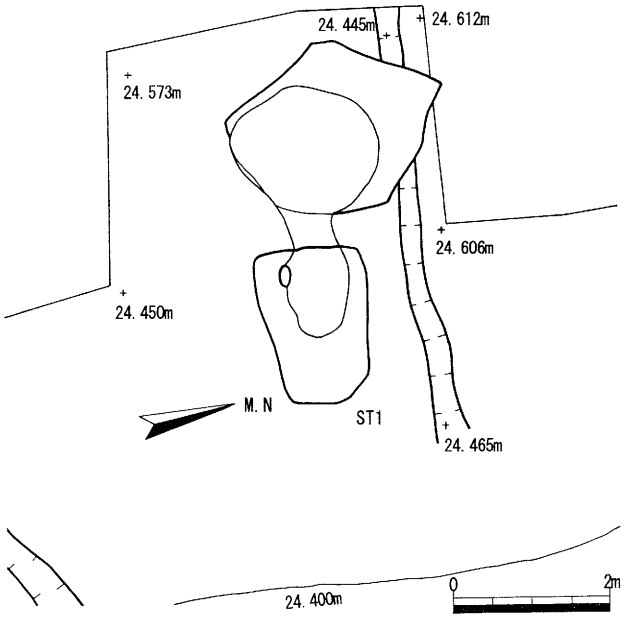


Fig. 18　1号地下式横穴墓位置図（1/100）

竪坑は長さ2.8m、幅1.16～1.51m、深さは最深部で1.16mで縦長の蒲鉾形を呈す。降り口傾斜角は50°で掘削されており、羨門部床から降り口側上部の傾斜角（以下、竪坑傾斜角と呼ぶ。）は29°、両側壁は69～76°で立つ。羨門部傾斜角の壁は約89°で立ち、羨門は上部がやや丸みのある蒲鉾形である。羨門部下の床面は一段上がり玄室へと延びる。

閉塞の方法は、羨門左側に置かれている川原石が板を押さえに使った石と想定され、板閉塞と思われるが、板をはめ込んだとみられる溝は確認できない。また、羨門部の床面には径６～８cm程のピットが２つ、また、竪坑の左側壁には径20～25cmと10～20cmのピットが１つずつ、右側壁には径８cmのピットが１つ確認された。羨門部床面のピットに関しての目的は不明であるが、竪坑両側壁の穴は、羨門部を閉塞した板が手前側に倒れないように木で押さえるために用いた穴の可能性がある。これは、単に閉塞板の転倒をさける為ではなく、当時の人々が死者の再生を恐れ、玄室内に封印するという思想の影響があるかも知れない。

玄室内はかなり荒らされていたが、羨門部玄室側に５個の川原石が横に並べられ、その内側に屍床を形成していたと思われる。残りの玄室中央右側壁側にある２個の川原石は枕として用いたのであろうか。

この周辺の地下式横穴墓の屍床は、このように玄室羨門側に横一列に川原石を並べ、玄室両側壁及び奥壁のスペースを拳大からもう少し小振りの川原石で充填し形成される例が多い。この地下式横穴墓は、そのスペースには石が敷かれてなかった。これは攪乱時に取り除かれた訳ではなく、築造時から屍床の区画石だけが配されていたようである。その理由として考えられることは、他の地下式横穴墓の玄室床面と比較すると地山が砂質であり、被葬者を直接寝かせることに抵抗がなかったのではなかろうか。

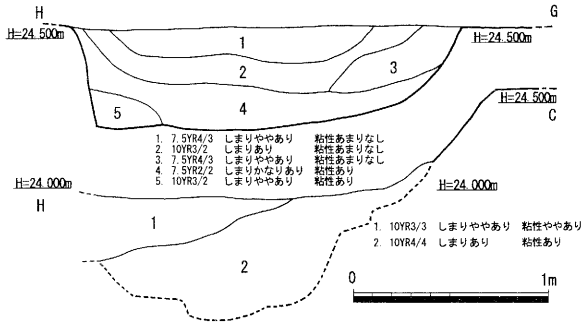


Fig. 19　1号地下式横穴墓竪坑土層断面図（1/40）

天井は既に崩落しており、玄室内には多量の土砂が堆積していたが、竪坑側からの埋土とは質が異なっていたことから、板閉塞が朽ち竪坑側埋土の重力で玄室内に流れ込んだと解釈できる。土層堆積状況を観察した結果、追葬痕跡は確認できなかった。

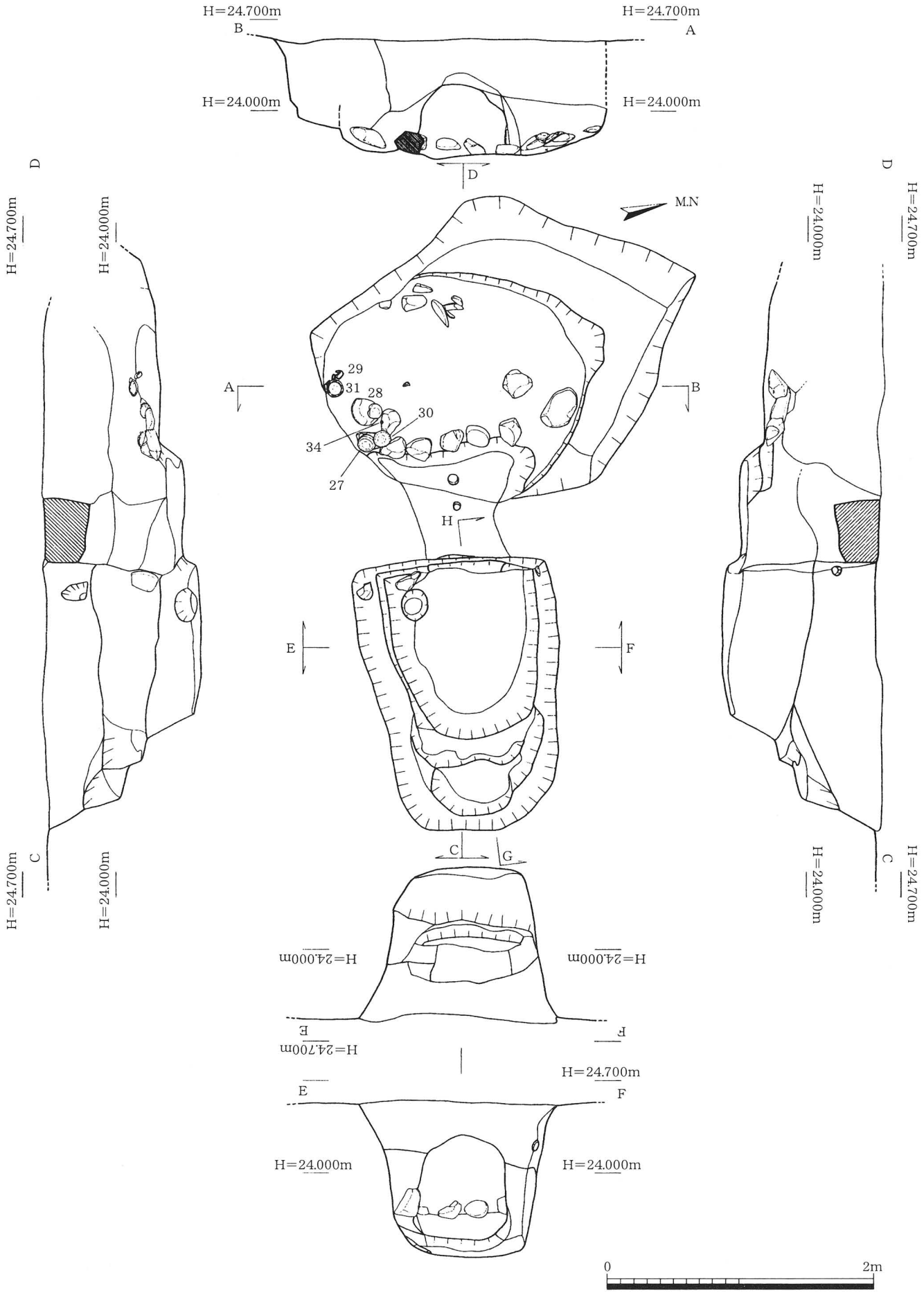


Fig. 20　1号地下式横穴墓実測図 (1/40)

3）遺物の出土状態

玄室羨門側左右隅にまとまって出土した。玄室内から須恵器坏蓋３(27～29)、坏身３(30～32)、耳環１(34)である。また、これとは別に天井崩落後に充填された土砂の中から須恵器坏身片２(33)が出土した。したがって、玄室内の遺物は、まだ多かった可能性が高い。

4）出土遺物（Fig. 21）

27～29は須恵器坏蓋である。口径は11.8～12.2cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/3～1/4程度である。30～33は須恵器坏身である。受部径は12.2～13.1cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/3程度である。33は須恵器坏身の1/8程の破片である。復元受部径は11.9cm程度になる。34は玄室内左側壁側屍床上の川原石上から出土した耳環である。径が2.7cmで銅芯銀箔張耳環と思われるが、銀箔はほとんど遺存しない。

これら出土遺物から本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、九州編年IVB期からＶ期、陶邑TK209型式新段階からTK217型式新段階併行期に対応しよう。

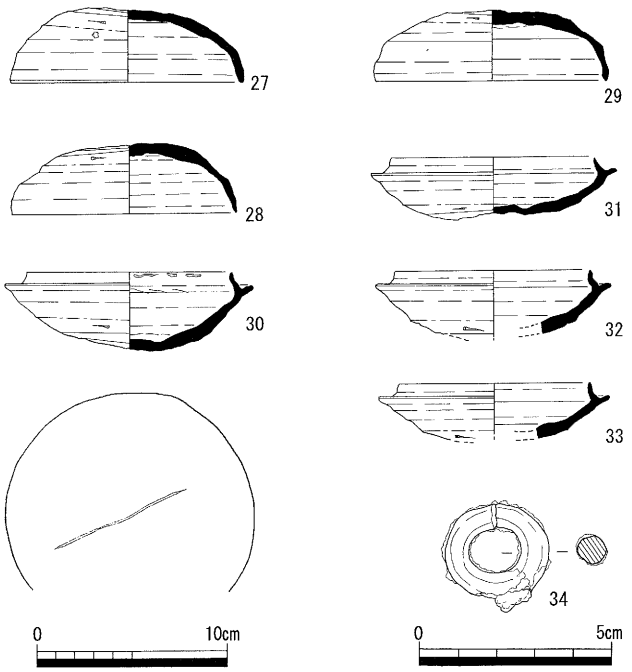


Fig. 21　１号地下式横穴墓出土遺物実測図（1/4、34のみ1/2）

２号地下式横穴墓（Fig. 22～24）

1）立地

調査区北側１号地下式横穴墓の南東側に所在する。検出面は標高約24.2～24.3mである。

2）規模と構造

本地下式横穴墓は全長4.06m、玄室奥行1.03m・幅1.85m・高さ0.8m、玄室床面積1.91㎡の横長隅丸楕円形プランを呈す。天井は蒲鉾形で、四壁は床面から約30cmまではほぼ直に立ち上がる。

竪坑は長さ2.2～2.33m、幅1.59m、深さ約1.5mの縦長の隅丸方形プランである。降り口傾斜角は56°で掘削されており、竪坑傾斜角は33°、両側壁は72～75°で立つ。降り口右隅側には３段の足場（ステップ）が直線的にに穿たれており、床面へと続く。羨門部傾斜角は約80°で立ち、羨門は上部が下部に比べて20cm程短い台形状である。羨門部下の床面は一段上がり玄室へと延びる。

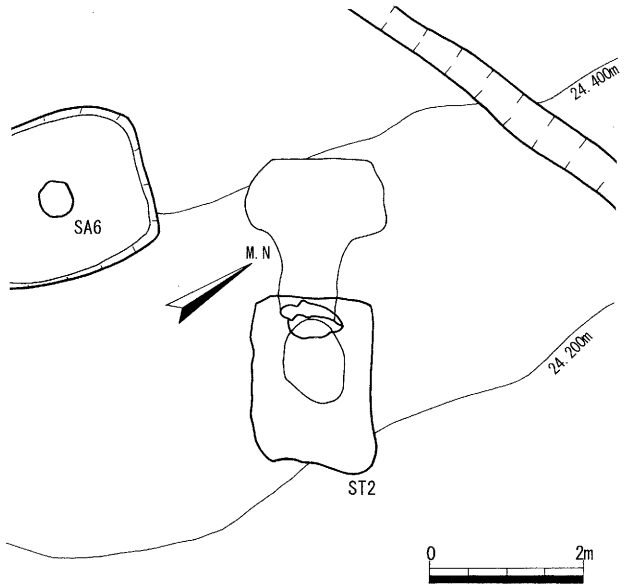


Fig. 22　２号地下式横穴墓位置図（1/100）

閉塞の方法は、川原石閉塞である。長辺40cm程の川原石を横方向に置きその後、それら石と羨門を覆うように径20cm程の石で被覆してある。その上に粘土などの目張りは行われていない。

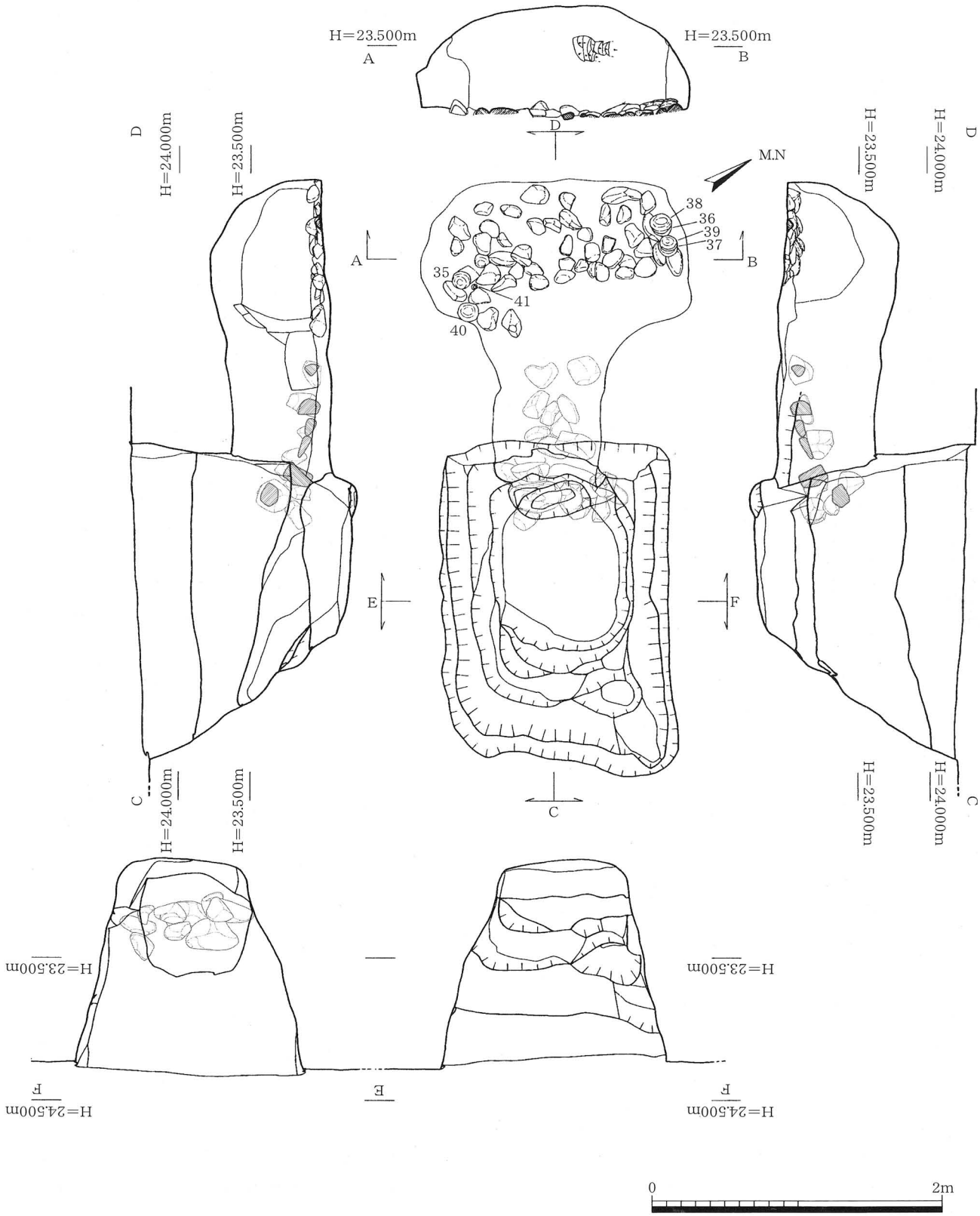


Fig. 23　２号地下式横穴墓実測図 (1/40)

閉塞石を外し床面を精査すると閉塞石が水平に充填できるように羨門部下に粘質土を盛り平坦面を形成してあった。また、その下には板閉塞を行った際の板をはめ込んだとみられる幅25～30cm程の溝が確認できた。したがって、第１次閉塞では羨門部板閉塞であるが、最終閉塞では羨門部石閉塞へと変更されたとみられ追葬が行われたようである。

玄室内は追葬時にかなり荒らされたと思われ、屍床はかなり雑な形状をとる。また、左右に１体ずつを安置したような敷石を行っていることからも、追葬が行われた可能性は高い。人骨は骨片が数点確認されたが、ほとんど朽ちている。

奥壁には築造時の幅10cmの鑿痕が遺存しており、右ないし右上方から削り込まれている。縦方向の仕上げ削りはみられず、粗彫りで構築されたようである。

竪坑を半裁した段階で北東壁の土層堆積状況を観察した結果、17層上面に降り口側から斜めのラインが延びるが硬化面などではなく、追葬痕跡は確認できなかった。玄室内に副葬された遺物は１型式ほどの差が予想され、蓋坏も３セット出土したことから、最低でも２体の埋葬は予想される。

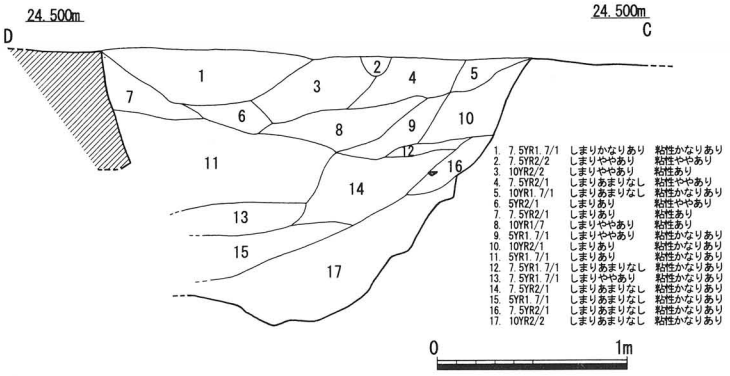


Fig. 24　２号地下式横穴墓竪坑土層断面図（1/40）

３）遺物の出土状態

須恵器の蓋坏は全て内側を伏せて出土した。右側壁側に２組とも坏蓋２(36･37)を下、坏身２(38･39)を上に伏せ、計４個置かれた蓋坏は枕として用いたと思われる。左側壁から前壁の隅に置かれた蓋坏(35･40)も同様のものと解釈でき、２体の人骨が頭位を東と西の逆向きに入れられていると推測される。その付近に耳環１(41)が検出された。

玄室のほぼ中央部には骨片が数点確認されたが、腐食が進んでおり辛うじて腕骨と推定されるが左右どちら側の人骨かは不明である。

また、副葬された遺物には型式差があり、手前の被葬者が跡に埋葬されたと予想される。

４）出土遺物（Fig. 25）

35～37は坏蓋である。口径12.2～13.9cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/4程度(36)と1/8程度(35･37)とばらつきがある。38～40は坏身の完存品である。受部径13.6～14.6cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/3～1/4程度である。

41は径が2.9cmの銅芯金箔張耳環である。金箔が僅かに遺存する。

これら出土遺物から本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、九州編年ⅣA期からⅣB期、陶邑TK209型式古段階からTK209型式新段階併行期に対応しよう。

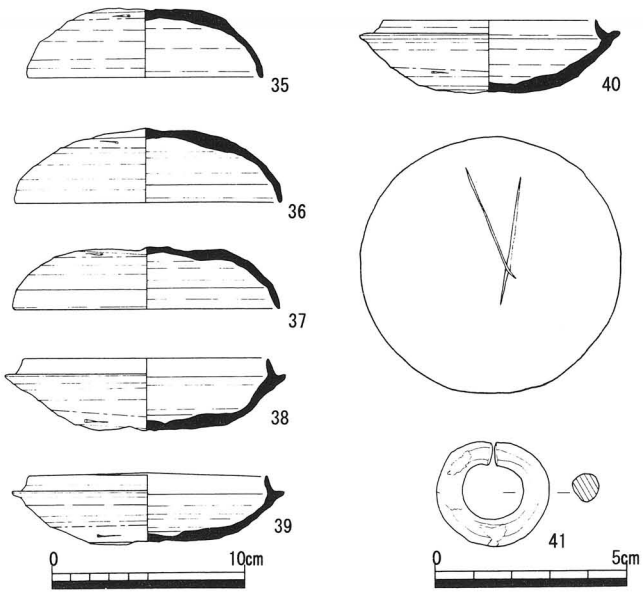


Fig. 25　２号地下式横穴墓出土遺物実測図（1/4､41のみ1/2）

３号地下式横穴墓（Fig.26～28）

１）立地

調査区北側２号地下式横穴墓の南東側に所在する。検出面は標高約23.6～24.0mである。

２）規模と構造

３号地下式横穴墓は全長4.87m、玄室奥行1.41m・幅1.65～2.1m・高さ不明、玄室床面積2.64㎡の横長隅丸長方形プランを呈す。四壁は床面から約20cmまでは、ほぼ直に立ち上がるが、その後湾曲することから天井はドーム形であろう。

竪坑は長さ2.63m、幅0.5～1.58m、深さ約1.05mの縦長隅丸二等辺三角形プランである。降り口傾斜角は16°で掘削されており、竪坑傾斜角は16°、両側壁は66～74°で立つ。降り口側にステップらしき痕跡はない。羨門部傾斜角は約78°で立ち、羨門は上部が下部に比べて20cm程短い蒲鉾形である。羨門部下の床面は竪坑から緩傾斜で玄室へと延びる。

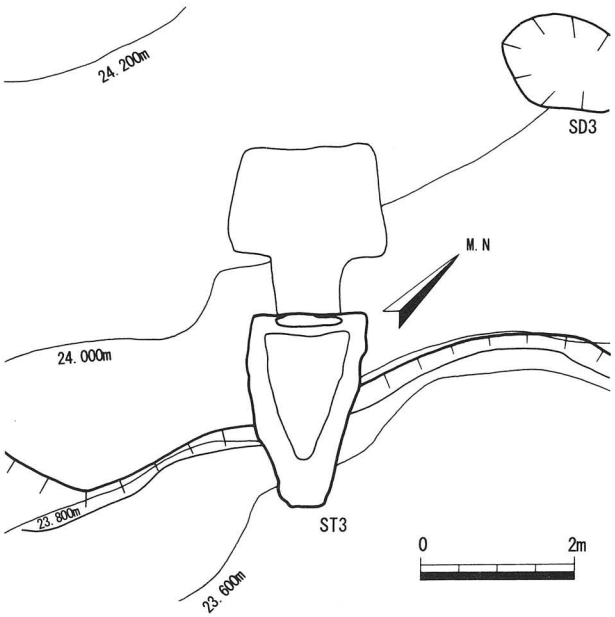


Fig.26　３号地下式横穴墓位置図（1/100）

閉塞の方法は板閉塞と思われるが、板をはめ込んだとみられる溝の痕跡は確認できない。羨門部傾斜角が78°とやや倒れることからも板を立てかけて閉塞した可能性が高い。

玄室は、羨門部玄室側に約20～25cmの川原石が５個横に並べられ、その中をそれよりもやや小振りの石を配して屍床を形成している。しかし、石はかなり雑に充填されており、屍床の改変が行われた可能性が高い。

竪坑を半裁した段階で北東壁側の土層断面を観察した結果、追葬痕跡は確認できなかったが、玄室内に副葬された遺物には型式差があり追葬が行われた可能性は高い。また、竪坑埋土の堆積状況は、降り口側上方から羨門に向けて堆積しており、板閉塞が朽ちた後に、一気に流れ込んだものと予想される。

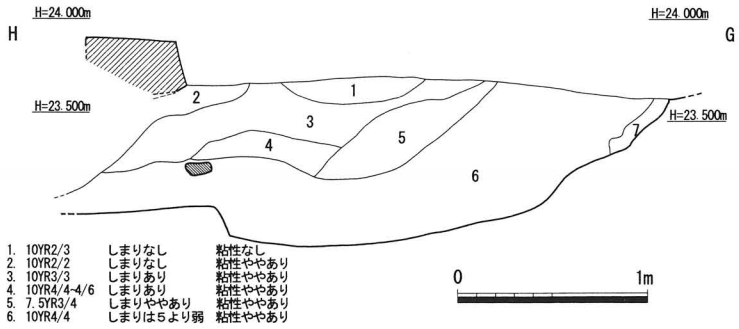


Fig.27　３号地下式横穴墓竪坑土層断面図（1/40）

３）遺物の出土状態

右側壁より奥壁側に４個の蓋坏（42・43・49・50）が上から蓋（42）→身（49）→蓋（43）→身（50）の順で伏せた状態で重ねてあり、左側壁側には坏蓋５（44～47）・坏身５（51～55）10点が出土した。44・51～55は内側を上にし、45～48は伏せて置かれていた。また、左側壁側の奥壁側よりに平瓶１（56）が出土した。

人骨は骨片が数点確認されたのみでほとんど朽ちている。

４）出土遺物（Fig.29）

42～48は坏蓋、47・48は1/8程と4/5程を遺存する須恵器坏身片である。口径は45が11.5cmと最も小さく、48が13.9cmを測り最大である。ヘラ削りの範囲は1/3～1/5程度である。49～55は坏身である。受部

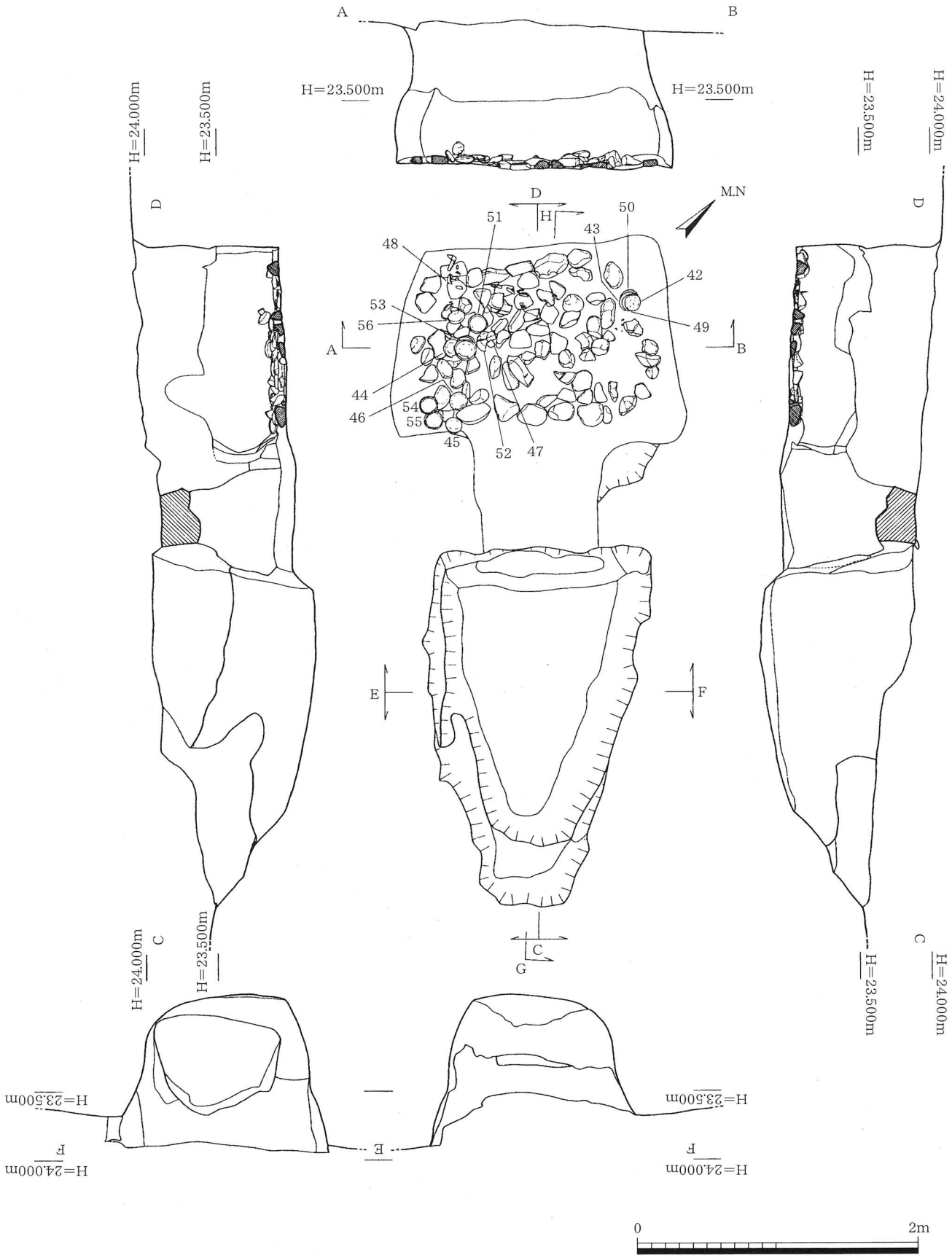


Fig. 28　３号地下式横穴墓実測図 (1/40)

径約12.9～14.5cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/2～1/4程度とばらつきがある。51には×形のヘラ記号も確認される。56は平瓶で口径4.7cm、胴部径11.9cmを測る。胴部1/2辺りまでカキ目が施され、底部1/3程度までヘラ削りがなされている。胴部上部には胴部整形後の充填痕跡か膨らみが確認できる。

これら出土遺物から本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は九州編年ⅣA期からⅤ期、陶邑TK209型式古段階からTK217型式新段階併行期に対応しよう。

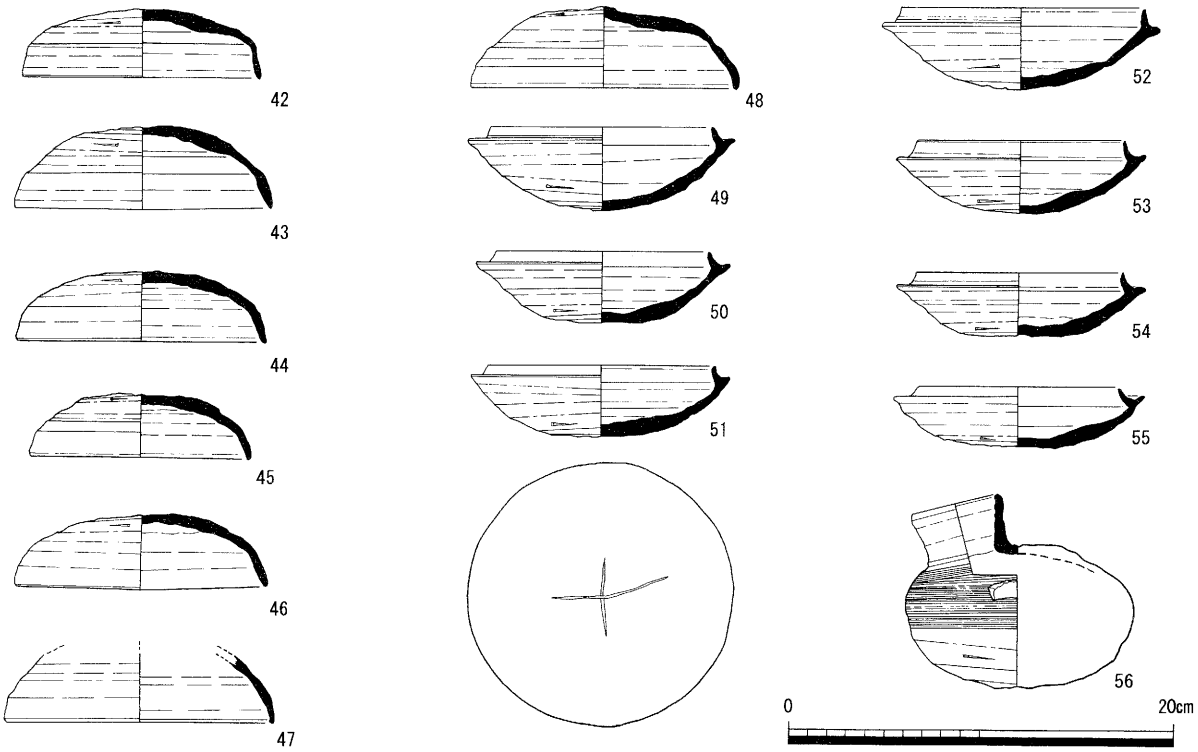


Fig.29　3号地下式横穴墓出土遺物実測図（1/4）

4号地下式横穴墓（Fig.30～32）

1）立地

調査区北側3号地下式横穴墓の南西側、6号住居跡の南東側に所在する。検出面は標高約24.1～24.3mである。

2）規模と構造

4号地下式横穴墓は全長5.17m、玄室奥行1.33m・幅2.1m・高さ0.73m、玄室床面積2.79㎡の横長楕円形プランを呈す。四壁は床面から湾曲するドームであるが、天井部横方向の約2mはほぼ水平を呈し、天井形は台形状をなす。。

竪坑は長さ3.25m、幅1.13～1.9m、深さ約1.28mの縦長逆台形プランである。降り口傾斜角は51°で掘削されており、竪坑傾斜角は20°、両側壁は68～70°の傾斜で立つ。降り口側には7～8

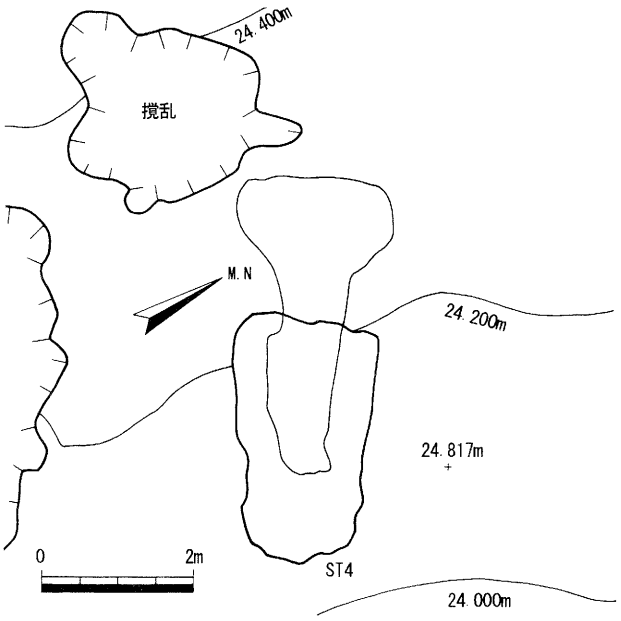


Fig.30　4号地下式横穴墓位置図（1/100）

個の足場が千鳥に穿たれており、床面へと続く。羨門部傾斜角は約72°で立ち、羨門は上部が下部に比べて10cm程短い台形状である。羨門部下の床面は緩傾斜で玄室へと延びる。

閉塞の方法は、羨門下から前にかけて不整形の溝が確認できたが明らかにはできない。

玄室は良好に遺存しており、屍床は奥壁及び左側壁側にやや大きめの石を配し、逆に右側壁及び前壁側は小振りの石が敷かれている。

右側壁には築造時の幅10～20cmの鑿痕が遺存しており、右ないし右上方から削り込まれいる。

竪坑を半裁した段階で北東壁の土層堆積状況を観察した結果、追葬痕跡は確認できず、玄室内に副葬された遺物状況及び年代差などとも対応する。しかし、屍床は２体分の可能性もあり、ほぼ同時に追葬を行った可能性も残る。

また、本地下式横穴墓で特筆することとして、竪坑前壁の羨門の左右に径7～12cm、竪坑右側壁に径20cm程の穴が穿たれており、板閉塞を行った後、板が手前に倒れないように木を横向きにして留めた可能性がある。恐らく１号地下式横穴墓と同様に、死者の再生を恐れた影響も予想であろう。

３）遺物の出土状態

左側壁側にまとまって出土した(57～61)。須恵器は坏蓋１(57)・坏身１(58)が共に敷石の隙間に立った状態で、無蓋長脚高坏１(59)は正位置、横瓶１(60)は横に寝て出土した。土師器は坏１(61)・鉢１(62)

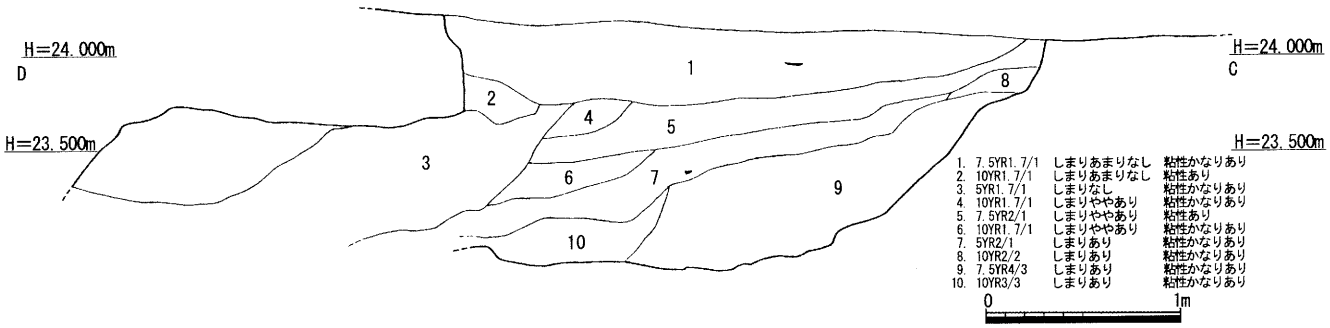


Fig.31　４号地下式横穴墓竪坑土層断面図(1/40)

が伏せた状態で出土した。玄室右側壁寄り前壁側には耳環１(63)が出土した。人骨は朽ちてしまっている。

また、竪坑からは須恵器坏身片３(64)、土師器甕片２、弥生土器甕片１(65)が出土した。

４）出土遺物(Fig.33)

57は坏蓋で口径11.9cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/5程度である。58は坏身で受部径12.8cmを測り、ヘラ削りの範囲1/4程度である。59は無蓋長脚高坏で口縁部径・脚裾径ともに11.5cmで、脚部に長方形の透かしを２段で３方向に穿ち、脚部中央に２条の沈線を巡らす。60は横瓶で、口径8.1cm、器高21.1cmを測る。全体にカキ目が施されている。口縁部には絞りの痕跡もみられる。61は土師器鉢で口径13.6cm測り、内外面は丁寧にミガキが施されている。62も土師器鉢で口径14.3cmを測り、内外面を丁寧にミガキ・板ナデにより整形してある。63は銅芯金箔張耳環である。金箔は、僅かに遺存する。

64は坏身で受部径13.3cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/4程度である。65は刻目突帯を１条廻らす甕である。

これら出土遺物から本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は九州編年ⅣB期、陶邑TK209型式新段階併行期に対応しよう。

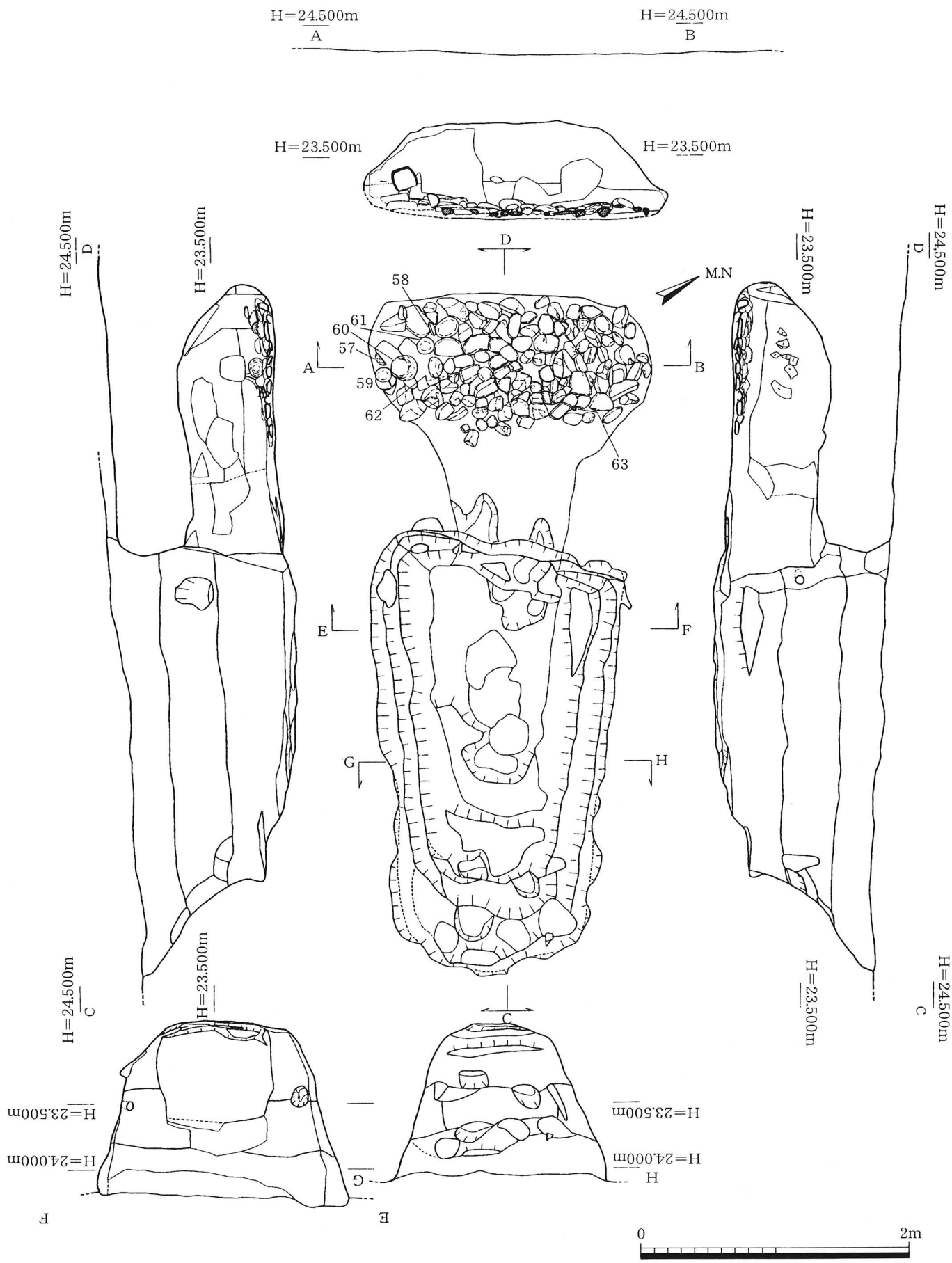


Fig. 32　4号地下式横穴墓実測図 (1/40)

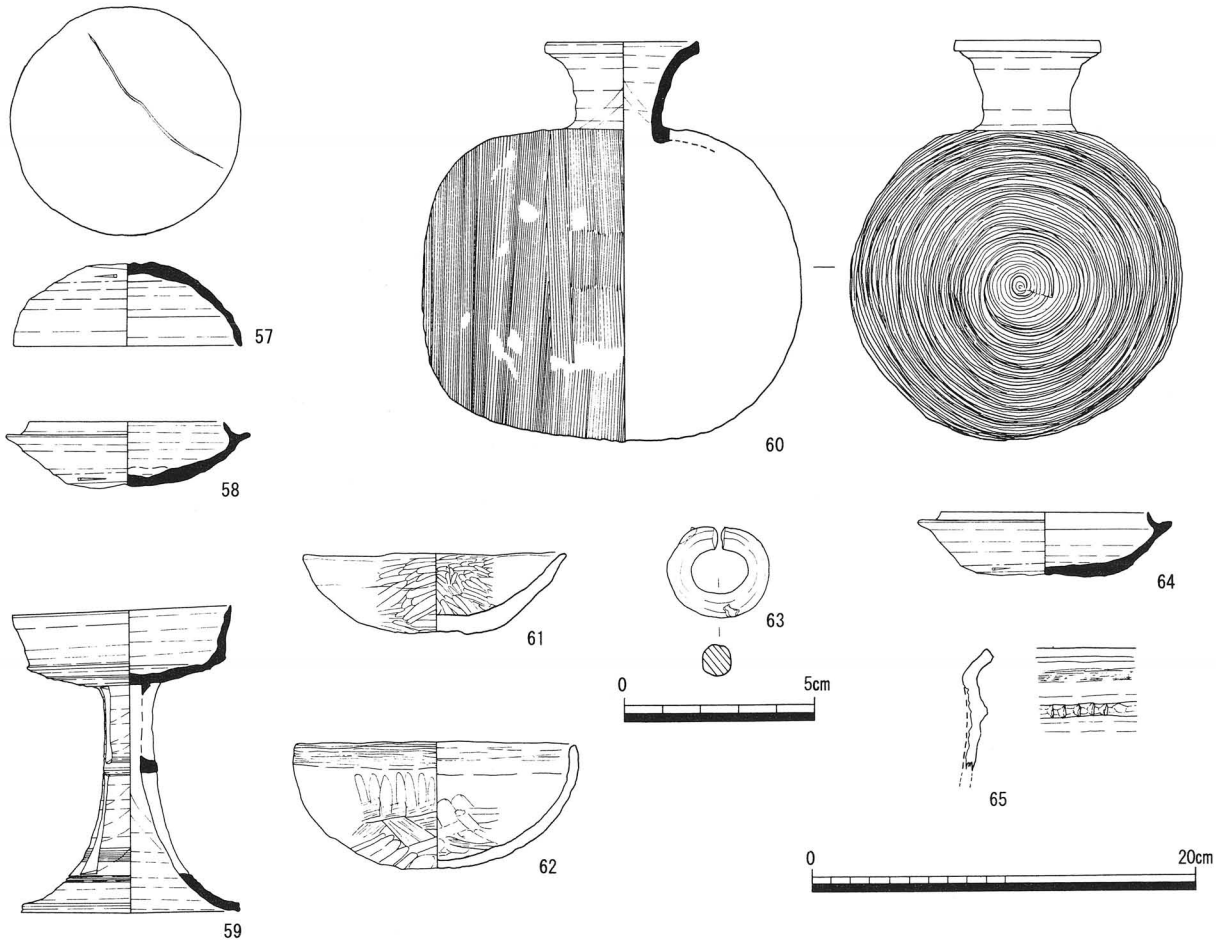


Fig. 33　４号地下式横穴墓出土遺物実測図（1/4、63のみ1/2）

５号地下式横穴墓（Fig. 34～36）

１）立地

調査区北側４号地下式横穴墓の東側に所在する。検出面は標高約24.6mである。

２）規模と構造

５号地下式横穴墓は全長4.13m、玄室奥行1.1m・幅1.9m・高さ0.68m、玄室床面積2.09㎡の隅丸長方形プランを呈す。天井は縦断面は床面から約35cmまではほぼ直に立ち上がる蒲鉾形であるが、横断面は側壁が若干弧を描くのみでほぼフラットな台形状である。

竪坑は長さ2.34m、幅1.5～1.75m、深さ1.41mの横長隅丸長方形プランである。降り口側は２段になっており、幅60cm程のテラスを形成し、床面へ降りる。また、床面には掘削痕も遺存している。降り口傾斜角は50°で掘削されており、竪坑

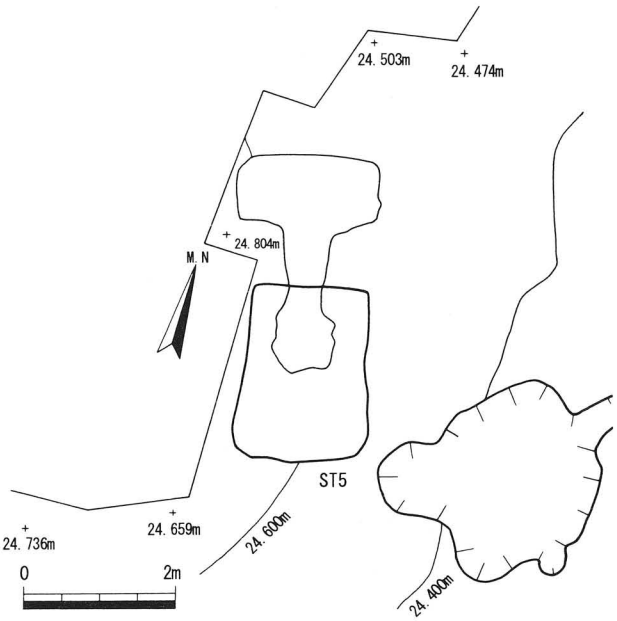


Fig. 34　５号地下式横穴墓位置図（1/100）

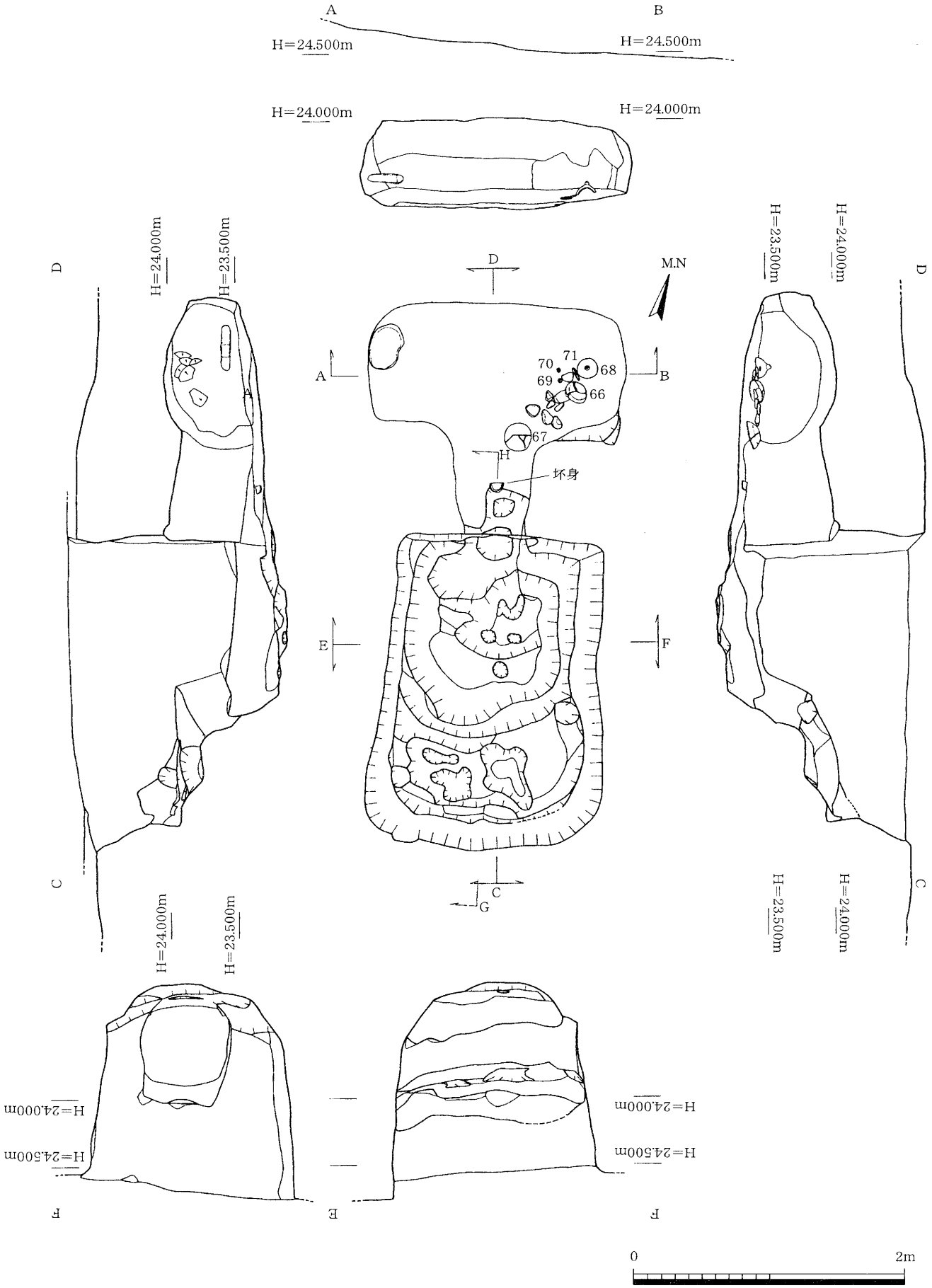


Fig. 35　5号地下式横穴墓実測図 (1/40)

傾斜角は30°、両側壁は74～78°で立つ。羨門部傾斜角は約83°で立ち、羨門は縦長の楕円形状を呈す。羨門部下の床面は緩傾斜のまま玄室へと延びる。

閉塞の方法は、羨門部手前に不整形の窪みがあるが板閉塞を行った痕跡とは断定できず不明である。

玄室内は礫を敷いた屍床などはなく、左側壁隅に約20～35cmの偏平な石が置かれているのみである。これは枕として利用された可能性が高い。

竪坑を半裁した段階で西壁の土層堆積状況を観察した結果、追葬痕跡は確認できなかった。但し、竪坑降り口側の構造などから再度、竪坑を堀りなおした可能性は残る。

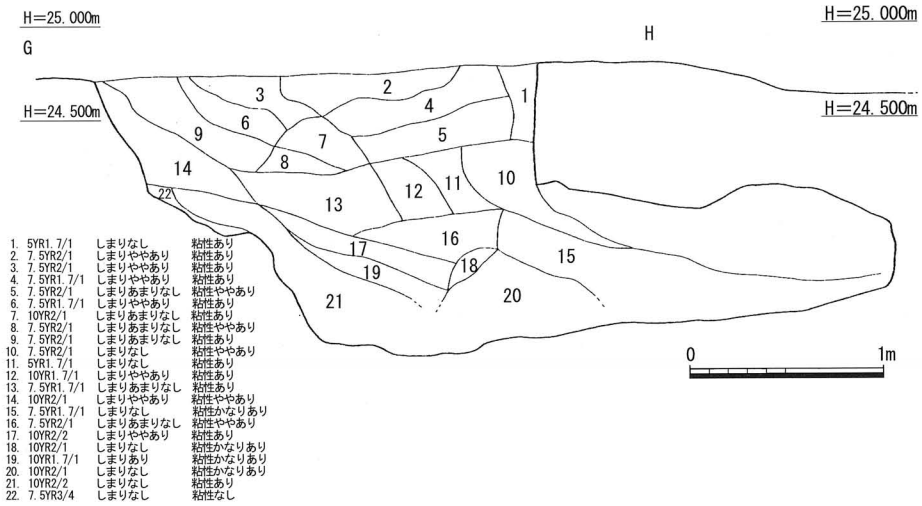


Fig.36　５号地下式横穴墓土層断面図（1/40）

３）遺物の出土状態

羨道から玄室右側壁にかけて検出された。但し、玄室内の土器類に関しては全てが土師器３(66～68)で、須恵器と土師器を供献される被葬者には何らかの制約があった可能性が示唆される。69･70は耳環、71は刀子である。人骨は全て朽ちてしまっている。羨道から須恵器坏身片が１点出土したが、調査中に紛失した。

また、竪坑からは、須恵器、土師器、陶磁器などの破片が出土した。

４）出土遺物（Fig.37）

66･67は鉢で口径17.6～18.5cmを測る。66は内外面をミガキで、67はミガキと横ナデで丁寧に仕上げてある。68は高坏で口径14.8cmを測り、脚部を欠損し伏せた状態で出土した。69は銅芯の耳環で金箔張りか銀箔張りかは不明である。70は銅芯金箔張耳環である。71は大型の刀子で形状は良好に遺存しており、２本が錆着している。

本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、土師器のみの出土のため明らかにし得ないが、６世紀末から７世紀初頭頃と予想される。

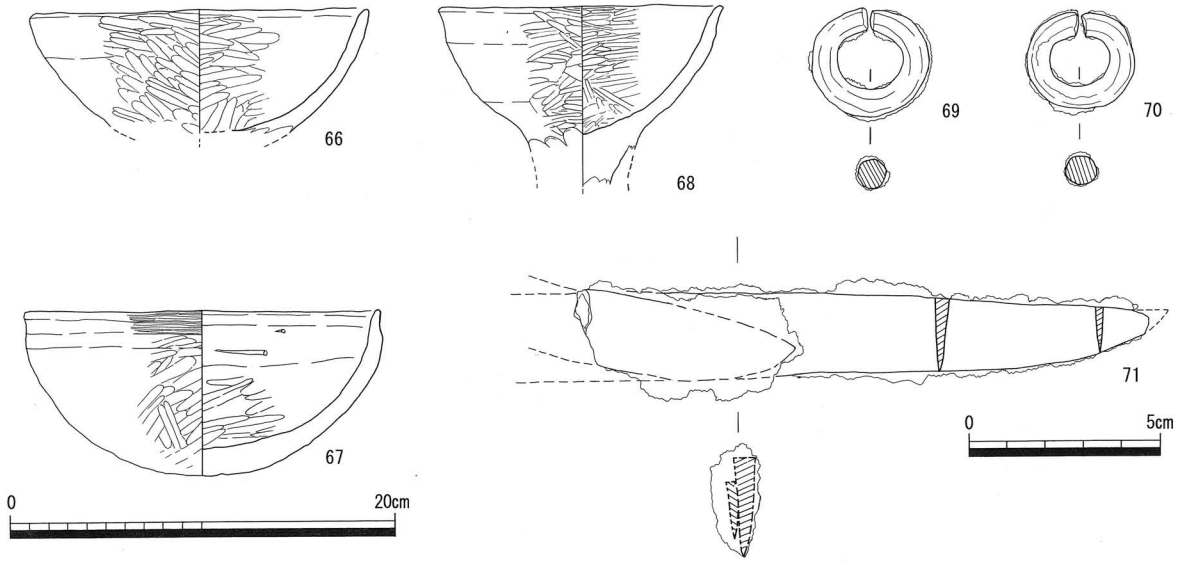


Fig.37　５号地下式横穴墓出土遺物実測図（1/4､69～71は1/2）

６号地下式横穴墓（Fig.38･39･41）

１）立地

調査区中央西側隅に所在する。検出面は標高約24.3～24.6ｍである。

２）規模と構造

６号地下式横穴墓は全長4.4ｍ、玄室奥行1.57ｍ・幅2.32ｍ・高さ不明、玄室床面積3.64㎡の楕円形プランを呈す。四壁は床面からカーブをなしながら立ち上がり、天井部は既に崩落しており明らかにできないが、おそらくドーム形になると思われる。

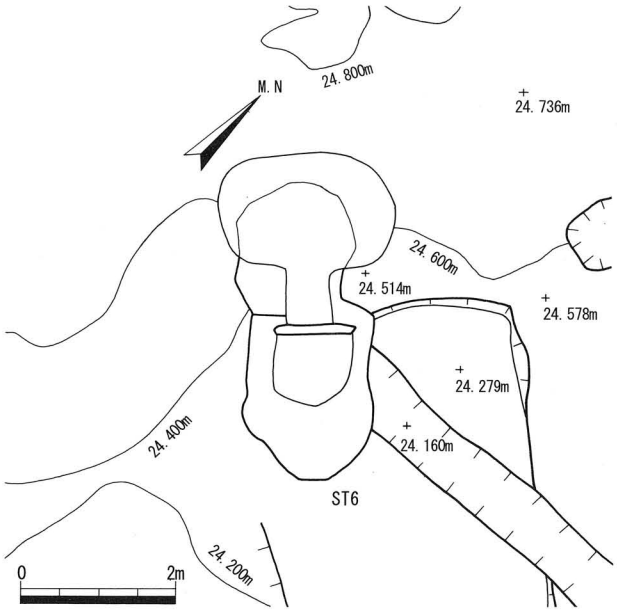


Fig.38　６号地下式横穴墓位置図（1/100）

竪坑は長さ2.47ｍ、幅1.62～1.73ｍ、深さ1.0～1.15ｍの横長楕円形プランである。但し、降り口側には深さ10cm程の浅い窪みが取り付いており、これがどのような意味をもつのかは不明である。降り口傾斜角は37°で掘削されており、竪坑傾斜角は20°、両側壁は66～71°で立つ。降り口側には右隅と左隅にそれぞれ２箇所の足場が直線的にに穿たれており、床面へと続く。羨門部傾斜角の壁は約77～83°で立ち、羨門は横長楕円形と思われる。羨門部下の床面は一段上がり玄室へと延びる。

閉塞の方法は、羨門部手前に板閉塞を行った際の板をはめ込んだとみられる幅10cm程の細長い溝が確認できたことから、板閉塞と予想される。

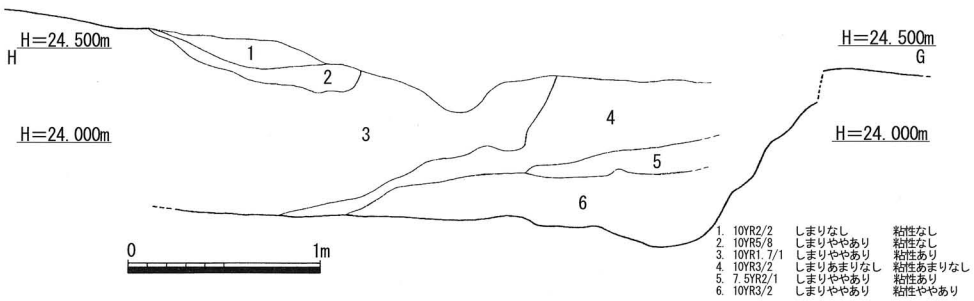


Fig.39　６号地下式横穴墓竪坑土層断面図（1/40）

玄室内には礫などによる屍床はなく、簡素で平坦面を形成している。

竪坑を半裁した段階で北東壁の土層堆積状況を観察した結果、竪坑埋土は板閉塞が朽ち、竪坑側埋土の重力により玄室内に流れ込んだと解釈できる。追葬痕跡は確認できず、玄室内に副葬された遺物の量などとも対応する。

３）遺物の出土状態

玄室中央よりやや右側壁に土師器坏１(72)のみが確認された。

４）出土遺物（Fig.40）

72は坏で口径12.2cmで底に木の葉紋が施されている。粗粒であるが、横ナデ、板ナデにより整形されている。

本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、土師器１点のみの出土であることから明らかにはできないが、地下式横穴墓の構造からみても６世紀末から７世紀初頭頃と予想される。

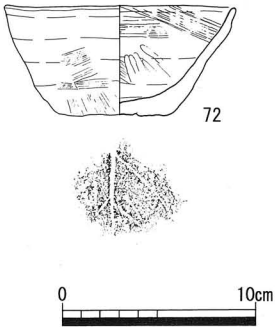


Fig.40　6号地下式横穴墓出土遺物実測図（1/4）

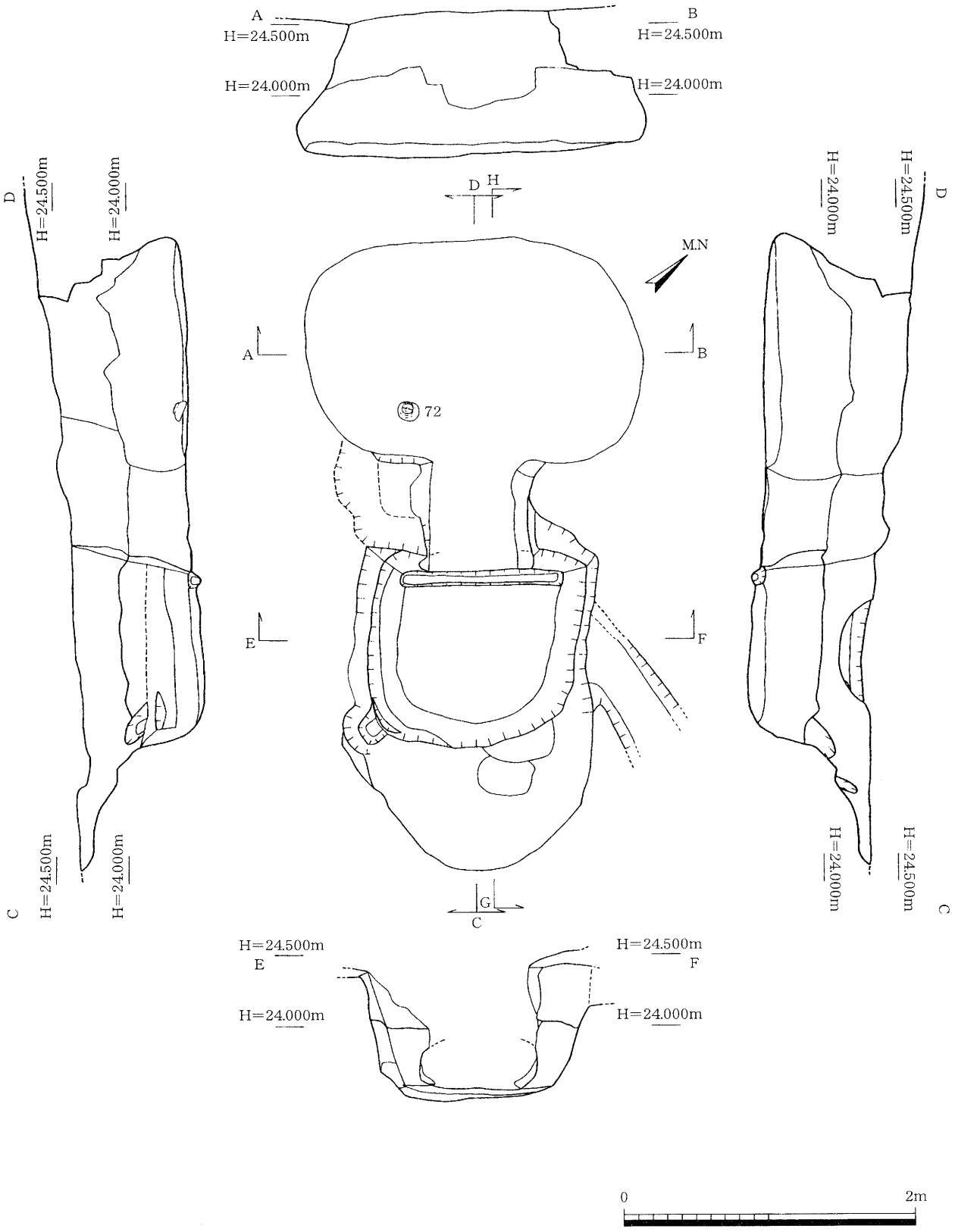


Fig. 41　6号地下式横穴墓実測図 (1/40)

7号地下式横穴墓（Fig.42・43）

1）立地

調査区中央西側6号地下式横穴墓の南東側に所在する。検出面は標高約23.6～24.2mである。

2）規模と構造

7号地下式横穴墓は全長4.48m、玄室奥行1.82m・幅2.3～2.36m・高さ不明、玄室床面積4.24㎡の隅丸長方形プランを呈す。天井はドーム形と思われるが、既に崩落していたことから明らかにはできない。

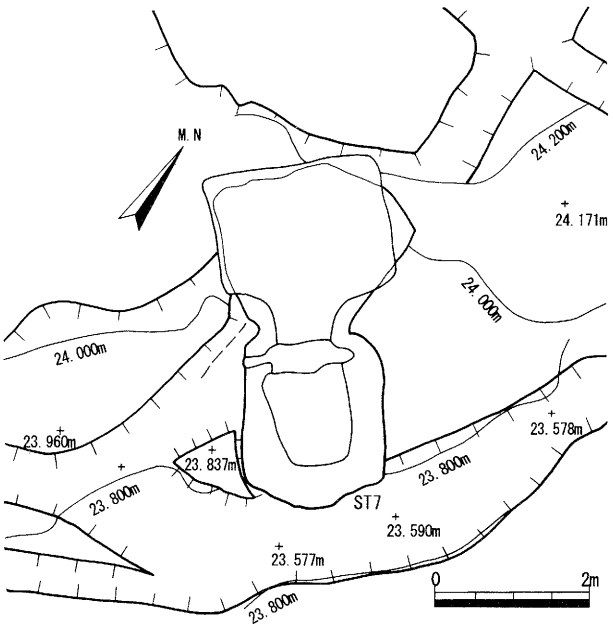


Fig.42　7号地下式横穴墓位置図（1/100）

竪坑は長さ4.48m、幅1.88m、深さ0.97mの隅丸方形プランである。降り口傾斜角は48°で掘削されており、竪坑傾斜角は18°、両側壁は58°で立つ。降り口側の右隅にステップらしき窪みが確認できた。羨門部傾斜角は約63～75°で立ち、羨門は天井部がほとんど崩落していることから明らかにはできないが、側壁が床面から40cm程直に立ち上がることから蒲鉾形であろうと思われる。羨門部下の床面は緩傾斜のまま玄室へと延びる。

閉塞の方法は、羨門部手前に板閉塞を行った際の板をはめ込んだとみられる幅25cm程の溝が確認できたことから羨門部板閉塞と思われるが、羨門部玄室側にも幅20～30cm程の溝が確認できた。このことは、解釈に苦しむが、ただ単に2箇所の閉塞を行った可能性と追葬時に閉塞の位置が変わった可能性がある。

玄室内には礫などによる屍床はなく、平坦面を形成している。

また、羨門部床面中央あたりに径10cm程のピットが1つ確認できた。この穴は玄室側から竪坑側に傾き、掘削されており、これに木などを立てた場合、その内側に立てられる閉塞板の支えとして利用できる。したがって、やはり死者再生を恐れての封印を意識したものの可能性が高い。

天井は既にほとんどが崩落しており、玄室内には大量の土砂が流れ込み充填されていた。本地下式横穴墓の竪坑上には、溝が切り合っており、調査時に地下式横穴墓の竪坑と判断することができずに、竪坑部を掘り下げてしまったことから、土層の堆積状況を検討することはできなかった。

3）遺物の出土状態

左側壁側に須恵器蓋坏5（73・77～80）が全て伏せた状態で、一方、右側壁側は須恵器蓋坏4（74～76・81）が内側を上に向けて出土した。また、左側壁側には蓋坏の側に耳環2（85・86）が検出されたことから、これら蓋坏は枕として用いられた可能性が高い。右側壁側にはハソウと須恵器甕片も各1点ずつ出土した。頭と足の対象性が蓋坏にも反映されたものではなかろうか。奥壁側にはミニチュア土器1（83）が出土した。

また、竪坑からは土師器高坏脚部片（87）などの土師器片が数点出土した。

4）出土遺物（Fig.44）

73～76は坏蓋で口径11.1～13.0cmを測り、ヘラ削りの範囲は74が1/3程度、75が1/2程度であるが、73は回転切り離し、76はヘラ削りの範囲がごく僅かである。77～81は坏身で受部径13.3～13.9cmを測り、

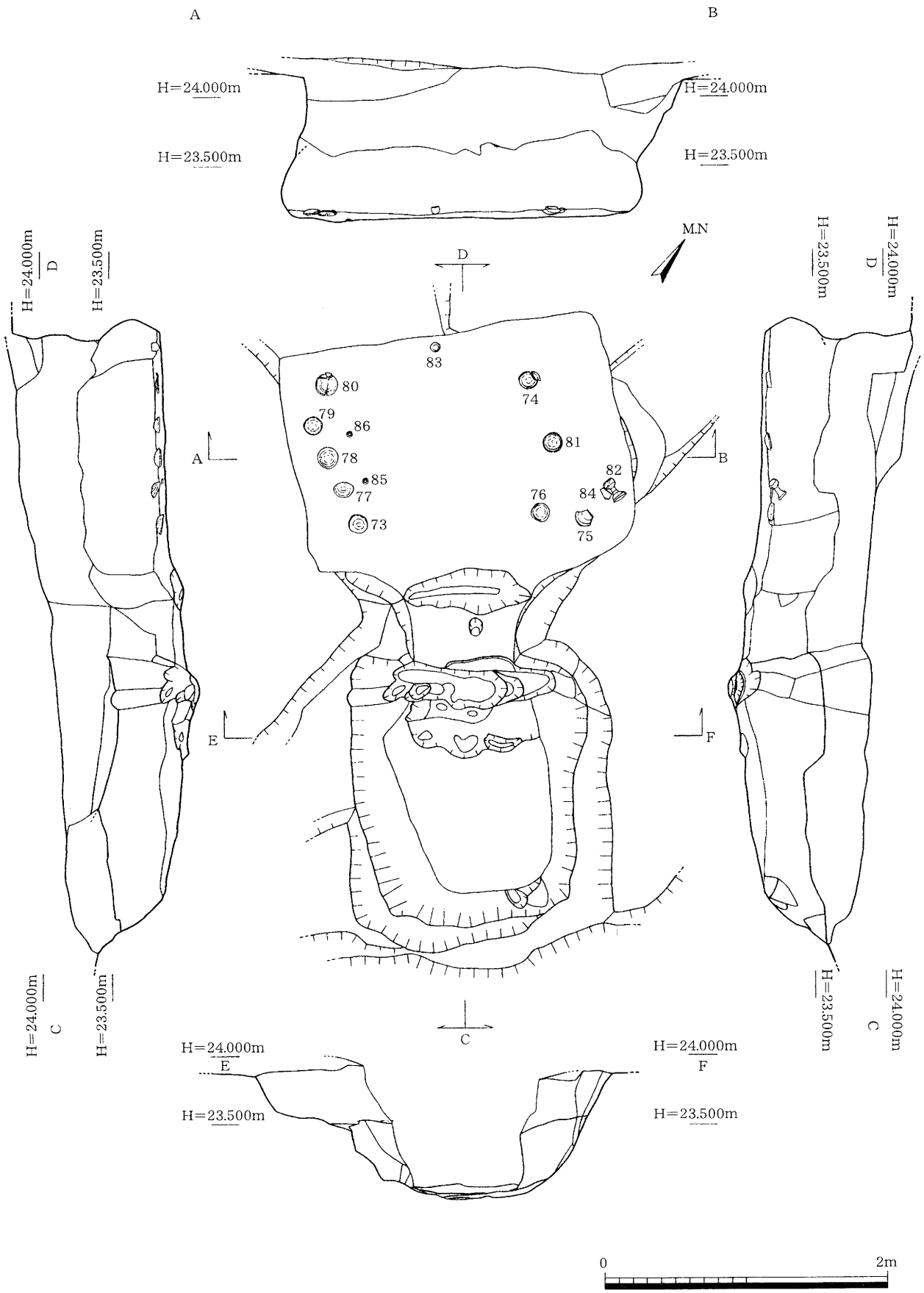


Fig. 43　7号地下式横穴墓実測図 (1/40)

ヘラ削りの範囲は1/7～1/2程度とばらつきがあり、蓋とも一致する。82はハソウで口縁部径12.3cmで胴部より拡がる。透かし穴を貫通した折りの粘土が内部に遺存している。83は甕形のミニチュア土器で口径6.8cm、器高4.0cmである。84は須恵器甕の胴部片で外面に叩きの痕跡が遺存する。85・86は銅芯銀箔張耳環である。87は高坏で脚部のみ1/2程遺存している。外面は丁寧にミガキが施されている。

本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、九州編年IVB期、陶邑TK209型式新段階併行期に対応しよう。

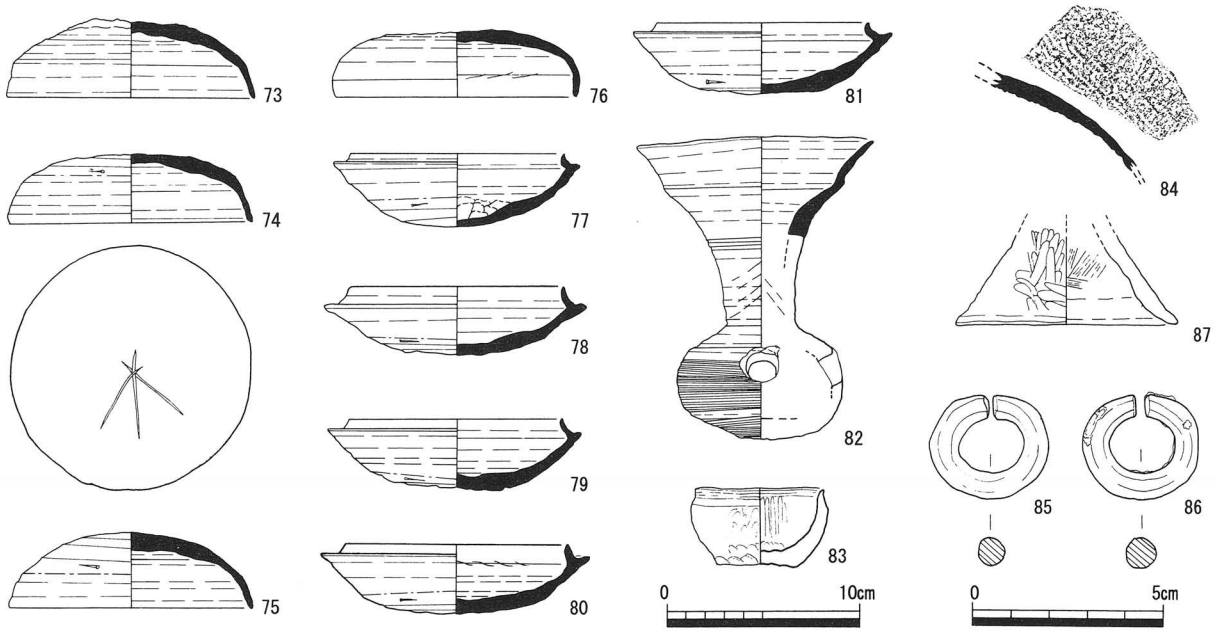


Fig. 44　7号地下式横穴墓出土遺物実測図（1/4、85・86は1/2）

8号地下式横穴墓（Fig. 45～47）

1）立地

調査区ほぼ中央7号地下式横穴墓の北東側に重機による表土剥ぎ取り時に、天井が陥没し検出された。検出面は標高約23.6～23.9mである。

2）規模と構造

8号地下式横穴墓は全長4.69m、玄室奥行1.34m・幅1.94～2.17m・高さ不明、玄室床面積2.75m²の長方形に近い台形プランを呈す。天井はほとんどが既に崩落していたことから詳細にできないが、側壁が床面から40cm程直に立ち上がることから蒲鉾形であろうと思われる。

竪坑は長さ2.79m、幅1.34～1.96m、深さ1.13mの縦長逆台形プランである。降り口傾斜角は48°で2段に掘削されており、竪坑傾斜角は21°、中位に幅約30cmの平坦面が造られ、やや内湾し

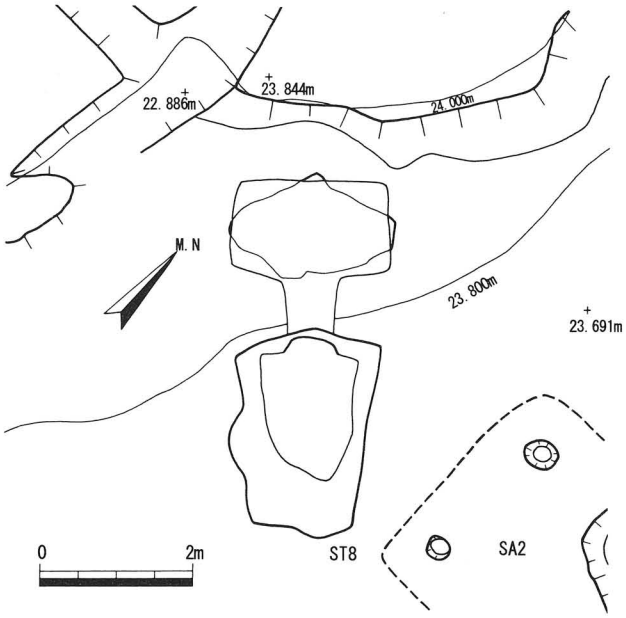


Fig. 45　8号地下式横穴墓位置図（1/100）

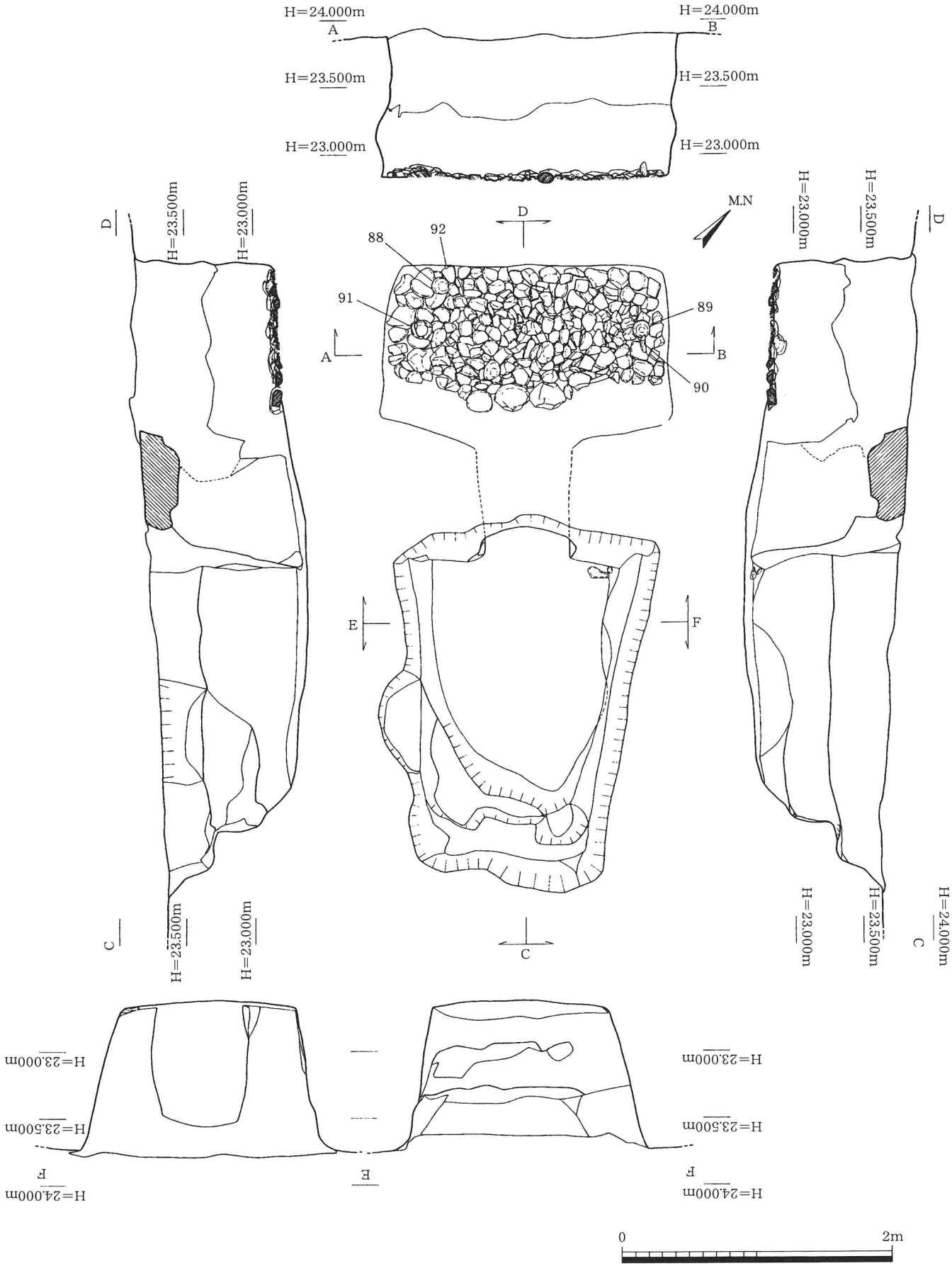


Fig. 46　８号地下式横穴墓実測図 (1/40)

ながら床面に至る。また、両側壁は72～78°で立つ。羨門部傾斜角は約74°で立ち、羨門の形は上方がやや丸まる長方形である。羨門部下の床面は羨門部前面が最も深く、約10°の緩傾斜で玄室へと延びる。

竪坑降り口側右隅のテラスに径25～40cm程の円形の足場が１個穿たれている。竪坑左側壁上部にも径80cmの半円形の窪みが確認されたが、遺構検出時には既に確認されていたことから後世に掘削されたイモ穴の可能性が高い。

屍床は羨門部玄室側に20～25cm程の３個の川原石を横に並べ、奥壁及び両側壁にやや大きめの石をコの字状に配し、その中をそれよりも小振りの川原石で充填し形成されている。この小振りな石は、ほとんどが縄文の集石遺構に使用されていた焼石を転用してある。

閉塞の方法は、板閉塞時に使用したような溝などの痕跡がなく不明である。竪坑を半裁した段階で南西壁の土層堆積状況を観察した結果、６層と７～９層の間に斜めにラインがとおり、追葬面の可能性も残る。また、竪坑埋土は、１・１'・３層などが羨門側に流れ込んでることから板閉塞が朽ちた段階で、一気に竪坑埋土が流れ込んだ可能性も示唆される。

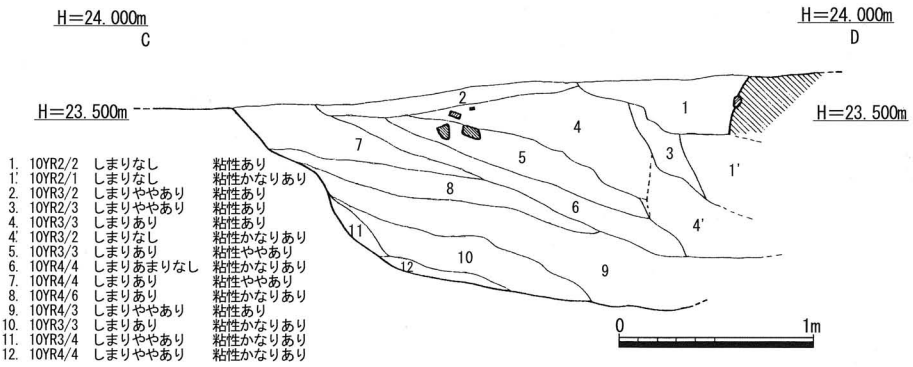


Fig. 47　８号地下式横穴墓竪坑土層断面図（1/40）

３）遺物の出土状態

土器類は全て須恵器で、玄室左側壁側に坏身１(91)、左側壁寄り奥壁側に坏蓋１(88)、右側壁側に坏蓋２(89・90)が88・89・91は伏せて、90は横向きの状態で出土した。

鉄器は奥壁の左側壁寄りに鉄鏃１(92)が出土した。

左右側壁側に置かれた遺物はほとんどが伏せた状態で出土し、枕として使用されたことを考慮すると、玄室内の被葬者は２体が頭位を逆に入れられたとも想定される、また、左側壁側の遺物の位置が奥壁側と側壁中央出土したことから想定すると奥壁側と前壁側に２体が頭位を同じくして埋葬された可能性も残る。

４）出土遺物（Fig. 48）

88～90は坏蓋で口径12.3～13.1cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/5～1/7程度であり狭い。91は坏身で受部径13.4cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/4程度である。92は腸抉三角形鏃で現存鏃身長4.6cm、幅3.6cmを測る。全面が錆びているが、形状は良好である。

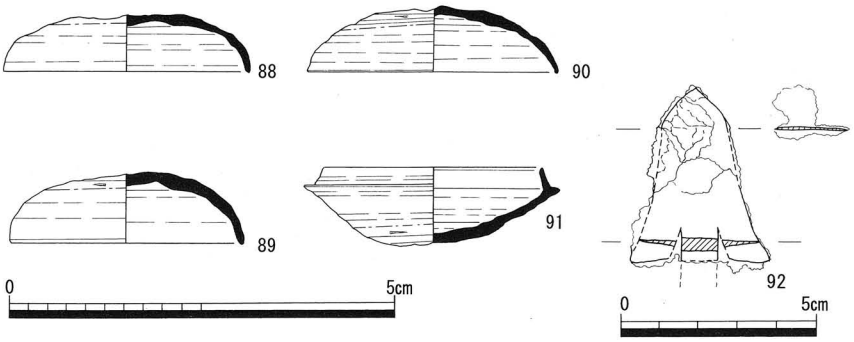


Fig. 48　８号地下式横穴墓出土遺物実測図（1/4、92のみ1/2）

本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、九州編年ⅣB期、陶邑TK209型式新段階併行期に対応しよう。

9・10号地下式横穴墓（Fig. 49・50）

1）立地

調査区ほぼ中央やや東より８号地下式横穴墓の東、２号住居跡と切り合って所在する。検出面は標高約23.6mである。

2）規模と構造

９号地下式横穴墓は竪坑を10号地下式横穴墓と切り合いないしは共有することから10号の竪坑を仮に９号の竪坑と考えた場合の全長は3.46mである。玄室奥行1.26m・幅1.66～1.9m・高さ不明、玄室床面積2.24㎡の横長台形プランを呈す。天井はほとんど陥没しており詳細は不明であるが、四壁は床面から約60cmまではやや内傾するもののほぼ直に立ち上がることから蒲鉾形を呈すと思われる。

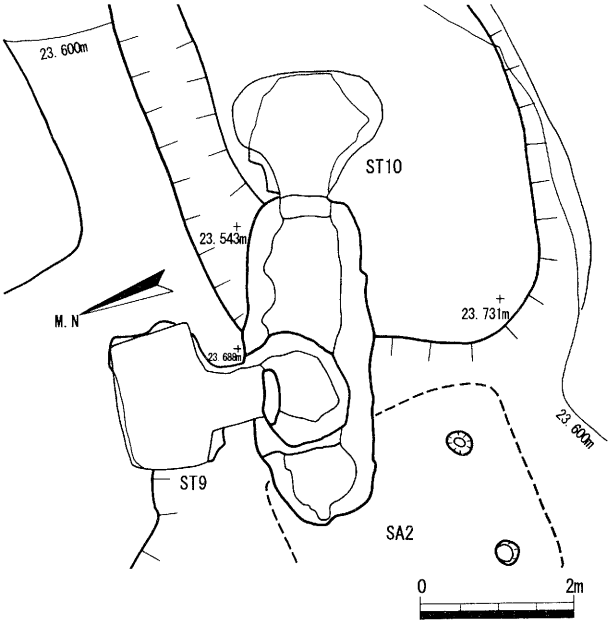


Fig. 49　9・10号地下式横穴墓位置図（1/100）

竪坑は上記のように不明であるが、９号地下式横穴墓の羨門部前に1.8×1.8m程、深さ約20cmの不整形楕円の窪みがあり、本来の竪坑が10号地下式構築時に上部のみ破壊されたのか、やはり竪坑は10号地下式と共有しており、竪坑を意識した掘込みを構築したのかは不明である。降り口傾斜角は59°で掘削されており、竪坑傾斜角は32°である。羨門部傾斜角は約74°で立ち、羨門は隅丸長方形であろうと思われる。羨門部下の床面は緩傾斜のまま玄室へと延びる。

閉塞の方法は、羨門部手前に板閉塞を行った際の板をはめ込んだとみられる幅20～25cm程の溝が確認できたことから、羨門部板閉塞であると思われる。

屍床は10～30cm程度の川原石が乱雑に並べられて形成してある。

10号地下式横穴墓は全長6.06m、玄室奥行1.15m・幅1.95m・高さ不明、玄室床面積2.24㎡の横長楕円形プランを呈す。天井は四壁が床から約40cmまではやや内傾するもののほぼ直に立ち上がることから蒲鉾形と思われる。

竪坑は長さ4.36m、幅1.46～1.72m、深さは９号地下式の辺りが最も低く約1.15mで、それ以外の場所で最低位は約１mの長大な楕円形プランである。降り口傾斜角は29°で掘削されており、竪坑傾斜角は８°、両側壁は59～66°で立つ。降り口側には２個のピットが穿たれているが目的は不明である。羨門部傾斜角は約71°で立ち、羨門は隅丸長方形であろうと思われる。

羨門部下の床面は、羨門部前の窪みから約10°の傾斜で玄室へと延びる。

閉塞の方法は、羨門部下に板閉塞を行った際の板をはめ込んだとみられる幅20cm程の溝が確認できたことから羨門部板閉塞であると思われる。

屍床は10～25cm程度の川原石が玄室中央部から奥壁側に横長に乱雑に並べられて形成してある。

この長大な竪坑の降り口側は幅30cm程のテラスが形成されており、これを足場として用いたと思われる。

また、９号の左側壁奥壁側には径30cm程の穴が穿たれていた。この穴の深さは、２mポールでも壁に届かず使用用途は不明であるが、可能性として死者の再生を恐れ、死者が起き上がらないようこの穴に丸太などを差し込み、被葬者に抱えさせていたのかも知れない。調査後、この穴の終わりを確認する予

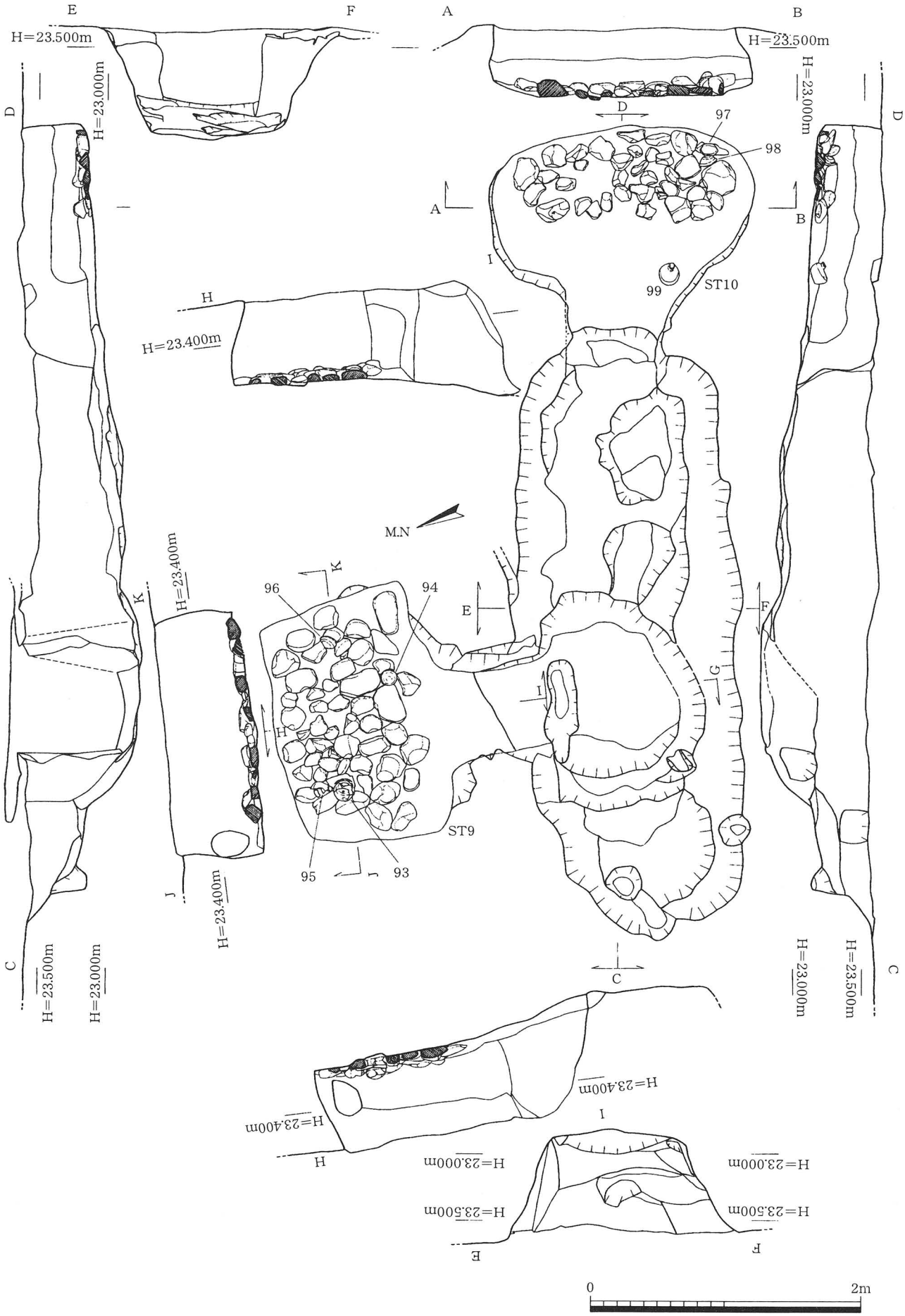


Fig. 50　9・10号地下式横穴墓実測図 (1/40)

定であったが、時間の都合上調査できなかった。

また、これと同様なものは14・16・18号などからも確認された。他の遺跡でこれと同様の例は、西都市内の穂北横穴墓群[2]からも確認されている。

3）遺物の出土状態

9・10号ともに玄室内は良好に遺存していた。

9号は左側壁側に須恵器坏蓋1(93)と坏身1(95)、右側壁側に坏身1(96)、中央よりやや右寄り羨門側に坏蓋1(94)が出土した。これら蓋坏は、全て伏せた状態で出土した。また、玄室内の埋土から土師器甕胴部片1が出土しているが、天井部上部からの流込みの可能性が高い。

10号は玄室右側壁奥壁隅から須恵器坏蓋1(97)・坏身1(98)、玄室羨門側右袖から平瓶1(99)が出土した。97は内面を上にし、98は伏せた状態で置かれているようではあったが、97は当初、98の上に被せられていたものが、その後、転がったようにも見受けられる。

人骨は9号から骨片が少量検出されたが、10号は朽ち果ててしまっている。

本地下式横穴墓は調査の都合上、土層断面を実測し得なかったので、土層の堆積状況から各地下式横穴墓の切り合い関係や追葬の可能性を検討できないのが惜しまれる。追葬に関しては、9号は左側壁側と右側壁側から出土した遺物に型式差が明らかにあり、最低2体の埋葬を行っている。一方、10号は遺物の量も1組程度で、型式差もないことから1体のみの埋葬であろうと思われる。

4）出土遺物 (Fig. 51)

93・94は坏蓋で93は口径13.7cm、94は口径11.9cmを測り、ヘラ削りの範囲は93が1/6程度、94はヘラ切り離し調整である。95・96は坏身で95は受部径16.2cm、96は受部径12.2cmを測り、ヘラ削りの範囲は95は風化のため不明で、96は1/4程度である。93・95と94・96はセット関係にあると思われる。

97は坏蓋で口径11.9cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/7程度である。98は坏身でかなり焼き歪みがあるが、受部径13.2cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/3程度である。99は平瓶で口縁部端を一部欠損しているが、他は良好に遺存しており胴部は角張り、平底気味である。胴部最大径は15.3cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/3程度である。胴部全体にカキ目が施されており、肩部ににぶい黄橙色の灰被りが認められる。

また、96は－、97は×印のヘラ記号が刻印されていた。

9号地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、九州編年ⅣA期からⅤ期、陶邑TK209型式古段階からTK217型式新段階併行期に対応しよう。一方、10号地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、九州編年ⅣB期、陶邑TK217型式古段階併行期に対応しよう。

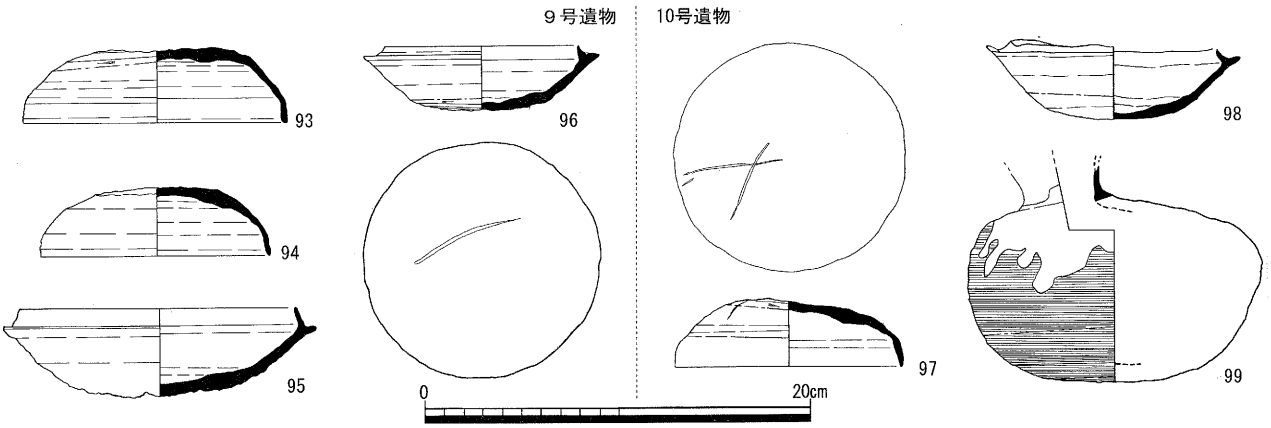


Fig. 51　9・10号地下式横穴墓出土遺物実測図 (1/4)

11号地下式横穴墓（Fig.52・53）

1）立地

調査区中央よりやや北東側、9・10号地下式横穴墓の北東側に所在する。検出面は1号住居跡床面であり、標高約23.3mである。

2）規模と構造

11号地下式横穴墓は全長3.81m、玄室奥行0.91m・幅1.44m・高さ不明、玄室床面積1.31㎡の横長不整形楕円プランを呈す。四壁は床面からカーブをなしながら立ち上がり、天井部は既に崩落しており明らかにできないが、おそらくドーム形になると思われる。

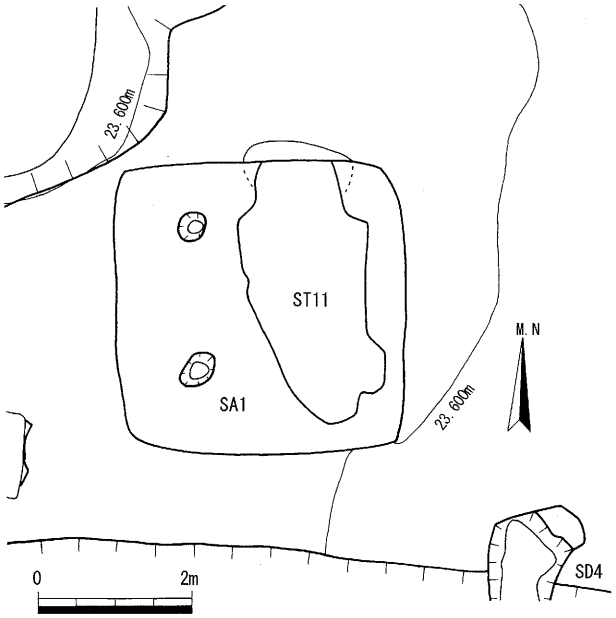


Fig.52　11号地下式横穴墓位置図（1/100）

竪坑は長さ2.79m、幅0.73～1.74m、深さ0.71mの縦長隅丸三角形プランである。降り口傾斜角は40°で掘削されており、竪坑傾斜角は15°、両側壁は76～78°で立つ。降り口側は1段テラスが設けられており、床面へと続く。羨門部傾斜角は約71°で立ち、羨門は上部が既に崩壊していることから詳細にはできないが、横長楕円形と思われる。羨門部下の床面は一段上がり玄室へと延びる。堂ヶ嶋第2遺跡は、河岸段丘上の遺跡であることから、竪坑床面には自然礫層が露出している箇所が認められる。

竪坑降り口側上部及び底には径20cm弱のピットが各1つ、また、竪坑右側壁側中央上部にも径30cmのピットが1つ穿たれている。住居跡と切り合っていることから、これらピットの利用法に関しては明らかにできないが、竪坑降り口側上部に穿たれている柱穴に関しては標柱的な柱が立っていた可能性もある。

閉塞の方法は、板をはめ込んだとみられるような溝も確認できず不明であるが、羨門部傾斜角が71°と倒れていることから板を立てかけていた可能性が高い。

玄室内には20～40cm程の川原石が4個不規則的に置かれているのみで、遺物は何も出土しなかった。

この地下式横穴墓は第1号住居跡内に竪坑がおさまり、玄室は住居跡の外に出ている状態である。住居跡との関係については、住居跡の方が先に造られ、その後、地下式横穴墓が築かれたと思われるが、ただ単に住居跡と切り合うだけではなく、住居跡内に規則的に配されていることから、住居跡が所在していたことを知っていたのか、住居跡廃絶後すぐに築かれたと考えられる。また、可能性として住居をモガリ屋的なものとして利用し、その中に地下式横穴墓を築いたとも予想される。

追葬に関しては、遺物が出土していないことなどから不明であるが、玄室のプランがかなり狭小なことからも1体のみの埋葬であったと思われる。

3）遺物の出土状態

玄室内・竪坑ともに遺物は何も出土せず、人骨は朽ち果てている。

4）出土遺物

出土遺物は、唯一何も出土しなかった。

本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、出土遺物が全くなかったことから不明であるが、玄室の規模や構造から7世紀初頭頃の可能性が高いと予想される。

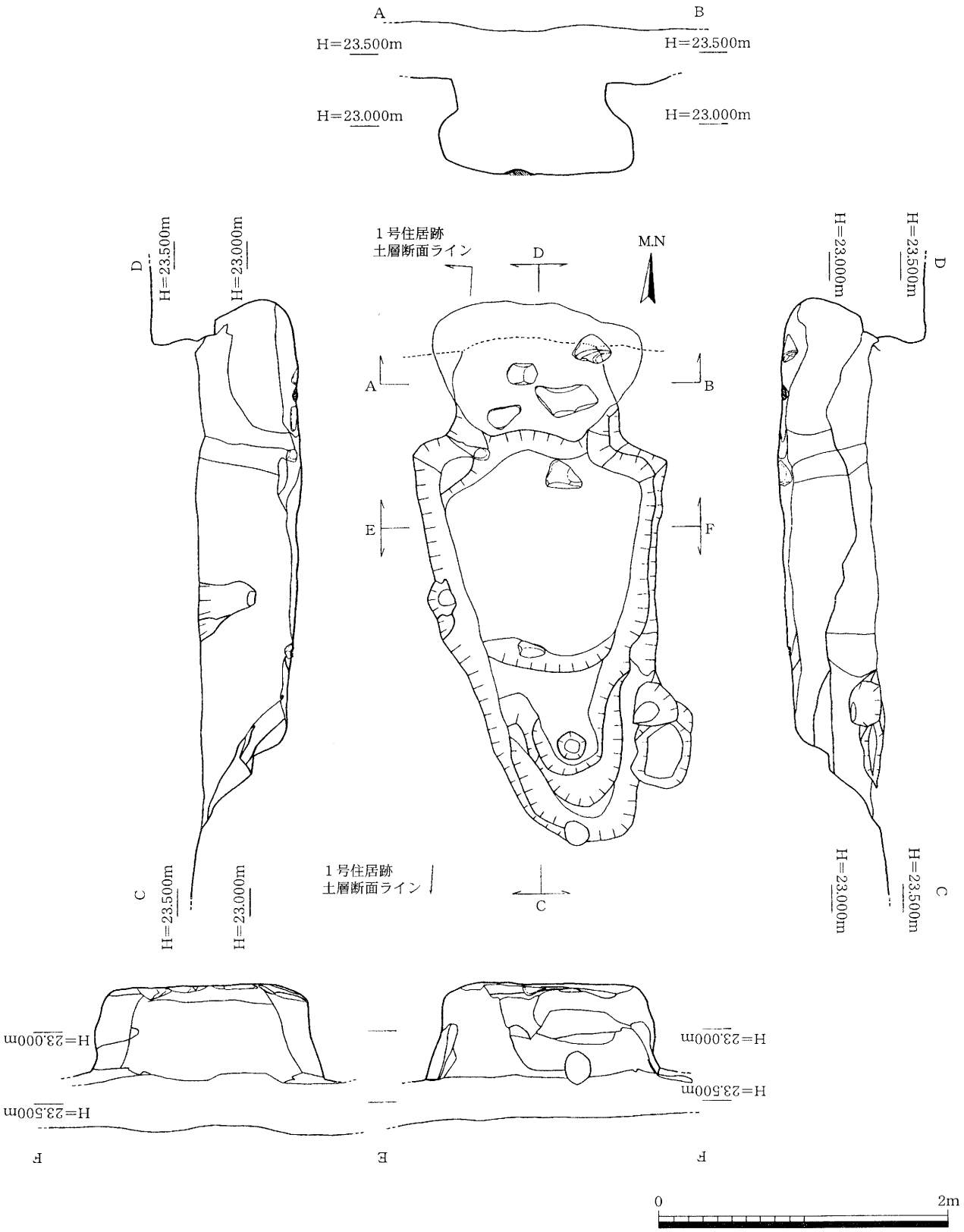


Fig. 53　11号地下式横穴墓実測図 (1/40)

12号地下式横穴墓（Fig. 54～56）

1）立地

調査区中央東側、9・10号地下式横穴墓の南東に所在する。検出面は標高23.3～23.4mである。

2）規模と構造

12号地下式横穴墓は全長4.05m、玄室奥行1.11m・幅1.62m・高さ不明、玄室床面積1.8㎡の不整形楕円形プランを呈す。天井はほとんどが崩落していることから明らかにできないが、床面から既にカーブするドーム形と思われる。

竪坑は長さ2.45m、幅1.56～1.97m、深さ0.72mの竪坑右側壁がやや膨らむ縦長隅丸方形プランである。降り口傾斜角は49°で掘削されており、竪坑傾斜角は16°、両側壁は61～71°で立つ。降り口側には中央部に幅20cm程のテラスが設けられている。

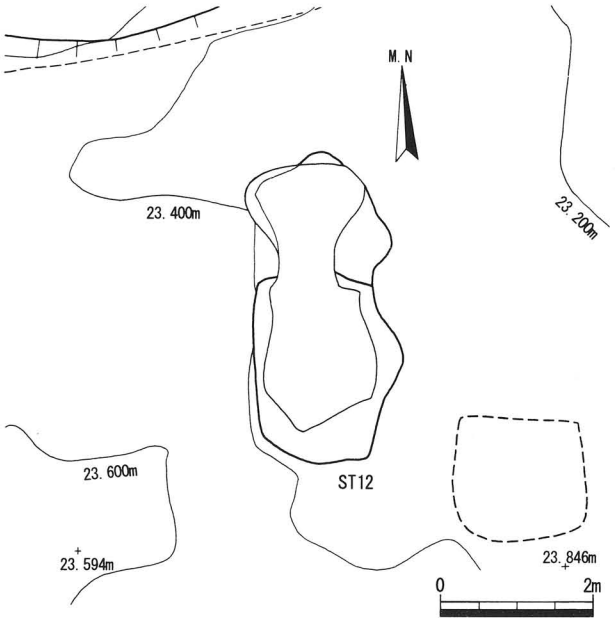


Fig. 54　12号地下式横穴墓位置図（1/100）

竪坑の底にはカシワバン下層の河岸段丘の自然礫層が露呈しており、これを竪坑床面として利用している。

羨門部傾斜角は約72°で立ち、羨門は天井部が既に崩落しており明らかにできないが縦長楕円形を呈すと思われる。

閉塞の方法は、川原石閉塞である。20cm程の川原石の長い方を差し込むような形でまず充填され、その後、それら石と羨門を覆うように10～20cm程の川原石で被覆してある。その上に粘土などの目張りは行われていない。閉塞石の内、閉塞時の最初に差し込まれた川原石が1点、玄室側に転落していた。

玄室内には右袖側に石が1個置かれているのみであり、屍床は築かれていない。

竪坑を半裁した段階で西壁の土層堆積状況を観察した結果、降り口側からの流込みが確認された、11層上面に斜めのラインが確認されたが、羨門の高さを考慮するとこれは追葬ラインとは考え難い。

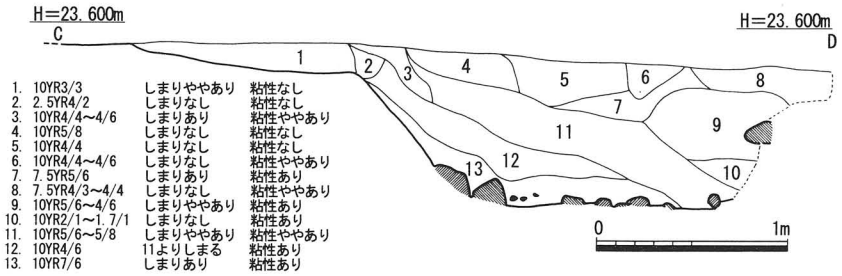


Fig. 55　12号地下式横穴墓竪坑土層断面図（1/40）

3）遺物の出土状態

玄室内は既に天井が崩落し多量の土砂が堆積していたが、良好に遺存していた。右側壁側に須恵器坏蓋1（100）と坏身1（101）が伏せた状態で、玄室中央羨門側に平瓶1（102）が横に倒れ、左側壁側に土師器高坏1（103）が斜めに傾き出土した。

人骨は既に朽ち果てている。また、閉塞部の埋土からは土師器甕の小破片も出土した。

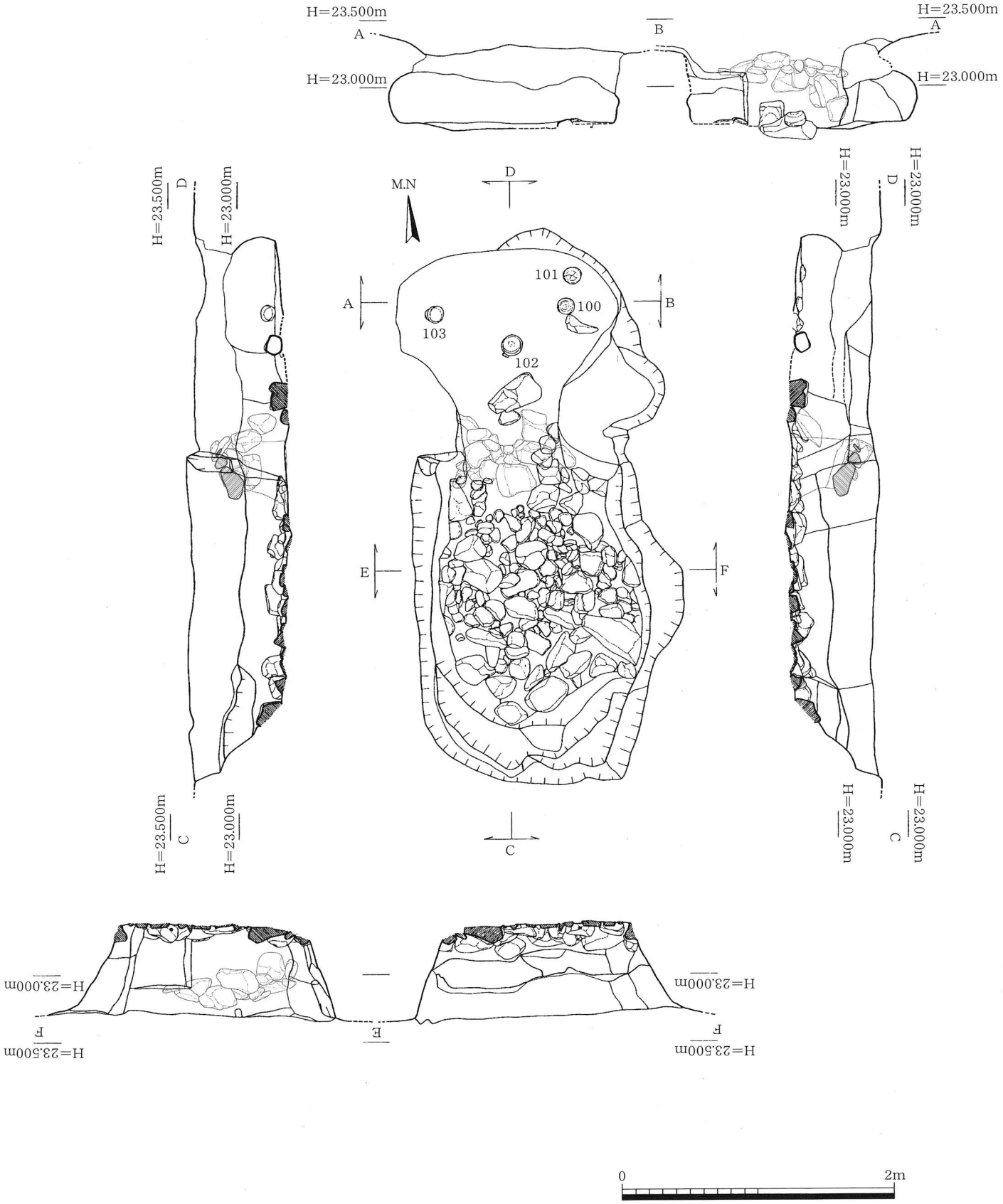


Fig. 56　12号地下式横穴墓実測図 (1/40)

4）出土遺物（Fig. 57）

100は坏蓋で口径約12.0cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/4程度である。141坏身で受部径12.4cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/2程度である。102は平瓶で口径6.7cm、器高14.0cmを測る。口縁部を一部欠損する。胴部にはカキ目が施されており、底から1/3程度は回転ヘラ削りで仕上げられている。103は土師器高坏で口径11.8cm、器高8.85cmを有する。坏部は外・内面とも横方向のミガキが右下から左上に施され、脚部は外面を下から上方向に板状ナデ、内面を横ナデ、脚部と坏部の接合箇所は指押さえで、丁寧に仕上げられている。

本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、九州編年IVB期、陶邑TK217型式古段階併行期に対応しよう。

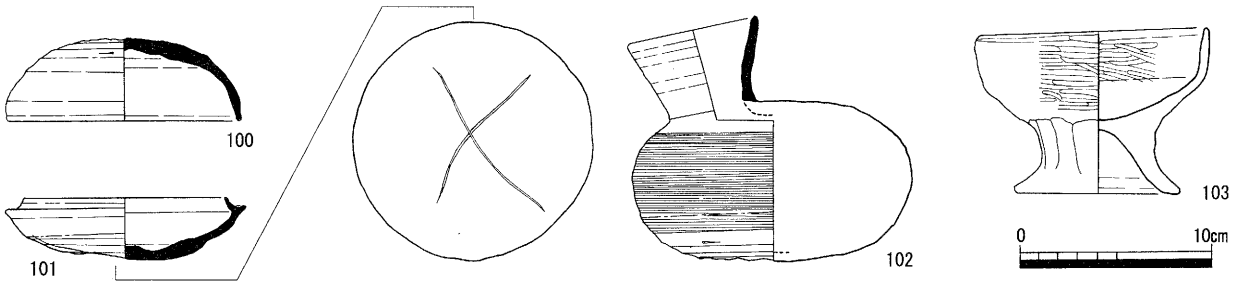


Fig. 57　12号地下式横穴墓出土遺物実測図（1/4）

13号地下式横穴墓（Fig. 58・59・61）

1）立地

調査区中央やや南側１号地下式墓寄生型消失円墳の周溝から竪坑を穿ち、玄室を外側に配し所在している。検出面は、標高23.8mである。

2）規模と構造

13号地下式横穴墓は全長5.44m、玄室奥行1.68m・幅2.21m・高さ不明、玄室床面積3.71㎡の横長楕円形プランを呈す。天井は床面からカーブするドーム形である。

竪坑は周溝内に穿たれるため、周溝内側の上端から計測し長さ3.12m、幅1.68～1.72m、深さ1.22mの縦長隅丸方形プランである。降り口傾斜角は47°で掘削されており、竪坑傾斜角は21°、両側壁は79～85°で立つ。降り口側（周溝内側）には足場はないが、周溝底と竪坑底の高低差は約50cmであり、周溝を墓道的に用い上り下りを行ったと予想される。また、竪坑羨門部側の床面は10～15cm程窪んでいるが、掘削時の作業面として堀り窪められた可能性と羨門が低いことから玄室内へ入り易くするための工夫と思われる。羨門部傾斜角は約84°で立ち、羨門は蒲鉾形である。羨門部下の床面は緩傾斜を保ちながら玄室へと延びる。

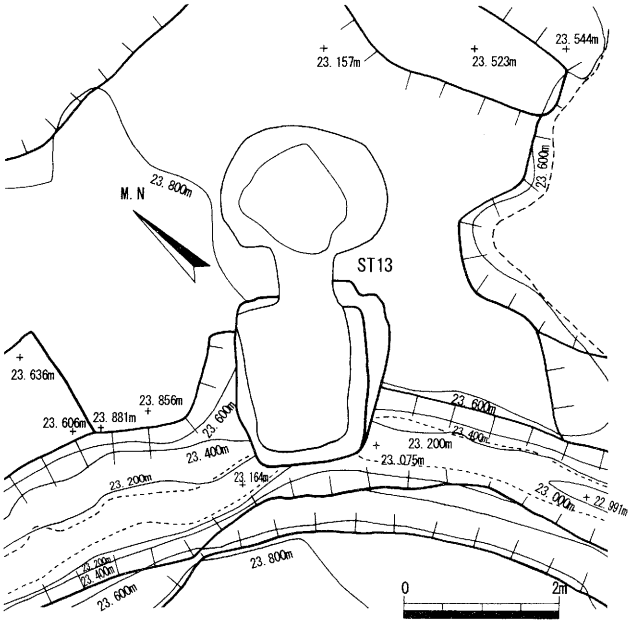


Fig. 58　13号地下式横穴墓位置図（1/100）

閉塞の方法は、羨門竪坑側の左袖に偏平な石が立てかけられていたことから、この石は閉塞板が手前に倒れないように押さえた石と予想され、羨門部板閉塞と思われる。

玄室内は右側壁及び奥壁側にやや大きめの石が配され、中央部から左側壁には小振りの石がぎっしりと充填された屍床が形成されている。右側壁前壁側に置かれている石は偏平で長く、枕として用いられた可能性が高い。この屍床に関しては、敷石の形状からの判断であるが、３体分の屍床である可能性がある。左側壁から奥壁にかけて10～30cm程の石が敷かれた箇所(第１屍床)、玄室中央に10cm程の小振りな石が敷き詰められた箇所(第２屍床)、前壁側の15～35cm程のやや大きめの石が敷かれた箇所(第３屍床)の３箇所である。それぞれの端には枕として用いたと思われる、大きめの石が置かれている。このことから、第１・２屍床は北西向きに、第３屍床は南東向きに頭位を配していた可能性が高い。

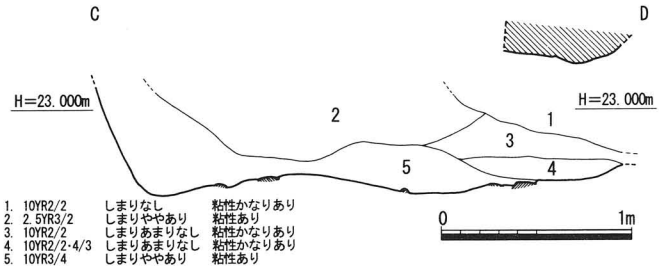


Fig. 59　13号地下式横穴墓土層断面図 (1/40)

また中央部左側壁側には径30cm程の石が敷かれていない空白箇所がある。これは、羨門部床面に９個、竪坑に12個の石が散乱しており、追葬時に玄室内から持ち出された可能性が高い。

竪坑を半裁した段階で北西壁の土層堆積状況を観察した結果、追葬は確認できなかった。

３）遺物の出土状態

玄室内は良好に遺存しており、左側壁から坏蓋１(104)と坏身１(105)、中央奥壁側に手鎌１(106)、右側壁羨門部袖付近に鉄鏃茎部１(107)と耳環１(108)が検出できた。

人骨は既に朽ち果てている。

４）出土遺物 (Fig. 60)

104は坏蓋で口径12.3cmを測り、ヘラ削りの範囲は2/5程度である。105は坏身で受部径13.1cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/2程度である。106は手鎌と思われる。現存長5.7cm、幅2.05～2.4cm程が遺存している。断面は三角形状を呈し、鎬部は４mm程度である。しかし、かなり錆が付着しており、詳細な形状は明らかにできない。107は鉄鏃の茎部である。現存長6.0cm、幅8.0～1.4cmで、断面は厚さ４mm、幅1.0cm程の長方形である。鏃身部が欠損しており形状は不明であり、錆がひどい。108は銅芯金箔張耳環である。径は2.7～3.0cmを測り、かなり腐食が進んでいるものの、金箔は良好に遺存している。

本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、九州編年ⅣB期、陶邑TK209型式新段階からTK217型式古段階併行期に対応しよう。

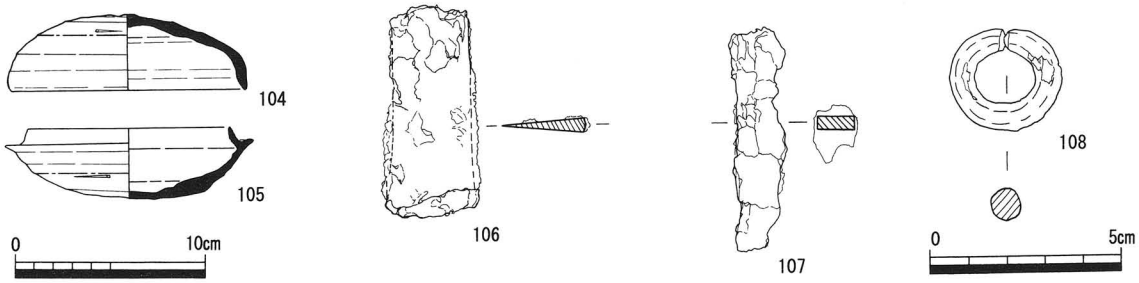


Fig. 60　13号地下式横穴墓出土遺物実測図 (1/4、106～108は1/2)

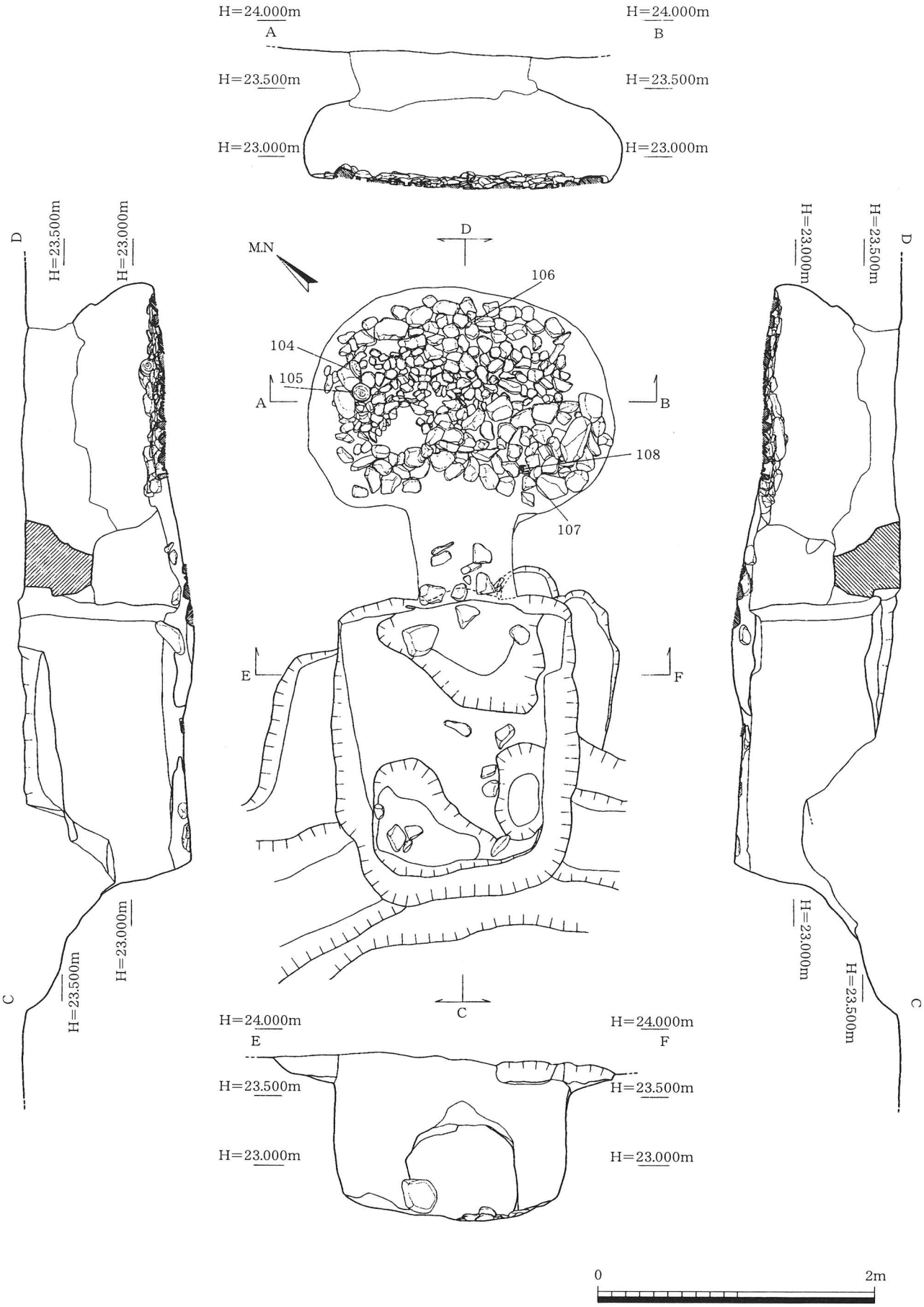


Fig. 61　13号地下式横穴墓実測図 (1/40)

14号地下式横穴墓（Fig. 62～64）

1）立地

調査区南方西側１号地下式墓寄生型消失円墳周溝の西北西側周溝から墳丘中心に向け所在している。検出面は標高約23.7～23.8mである。

2）規模と構造

14号地下式横穴墓は全長4.39m、玄室奥行1.6m・幅2.01m・高さ0.70m、玄室床面積3.22㎡の主軸より右側に長い楕円形プランを呈す。玄室両側壁が床面から約30cmまでやや外に開きながら立ち、その後、内湾する。奥壁側は床から約20cmが緩く内湾しながら立ち上がり、その後内傾する。これらのことから、天井は蒲鉾形からドーム形への過渡期の段階である。

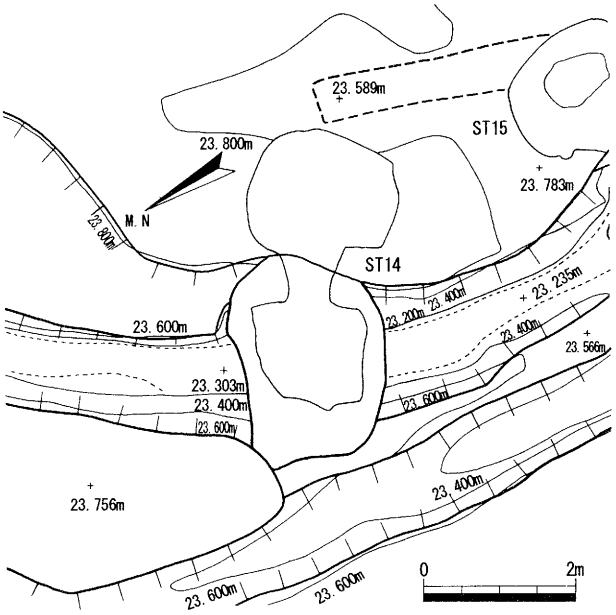


Fig. 62　14号地下式横穴墓位置図（1/100）

竪坑は長さ2.18m、幅1.53～2.1m、深さ1.39mの縦長蒲鉾形プランである。降り口傾斜角は57°で掘削されており、竪坑傾斜角は30°、両側壁は75°程度で立つ。降り口側（周溝外側）の床面には赤みがかった粘質土が50cm程人為的に盛られており足場が築かれている。

羨門部傾斜角は約74°で立ち、羨門は左側壁側がやや外側に拡がる蒲鉾形である。床面は羨門部玄室側まではほぼ平らであるが、そこから10cm程上がり玄室に至る。

閉塞の方法は、板をはめ込んだとみられる溝などは確認できなかったが、羨門部傾斜角が74°とやや倒れていることから板を立てかけるだけでも十分だったと思われる。

竪坑を半裁した段階で南西壁の土層堆積状況を観察した結果、板閉塞が朽ち果て竪坑降り口側から羨門に向かって土が流入し玄室内に流れ込んだと解釈できた。調査中、誤って竪坑検出面から下に約60～70cmまでが、それより下部の土層断面より南側に50cm掘りすぎたことから上層と下層でセクションにズレがある（Fig. 63）。

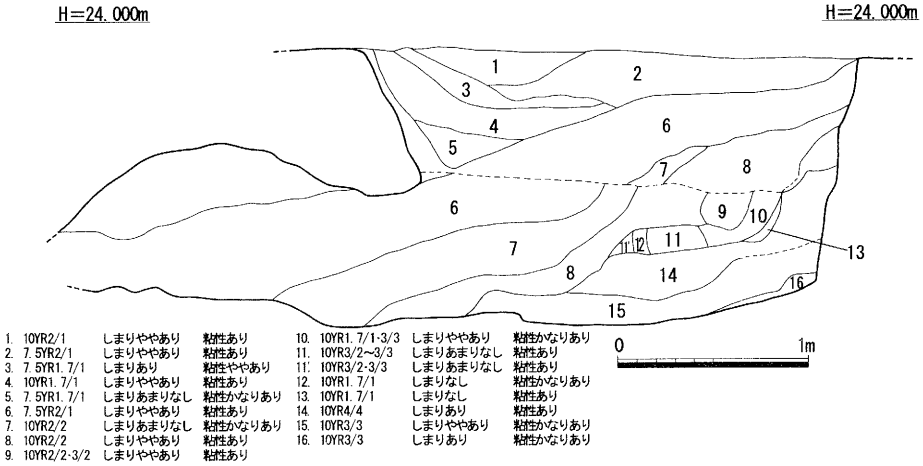


Fig. 63　14号地下式横穴墓土層断面図（1/40）

屍床は10～20cm程の川原石を玄室中央部から奥壁側にのみ0.8×1.3m程の範囲で横長に構築されている。

また、９号同様に、右側壁前壁側に径35～40cm、深さは２m以上の穴が穿たれていた。これらの用途に関しては、９号で述べたような可能性があると思われる。他に16・18号からも16号が玄室右奥隅・18号が玄室左奥隅から確認されているが16・18号地下式横穴墓の説明の中では省略する。

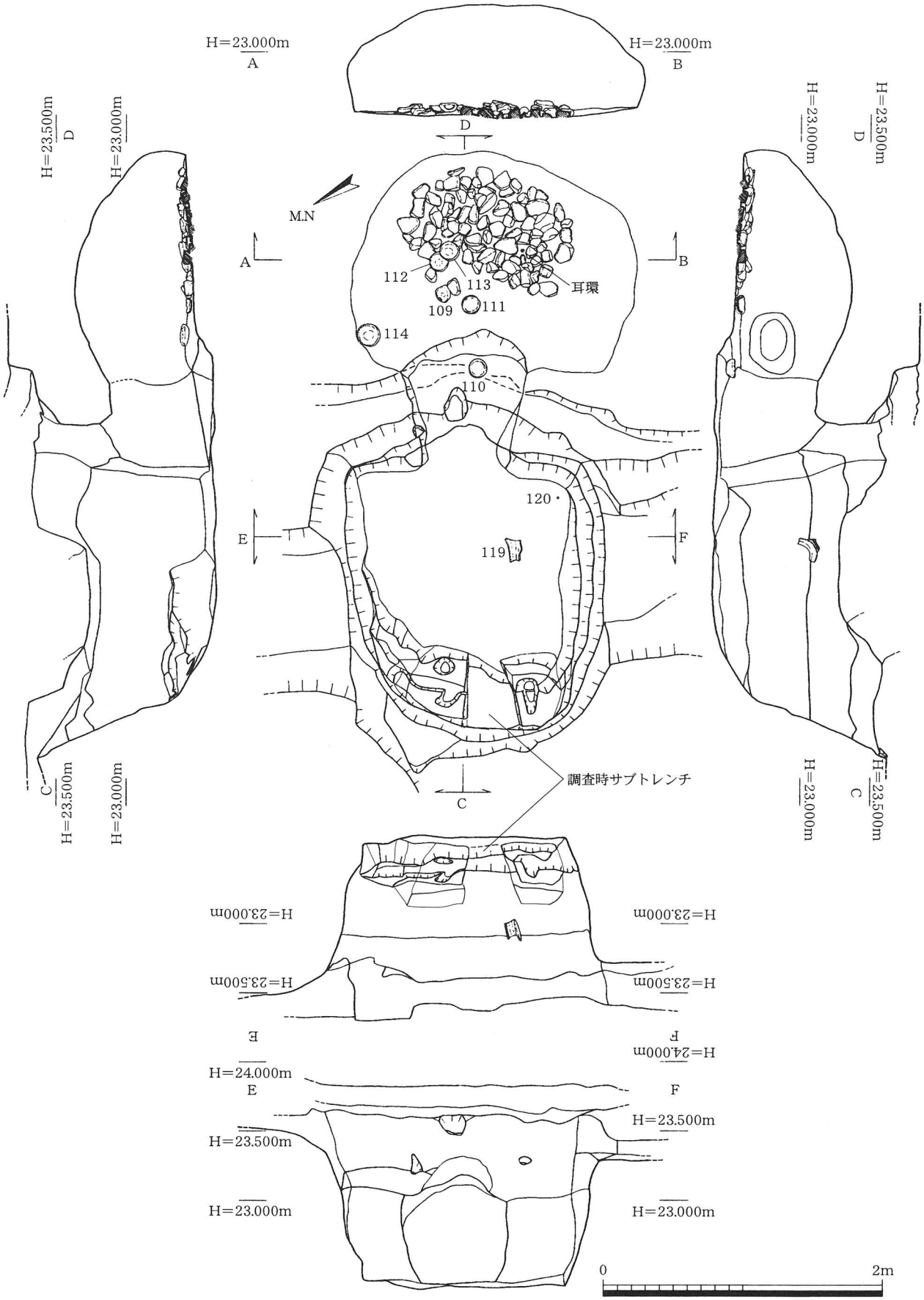


Fig. 64　14号地下式横穴墓実測図 (1/40)

3）遺物の出土状態

玄室内は良好に遺存しており、羨門部玄室側に土師器鉢１(110)、玄室中央やや左側と左側壁前壁隅に坏４(111～114)、玄室中央よりやや手前の左側に須恵器無蓋高坏１(109)、玄室中央右側壁側に耳環１が確認された。耳環は、調査中に地下式横穴墓が何度も水没し、紛失した。人骨は既に朽ち果てている。

また、竪坑からは竪坑検出面より50cm程下から坏身１(116)・短頸壷１(118)・長頸壷１(117)・須恵器甕１(119)、土師器坏１(115)・甕胴部小破片、耳環１(120)が出土した。また、115～118・119の一部は、１号消失円墳周溝実測時に誤って取り上げてしまったことから、Fig.64には図示できない。

4）出土遺物 (Fig.65)

109は無蓋高坏の坏部である。かなり焼き歪みがあるが、口径は11.9cmである。胴部中央と下部が突帯状に張り出している。110は口径12.6cm、器高5.6cmの鉢である。111～115は口径12.1～14.9cm、器高4.15～5.1cmの土師器坏である。110・113～115は内外面共に横ないし斜め方向のミガキが施されているが、111・112は外内面共に器面風化の為、不明である。また、115は外面に家ないしは船を模したような線刻画が認められる。116は坏身で口径11.1cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/4程度である。117は長頸壷の口縁部～頸部片で口径8.4cmを測る。口縁部最大径は8.65cmで端部から８mm下がった箇所に位置する。口縁部中央よりやや上位に幅３mmほどの沈線が１条廻る。118は短頸壷で口径6.6cm、胴部復元径10.5cm、器高6.55cmを測る。口縁部端はやや外湾しながら立ち上がり、端部は丸まる。ヘラ削りの範囲は2/5程度である。119は甕口縁部～肩部片である。竪坑内から２片出土し、接合はできなかったが同一個体である。口縁部復元径は20.5cmを測り、頸部にカキ目、肩部に格子目叩きが施され、それより下位はカキ目で消されている。120は銅芯金箔張耳環で一部金箔が剥離している程度で良好に遺存している。

本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、須恵器が１点のみであることから時期比定には苦しむが、追葬の可能性が低いと想定すると九州編年ⅣB期、陶邑TK217型式古段階併行期に対応しよう。

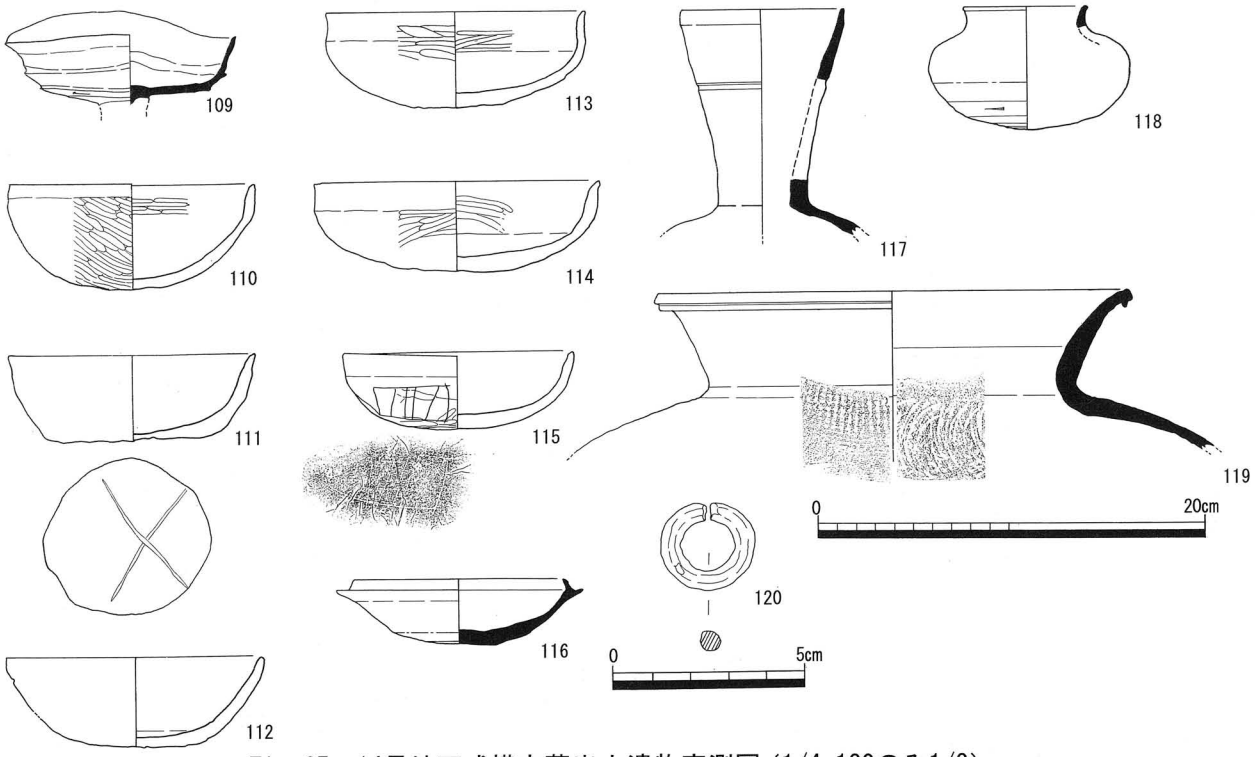


Fig.65　14号地下式横穴墓出土遺物実測図 (1/4、120のみ1/2)

15号地下式横穴墓（Fig.66～69）

1）立地

調査区南西１号地下式墓寄生型消失円墳の周溝西側から墳丘中心に向け所在している。検出面は標高約23.5～23.7mである。

2）規模と構造

15号地下式横穴墓は全長3.28m、玄室奥行1.32m・幅1.92m・高さ不明、玄室床面積2.53㎡の横長の楕円形プランを呈す。天井は床面からカーブするドーム形である。

竪坑は長さ1.28m、幅1.37m、深さ1.15mの横長楕円形プランである。周溝外側の降り口傾斜角は88°で掘削されており、竪坑傾斜角は39°、左側壁が43°、右側面は79°で立つ。降り口は周溝を墓道として利用したと思われ竪坑右側面に２段のテラスが階段状に構築されている。

羨門部傾斜角は約60°で立ち、羨門は横長の隅丸方形である。羨門部下の床面は約27°の傾斜で上り玄室へと続く。

閉塞の方法は、川原石閉塞である。40～50cm程の川原石の長い方を差し込むような形でまず充填され、その後それら石と羨門を覆うように20～40cmの石で被覆してある。その上に粘土などの目張りは行われていない。閉塞石を外し床面を精査すると閉塞石が水平に充填できるように羨門部下に粘質土を盛り平坦面を形成してあった。

屍床は10～30cm程の川原石を雑に敷いてある。

天井が既に崩落しており玄室内には大量の土砂が充填されていたが、竪坑側からの埋土とは質が異なっていたことから土層の堆積状況を観察すると、人為的に竪坑が埋め戻されたと解釈できる。

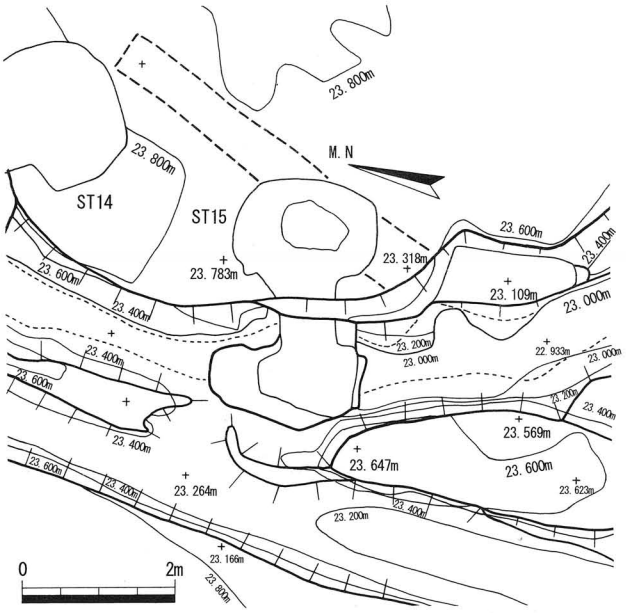


Fig.66　15号地下式横穴墓位置図（1/100）

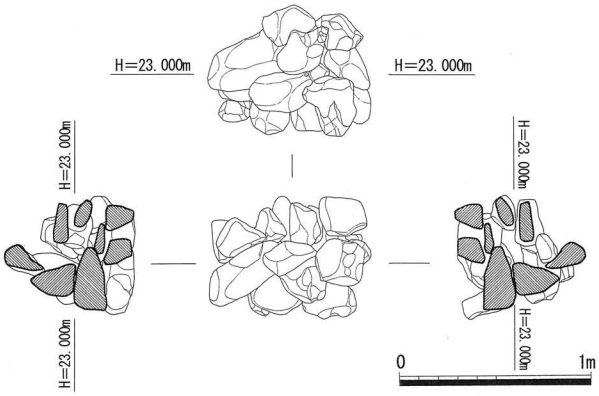


Fig.67　15号地下式横穴墓閉塞石実測図（1/40）

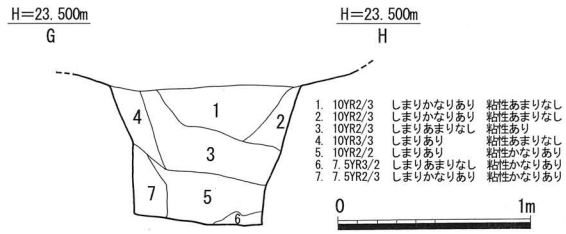


Fig.68　15号地下式横穴墓竪坑土層断面図（1/40）

3）遺物の出土状態

玄室内は良好に遺存しており、羨門部玄室側に須恵器坏蓋２（121・122）と坏身２（123・124）、土師器甕１（125）、左側壁前壁側隅に土師器高坏１（126）、玄室中央に刀子（127）が確認された。人骨は既に朽ち果てている。

4）出土遺物（Fig.70）

121・122は坏蓋で口径11.6～11.8cmを測り、ヘラ削りの範囲は121が1/4程度、122が1/6程度である。123・

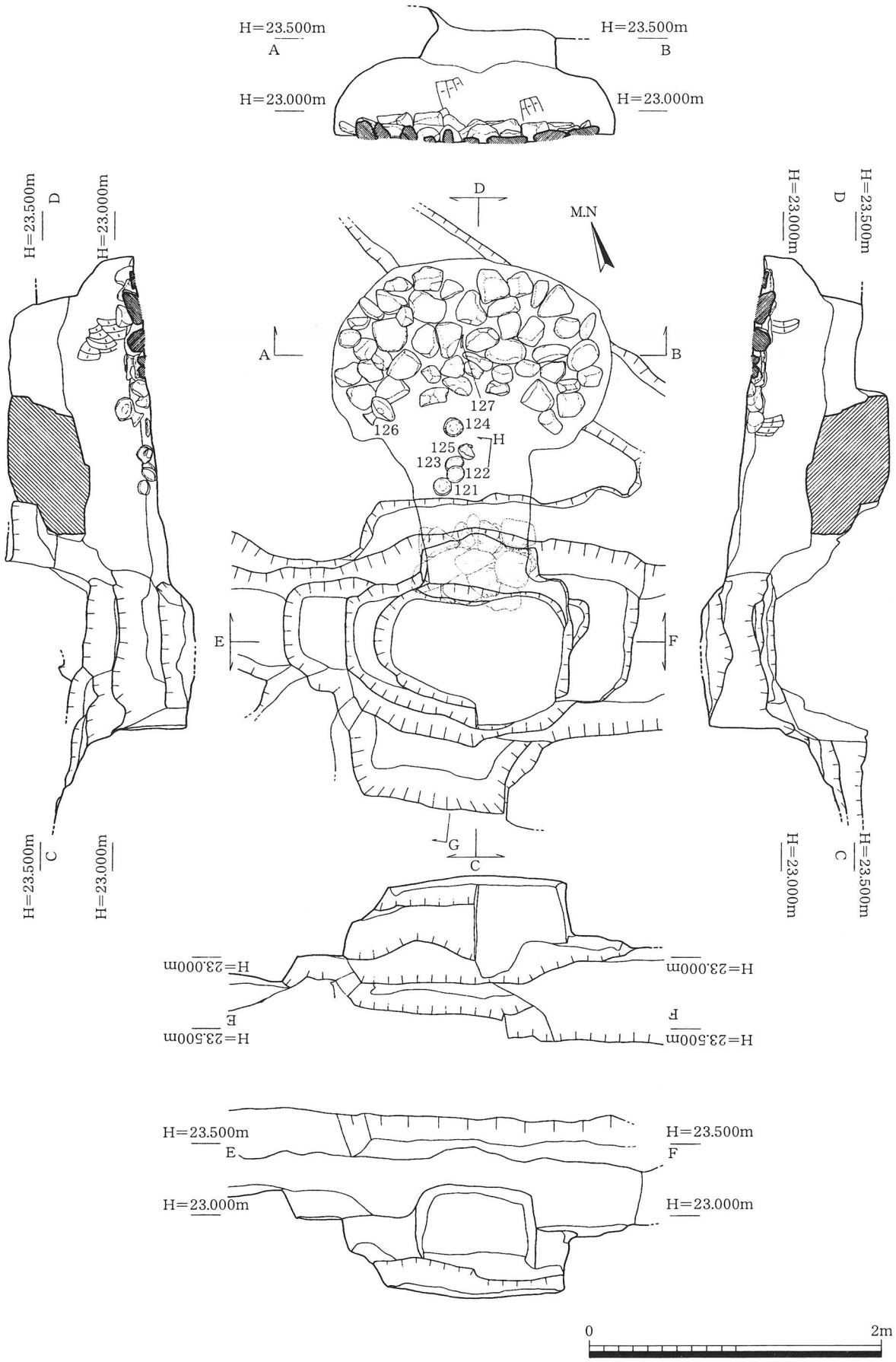


Fig. 69　15号地下式横穴墓実測図（1/40）

124は坏身で受部径12.2～12.7cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/2弱程度である。125は土師器小型甕で口径11.0cm、器高9.9cmcmを測り、底部には木の葉紋が遺存している。126は丹塗り高坏で口縁部径19.1cm、器高12.5cmである。127は刀子で現存長7.25cm、復元幅1.4cm程であるが錆が著しく形状は詳細にできない。

本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、九州編年ⅣB期からⅤ期、陶邑TK217型式古段階からTK217型式新段階併行期に対応しよう。

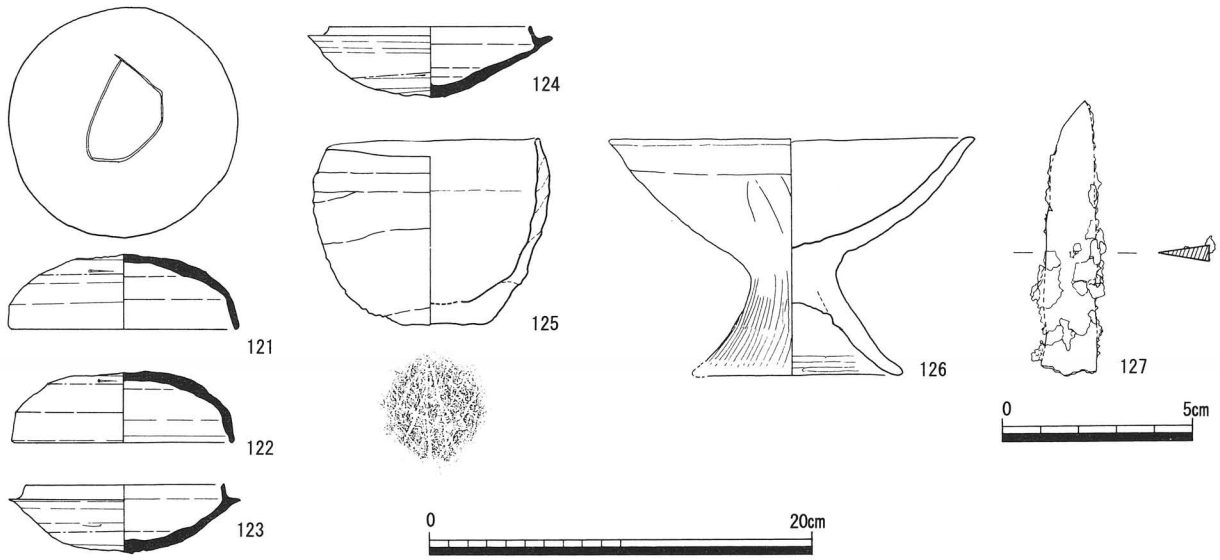


Fig. 70　15号地下式横穴墓出土遺物実測図（1/4、127のみ1/2）

16号地下式横穴墓（Fig. 71～73）

1）立地

調査区南方やや西側に1号地下式墓寄生型消失円墳の周溝西側から墳丘中心に向け所在している。検出面は標高約23.6～23.7mである。

2）規模と構造

16号地下式横穴墓は全長4.29m、玄室奥行1.33m・幅2.08m・高さ0.7m、玄室床面積2.77㎡の横長楕円形プランを呈す。天井は床面からカーブするドーム形である。

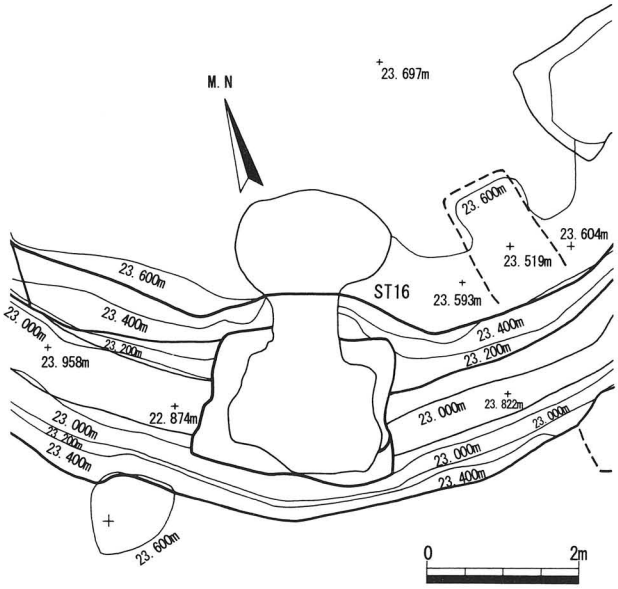


Fig. 71　16号地下式横穴墓位置図（1/100）

竪坑は周溝内に穿たれるため、周溝内側の上端から計測し長さ2.28m、幅2.38m、深さ1.24mの不整形方形プランである。降り口（周溝外側）傾斜角は72°で掘削されており、竪坑傾斜角は28°、両側壁は62～72°で立つ。恐らく周溝を墓道として用いたと予想され、周溝部外側（降り口側）壁には足場などはない。周溝と玄室の高低差は、左側面で60cmあるが、右側面では高低差がないことから、竪坑左側の周溝が墓道的な役割をなしていたと思われる。

羨門部傾斜角は約60°で立ち、羨門は両側壁が直に立ち、天井部でややカーブする蒲鉾形である。羨門部下の床面は竪坑とほぼ同レベルであるが、かなり弱い緩傾斜で玄室へと延びる。

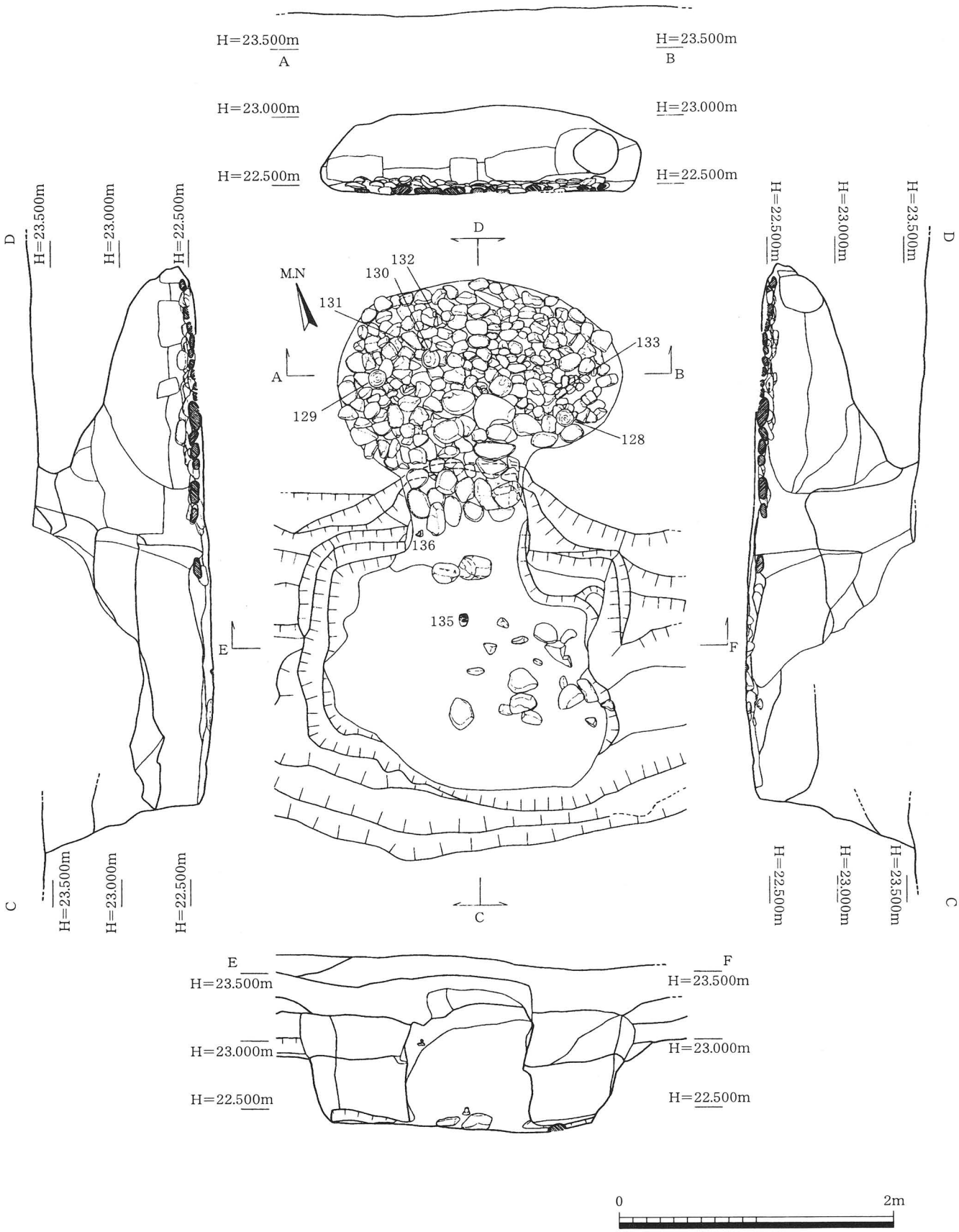


Fig. 72　16号地下式横穴墓実測図 (1/40)

閉塞の方法は、羨門部竪坑側床面に20cm程の石が２個横向きに並べられていた。この石は、恐らく板閉塞を行った際に、板を押さえたものと思われる。

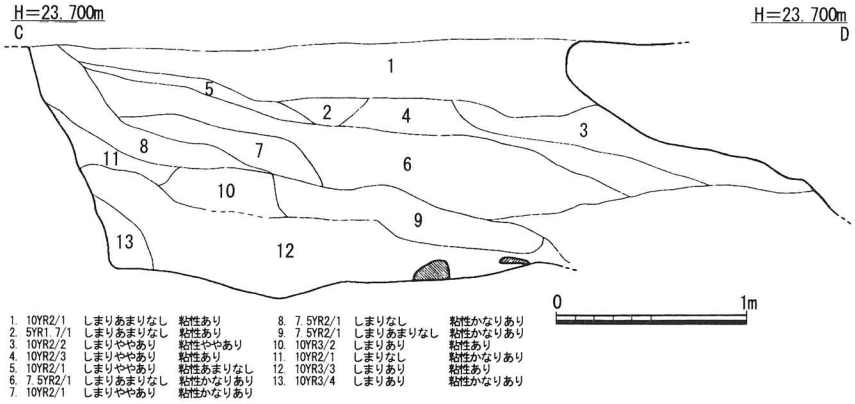


Fig.73　16号地下式横穴墓土層断面図（1/40）

屍床は羨門部半ばから玄室全体にぎっしりと礫を敷き詰め構築されている。しかし、羨門部から玄室中央手前までと右側壁から奥壁にかけて、また、玄室左側壁中央から前壁隅にかけて用いられている石は大きさが異なる。玄室中央よりやや竪坑側には大きめの石が玄室中央で最も窪むような弧を描いて配され、その中を小振りの石で充填したような配置である。また、これから羨門部にかけては、その後の追葬時に屍床の拡張を行った可能性が示唆される。また、玄室中央やや竪坑側の屍床上には20cm程の石が１つ置かれていた。これは、羨門部竪坑側で閉塞板を押さえたと思われる２つの石の横に本来は収まっていたものが、後の追葬段階で玄室内に用いられた可能性もある。玄室内に持ち込まれた以降は、枕として利用されたのであろうか、詳細は不明である。

竪坑を半裁した段階で西壁の土層堆積状況を観察した結果、板閉塞が朽ち竪坑側埋土の重力で玄室内に流れ込んだと解釈でき、追葬ラインは確認できなかった。

３）遺物の出土状態

玄室中央部やや左側に土師器鉢１(130)、左側壁側に須恵器坏身１(129)、奥壁側やや左寄りに鉄鏃２(131・132)、右側壁側に須恵器坏蓋１(128)と鉄鏃１(133)が出土した。人骨は既に朽ち果てている。

竪坑からは、羨門部左側壁側床面に土師器高坏脚部１(136)、竪坑中央部羨門部手前床面に須恵器高坏脚部１(135)、竪坑上部からはハソウ胴部１(134)・土師器高坏脚部１・甕小破片１が出土した。

４）出土遺物（Fig.74）

128は坏蓋で口径12.9cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/5程度である。129は坏身で口径11.9cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/5程度である。130は土師器鉢で口径15.8cm、器高5.7cmである。131は鉄鏃茎部で現

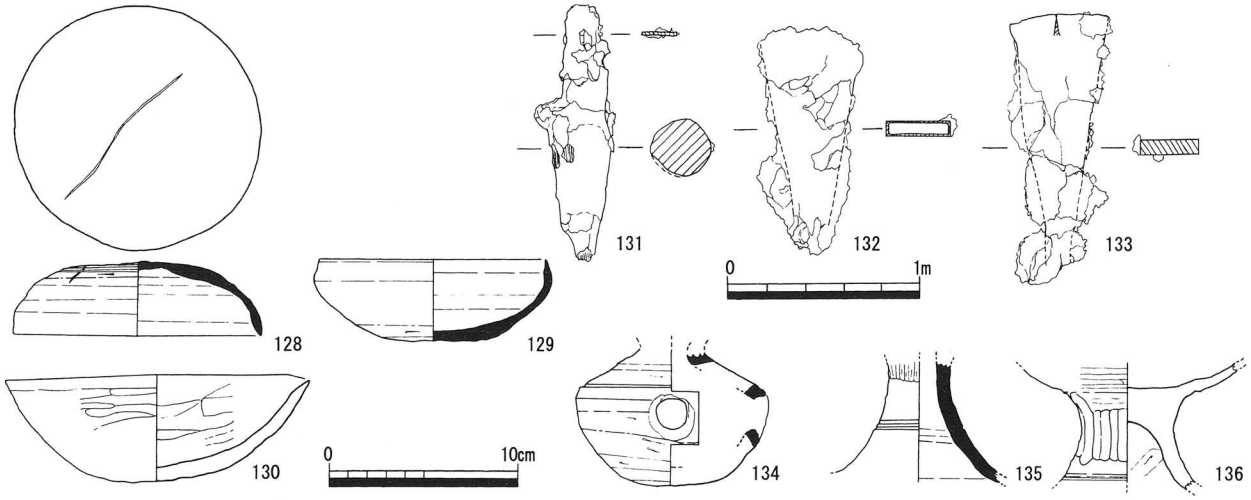


Fig.74　16号地下式横穴墓出土遺物実測図（1/4、131～133は1/2）

存長6.3cm、茎部は厚さ２mm、幅９mm、木芯部径1.5～1.6cmを測る。132は方頭鏃で現存長6.05cm、復元幅は1.0～2.3cmを測り、鏃身部は錆び膨れの為、厚さ４mm程になっているが、本来は厚さ２mm、幅1.0～2.6cm程と思われる。133は方頭鏃で現存長7.2cm、復元幅0.8～2.5cm、厚さ４mm程である。131～133は錆が著しく、詳細は不明である。134はハソウ胴部で胴部最大径は10.0cm、孔径は1.6cmを測る。肩部に幅１mm程の沈線が１条廻る。135は長脚高坏脚部である。脚部中央部に幅２mm程の２条の沈線が施されている。136は土師器高坏の坏部から脚部で、外面は横・縦ミガキにより調整され、脚部下位には横線が数条廻る。

本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、九州編年ⅣB期、陶邑TK209型式新段階併行期に対応しよう。

17号地下式横穴墓（Fig.75～80）

１）立地

調査区南方１号地下式墓寄生型消失円墳の周溝から墳丘中央に向け１基の玄室(17-1号)を構築し、それとは反対に周溝外側に長大な墓道を伴い、墓道南西壁に２基の小型玄室(17-2・17-3号)、墓道北東壁に１基の小型玄室(17-4号)を構築している。検出面は標高約23.2～23.7mである。

２）規模と構造

１7-1号地下式横穴墓は全長10.15m、玄室奥行1.52m・幅1.92～2.27m・高さ不明、玄室床面積3.18m²の横長長方形プランを呈す。天井は既にほとんど陥没していたことから詳細にはできないが、玄室両側壁は床面から55～65cmまではほぼ直に立ち上がり、玄室奥壁は床面からカーブを描きながら立ち上がることから、蒲鉾形からドーム天井への過渡期であろうと思われる。

竪坑は土層の堆積状況から以前、溝として使用されていた箇所が埋没した後に設けられており、溝も含むと14m程になるが、竪坑としての長さは6.36m、幅2.1mで先がすぼまる長大な三角形プランである。深さは最も深い箇所が閉塞部で1.05mで徐々に浅くなり、降り口側では30cm程になる。

降り口傾斜角は16.5°で掘削されており、両側壁は50～55°で立つ。降り口側には足場はない。

羨門部傾斜角は約80°で立ち、羨門は上部が下部に比べて10cm程短い台形形である。羨門部下の床面は一段上がり玄室へと延びる。

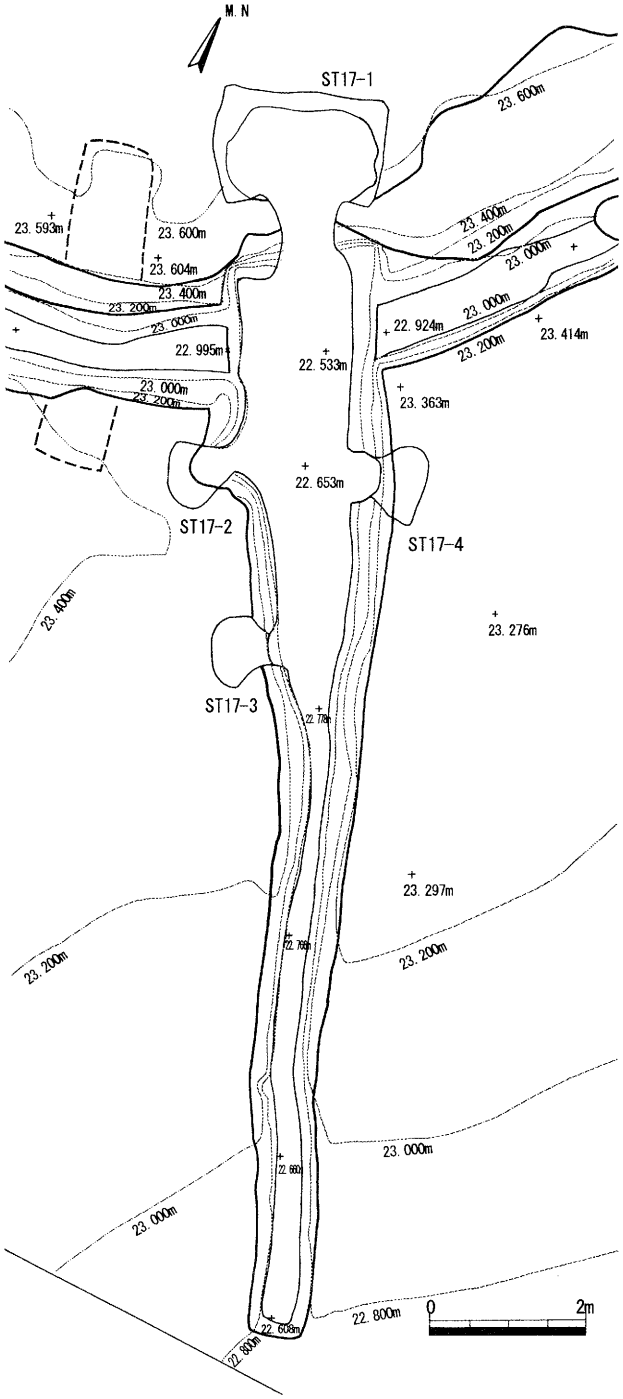


Fig.75　17号地下式横穴墓位置図（1/100）

Fig. 76　17号地下式横穴墓・竪坑土層断面図 (1/60)

閉塞の方法は、川原石閉塞である。40～45cm程の川原石の長い方を差し込むような形で２石と横方向に１石が配され、その後、それら石と羨門を覆うように15～35cm程の石で被覆してある。その上に粘土などの目張りは行われていない。閉塞石を外し床面を精査すると、その下には板閉塞を行った際の板をはめ込んだとみられる幅20cm程、堀り方幅40cm程の溝が確認できた。したがって、第１次閉塞では羨門部板閉塞であるが、最終閉塞では羨門部石閉塞へと変更されたみられ追葬が行われたようである。

玄室中央から右側壁にかけて屍床と見なされる敷石があるが、中央部左側にある偏平な石は立った状態で検出され、天井崩落による偶然性も予想されるが、追葬時の片づけが行われている可能性もある。

このようなタイプの墓制は、西都原台地上に所在する酒元ノ上横穴墓群に同様な形状のものがある。酒元ノ上では地下式横穴墓と横穴墓の折衷型とし、横穴墓の枠の中に納めている。

１7-2号地下式横穴墓は竪坑を17-1号地下式横穴墓と共有することから全長は不明、玄室奥行0.62m・幅0.89m・高さ0.37m、玄室床面積0.55㎡の楕円形プランを呈す。天井は床面からカーブを描きながら立ち上がるドーム形である。

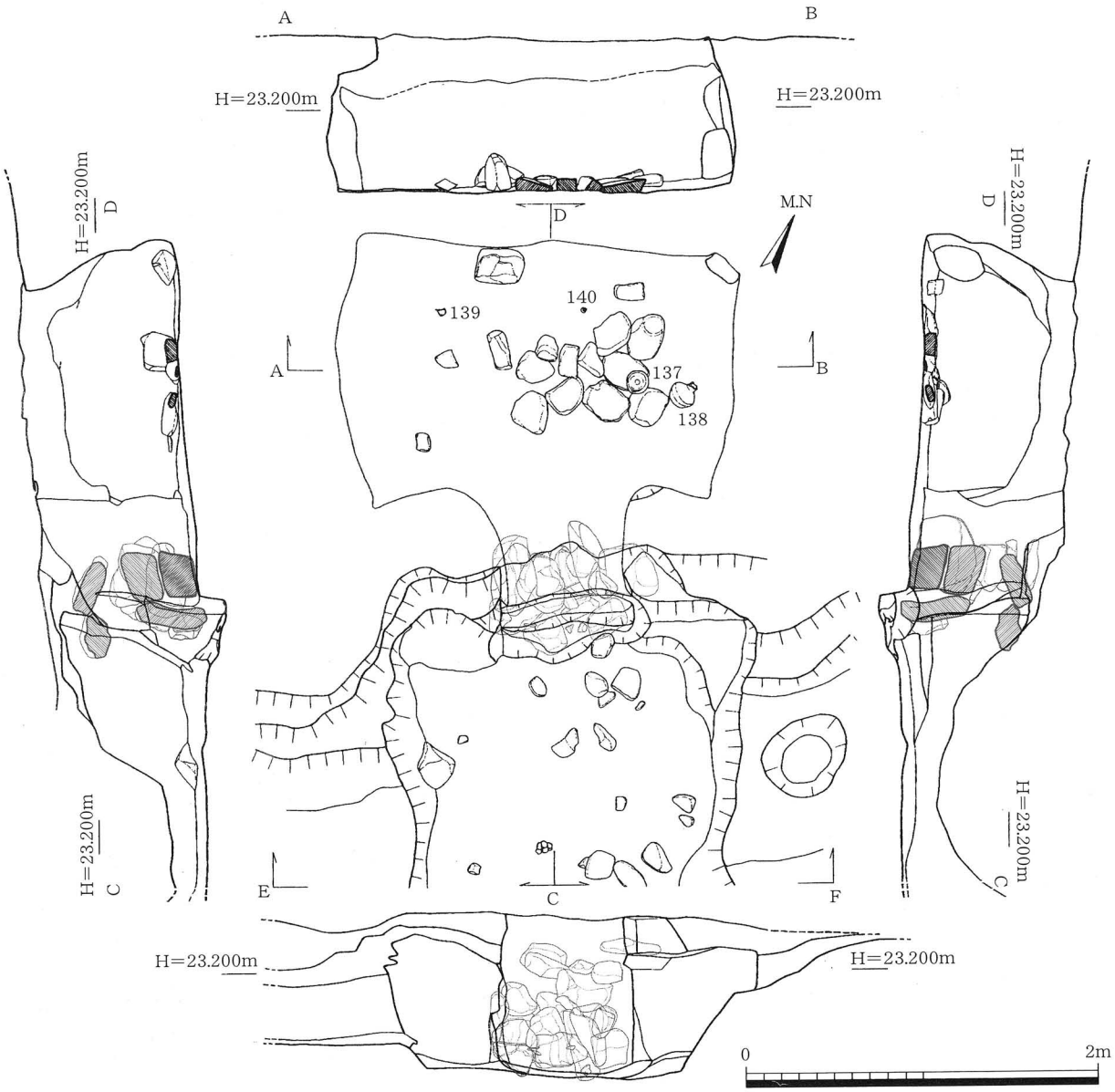


Fig. 77　17-1号地下式横穴墓実測図（1/40）

閉塞の方法は、墓道内の埋土で玄室までが埋まっていたことから明らかにできないが、玄室内の埋土が墓道の埋土と同質であることから、板閉塞と予想される。

羨門部傾斜角は約78°で立ち、羨門は上部が崩落しており詳細は不明だが、隅丸長方形であろうと思われる。

玄室中央部に手前から奥に２列、横向きに川原石が並べられ屍床を形成している。

１7-3号地下式横穴墓は竪坑を17-1号地下式横穴墓と共有することから全長は不明、玄室奥行0.6m・幅0.9m・高さ0.36m、玄室床面積0.54㎡の楕円形プランを呈す。天井は床面からカーブを描きながら立ち上がるドーム形である。

閉塞の方法は、墓道内の埋土で玄室までが埋まっていたことから明らかにできないが、玄室内の埋土が墓道の埋土と同質であることから、板閉塞と予想される。

羨門部傾斜角は約64°で立ち、羨門は幅25cm程の横長楕円形を呈す。

玄室中央部に偏平な川原石が雑に並べられ屍床を形成している。

17-4号地下式横穴墓は、竪坑を17-1号地下式横穴墓と共有することから全長は不明、玄室奥行0.66m・幅1.03m・高さ0.45m、玄室床面積0.68㎡の楕円形プランを呈す。天井は床面からカーブを描きながら立ち上がるドーム形である。

羨門部傾斜角は約72°で立ち、羨門は幅35cm程の横長楕円形である。閉塞の方法は、墓道内の埋土で玄室までが埋まっていたことから明らかにできないが、羨門部床面に幅20cm程の溝が確認されたこと、玄室内の埋土が墓道の埋土と同質であることから、板閉塞と予想される。

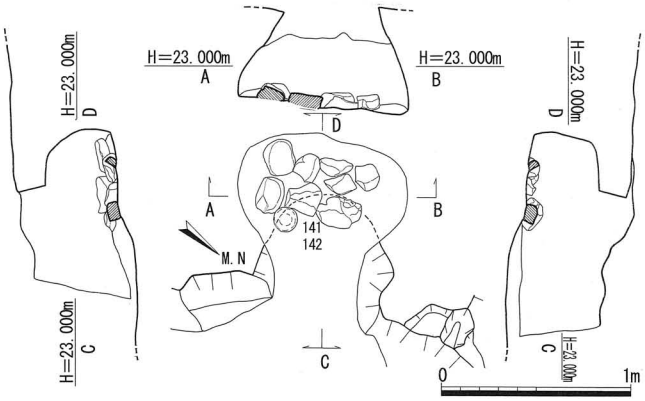


Fig. 78　17-2号地下式横穴墓実測図（1/40）

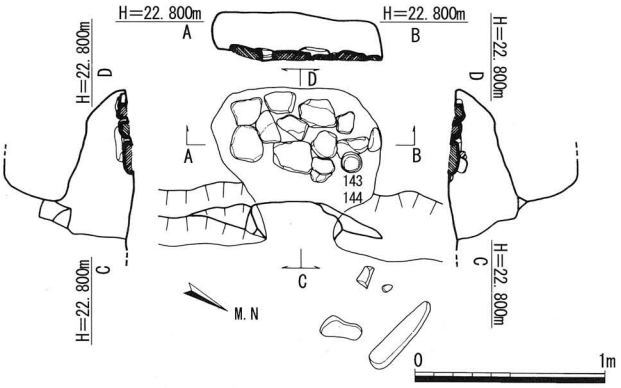


Fig. 79　17-3号地下式横穴墓実測図（1/40）

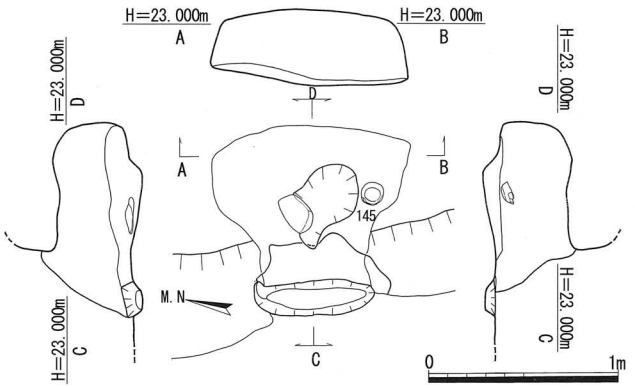


Fig. 80　17-4号地下式横穴墓実測図（1/40）

玄室中央部には不整形な窪みが確認され、この窪みの羨門側には川原石が１個置かれていた程度で、屍床としての敷石などは行われていない。

17-2・17-3・17-4号に関しては、玄室規模が狭小であることから改葬墓などの可能性も示唆されるが、これらに関しては第Ⅳ章第１節で述べたい。

17号周辺には多くのピットが検出できたが、寛永通宝や陶磁器片が出土し近世の柱穴と予想される。

3）遺物の出土状態

17-1号は玄室内は天井が既に崩落しておりかなり変容していると思われるが、玄室中央から左側壁に関しては良好に遺存している。玄室内の遺物は、右側壁側川原石上に須恵器坏身１(137)、その東側床面に平瓶片１(138)、奥壁側やや右寄り床面に耳環１(140)、左側壁側奥壁寄りに鉄鏃１(139) が出土した。

17-2号は玄室左側壁側羨門部よりに須恵器蓋坏のセットが１組出土した。坏蓋１(141)は天井を下にし、その上に坏身１(142)が被さった状態で出土した。

17-3号は玄室中央よりやや手前の右側壁側に須恵器蓋坏のセットが出土した。17-2号同様に坏蓋１(143)は天井を下にし、その上に坏身１(144)が被さった状態で出土した。

17-4号は玄室右側壁寄り羨門側から坏身１(145)が出土した。

17-1～17-4号内の人骨は、既に全て朽ち果てていた。

次に、17号地下式横穴墓は上記したように6.36m程の長大な墓道をもち、その中からも多くの遺物が出土したことから、墓道及び17-1号地下式横穴墓閉塞部手前から出土した遺物について記載する。

17-1号閉塞部からは須恵器坏蓋１(146)、土師器胴部片１、鉄鏃１(148)が出土した。また、墓道の埋土中からは台付長頸壷１(147)が割れ墓道内に散らばり、それ以外には須恵器坏蓋片、土師器片、鉄鏃1(149)、刀子２(150･151)、陶磁器片、寛永通宝１などが出土した。

4）出土遺物 (Fig. 81)

137は坏身で受部径13.0cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/3程度である。138は平瓶で胴部最大径14.6cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/4程度である。底部は丸くすわりは悪い。139は三角形鏃で現存長5.3cm、復元幅0.8～3.8cm、厚さは鏃身部で２mm、茎部で３mmを測る。140は同芯銀箔張耳環で径は2.65～3.0cm、厚さは径７mmを測る。全体的に青錆びが噴いているが、銀箔は良好に遺存している。141は坏蓋で、乳頭形の摘みをもち、口縁部径は11.5cm、かえり径9.65cmを測る。ヘラ削りの範囲は1/2程度であり、口縁部端よりかえりの方が低い。142は坏身で口径は9.6cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/5程度である。143は坏蓋で口径11.1cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/3程度である。144は坏身で口径は10.0cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/4程度である。坏部中位に２mm程の沈線が１条廻る。145は坏身で口径10.6cmを測り、坏部中位に２mm弱の沈線が１条廻る。それより下位はヘラ削り後、カキ目で調整されているが焼きが悪くにぶい黄橙色を呈す。146は坏蓋で復元口径は11.8cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/6程度と思われる。147は台付長頸壷で乾燥時に脚部が壷の重量に耐えられなかったと思われ傾いている。肩が張りだし算盤玉のような形状を呈し、胴部最大径16.4cm、脚部径13cmを測り、２方向に方形の透かしが穿たれている。胴部1/3程までヘラ削りがなされているが、回転指ナデによりナデ消されている。148は方頭鏃で、本来は２本束ねてあったのが折れたものと思われる。錆が著しく詳細は不明であるが、現存長10.1cm、上にしてある鉄鏃の鏃身部復元幅は0.45～3.1cm、下の鉄鏃の鏃身部の厚さは２mm、茎部４mmを測る。茎部には木質が一部遺存しており、葛で巻いた痕跡も遺存している。149は方頭鏃で現存長14cm、復元幅3.05cm、鏃身部厚さ２mm、木質部径1.0cmを測る。鏃身部は錆びがかなり噴いているが形状は良好、また、木質も良好に遺存している。150は刀子で現存長9.45cm、復元幅８mm、鎬幅２mmを測る。錆が著しいが、木質も部分的に遺存している。151も刀子で現存長4.9cm、復元幅８mm、鎬幅２mmを測る。

各玄室の築造及び使用年代は、17-1号が九州編年ⅣB期、陶邑TK217型式古段階併行期、17-2号･17-3号･17-4号はともに九州編年Ⅴ期、陶邑TK217型式新段階併行期に対応しよう。

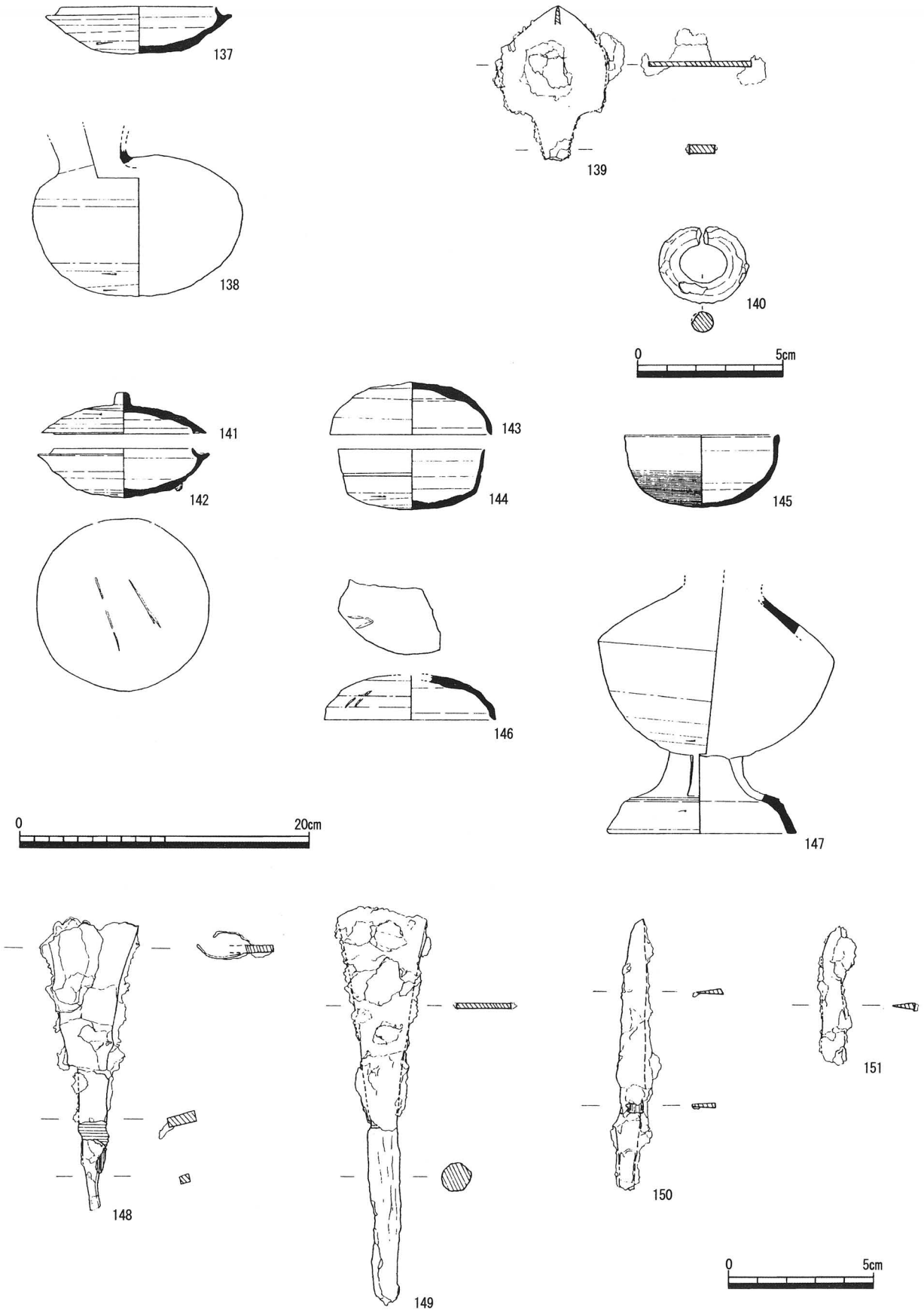


Fig. 81　17号地下式横穴墓出土遺物実測図（1/2・1/4）

18号地下式横穴墓（Fig. 82・83・85）

1）立地

調査区中央よりやや北側東側端に確認された。検出面は標高22.4～22.9mである。

2）規模と構造

18号地下式横穴墓は全長3.35m、玄室奥行0.82m・幅1.13m・高さ不明、玄室床面積0.93㎡の横長不整形楕円プランを呈す。天井は既に崩落しており詳細は不明であるが床面からカーブするドーム型である。

竪坑は長さ2.31m、幅1.02～1.71m、深さはかなり上部を削平されていると思われるが、現況で0.44mの縦長隅丸三角形プランである。竪坑は降り口傾斜角は73°で掘削されており、竪坑傾斜角は9°、両側壁は71～75°で立つ。降り口側に足場はない。羨門部傾斜角は約72°で立ち上がる。羨門の形状は、上半分が削平されていることから詳細は不明である。

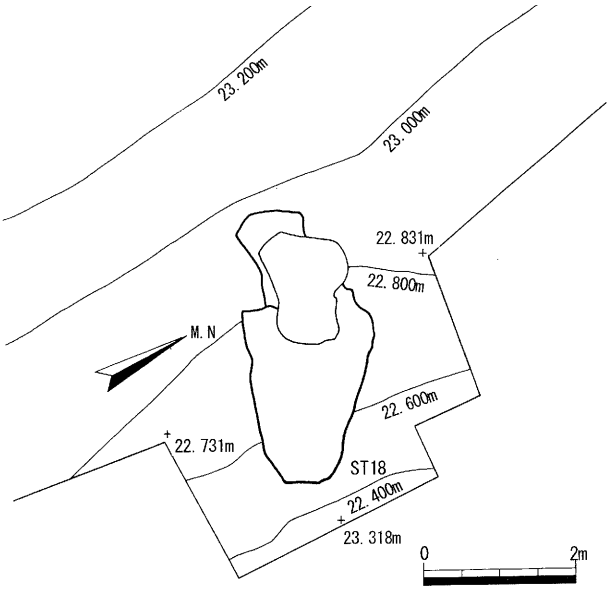


Fig. 82　18号地下式横穴墓位置図（1/100）

閉塞の方法は、川原石閉塞である。羨門前に掘削された幅1m、深さ20cm程の掘り方に玄室の方から30cm程の川原石を立てかけるように積み、その後、それら石と羨門を覆うように20～30cm程の石で被覆してある。その上に粘土などの目張りは行われていない。

屍床と呼べるような施設は確認できなかったが、15～30cm程の川原石が6個玄室内に配されている。

天井が既に崩落しており玄室内には大量の土砂が充填されていたが、竪坑側からの埋土とは質が異なっていたことから土層を観察すると、閉塞板が朽ち、竪坑側埋土の重力で玄室内に流れ込んだと解釈できる。土層堆積状況を観察した結果、追葬は確認できず、玄室内に副葬された遺物の量及び年代差とも対応する。

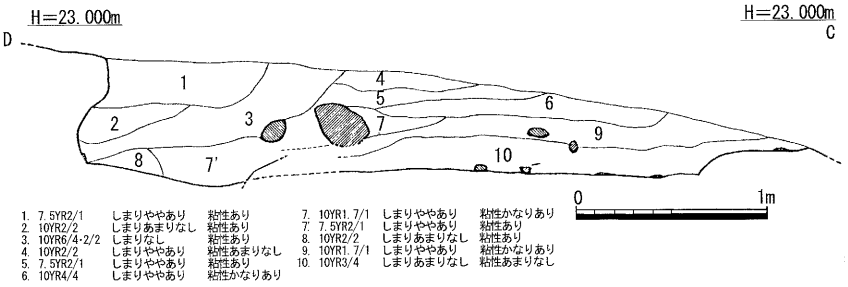


Fig. 83　18号地下式横穴墓竪坑土層断面図（1/40）

3）遺物の出土状態

玄室内は良好に遺存しており、右側壁側の川原石の上に、土師器坏1（152）が伏せて割れた状態で確認できた。人骨は既に朽ちてしまっている。

4）出土遺物（Fig. 84）

152は土師器坏で口径13.7cmを測り、内外面共に横ないしは斜めミガキで仕上げてある。

本地下式横穴墓の築造年代及び使用年代は、土師器坏1点のみの出土であることから明確にできないが、6世紀末から7世紀初頭頃と予想される。

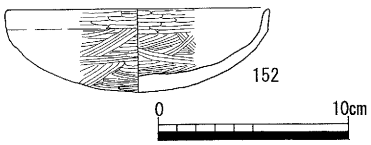


Fig. 84　18号地下式横穴墓出土遺物実測図（1/4）

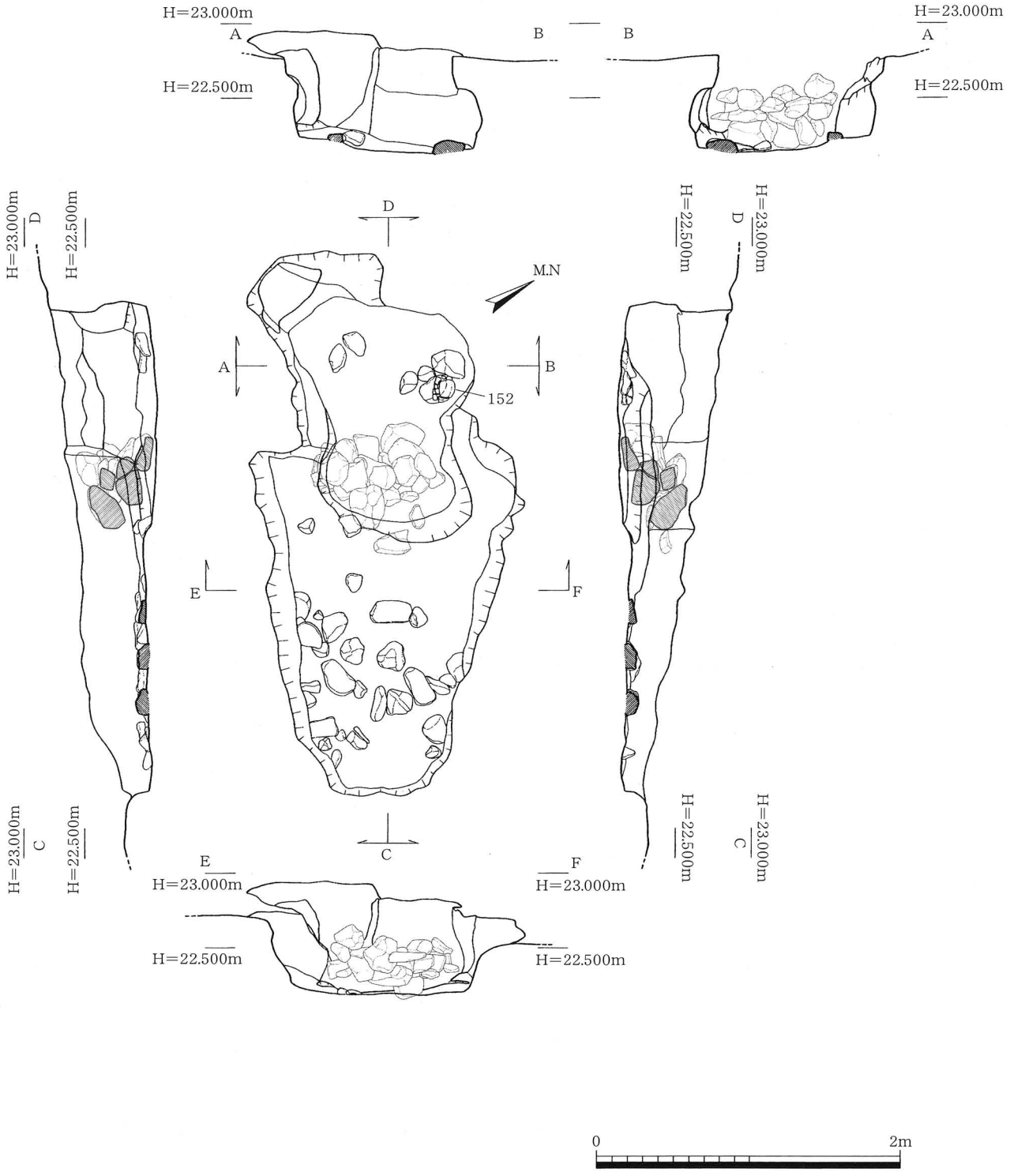


Fig. 85　18号地下式横穴墓実測図 (1/40)

3．古墳時代終末期の土壙墓

1号土壙墓（Fig. 86）

1）立地

1号土壙墓は、1号地下式横穴墓北方、本遺跡の最高位に位置する。検出面は標高24.4～24.5mである。

2）規模と構造

規模は、全長2.73m・幅1.64m・高さ0.55～0.6m、床面積4.48㎡の隅丸方形プランを呈す。四壁はほとんど直に立つ。埋土は3層に分けられ、下層に行くにつれ粘性を帯びしまる。

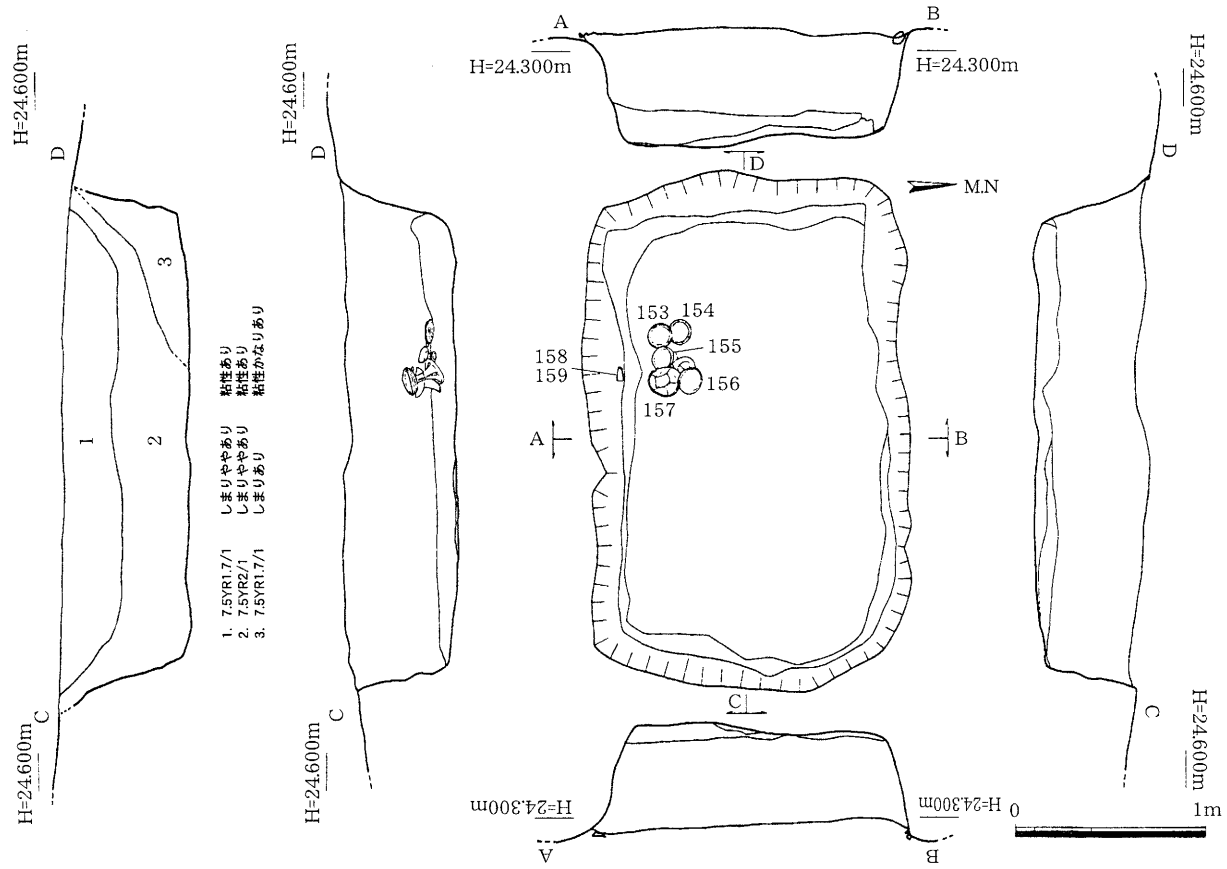


Fig. 86　1号土壙墓実測及び土層断面図（1/40）

3）遺物の出土状態

遺物は床面の北東壁に沿い、床面よりやや浮いた状態で須恵器坏蓋1（153）・坏身1（154）・無蓋短脚高坏1（155）、無蓋長脚高坏1（156）、土師器高坏1（157）点、鉄鏃2（158・159）がまとまって出土した。

4）出土遺物（Fig. 87）

153は坏蓋で口径12.4cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/3程である。154は坏身で口径11.4cmを測り、ヘラ削りの範囲は2/5程である。155は無蓋短脚高坏で口径12.7cm、器高7.0cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/3程である。156は無蓋長脚高坏でかなり焼き歪みがあるが、口径12.9cm、器高18.3cmを測る。2段の方形透かしを3方向に穿つ。坏部下位に2～3mmの沈線が2条、脚部中央に幅2mm程の沈線が1条廻る。157は土師器高坏で復元口径16.0cm、復元器高13.4cmを測る。外面全面に丹塗りが施されていたと思われるが、器面剥離が著しく、部分的に残る程度である。158は圭頭鏃で現存長4.2cm、復元幅3.1cmを測る。159は方頭鏃で現存長7.7cm、復元幅1.4～3.5cm、厚さ2mmを測る。

本土壙墓の築造年代及び使用年代は、九州編年Ⅳ期、陶邑TK209型式新段階からTK217型式古段階併行期に対応しよう。

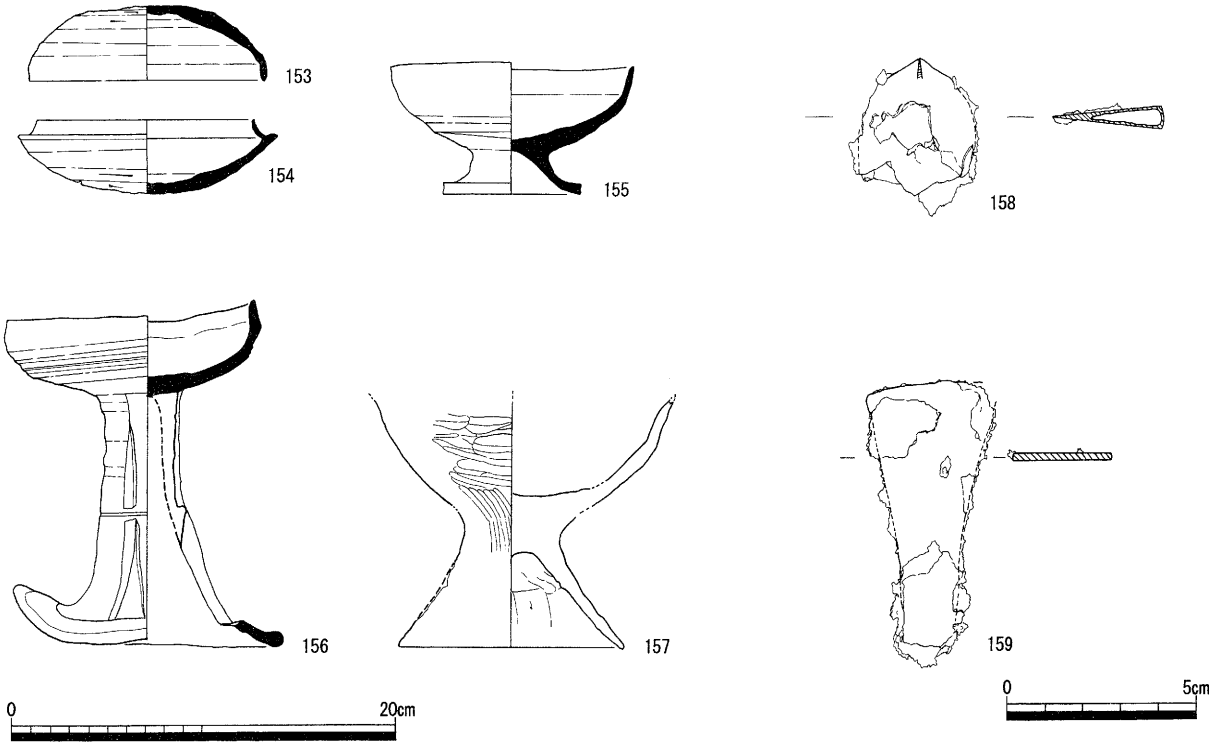


Fig. 87　1号土壙墓出土遺物実測図（1/4、158・159は1/2）

2号土壙墓（Fig. 88）

1）立地

2号土壙墓（馬埋葬土壙）は、調査区中央北端、北から南にかけての緩斜面に位置する。検出面は、標高23.7～23.9mである。

2）規模と構造

規模は、全長1.74m・幅1.62m・高さ0.63～0.7m、床面積2.82㎡の円形プランを呈す。

壁面はほぼ直に立つ。

掘削前に植物根が多く含まれていたことから、木の根による攪乱と想定し全掘した結果、床面から馬具が

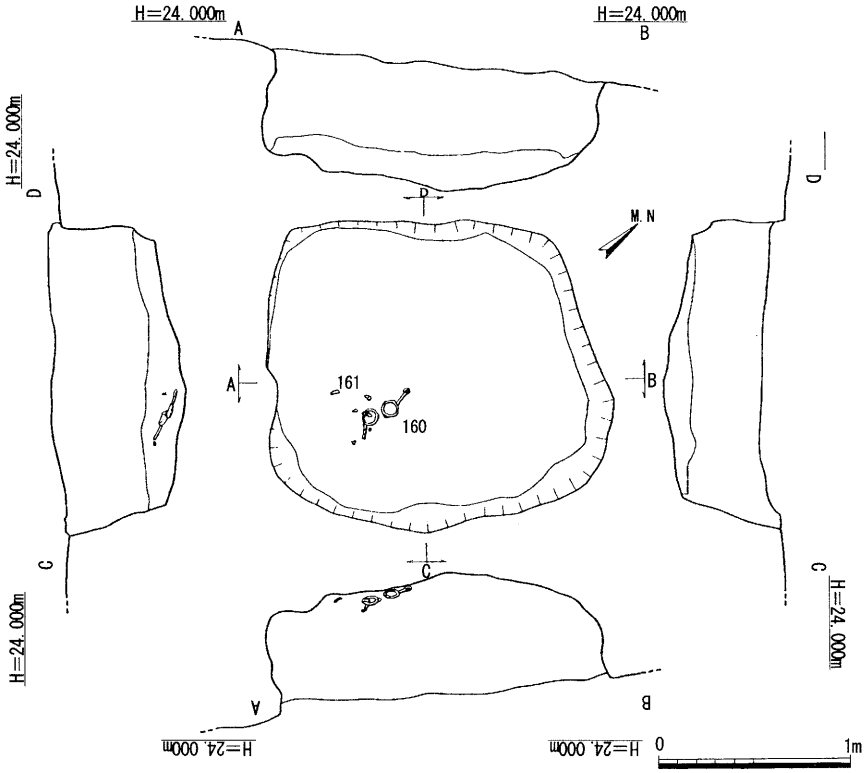


Fig. 88　2号土壙墓（馬埋葬土壙）実測図（1/40）

出土し、馬埋葬土壙と判明した。したがって、土層の堆積状況は図示できないが、しまりのない黒色土が堆積していた。

3）遺物の出土状態

床面中央よりやや南側に環状鏡板付轡１(160)が出土した。また、南西方向にやや離れて不明鉄器１(161)が出土した。既に銜の連結部は離れていたが、遺存状態は表面が錆びている程度で良好である。

4）出土遺物（Fig. 89）

160は環状鏡板付轡である。環状の鏡板と引手の遊環に喰の遊環がくぐる形状をとる。喰は２連で、立聞は台形を呈す。全面が錆びに覆われており、風化が著しいことからかなりもろい。161は不明鉄器である。ほぼ中央あたりで折れ曲がっており、轡の一部と予想されるが部位に関しては不明である。

本土壙墓の築造年代及び使用年代は、環状鏡板轡のみの時期比定であるが６世紀末～７世紀初頭頃と予想される。

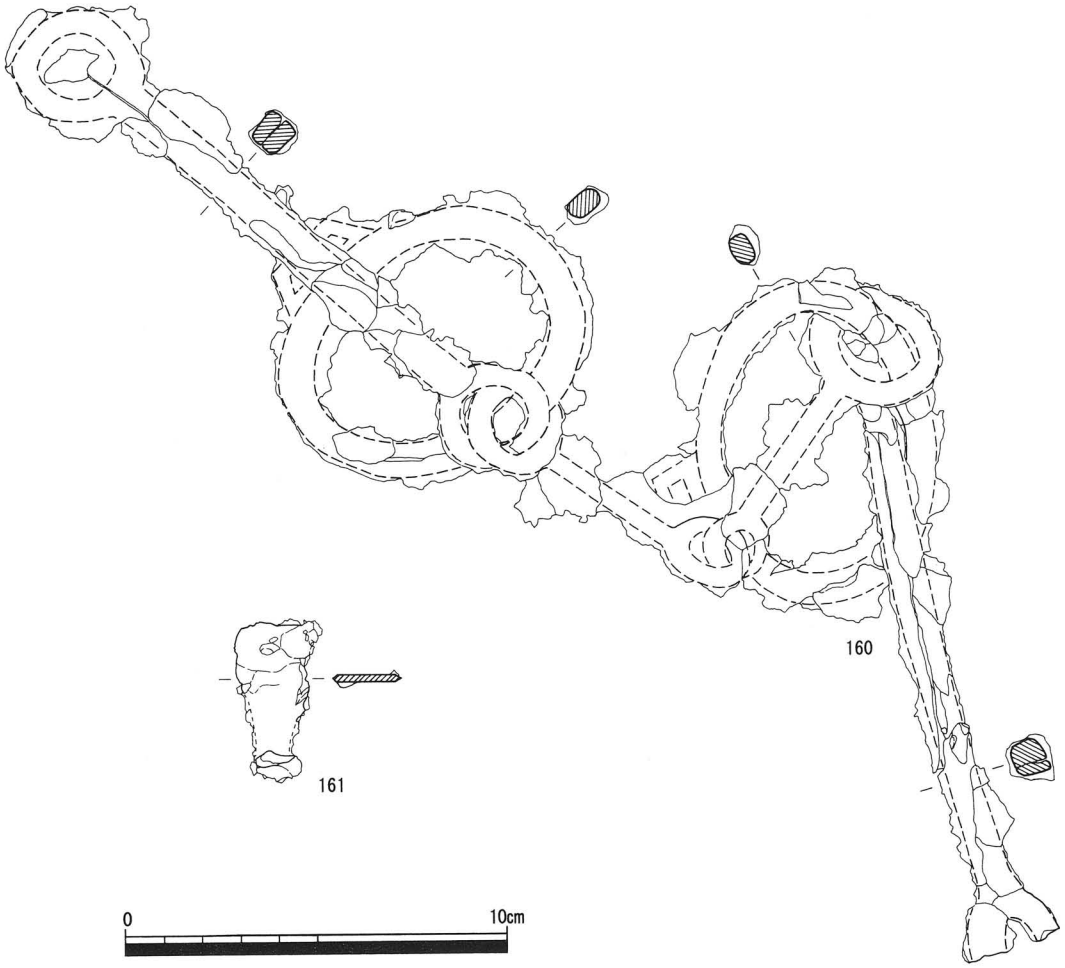


Fig. 89　２号土壙墓出土遺物実測図（1/2）

３号土壙墓（Fig.90）

１）立地

３号土壙墓は、調査区中央より北側、北から南にかけての緩斜面に位置する。検出面は標高24.0～24.1ｍである。

２）規模と構造

規模は全長1.75ｍ・幅1.15ｍ・高さ0.18～0.2ｍ、床面積2.01㎡の楕円形プランを呈す。

埋土は３層に分かれ、レンズ状堆積をしており、１層はしまりがないが、２・３層はややしまる。

３）遺物の出土状態

遺物は、床面西側から提瓶１(162)とほぼ中央あたりの床面から刀子１(163)が出土した。共に床面から10cm程浮いた状態である。

162の平瓶は４片に割れ床面中央よりやや北東側にまとまって出土したが、口縁部を欠いている。このうち３片のみが接合可能であった。

163の刀子は床面中央のやや北西側から出土した。

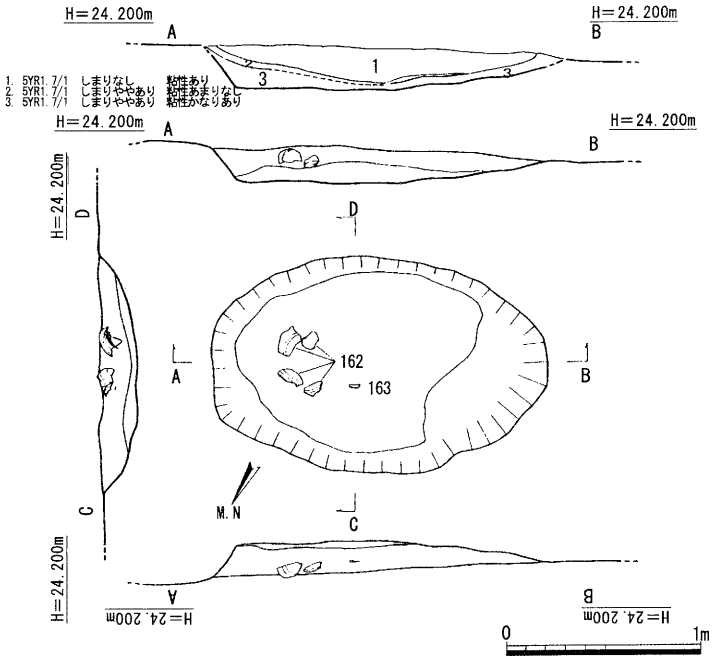


Fig.90　３号土壙墓実測及び土層断面図（1/40）

４）出土遺物（Fig.91）

162は提瓶で口縁部を含む胴部1/2を欠損している。復元法量は口縁部を欠いているので胴部のみになるが11.1cm程である。底部は平底であり、ヘラ削りの範囲は1/4程である。胴部調整はカキ目後、回転ナデでナデ消されている。

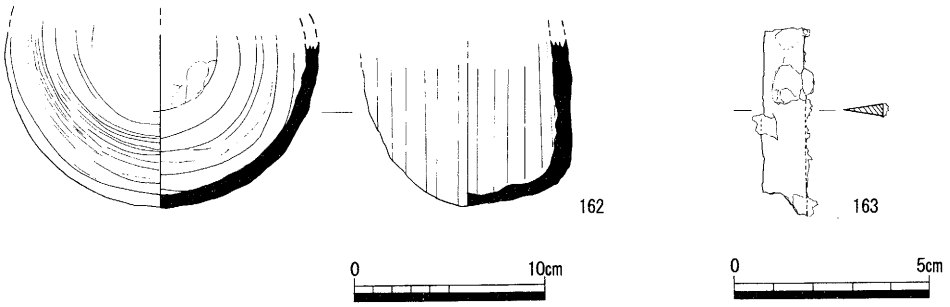


Fig.91　３号土壙墓出土遺物実測図（1/40）

163は刀子で現存長5.0cm、復元幅1.1cmである。全面に錆びが噴いているが、形状は良好で鎬は厚さ２mmである。

本土壙墓の築造年代及び使用年代は、出土遺物が提瓶片と刀子のみであることから明確にはできないが、６世紀末から７世紀初頭頃と予想される。

４号土壙墓（Fig. 92）

１）立地

４号土壙墓は、調査区中央よりやや北東側、11号地下式横穴墓の南東側に位置する。検出面は標高約23.5mである。

２）規模と構造

全長2.6m・幅0.48～1.16m・高さ0.24～0.34m、床面積2.13㎡の北側が膨らむ楕円形プランを呈す。北側の膨らみについては後世の攪乱によるものと予想される。

土壙墓のほぼ中央部を幅70～80cm程の近世の東西溝で切られていたが、この溝は床面までは及んでおらず、辛うじて遺存していた。

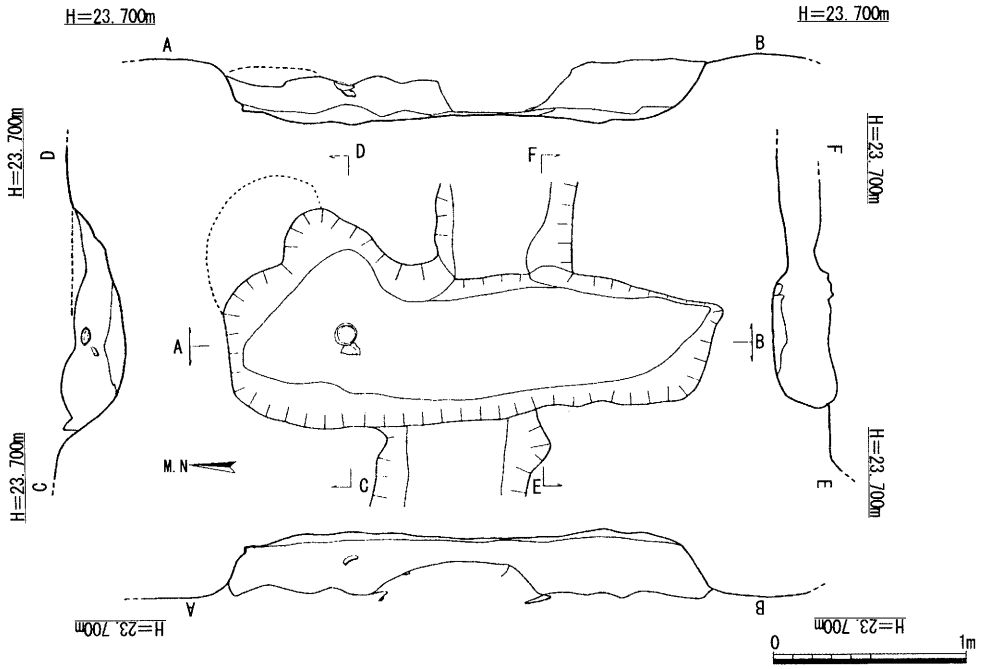


Fig. 92　４号土壙墓実測図（1/40）

３）遺物の出土状態

遺物は、床面北側から須恵器坏身１（164）と土師器鉢１（165）の２点のみが出土した。坏身はほぼ完形であるが、鉢は2/3程度が遺存していた。共に床面から15cm程浮いた状態で出土した。

４）出土遺物（Fig. 93）

164は坏身で口径10.1cm、受部径11.9cm、器高3.8cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/2程である。底部は回転ヘラ切り離し後未調整で新しい様相を呈す。165は土師器鉢で口径は11.8cmを測る。外面は口縁部端から１cm程下まで不定方向の削りが施され、上位は横方向の板ナデで仕上げてある。また、内面は１cm程の幅で横方向のミガキが部分的に遺存している。

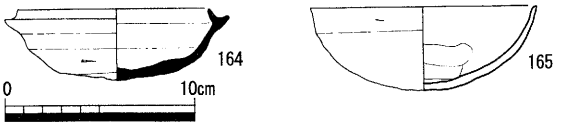


Fig. 93　4号土壙墓出土遺物実測図（1/4）

本土壙墓の築造年代及び使用年代は、九州編年ⅣＢ期、陶邑TK217型式新段階併行期に対応しよう。

4．古墳時代時代終末期の住居跡

1号住居跡（Fig. 94）

1）立地

1号住居跡は、調査区北端の北から南にかけての緩斜面に位置する。

2）規模と構造

規模は東西3.8×南北3.9m、遺存高20cm、床面積約14.82㎡の隅丸方形プランを呈す。4本柱の建物と思われるが、住居跡内には11号地下式横穴墓が所在しており柱穴は2個のみ確認できた。床は黒褐色ローム層（カシワバン）上面で形成されている。

四壁には排水溝などの施設はなく、簡素な造りである。

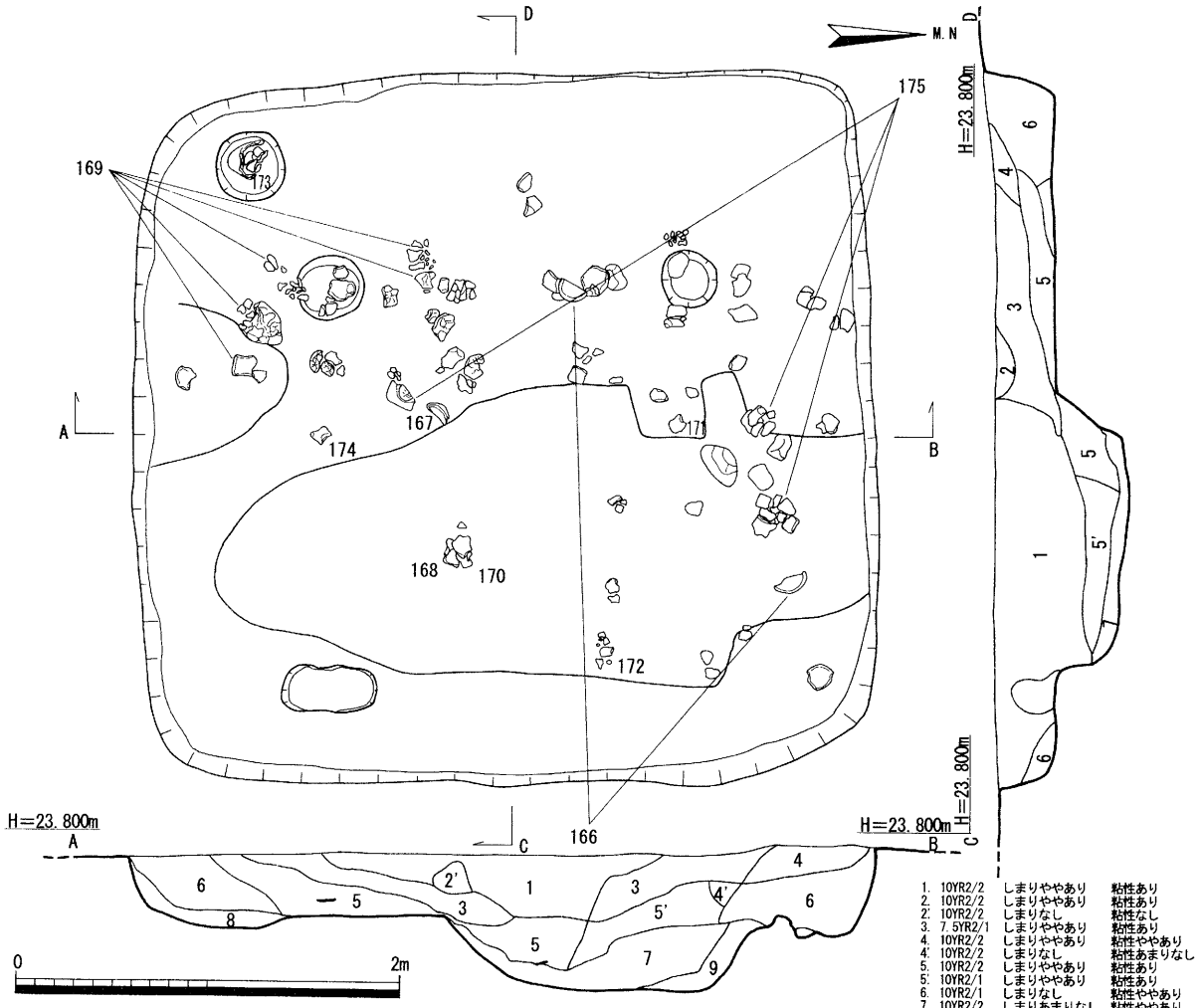


Fig. 94　1号住居跡実測及び土層断面図（1/40）

3）遺物の出土状態

遺物は住居跡内に散在して確認できた。小破片も多く器種等が不明なものも多いことから、ここでは10点のみ記載する。

4）出土遺物（Fig. 95）

166・167は須恵器坏身である。166が受部径14.7cm、167が受部径15.2cmで、ヘラ削りの範囲は166が1/4程度、167は1/2程度である。168は壷と思われ口縁部を欠損しており全体の形状は不明である。外面を板ナデで調整してある。169～175は甕の破片である。169は口縁部から胴部が遺存している。口径15.6

cmを測り、外面は板ナデ・横ナデで仕上げられている。長胴形の形状を呈す。170は底部から胴部で底径7.8cmを測り、平底である。外面底部を指オサエし、内面は板状ナデで仕上げてある。底部に木の葉紋が遺存する。171は甕口縁部で口径14.5cmを測り、口縁部端に粘土が張り付けてあり丸まる。172は甑の口縁部と思われる。口径23.8cmを測り、口縁部は胴部から直線的に立ち上がる。173は甑の底部～胴部で底径7.2cmを測り、径5.6cmの穴が穿たれている。174は口縁部から胴部で胴張りのプロポーションをとる。口径は20.0cmを測り、口縁部端には粘土が張り付けてあり、口縁部はコの字型を呈する。175は底部から胴部で底径10.5cmを測り、やや上げ底である。底部には木の葉紋が遺存する。

169・170、172・173、174・175は接合できなかったが同一個体の可能性が高い。

本住居跡の使用及び廃棄年代は、九州編年ⅢB期、陶邑TK43型式新段階からTK209型式古段階併行期に対応しよう。

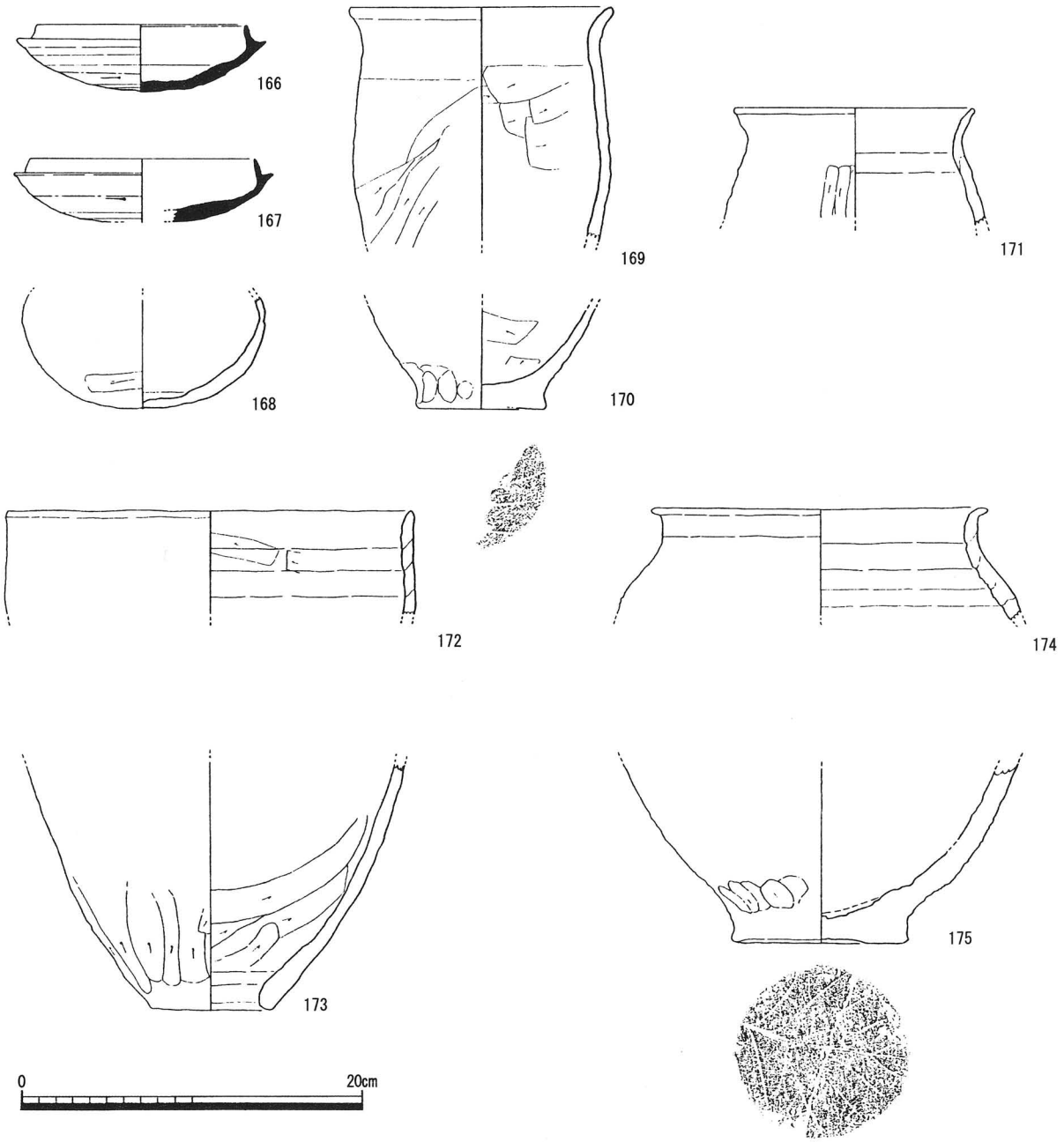


Fig.95　1号住居跡出土遺物実測図（1/4）

２号住居跡（Fig.96）

１）立地

2号住居跡は、９･10号地下式横穴墓の竪坑西側に位置する。調査終了前になり住居跡と判明した。

２）規模と構造

規模は床面上部まで削平されていることから不明であるが、おそらく隅丸方形プランを呈すと思われる。

辛うじて中央の埋甕と径30～40cm程の柱穴３個が遺存していた。もう一つの柱穴は９･10号地下式横穴墓の竪坑内に位置する。したがって、四本柱の住居跡である。

柱間は東西方向が1.6m、南北方向が1.8mである。

床面は黒褐色ローム層(カシワバン)上面で形成されている。

四壁には排水溝などの施設はなく、簡素な造りである。

土層の堆積状況に関しては、既に住居跡床面上部まで削平されていたことから不明である。

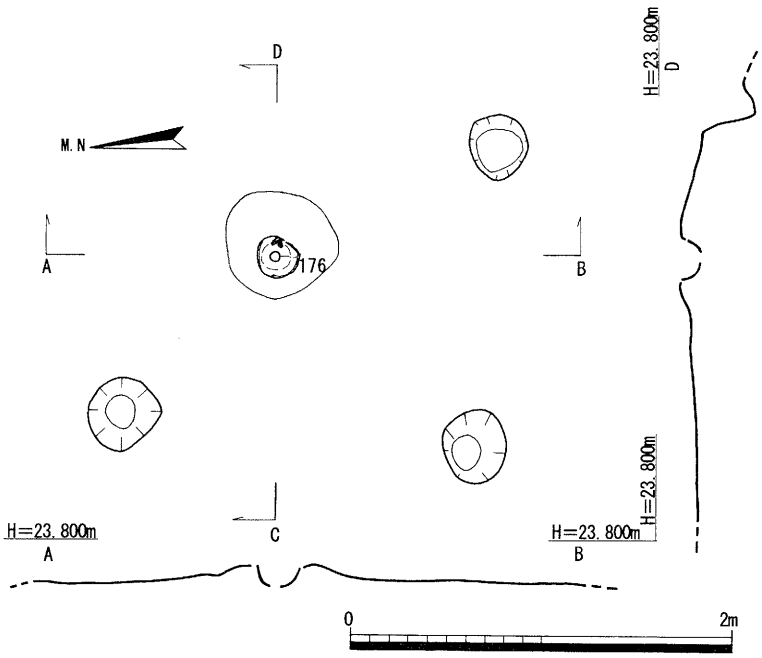


Fig.96　2号住居跡実測図（1/40）

３）遺物の出土状態

遺物は住居跡中央に上部が削平された埋甕１(176)、また、この住居跡の東側、９･10号地下式横穴墓竪坑の際から丹塗り土師器高坏１(177)の総計２点が出土したのみである。

４）出土遺物（Fig.97）

176は埋甕で現存胴部最大径23.2cmを測り、胴部は球状を呈す。内外面ともに斜め上方に上がる板ナデで整形されている。177は丹塗り高坏で口径20.2cm、脚裾径15.4cm、器高16.0cmを測る。脚部は、やや外反しながら拡がり、坏部は内湾する。内外面ともミガキで仕上げられいる。頸部は指オサエで整形される。

本住居跡の使用及び廃棄年代は、土師器のみの出土であることから限定できないが、９･10号地下式横穴墓の竪坑に切られていることは間違いないことから、九州編年Ⅳ期、陶邑TK217型式古段階併行期以前に対応しよう。

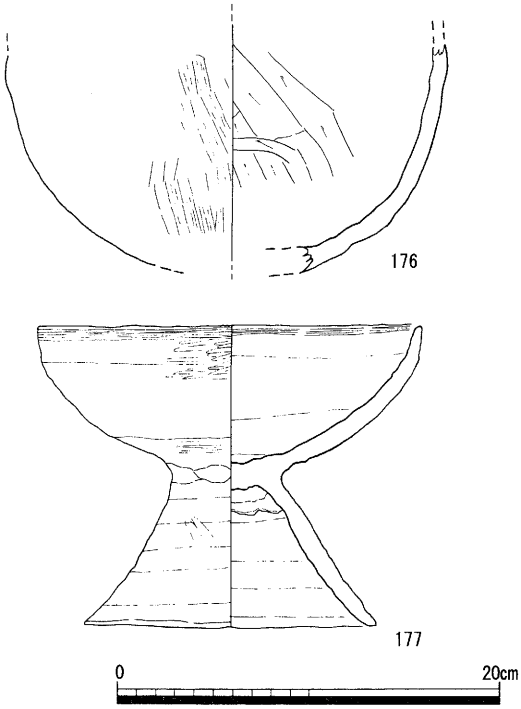


Fig.97　2号住居跡出土遺物実測図（1/4）

5．弥生時代の住居跡

3号住居跡（Fig. 98）

1）立地

3号住居跡は、調査区中央よりやや南側、1号地下式墓寄生型消失円墳北側の標高約23.9mで検出することができた。本住居跡は、床面のほぼ中央を東西に1号地下式墓寄生型消失円墳の周溝により切られていたがそれ以外は良好に遺存していた。

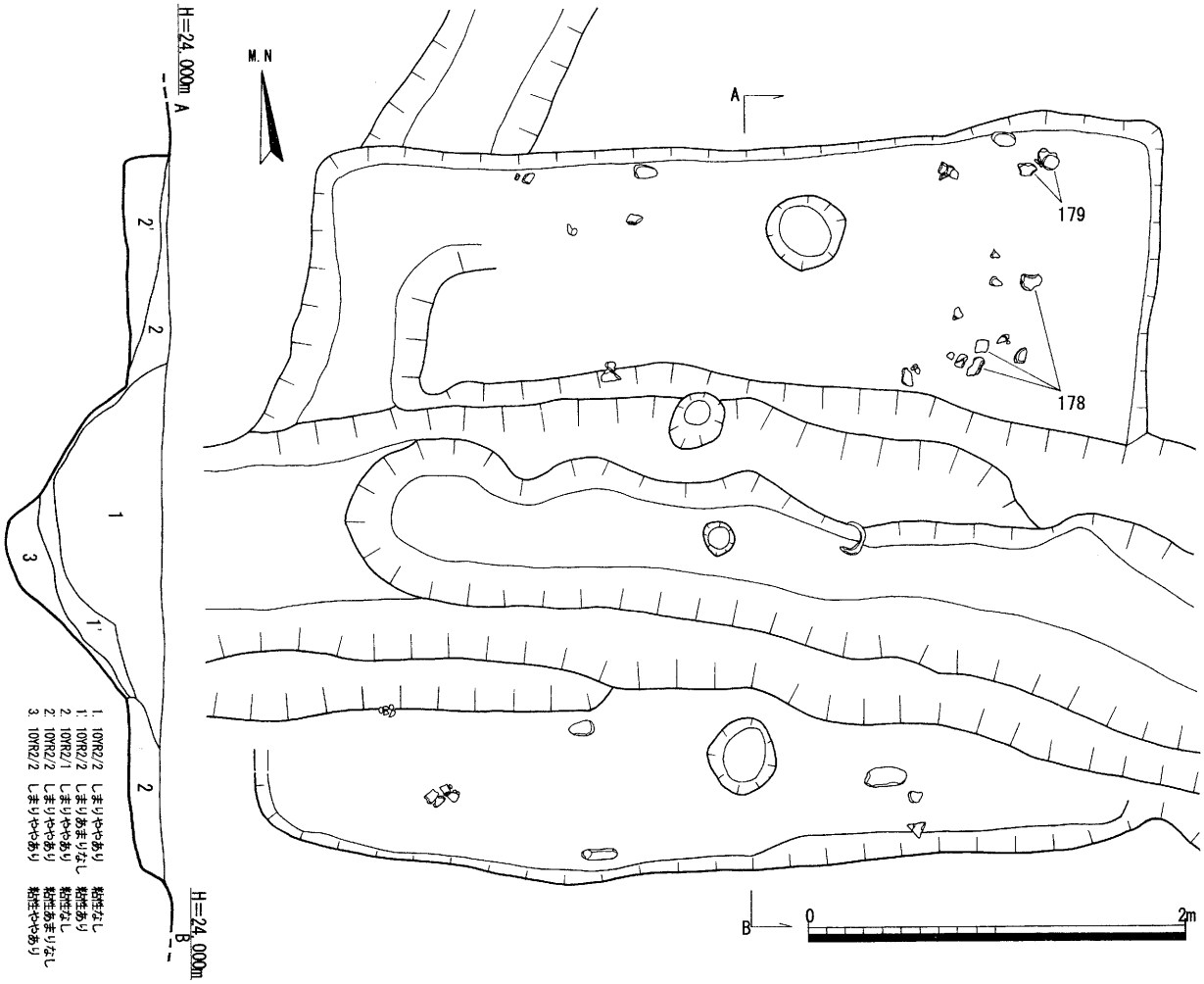


Fig. 98　3号住居跡実測及び土層断面図（1/40）

2）規模と構造

規模は約3.9×4.7m、遺存高20cm、床面積約18.33㎡の隅丸方形プランを呈す。柱穴は2本柱である。床は黒褐色ローム層（カシワバン）上面で形成されている。

四壁には排水溝などの施設はなく、簡素な造りである。

土層の堆積状況は、5層からなり、1･1'･3層は周溝埋土であり、2･2'層はややしまる粘質土からなる。

3）遺物の出土状態

遺物は住居跡床面直上から甕底部1（178）、流れ込みと思われるが土師器甕底部1（179）、上層から甕口縁部1（180）･石鏃1（181）の総計4点が出土したのみである。

4）**出土遺物**（Fig. 99）

178は弥生甕底部で底径は7.0cmを測る。横ナデ、指オサエ、内面横ナデ、不定ナデで整形されている。179は土師器甕底部片で底径7.0cmを測り、内面は板ナデで整形されている。180は弥生甕口縁部片であるが、口径は復元できない。181は頁岩製鏃で、全面を加工してあり、良好に遺存していた。

本住居跡の廃棄年代は、弥生時代後期後葉頃に位置づけられよう。

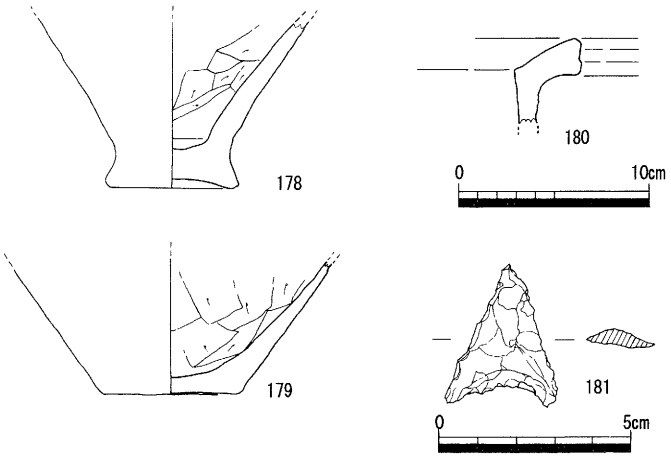


Fig. 99　3号住居跡出土遺物実測図（1/2・1/4）

4号住居跡（Fig. 100）

1）**立地**

4号住居跡は、調査区北端の北から南にかけての緩斜面に位置する。

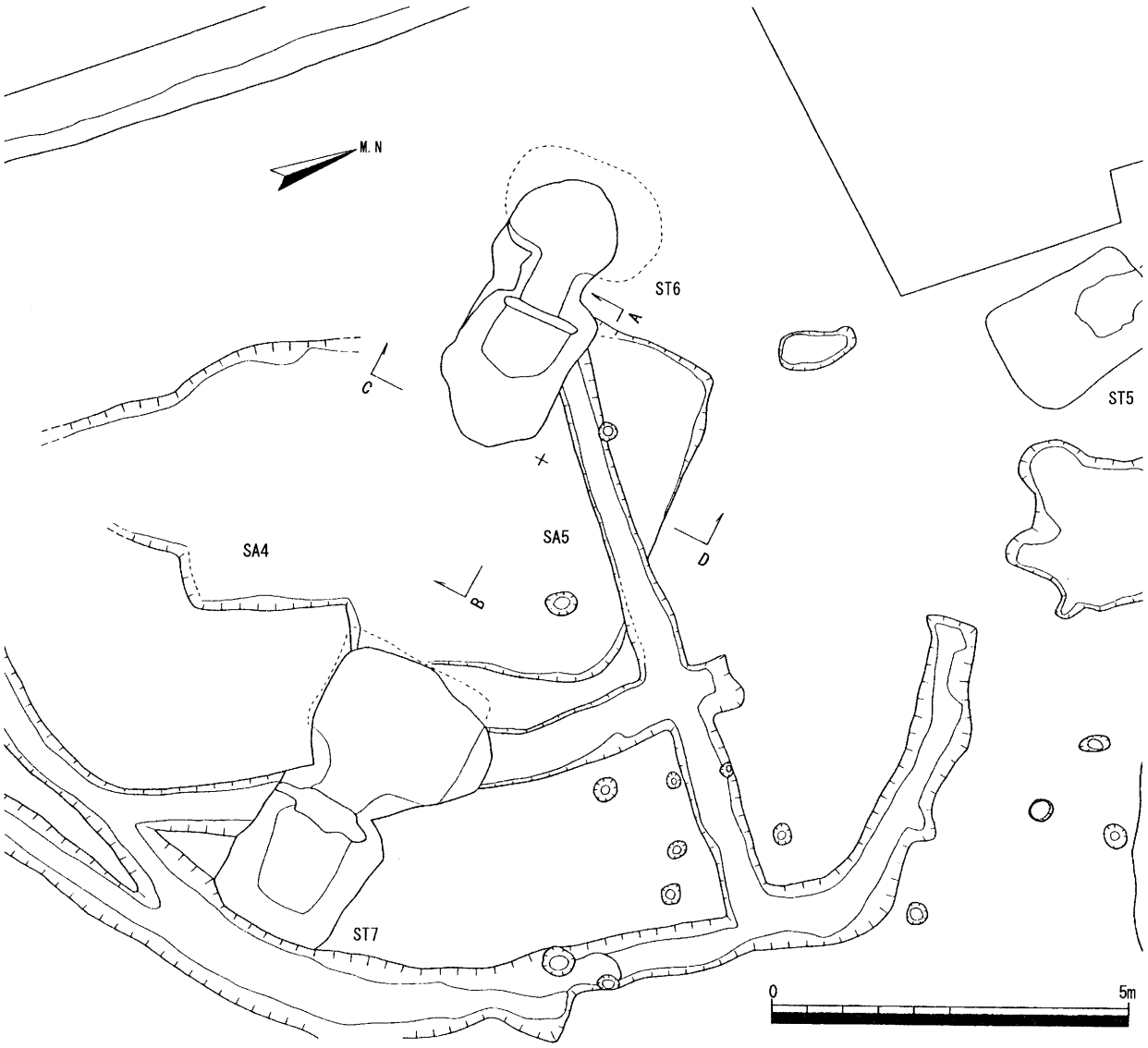


Fig. 100　4・5号住居跡実測図（1/100）

2）規模と構造

４号住居跡は、５号住居跡と切りあるため詳細な規模は明確にできないが、東西約3.75m、南北は５号住居跡と切り合うことから不明であるが、ほぼ同規模であろう。同規模である場合、床面積は14.06㎡程になる。上部をかなり削平されていると考えられ、遺存高は最深部で20cmを測る。南東側の遺存状況から想定すると隅丸方形プランを呈すと思われる。柱の本数については明らかにし得なかった。

床面はは黒褐色ローム層（カシワバン）上面で形成されている。

四壁には排水溝などの施設はなく、簡素な造りである。

3）遺物の出土状態

遺物は総計５点出土し住居跡内に散在して確認できた。小破片も多く器種等が不明なものも多いことから、形状が明らかにできる３点のみ記載する。

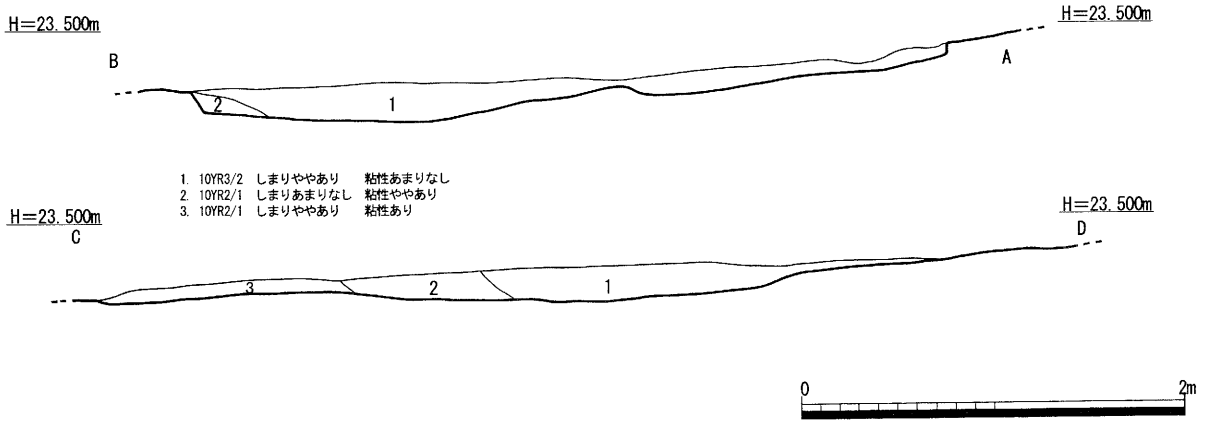


Fig.101　４・５号住居跡土層断面図（1/40）

4）出土遺物（Fig.101）

182は弥生の壷頸部～胴部にかけての破片である。頸部には段が付く。頸部最大径は8.95cmを測る。外面はミガキと板ナデにより整形されているが、内面は風化が著しく明らかにできない。183は１条の刻目突帯を有する甕である。小破片であることから法量は明らかにし得ないが、外面には板ナデの痕跡が残る。184は大型壷胴部片である。これも法量は明らかにし得ない。台形の突帯を１条廻らし、外面は風化が著しく不明であるが、内面は板ナデとハケ目で整形されている。

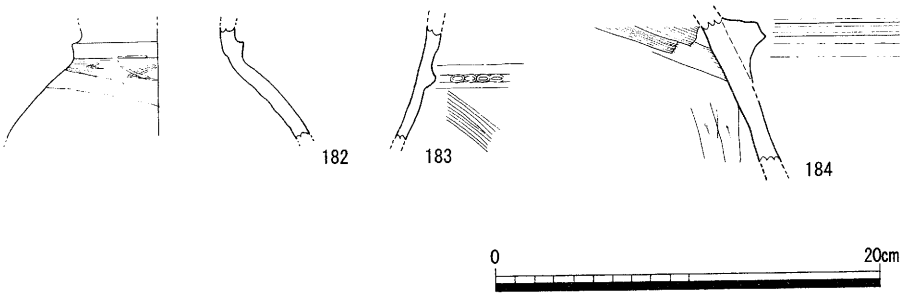


Fig.102　４・５号住居跡出土遺物実測図（1/4）

本住居跡の使用及び廃棄年代は、弥生時代後期に位置づけられよう。

５号住居跡（Fig. 100）

１）立地

５号住居跡は、調査区北端の北から南にかけての緩斜面に位置する。

２）規模と構造

規模は北西から南東が約6.6m、北西から南東は４号住居跡と切り合うことから明らかにし得ないが、ほぼ同規模であろう。同規模である場合、床面積43.56㎡程になる。上部をかなり削平されており遺存高は５cm程である。北東側の遺存状況から想定すると隅丸方形プランを呈すと思われる。柱穴の数については明らかにし得なかった。

床面は黒褐色ローム層(カシワバン)上面で形成されている。

四壁には排水溝などの施設はなく、簡素な造りである。

３）遺物の出土状態

遺物は全く出土しなかったが、４号住居跡と切り合うことから４号住居跡の遺物が伴う可能性も残る。

４）出土遺物（Fig. 91）

本住居跡の使用及び廃棄年代は、遺物が出土していないことから明らかにし得ないが、４号住居跡以降であろう。

６．中世の住居跡

６号住居跡（Fig. 103）

１）立地

６号住居跡は、調査区北端の北から南にかけての緩斜面に位置する。

２）規模と構造

規模は東西最大幅2.18m、南北最大幅2.54m、遺存高16cm、床面積約5.54㎡の隅丸方形プランを呈す。床面中央に長径45cm程の焼土を含んだ窪みが確認された。その南東側には長さ25cm程の偏平な川原石が出土した。柱穴は不明であり、住居跡とするには無理もあるが、中央の炉跡らしき痕跡から住居跡として取り扱うことにした。

床面は黒褐色ローム層(カシワバン)上面で形成されている。

四壁には排水溝などの施設はなく、簡素な造りである。

３）遺物の出土状態

遺物は、中央の窪みから陶磁器片１と軽石１が出土したのみである

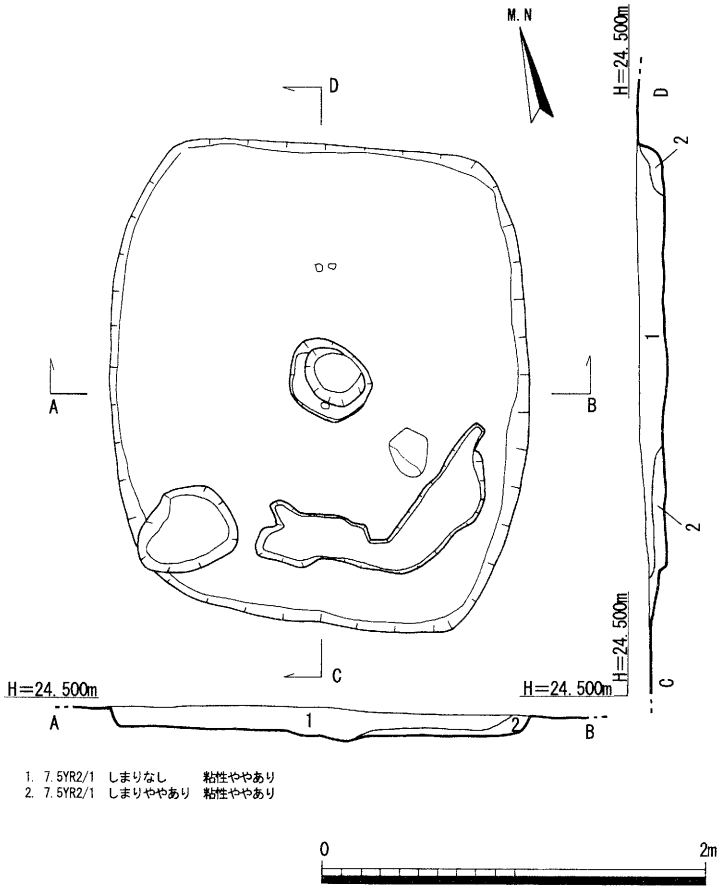


Fig. 103　６号住居跡実測及び土層断面図（1/40）

7．縄文時代の集石遺構

1号集石遺構（Fig. 104）

1）立地

1号集石遺構は調査区南側、1号地下式墓寄生型消失円墳東側に散在する近世の柱穴群の中に所在する。

2）規模と構造

堀り方は黒褐色ローム層（カシワバン）上面から掘削されており、その後、後世の柱穴に切られているが、堀り方の規模は1.25～1.3mの円形を呈す。

その底に長辺25～30cm程の偏平な川原石6個を皿状に配し、その上に5～20cm程の焼石が40cm程堆積していた。

3）遺物の出土状態

遺物は全く出土せず、周辺からも検出できなかった。

4）出土遺物

何も出土せず築造及び使用時期決定には問題があるが、カシワバン層から掘削されていることから、縄文早期以前である。

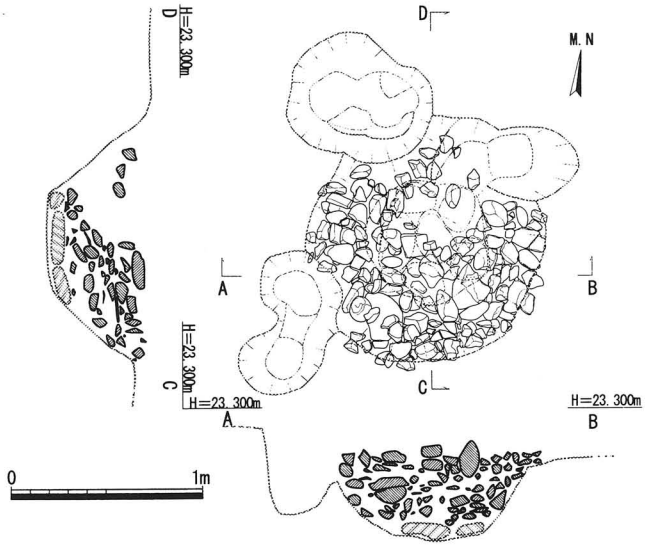


Fig. 104　1号集石遺構実測図（1/40）

2号集石遺構（Fig. 105）

1）立地

2号集石遺構は調査区南側、1号集石遺構の北側に近接して所在する。

2）規模と構造

堀り方は黒褐色ローム層（カシワバン）上面から掘削されており、その後、後世の柱穴に切られているが、堀り方の規模は1号集石遺構同様1.25～1.3mの円形を呈す。

その底に10～35cm程の川原石8個程を皿状に配し、その上に5～20cm程の焼石が25cm程堆積していた。

3）遺物の出土状態

遺物は全く出土せず、周辺からも検出できなかった。

4）出土遺物

何も出土せず築造及び使用時期決定には問題があるが、カシワバン層から掘削されていることから、縄文早期以前である。

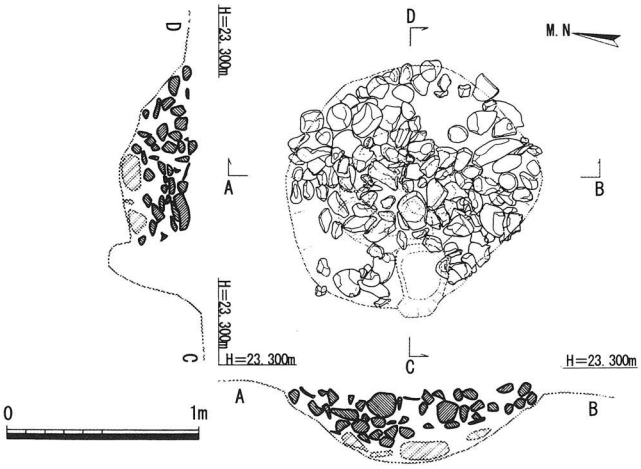


Fig. 105　2号集石遺構実測図（1/40）

8．その他の遺構

合わせ甕（Fig. 106・107）

調査区北方中央部に確認された。３つの甕が１個(185)は単独で、一方は２個重ねて(186・187)、口縁部を合わせた状態で出土した。堀り方は本来あった可能性が高いが、確認できなかった。

185は土師器甕の底部～胴部にかけてである。口径は破損しており不明であるが、底径6.1cmを測る。寸胴な形状をとり胴部最大径は26.6cmを測る。外面はミガキと板ナデ、内面は板ナデで整形されている。186は土師器甕の口縁部から胴部である。口径16.3cmを測る。やや胴張りの形状をとり胴部最大径は21.2cmを測る。内外面ともに板ナデにより整形されている。187は土師器甕胴部である。球状の形状をとり胴部最大径は26.6cmを測る。口縁部及び底部に関しては欠損しており不明である。内外面ともに板ナデにより整形されている。

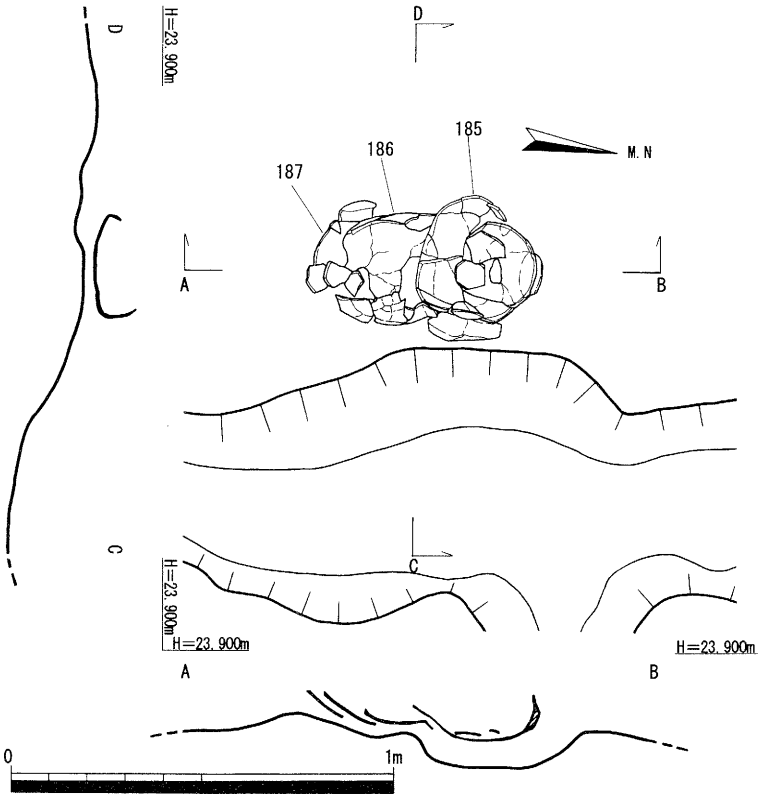


Fig. 106　２Aグリッド合わせ甕実測図 (1/20)

１Aグリッド（Fig. 9・107）

調査区北側の１Aのグリッド内に所在した遺物である。188・189は近世溝の南側に２個伏せた状態で並べて置かれていた。これら遺物の回りからは堀り方が確認されず、既に削平されていた可能性が高く、土壙墓であった可能性が高い。188は坏蓋で口径13.2cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/3程度である。肩に稜線の痕跡が残り、本遺跡内の遺物ではやや古い形状を呈す。189は坏身で、受部径14.1cmを測り、ヘラ削りの範囲は2/3程度である。188同様に器高も高くやや古い形状を呈す。これら、遺物はセット関係にあったと思われる。190は188・189が出土した１m程東側から１点のみ出土した坏身片である。188・189同様の遺構に伴う可能性も残るが、詳細は明らかにできない。受部径は14.3cmを測り、ヘラ削りの範囲は1/3～1/4程度である。坏部がやや丸まる形状であり、188・189同様にやや古い形状を呈す。

溝１(SE1)

調査区中央東側に確認された溝である。幅は３m程で深さは20cm程で浅く、西から東にかけて流れる。この溝からは５点の土器片が出土したが４点は土師器甕胴部と思われる小破片であり、形状が明らかになったものは土師器皿１(191)のみである。

191は土師器皿で口径12.7cm、底径7.0cmを測り、底部は回転ヘラ切り離し後、不定削りが施されている。平安期の遺物であり、流れ込みである。

溝２(SE2)

調査区南方西側、１号地下式墓寄生型消失円墳の西から南東にかけて所在する。この溝は近世の溝の

可能性が高い。幅は90cm程で北から南にかけて流れる。この溝内からは須恵器胴部小破片２、土師器胴部小破片７などが出土したが全てが流込みと思われ、形状が明らかになったもは平瓶片１(192)のみである。

192は平瓶片で口径7.1cmを測る。口縁部～肩部のみであることから傾きに関しては不明であるが、口縁部は頸部から直線的に開き、口縁部端から１cm程下からやや内傾し、端部は丸まる。肩部は焼成前に空気を出し切れなかったようで、焼き膨れが生じている。

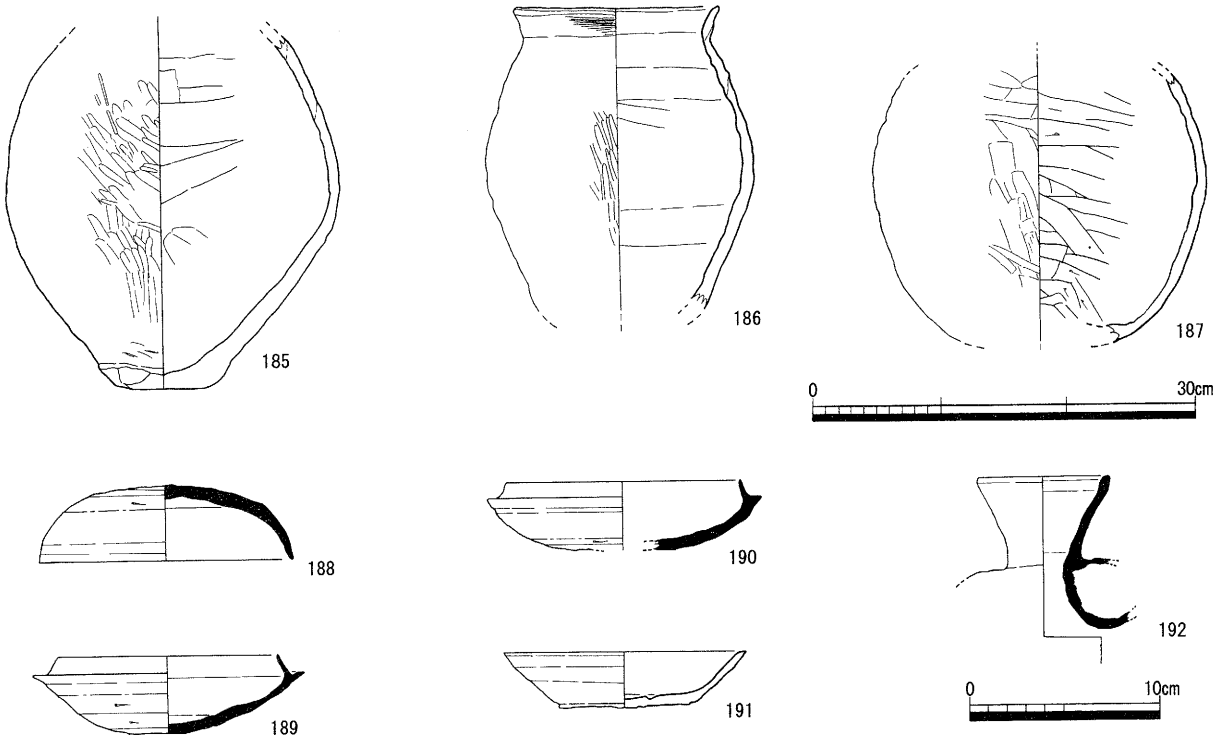


Fig. 107　1Aグリッド及び溝1･2出土遺物実測図（1/4･185～187は1/6）

墓道状遺構（Fig. 9）

調査区北方から中央部にかけてアカホヤ火山灰層が削平された痕跡が確認できた。調査当初は自然流路と想定していたが、このアカホヤ火山灰層が削平された箇所から３号及び９･10号地下式横穴墓の竪坑がそれぞれ外側を向き選地していることから、これら地下式横穴墓に伴う墓道の可能性も残る。この遺構に伴うような遺物は明らかにできない。この遺構は、１号消失円墳の西側から１号地下式墓寄生型消失円墳に向かって延びた後、消えてしまう。このことから、その後は、１号地下式墓寄生型消失円墳の周溝を墓道として利用したと考えられるが、今後、更なる検討を要する。

近世の柱穴群

調査区全体には多くの柱穴が所在する。中でも調査区南側には多くの柱穴跡ないしピットが密集する。これらには古墳時代終末期、江戸期、近代と最低でも３時期に区別されると思われるが、多くの柱穴は時期比定が困難である。調査区南側の柱穴群は柱穴内から寛永通宝や陶磁器片が出土したものが多く確認されたことから江戸期の掘立柱建物跡の可能性が高い。これら建物の復元を試みたが、かなりの柱穴が密集しており明らかにはできなかった。但し、南側柱穴群の北方に東西に長い１×数軒の掘立柱建物跡が所在していた可能性がある。

Tab. 1　堂ヶ嶋第２遺跡地下式横穴墓一覧　（全長・玄室規模はm、面積は㎡）

No.	全長	玄室				墳丘	人骨	閉塞	年代	副葬品
		奥行	幅	高さ	面積					
1	3.86	1.64	1.97	—	3.23	—	—	羨・板	TK209新-TK217新	須恵器坏蓋3・坏身3、耳環1
2	4.06	1.03	1.85	0.80	1.91	—	骨片	羨・石	TK209古-TK209新	須恵器坏蓋3・坏身3、耳環1
3	4.87	1.41	1.65-2.10	—	2.64	—	骨片	羨・板	TK209古-TK217新	須恵器坏蓋6・坏蓋片1・坏身7・平瓶1
4	5.17	1.33	2.10	0.73	2.79	—	—	羨・板	TK209新	須恵器坏蓋1・坏身1・高坏1・横瓶1、土師器坏1・鉢１、耳環1
5	4.13	1.10	1.90	0.68	2.09	—	—	羨・板	6C末～7C初	須恵器坏身片1、土師器大鉢1・鉢1・高坏1、耳環2、刀子2
6	4.40	1.57	2.32	—	3.64	—	骨片	羨・板	6C末～7C初	土師器鉢1
7	4.48	1.82	2.30-2.36	—	4.24	—	—	羨・板	TK209新	須恵器坏蓋4・坏身5・ハソウ1・甕破片1、ミニチュア土器1、耳環2
8	4.69	1.34	1.94-2.17	—	2.75	—	—	羨・板	TK209新	須恵器坏蓋3・坏身1、鉄鏃1
9	3.46	1.26	1.66-1.90	—	2.24	—	骨片	羨・板	TK209古-TK217新	須恵器坏蓋2・坏身2
10	6.06	1.15	1.95	—	2.24	—	—	羨・板	TK217古	須恵器坏蓋1・坏身1・平瓶1
11	3.81	0.91	1.44	—	1.31	—	—	羨・板	7C初？	—
12	4.05	1.11	1.62	—	1.80	—	—	羨・板	TK217古	須恵器坏蓋1・坏身1・平瓶1、土師器高坏1
13	5.44	1.68	2.21	—	3.71	—	—	羨・板	TK209新-TK217古	須恵器坏蓋1・坏身1、耳環1、鉄鏃1、刀子1
14	4.39	1.60	2.01	0.70	3.22	○	—	羨・板	TK217古	須恵器高坏1、土師器鉢1・坏4、耳環1
15	3.28	1.32	1.92	—	2.53	○	—	羨・石	TK217古-TK217新	須恵器坏蓋2・坏身2、土師器高坏1・甕1、刀子1
16	4.29	1.33	2.08	0.70	2.77	○	—	羨・板	TK209新	須恵器坏蓋1・坏身1、土師器鉢1、鉄鏃3
17-1	10.15	1.52	1.92-2.27	—	3.18	○	—	羨・石	TK217古	須恵器坏身1・平瓶1、耳環1、鉄鏃1
17-2	—	0.62	0.89	0.37	0.55	—	—	羨・板	TK217新	須恵器坏蓋1・坏身1
17-3	—	0.60	0.90	0.36	0.54	—	—	羨・板	TK217新	須恵器坏蓋1・坏身1
17-4	—	0.66	1.03	0.45	0.68	—	—	羨・板	TK217新	須恵器坏身1
18	3.35	0.81	1.10	—	0.93	—	—	羨・石	6C末～7C初	土師器坏1

Tab. 2　堂ヶ嶋第２遺跡土壙墓一覧　（全長・玄室規模はm、面積は㎡）

No.	長さ	幅	遺存高	面積	人骨	築造時期	副葬品
1	2.73	1.64	0.55-0.60	4.48	—	TK209新-TK217古	須恵器坏蓋1・坏身1・高坏2、土師器高坏1、鉄鏃2
2	1.74	1.62	0.63-0.70	2.82	—	6C末-7C初	轡１、不明鉄器1
3	1.75	1.15	0.18-0.20	2.01	—	6C末-7C初	須恵器提瓶1・刀子1
4	2.60	0.48-1.16	0.24-0.34	2.13	—	TK217新	須恵器坏身1、土師器鉢1

Tab. 3　堂ヶ嶋第２遺跡住居跡一覧　（全長・玄室規模はm、面積は㎡）

No.	規模				築造時期	副葬品
	奥行	幅	遺存高	面積		
1	3.80	3.90	0.20	14.82	TK43新-TK209古	須恵器坏身2、土師器壷？1・甕3＋α・甑2
2	—	—	—	—	-TK217古	土師器甕1・高坏1
3	3.90	4.70	0.20	18.33	弥生後期後葉	弥生甕片1、土師器片1、石鏃1
4	3.75	—	0.20	—	弥生後期	弥生壷片1・甕片2
5	6.60	—	0.05	—	弥生後期以降	—
6	2.18	2.54	0.16	5.54	中世	陶磁器片1、軽石1

Tab. 4　堂ヶ嶋第２遺跡地下式横穴墓計測値一覧

（全長・玄室規模はm、面積は㎡）

No.	全長	玄室				竪坑							編年	
		奥行	幅	高さ	面積	長さ	幅	遺存高	傾斜角度（°）				小田編年	田辺編年
									降り口	羨門部	羨門部床－竪坑上部	側壁		
1	3.86	1.64	1.97	—	3.23	2.80	1.16-1.51	1.16	50	89	29	69-76	小田ⅣB-Ⅴ	TK209新-TK217新
2	4.06	1.03	1.85	0.80	1.91	2.20-2.33	1.59	1.50	56	80	33	72-75	小田ⅣA-ⅣB	TK209古-TK209新
3	4.87	1.41	1.65-2.10	—	2.64	2.63	0.50-1.58	1.05	35	78	16	66-74	小田ⅣA-Ⅴ	TK209古-TK217新
4	5.17	1.33	2.10	0.73	2.79	3.25	1.13-1.90	1.28	51	72	20	68-70	小田ⅣB	TK209新
5	4.13	1.10	1.90	0.68	2.09	2.34	1.50-1.75	1.41	50	83	30	74-78	—	—
6	4.40	1.57	2.32	—	3.64	2.47	1.62-1.73	1.00-1.15	37	77-83	20	66-71	—	—
7	4.48	1.82	2.30-2.36	—	4.24	4.48	1.88	0.97	48	63-75	18	58	小田ⅣB	TK209新
8	4.69	1.34	1.94-2.17	—	2.75	2.79	1.34-1.96	1.13	48	74	21	72-78	小田ⅣB	TK209新
9	3.46	1.26	1.66-1.90	—	2.24	2.20	—	1.15	59	74	32	—	小田ⅣA-Ⅴ	TK209古-TK217新
10	6.06	1.15	1.95	—	2.24	4.36	1.46-1.72	1.00-1.15	29	71	8	59-66	小田ⅣB	TK217古
11	3.81	0.91	1.44	—	1.31	2.79	0.73-1.74	0.71	40	71	15	76-78	—	—
12	4.05	1.11	1.62	—	1.80	2.45	1.56-1.97	0.72	49	72	16	61-71	小田ⅣB	TK217古
13	5.44	1.68	2.21	—	3.71	3.12	1.68-1.72	1.22	47	84	21	79-85	小田ⅣB	TK209新-TK217古
14	4.39	1.60	2.01	0.70	3.22	2.18	1.53-2.10	1.39	57	74	30	75	小田ⅣB	TK217古
15	3.28	1.32	1.92	—	2.53	1.28	1.37	1.15	88	60	39	43-79	小田ⅣB-Ⅴ	TK217古-TK217新
16	4.29	1.33	2.08	0.70	2.77	2.28	2.38	1.24	72	60	28	62-72	小田ⅣB	TK209新
17-1	10.15	1.52	1.92-2.27	—	3.18	6.36	2.10	0.30-1.05	16.5	80	—	50-55	小田ⅣB	TK217古
17-2	—	0.62	0.89	0.37	0.55	—	—	—	—	78	—	—	小田Ⅴ	TK217新
17-3	—	0.60	0.90	0.36	0.54	—	—	—	—	64	—	—	小田Ⅴ	TK217新
17-4	—	0.66	1.03	0.45	0.68	—	—	—	—	72	—	—	小田Ⅴ	TK217新
18	3.35	0.82	1.13	—	0.93	2.31	1.02-1.71	0.44	73	72	9	71-75	—	—

Tab. 5　堂ヶ嶋第２遺跡　出土遺物観察表

１号地下式墓寄生型消失円墳

No.	器種	残存率	法量 口径/受部径/底径/脚裾径/胴部最大径/器高(cm)	調整 外面／内面	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	ヘラ記号
1	須恵器/坏蓋	天井部／1/4	—／—／—／—／—／—	回転ヘラ切後不定ナデ、回転ヘラケズリ／回転ナデ、指オサエ後不定ナデ	7.5YR5/2	N5/1	細かい長石、黒雲母含む。精緻	堅緻	
2	須恵器/坏蓋	口縁部／1/6	12.3／—／—／—／—／—	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ	7.5YR5/1	5Y5/1	細かい長石を多く含む。精緻	堅緻	
3	須恵器/坏蓋	口縁部	12.7／—／—／—／—／—	回転ナデ／回転ナデ	5YR5/1	5YR5/1	精緻		
4	須恵器/坏蓋	1/4	12.5／—／—／—／—／4.3	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部のみ不定ナデ	7.5Y5/1	5Y6/1	１mm程の長石や黒雲母を含みやや粗い	堅緻	
5	須恵器/坏蓋	1/3	12.9／—／—／—／—／4.5	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ、→中央部不定ナデ	7.5Y5/1	7.5Y5/1	細かな長石を含み精緻	堅緻	
6	須恵器/高坏蓋	1/9	11.3／—／—／—／—／—	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ	N4/0	N5/0	精緻	堅緻	
7	須恵器/無蓋高坏	杯部破片	—／—／—／—／—／—	—／—	7.5Y5/1	5Y5/1	精緻	堅緻	
8	須恵器/高坏	脚部／1/6	—／—／—／12.6／—／—	回転ナデ／回転ナデ	5Y6/2	5Y6/2	1mm程の黒雲母を含み精緻	やや軟質	
9	土師器/高坏	1/6	—／—／—／—／—／—	杯部ヨコミガキ、指ナデ、脚部タテミガキ／ヨコミガキ、ヨコナデ	5YR6/6	5YR6/6	２～３mm程の赤褐色粒を含み粗い。	良好	
10	土師器／甕	1/14	15.0／—／—／—／—／—	回転ナデ／回転ナデ	2.5Y8/1	2.5Y8/1	１～２mmの長石、赤褐色粒を多く含み粗い。	軟質	
11	土師器／甕	1/12	—／—／—／—／—／—	回転ナデ／回転ナデ	7.5YR7/4	10YR7/3	７mm程の暗褐色粒を含み粗い。	良好	
12	土師器／甕	1/6	22.0／—／—／—／—／—	回転ナデ／回転ナデ	10YR7/3	10YR7/4	３mm程の赤褐色粒を含み粗い。	やや軟質	
13	土師器／甕	1/10	21.3／—／—／—／—／—	回転ナデ／回転ナデ	10YR7/3	10YR6/4	２～４mm程の赤褐色粒を含み粗い。	良好	
14	土師器／甕	2/3	17.6／—／—／—／23.8／—	ヨコナデ、頸部にタテナデ／ヨコナデ、板ナデ	10YR 8/3, 7/3	2.5Y 7/3, 7/4	５mm程の赤褐色粒を含むが精良。	やや軟質	
15	須恵器/大甕	3/4	22.2／—／—／—／43.8／—	回転ナデ、擬格子目タタキ→カキ目／回転ナデ、同心円状当て具痕	7.5Y 7/1, 3/1	10Y5/1	１～５mmの長石、石英、黒雲母を少量含み精緻	堅緻	

１号消失円墳

16	須恵器/坏蓋	ほぼ完形	14.5／—／—／—／—／4.1	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部のみ不定ナデ	5Y 8/2, 3/1	7.5Y6/1	１mmほどの長石を多く含みやや粗い	良好	
17	須恵器/平瓶	1/4	—／—／—／—／—／—	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ	5Y5/1	5Y6/1	細かな長石を含み精緻	堅緻	
18	土師器/高坏	杯部、脚部	—／—／—／15.8／—／—	脚部　板ナデ、指オサエ／丹塗り	10YR7/4	7.5YR 5/4	５mm程の赤褐色粒を含むが精良。	良好	
19	土師器／甕	口縁部のみ	—／—／—／—／—／—	ヨコナデ、不定ナデ／ヨコナデ	7.5YR 7/4	10YR7/4	２～５mm程の赤褐色粒を含み粗い。	良好	
20	土師器／甕	口縁部のみ	—／—／—／—／—／—	ヨコナデ、不定ナデ／ヨコナデ、不定ナデ	7.5YR 8/4	10YR8/4	１～10mm程の赤褐色粒を含み粗い。	軟質	
21	土師器／甕	口縁部のみ	12.0／—／—／—／—／—	ヨコナデ／ヨコナデ、不定ナデ	10YR8/4	10YR8/4	５mm程の長石や赤褐色粒を含み粗い。	やや軟質	
22	土師器／甕	口縁部のみ	20.0／—／—／—／—／—	ヨコナデ／ミガキ、ヨコナデ	10YR7/4	10YR7/4	１～10mm程の赤褐色粒を含み粗い。	やや軟質	
23	土師器／甕	1/3	—／—／—／—／—／—	板ナデ／板ナデ	10YR7/3	10YR8/3	２～５mm程の赤褐色、灰褐色粒を含み粗い。	やや不良	
24	土師器／甕	底部1/5	—／—／6.2／—／20.3／—	板ナデ／板ナデ、ヨコナデ	10YR8/6	2.5Y7/3	８mm未満の長石、赤褐色粒を含み粗い。	やや軟質	
25	土師器／甕	底部のみ	—／—／11.0／—／—／—	不定ナデ／不定ナデ／底部　木の葉底	10YR7/4	黒色	４mm程の長石、赤褐色粒を多く含み粗い。	良好	
26	土師器／甕	底部のみ1/2	—／—／13.6／—／—／—	板ナデ、指オサエ／板ナデ、指オサエ／底部　木の葉底	10YR7/4	黒色	２～３mm程の赤褐色粒を含み粗い。	良好	

１号地下式横穴墓

27	須恵器/坏蓋	完形	12.2／—／—／—／—／3.8	切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ヨコナデ→中央部不定ナデ	5B6/1	5B7/1	１～５mmの長石、石英、黒雲母を微量含み精緻。	良好	
28	須恵器/坏蓋	ほぼ完形	11.8／—／—／—／—／3.6	切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	10BG6/1	N6/0	長石、石英等含み粗め。	良好	
29	須恵器/坏蓋	3/5	12.0／—／—／—／—／3.8	切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	5B6/1	5B6/1	１～５mmの長石、石英、黒雲母を含みやや粗い	良好	
30	須恵器/坏身	完形	10.6／12.8／—／—／—／3.0	切離し→ナデオサエ、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ	N8/0	N6/0	５mm以下の砂粒多く粗い。	良好	

No.	器種	残存率	法量 口径/受部径/底径/脚裾径/胴部最大径/器高(cm)	調整 外面／内面	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	ヘラ記号
31	須恵器／坏身	完形	10.8／13.1／—／—／—／4.1	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→底部のみ不定ナデ	10Y4/1	10Y6/1	5㎜以下の長石、石英など含み粗い。	堅緻	○
32	須恵器／坏身	破片	10.1／12.2／—／—／—／	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→底部のみ不定ナデ	10BG6/1	N6/0	細かな長石、石英を含み精緻。	良好	
33	須恵器／坏身	破片	9.9／11.9／—／—／—／—	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ	10BG6/1	N6/0	細かな長石、石英を含み精緻。	良好	

2号地下式横穴墓

35	須恵器／坏蓋	完形	12.2／—／—／—／—／3.6	ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央のみ不定ナデ	N6/0, 5/0	N5/0	1～5㎜程の長石、石英、黒雲母を含み粗い。	良好	
36	須恵器／坏蓋	完形	13.9／—／—／—／—／3.9	ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央のみ不定ナデ	N8/0, 6/0	N8/0	5㎜以下の長石、石英など微量含み精緻。	やや軟質	
37	須恵器／坏蓋	完形	13.9／—／—／—／—／3.2	ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央のみ不定ナデ	7.5Y8/1, 7/1	10Y8/1, 7/1	長石、石英等微量含み精緻。	やや軟質	
38	須恵器／坏身	完形	12.8／14.6／—／—／—／3.8	ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→底部のみ不定ナデ	7.5Y7/1	7.5Y8/1	1～7㎜程の砂粒微量含み精緻。	軟質	
39	須恵器／坏身	完形	12.4／14.2／—／—／—／3.6	ヘラ切り離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→不定ナデ	N8/0, 5/0	N8/0	1～5㎜程の長石、石英、黒雲母を微量含み精緻。	やや軟質	
40	須恵器／坏身	完形	11.1／13.6／—／—／—／3.8	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	N3/0, 4/0	N5/0, 6/0	1～4㎜の長石、石英を含みやや粗い。	堅緻	○

3号地下式横穴墓

42	須恵器／坏蓋	完形	12.3／—／—／—／—／3.6	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部のみ不定ナデ	N6/0, 5/0	N6/0, 5/0	1～5㎜の長石、石英を含み、緻密	良好	
43	須恵器／坏蓋	完形	13.2／—／—／—／—／4.3	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	5B5/1	N6/0	1～5㎜の長石、石英を含み、緻密	良好	
44	須恵器／坏蓋	ほぼ完形	12.8／—／—／—／—／3.7	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	7.5Y5/1, 4/1	7.5Y6/1	1～5㎜の長石、石英、黒雲母を含み、緻密	堅緻	
45	須恵器／坏蓋	完形	11.5／—／—／—／—／3.3	ヘラ切→不定ケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	N5/0, 4/0	N6/0, 5/0	1～5㎜の長石、石英、黒雲母を含み、緻密	堅緻	
46	須恵器／坏蓋	完形	13.0／—／—／—／—／3.9	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	N6/0	N6/0	1～5㎜の長石、石英、黒雲母が微量、緻密	堅緻	
47	須恵器／坏蓋	1/8	13.8／—／—／—／—／—	回転ナデ／回転ナデ	10YR8/3	2.5YR8/4	1～2㎜の砂粒微量、精緻。	やや軟質	
48	須恵器／坏蓋	4/5	13.9／—／—／—／—／4.3	ヘラ切離し、回転ヘラケズリ（雑）、回転ナデ／回転ナデ	2.5Y8/3, 6/3	2.5Y8/2	1～5㎜以下の砂粒微量で精緻。	軟質	
49	須恵器／坏身	完形	11.4／13.9／—／—／—／4.5	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	7.5Y7/1	7.5Y8/1	1～4㎜の長石、石英を多量含み粗い。	やや軟質	
50	須恵器／坏身	完形	11.0／13.2／—／—／—／3.8	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	N6/0	N7/0, 6/0	1～8㎜の長石、石英、黒雲母を多量含み粗い。	良好	
51	須恵器／坏身	完形	11.8／13.5／—／—／—／3.8	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	7.5Y8/1, 6/1	10Y8/1	1～5㎜程の長石、石英微量、緻密	良好	○
52	須恵器／坏身	完形	12.7／14.5／—／—／—／4.4	ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	2.5Y7/3, 6/3	2.5Y8/3, 8/2	1～5㎜の砂粒が微量、精緻。	軟質	
53	須恵器／坏身	完形	10.8／12.9／—／—／—／3.8	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	N7/0, 6/0	N7/0	1～7㎜程の長石、石英等微量含み精緻。	軟質	
54	須恵器／坏身	完形	10.8／12.9／—／—／—／3.3	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→不定ナデ	N7/0, 6/0	N6/0	1～5㎜程の長石、石英微量、緻密	堅緻	
55	須恵器／坏身	ほぼ完形	10.5／13.1／—／—／—／3.2	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	N5/0	N5/0	1～4㎜の長石、石英微量含み精緻	良好	
56	須恵器／平瓶	完形	4.7／—／—／—／11.9／10.3	回転ナデ、体部上カキ目、体部下回転ヘラケズリ／回転ナデ	N7/0, 6/0	N7/0	1～5㎜程の長石、石英、黒雲母を微量含み、緻密	堅緻	

4号地下式横穴墓

57	須恵器／坏蓋	完形	11.9／—／—／—／—／4.4	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	N5/0	N6/0	1～7㎜程の長石、石英等微量含み精緻。	堅緻	○
58	須恵器／坏身	完形	10.2／12.8／—／—／—／3.4	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	5B5/1	5B6/1	1～5㎜程の長石、石英、黒雲母を微量含み、緻密	堅緻	
59	須恵器／高坏	完形	11.5／—／—／11.5／—／16.0	回転ナデ／回転ナデ	N5/0, 4/0	N5/0, 4/0	1～5㎜程の長石等が微量、緻密	堅緻	
60	須恵器／横瓶	完形	8.1／—／—／—／—／21.1	口縁部回転ナデ、体部回転カキ目／回転ナデ	N7/0	2.5GY4/1	1～3㎜程の長石等が微量、緻密	堅緻	
61	土師器／坏	完形	13.6／—／—／—／—／4.1	ミガキ、ヨコナデ／ミガキ、ヨコナデ	7.5YR7/6	7.5YR6/6	精良	良好	
62	土師器／鉢	完形	14.3／—／—／—／—／6.8	ミガキ、板ナデ、ヨコナデ、暗文？／ミガキ、ヨコナデ	2.5Y8/3	2.5Y8/3	1～7㎜の砂粒多量、粗い	良好	
64	須恵器／坏身	4/5	10.8／13.3／—／—／—／3.3	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	7.5Y7/1, 6/1	N6/0, 5/0	1～5㎜程の長石、石英、黒雲母を含み、粗密	堅緻	
65	弥生土器／甕	口縁部破片	—／—／—／—／—／—	ヨコナデ、刻目突帯／ヨコナデ	2.5Y8/3	2.5Y8/4	1～5㎜の茶色粒を多く含み粗い。	良好	

5号地下式横穴墓

No.	器種	残存率	法量	調整	色調		胎土	焼成	ヘラ記号
			口径/受部径/底径/脚裾径/胴部最大径/器高(cm)	外面／内面	外面	内面			
66	土師器／鉢	3/5	17.6／—／—／—／—／—	ミガキ／ミガキ	2.5Y6/8	7.5YR7/6	1～3mm程の砂粒が微量、精良。	良好	
67	土師器／鉢	完形	18.5／—／—／—／—／8.7	ミガキ、口縁部ヨコナデ／ミガキ	5YR6/8	2.5YR6/6	1～5mmの砂粒(茶色粒)を含み精良。	良好	
68	土師器／高坏	杯部のみ	14.8／—／—／—／—／—	ミガキ、タテナデ／ミガキ	2.5YR6/8	2.5YR5/8	精良	良好	

6号地下式横穴墓

72	土師器／坏	完形	12.2／—／—／—／—／5.8	ヨコナデ、板ナデ／板ナデ	7.5YR8/6	7.5YR8/4	1～7mmの長石、茶色粒を含み、やや粗い。	良好	

7号地下式横穴墓

73	須恵器／坏蓋	4/5	13.0／—／—／—／—／4.0	切離し→ナデ、回転ナデ／回転ヨコナデ→中央部不定ナデ	5GY6/1	N6/0	1～5mmの長石、石英、黒雲母が微量、緻密。	良好	
74	須恵器／坏蓋	完形	12.8／—／—／—／—／—3.6	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	N6/0	N7/0	1～5mmの長石、石英を微量含み緻密。	堅緻	○
75	須恵器／坏蓋	3/5	12.8／—／—／—／—／4.0	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	N5/0	2.5GY6/1	1～5mmの長石、石英を微量含み緻密。	堅緻	
76	須恵器／坏蓋	完形	11.1／—／—／—／—／3.8	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ	N5/0, 3/0	N6/0	1～7mmの砂粒を微量含み緻密。	堅緻	○
77	須恵器／坏身	完形	12.6／—／—／—／—／3.5	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部オサエ、不定ナデ	7.5Y6/1	N7/0	1～5mmの砂粒が微量、緻密。	良好	
78	須恵器／坏身	完形	11.2／13.6／—／—／—／3.6	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	7.5Y7/1	N6/0	1～5mmの砂粒が微量、緻密。	良好	
79	須恵器／坏身	ほぼ完形	11.2／13.3／—／—／—／3.6	切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ	N5/0	N5/0, 4/0	1～5mmの長石、石英、黒雲母が微量、緻密	堅緻	
80	須恵器／坏身	完形	11.5／13.9／—／—／—／3.7	切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	2.5GY6/1	N6/0	1～7mmの砂粒を微量含み緻密。	良好	
81	須恵器／坏身	完形	11.1／13.5／—／—／—／3.8	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	2.5GY5/1	N6/0	1～5mmの砂粒が少量、緻密。	良好	
82	須恵器／ﾊｿｳ	完形	12.3／—／—／—／—／16.0	回転ナデ、カキ目、／回転ナデ	N4/0	2.5GY3/1	1～7mmの砂粒を少量含み緻密。	良好	
83	土師器／ﾐﾆﾁｭｱ土器	完形	6.8／—／4.3／—／—／4.0	指オサエ、ミガキ／ミガキ、回転ナデ	7.5YR7/6	7.5YR7/6	1～3mm程の砂粒が微量、精良。	堅緻	
84	須恵器／甕	肩部破片	—／—／—／—／—／—	擬格子目叩き／—	2.5Y6/1	2.5Y8/4	1～3mm程の砂粒が微量、緻密。	良好	
87	土師器／高坏	脚部	—／—／—／11.8／—／—	ミガキ／板ナデ、ヨコナデ	7.5YR7/6	10YR8/4	精良	良好	

8号地下式横穴墓

88	須恵器／坏蓋	完形	12.9／—／—／—／—／3.0	切離し→ナデ、回転ナデ／回転ヨコナデ→中央部不定ナデ	N7/0, 6/0	N6/0	1～5mmの砂粒を少量含み、緻密。	堅緻	
89	須恵器／坏蓋	完形	12.3／—／—／—／—／3.6	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	10GY6/1	5GY6/1	1～5mmの砂粒を少量含み、緻密。	堅緻	
90	須恵器／坏蓋	完形	13.1／—／—／—／—／3.3	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	N7/0, 6/0	N6/0	1～5mmの砂粒を少量含み、やや粗い。	堅緻	
91	須恵器／坏身	ほぼ完形	11.5／13.4／—／—／—／4.0	回転ヘラケズリ(雑)、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	N7/0	N7/0	1～5mmの砂粒を微量含み、精緻。	軟質	○

9号地下式横穴墓

93	須恵器／坏蓋	ほぼ完形	13.7／—／—／—／—／3.8	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	7.5Y7/1	7.5Y7/1	1～3mm程の砂粒が微量、精緻。	軟質	
94	須恵器／坏蓋	完形	11.9／—／—／—／—／3.6	切離し→ナデ、回転ナデ／回転ヨコナデ→中央部不定ナデ	7.5Y6/1, 4/1	7.5Y7/1	1～5mmの砂粒を微量含み、緻密。	堅緻	
95	須恵器／坏身	1/2	14.3／16.2／—／—／—／4.7	—／回転ナデ	7.5Y8/1	7.5Y8/1	1～5mm程の砂粒が微量、精緻。	軟質	
96	須恵器／坏身	完形	10.1／12.2／—／—／—／3.4	回転ヘラ切離し、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	N6/0	N6/0	1～5mmの長石、石英を微量含み緻密。	堅緻	○

10号地下式横穴墓

97	須恵器／坏蓋	完形	11.9／—／—／—／—／3.6	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	10Y4/1	7.5Y4/1	5mm未満の長石を少量含み精緻。	堅緻	○
98	須恵器／坏身	ほぼ完形	10.8／13.2／—／—／—／4.3	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	2.5Y7/2	5B5/1	1mm程の長石等を含み精緻。	堅緻	
99	須恵器／平瓶	口縁部欠損	—／—／—／—／15.3／—	回転ナデ→カキ目、胴部下位回転ヘラケズリ／回転ナデ	5Y4/1	5Y4/1	5mm以下の長石などを微量含み精緻。	堅緻	

12号地下式横穴墓

100	須恵器／坏蓋	口縁部欠損	12.0／—／—／—／—／4.4	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	5Y7/1	7.5Y7/1	1～2mm程の長石を含み精緻。	軟質	

No.	器種	残存率	法量 口径/受部径/底径/脚裾径/胴部最大径/器高(cm)	調整 外面／内面	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	ヘラ記号
101	須恵器／坏身	ほぼ完形	10.4／12.4／—／—／—／3.3	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	5Y6/1	5PB5/1	4㎜以下の長石を少量含み精緻。	良好	○
102	須恵器／平瓶	口縁部欠損	—／—／—／—／—／—	回転ナデ→カキ目、胴部下位回転ヘラケズリ／回転ナデ	5Y5/1	5Y5/1	7㎜以下の長石や黄褐色粒を含み緻密。	堅緻	
103	土師器／高坏	完形	11.8／—／—／8.6／—／8.85	坏部ヨコナデ、ヨコミガキ、脚部タテナデ、ヨコナデ／ヨコミガキ、回転ナデ	5YR6/6	7.5YR6/6	石英、長石を含み精緻。	良好	

13号地下式横穴墓

104	須恵器／坏蓋	完形	12.3／—／—／—／—／4.1	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	10Y5/1	N5/0	2～3㎜程の長石を含み精緻。	良好	
105	須恵器／坏身	完形	10.6／13.1／—／—／—／3.8	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	7.5Y6/1	5Y5/1	5㎜以下の長石などを含み粗い。	やや軟質	

14号地下式横穴墓

109	須恵器／無蓋高坏	杯部のみ	11.9／—／—／—／—／—	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ	N4/0	N5/0	3㎜以下の長石等を含み精緻。	良好	
110	土師器／鉢	完形	12.6／—／—／—／—／5.6	ヨコナデ、斜めミガキ／ヨコミガキ、不定ミガキ	5YR6/6	5YR6/6	精緻	良好	
111	土師器／坏	完形	12.7／—／—／—／—／4.6	—／—	7.5YR8/4	2.5YR5/6	5㎜以下の灰褐色粒を含み精緻。	やや軟質	○
112	土師器／坏	完形	13.2／—／—／—／—／4.8	—／—	2.5YR5/6	2.5YR6/6	細かな長石、石英を含み精緻。	やや軟質	
113	土師器／坏	完形	13.5／—／—／—／—／5.1	ヨコナデ→ヨコミガキ、不定ミガキ、／ヨコナデ→ヨコミガキ	5YR6/4	2.5YR5/6	1～2㎜程の長石を含み精緻。	良好	
114	土師器／坏	完形	14.9／—／—／—／—／4.85	ヨコナデ→ヨコミガキ、不定ミガキ、／ヨコナデ→ヨコミガキ	7.5YR6/4	7.5YR6/6	2㎜程の長石等を少量含み精緻。	やや軟質	
115	土師器／坏	完形	12.1／—／—／—／—／4.15	ヨコナデ、不定ミガキ、／ヨコナデ、不定ミガキ／外面に線刻あり	5YR6/8	7.5YR7/8	細かな長石、石英を含み精緻。	良好	
116	須恵器／坏身	ほぼ完形	11.1／12.9／—／—／—／3.5	回転ヘラ切離し、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	5Y5/1	5Y6/2	長石等を含み精緻。	良好	
117	須恵器／長頸壺	口縁～頸部	8.4／—／—／—／—／—	回転ナデ／回転ナデ	5Y6/1	7.5Y5/1	長石、黒雲母等微量含み精緻。	良好	
118	須恵器／短頸壺	完形	6.6／—／—／—／10.5／6.55	回転ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ	5Y6/1	5Y6/1	1㎜程の長石を含み精緻。	堅緻	
119	須恵器／大甕	口縁～頸部	20.5／—／—／—／—／—	回転ナデ、擬格子目タタキ→カキ目／回転ナデ、同心円状当て具痕	2.5Y4/1	5YR5/4	細かな長石、石英を含み精緻。	堅緻	

15号地下式横穴墓

121	須恵器／坏蓋	完形	11.8／—／—／—／—／4.0	回転ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	7.5YR5/3	5Y5/2	3㎜以下の長石、石英、灰色粒を含み緻密。	やや不良	○
122	須恵器／坏蓋	ほぼ完形	11.6／—／—／—／—／3.7	回転ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	10Y5/1	10Y5/1	4㎜以下の長石を含み緻密。	良好	
123	須恵器／坏身	ほぼ完形	10.35／12.2／—／—／—／3.6	回転ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	5Y5/1	5Y6/1	2㎜程の長石等を微量含み精緻。	やや不良	
124	須恵器／坏身	ほぼ完形	10.4／12.7／—／—／—／3.75	回転ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	N5/0	N4/0	4㎜以下の長石を少量含み緻密。	堅緻	
125	土師器／甕	ほぼ完形	11.0／—／4.4／—／—／9.9	ヨコナデ、指オサエ、ナデ／ヨコナデ、不定ナデ／底部　木の葉底	10YR7/4	10YR7/4	9㎜未満の赤褐色粒を含み粗い。	やや不良	
126	土師器／高坏	口縁部欠損	19.1／—／—／11.4／—／12.5	ヨコナデ、板ナデ、ミガキ、タテナデ／ミガキ、ヨコナデ	5YR6/6	5YR6/6	4㎜以下の赤褐色粒を少量含み精緻。	良好	

16号地下式横穴墓

128	須恵器／坏蓋	ほぼ完形	12.9／—／—／—／—／3.9	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	7.5Y5/1	10Y5/1	3㎜程の長石を含み精緻。	良好	○
129	須恵器／坏身	ほぼ完形	11.9／—／—／—／—／4.35	回転ヘラ切→ナデ、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	10Y7/1	7.5Y6/1	8㎜以下の長石を含み精緻。	やや不良	
130	土師器／鉢	ほぼ完形	15.8／—／—／—／—／5.7	ヨコミガキ, 回転ナデ／回転ナデ、板ナデ、不定ナデ	5YR6/6	5YR6/6	細かな長石を含み精緻。	良好	
134	須恵器／ﾊｿｳ	体部	—／—／—／—／10.0／—	ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ	7.5Y6/1	7.5Y6/1	1～4㎜程の長石を多く含み粗い。	良好	
135	須恵器／高坏	脚部	—／—／—／—／—／—	回転ナデ／回転ナデ	5Y6/1	10Y6/1	4㎜以下の長石を含み精緻。	堅緻	
136	土師器／高坏	杯部、脚部	—／—／—／—／—／—	坏部ヨコミガキ、脚部タテミガキ／指ナデ	5YR6/6	5YR5/6	精緻	良好	

17号地下式横穴墓

137	須恵器／坏身	完形	10.8／13.0／—／—／—／3.3	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	5Y5/1	7.5Y5/1	3㎜以下の長石を含み粗い。	やや軟質	
138	須恵器／平瓶	口縁部欠損	—／—／—／—／14.6／—	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ	5Y5/1	7.5Y4/2	2～3㎜程の長石、石英を含み精緻。	良好	

No.	器種	残存率	法量 口径/受部径/底径/脚裾径/胴部最大径/器高(cm)	調整 外面／内面	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	ヘラ記号
141	須恵器／坏蓋	完形	11.1／—／—／—／—／3.75	回転ヘラ切、ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ、指オサエ	5Y7/2	2.5Y7/3	精緻	不良	
142	須恵器／坏身	ほぼ完形	10.0／—／—／—／—／4.25	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→不定ナデ	5Y4/1	N4/0	1～2㎜の長石を含み精緻。	堅緻	
143	須恵器／坏蓋	ほぼ完形	11.5／9.65(カエリ部径)／—／—／—／3.0	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→不定ナデ	N5/0	N4/0	4㎜未満の長石を多く含み緻密。	やや軟質	
144	須恵器／坏身	完形	9.6／11.9／—／—／—／3.5	ヘラ切離し、回転ケズリ(雑)／回転ナデ→オサエ、中央部不定ナデ	7.5Y5/1	7.5Y5/1	2㎜程の長石を含み緻密。	良好	○
145	須恵器／坏身	完形	10.6／—／—／—／—／5.1	回転ヘラ切離し→カキ目、回転ナデ／回転ナデ	10YR7/3	10YR7/4	3㎜程の黒褐色粒を含み精緻。	不良	
146	須恵器／坏蓋	1/5	11.8／—／—／—／—／—	回転ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→不定ナデ	10Y5/1	10Y5/1	1㎜程の長石を含み精緻。	堅緻	○
147	須恵器／台付長頸壺	胴部～脚部	—／—／—／13.0／16.4／—	胴部下位回転ヘラケズリ→回転ナデ、回転ナデ／回転ナデ	N7/0	2.5GY6/1	4㎜程の長石を含み精緻	良好	

18号地下式横穴墓

152	土師器／坏	ほぼ完形	13.7／—／—／—／—／4.4	ミガキ／ミガキ	5YR7/8	7.5YR7/6	1～2㎜程の石英、長石を含み緻密。	良好	

1号土壙墓

153	須恵器／坏蓋	完形	12.4／—／—／—／—／4.0	ヘラ切離し→ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→オサエ、中央部不定ナデ	10Y5/1	10Y6/1	7㎜以下の長石や灰白色粒を多く含み粗い。	やや軟質	
154	須恵器／坏身	完形	11.4／13.6／—／—／—／3.9	ヘラ切離し→ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→オサエ、中央部不定ナデ	10Y5/1	7.5Y6/1	6㎜以下の長石を多く含みやや粗い。	良好	
155	須恵器／短脚高坏	完形	12.7／—／—／7.2／—／7.0	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ、オサエ→中央部不定ナデ	5Y7/2	5Y7/1	4㎜程の長石を含むが精緻。	やや軟質	
156	須恵器／長脚高坏	完形	12.9／—／—／—／—／18.3	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→中央部不定ナデ	5Y6/1	7.5Y7/1	7㎜以下の灰色、白色粒を多く含み粗い。	やや不良	
157	土師器／高坏	完形	16.0／—／—／11.8／—／13.4	ヨコミガキ、タテミガキ／不明	5YR6/6	7.5YR7/6	1㎜以下の長石、石英を含み緻密。	良好	

3号土壙墓

162	須恵器／提瓶	底部～胴部1/2	—／—／—／—／—／—	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→不定ナデ	N5/0	5Y6/1	1㎜未満の長石を含み精緻。	良好	

4号土壙墓

164	須恵器／坏身	完形	10.1／11.9／—／—／—／3.8	回転ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→不定ナデ	5Y7/2	5Y7/1	1㎜以下の長石を少量含み精緻。	やや軟質	
165	土師器／鉢	2/3	11.8／—／—／—／—／4.4	板ナデ、不定ケズリ／回転ナデ、ナデ→ミガキ	7.5YR7/6	7.5YR7/4	1㎜程の赤褐色粒、長石と4㎜程の白色粒を含み粗い。	良好	

1号住居跡

166	須恵器／坏身	ほぼ完形	12.3／14.7／—／—／—／4.5	ヘラ切離し→ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→オサエ、中央部不定ナデ	2.5GY7/1	7.5Y6/1	3㎜程の長石を含みやや粗い。	良好	
167	須恵器／坏身	2/5	13.2／15.2／—／—／—／—	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ→不定ナデ	N6/0	N5/0	3㎜以下の長石を多く含みやや粗い。	堅緻	
168	土師器／壷?	底部～胴部1/2	—／—／—／—／—／—	—／板ナデ、オサエ→不定ナデ	10YR8/4	2.5Y6/3	3㎜以下の赤褐色粒、長石と灰色粒を含み粗い。	やや軟質	
169	土師器／甕	口縁～胴部	15.6／—／—／—／—／—	ヨコナデ、板ナデ／ヨコナデ、板ナデ	10YR8/3	2.5Y4/1	8㎜以下の赤褐色、黒色粒、長石を含みやや粗い。	良好	
170	土師器／甕	底部	—／—／7.8／—／—／—	不定ナデ、オサエ／板ナデ、オサエ→不定ナデ／底部　木の葉底	10YR8/3	10YR8/3	5㎜以下の赤褐色、黒色粒を多く含みやや粗い。	良好	
171	土師器／甕	口縁～胴部	14.5／—／—／—／—／—	ヨコナデ、指ナデ／ヨコナデ	10YR7/4	10YR8/3	7㎜程の灰黄褐色粒や4㎜程の長石を含むが精緻。	やや軟質	
172	土師器／甑?	口縁～胴部	23.8／—／—／—／—／—	ヨコナデ／板ナデ	10YR8/4	2.5Y8/3	5㎜以下の赤褐色、黒色粒を含むが精緻。	やや軟質	
173	土師器／甑	底部～胴部	—／—／7.2／—／—／—	指ナデ、板ナデ／指ナデ、板ナデ	7.5YR8/4	10YR7/3	6㎜以下の赤褐色、黒色粒を多く含み粗い。	やや軟質	
174	土師器／甕	口縁～胴部	20.0／—／—／—／—／—	ヨコナデ、不定ナデ／ヨコナデ	7.5YR8/6	10YR8/6	5㎜以下の赤褐色、黒色粒、長石を多く含み粗い。	軟質	
175	土師器／甕	底部～胴部	—／—／10.5／—／—／—	オサエ、ナデ／—／底部　木の葉底	10YR7/4	10YR8/4	7㎜以下の赤褐色、黒色粒、長石を多く含み粗い。	やや軟質	

2号住居跡

176	土師器／埋甕	底部	—／—／—／—／—／—	板ナデ／板ナデ	7.5YR6/8	10YR7/4	6㎜以下の赤褐色粒、石英を含み粗い。	良好	
177	土師器／高坏		20.2／—／—／15.4／—／16.0	ヨコナデ、ミガキ／ヨコナデ	2.5YR6/8	10YR7/4	1～5㎜の砂粒が微量、緻密。	良好	

3号住居跡

178	弥生土器／甕	底部～胴部	—／—／7.0／—／—／—	ヨコナデ、指オサエ、ナデ／ヨコナデ、不定ナデ	10YR8/4	黒	1～5㎜程の長石、赤褐色粒、石英を多く含み粗い。	良好	

No.	器種	残存率	法量	調整	色調		胎土	焼成	ヘラ記号
			口径/受部径/底径/脚裾径/胴部最大径/器高(cm)	外面／内面	外面	内面			
179	土師器／甕	底部	—／—／7.0／—／—／—	—／板ナデ	10YR5/3	2.5Y4/1	1～4㎜程の長石、石英を多く含み粗い。	不良	
180	弥生土器／甕	口縁部	—／—／—／—／—／—	ヨコナデ／ハケ目、ヨコナデ	10YR8/4	10YR8/4	長石、石英を多く含み粗い。	やや軟質	

4・5住居跡

182	弥生土器／壷	頸部～胴部	—／—／—／—／—／—	ヨコナデ、ミガキ／不定ナデ	10YR5/3	10YR7/4	1～4㎜程の長石等を多く含み粗い。	良好	
183	弥生土器／甕	刻目突帯	—／—／—／—／—／—	突帯、ハケ目／ハケ目	10YR8/2	2.5Y7/2	1～3㎜程の長石等を多く含み粗い。	やや不良	
184	弥生土器／壷	胴部	—／—／—／—／—／—	突帯、ハケ目、ヨコナデ／ハケ目、ナデ	10YR7/3	2.5Y3/1	1㎜程の赤褐色粒を多く含み粗い。	やや不良	

2Aグリッド

185	土師器／甕	底部～胴部	6.1／—／—／—／—／—	ミガキ、タテミガキ、板ナデ／板ナデ	10YR8/4	10YR7/4	黒褐色、赤褐色粒が混じり、精良。	良好	
186	土師器／甕	口縁～胴部	16.3／—／—／—／21.2／—	板ナデ／板ナデ	10YR7/4	7.5YR7/6	1～3㎜の赤褐色粒を含み粗い。	良好	
187	土師器／甕	胴部	—／—／—／—／26.6／—	板ナデ／板ナデ	2.5Y7/4	10YR7/4	赤褐色粒、長石を少量含む。	良好	

1Aグリッド

188	須恵器／坏蓋	ほぼ完形	13.2／—／—／—／—／4.0	回転ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ、指オサエ→不定ナデ	2.5Y6/1	5Y6/1	細かな石英や長石を含み精緻。	やや軟質	
189	須恵器／坏身	完形	11.4／14.1／—／—／—／4.1	回転ヘラ切離し、回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ、指オサエ	7.5YR6/1	5YR5/1	1～2㎜の長石、石英を含みやや粗い。	良好	
190	須恵器／坏身	1/8	12.2／14.3／—／—／—／—	回転ヘラケズリ、回転ナデ／回転ナデ、オサエ	5Y6/1	N5/0	2㎜程の長石を多く含みやや粗い。	堅緻	

溝1

191	土師器／皿	3/5	12.7／—／7.0／—／—／3.0	底部回転切離し→ヘラケズリ、回転ヘラケズリ回転ナデ／オサエ→不定ナデ、回転ナデ	10YR7/4	10YR7/4	細かい赤褐色粒を含み精緻。	良好	

溝2

192	須恵器／平瓶	口縁部	7.1／—／—／—／—／—	回転ナデ／回転ナデ	5Y6/1	5Y6/1	1～3㎜の長石を含み精緻。	やや軟質	

その他の出土遺物

鉄製品(cm)

No.	出土地点	名称	現存長	鏃身長／刃部長／幅／頸部長／茎部長
71	5号地下式横穴墓	刀子1　刃部	12.8	—／12.5(残存部)／1.2～2.2／—／—
71	5号地下式横穴墓	刀子2　刃部	6.0	—／5.0(残存部)／2.0／—／—
92	8号地下式横穴墓	腸抉三角形鏃鏃身部	4.6	4.5／—／1.7～3.6／0.9＋α／—
106	13号地下式横穴墓	手鎌？	5.7	5.2(残存部)／2.0～2.3／—／—
107	13号地下式横穴墓	鉄鏃茎部	6.0	—／—／0.8～1.4／—／6.0
127	15号地下式横穴墓	刀子　刃部	7.25	7.0(残存部)／1.4～1.9／—／—
131	16号地下式横穴墓	鉄鏃茎部	6.3	—／—／1.0～2.05／—／—
132	16号地下式横穴墓	方頭鏃鏃身部	6.05	—／2.6／1.0～2.6／—／—
133	16号地下式横穴墓	方頭鏃鏃身部	7.2	—／2.5／0.8～2.5／—／—
139	17-1号地下式横穴墓	三角形鏃鏃身・茎部	5.3	3.6／—／0.8～4.5／1.6／—
148	17-1号地下式横穴墓閉塞部前	方頭鏃鏃身部・茎部	10.1	7.1／3.1／0.45～3.1／—／3.2
149	17-1号地下式横穴墓閉塞部前	方頭鏃鏃身部・茎部	14.0	7.6／3.05／0.9～3.05／—／6.4
150	17-1号地下式横穴墓閉塞部前	刀子・刃部～柄部	9.45	—／6.5／0.9／—／—
151	17-1号地下式横穴墓閉塞部前	刀子・刃部	4.9	—／4.9／0.8／—／—
158	1号土壙墓	圭頭鏃	4.2	3.0／—／3.4／—／—
159	1号土壙墓	方頭鏃鏃身部	7.7	7.0／3.5／1.4～3.5／—／—
160	2号土壙墓	環状鏡板付轡		
161	2号土壙墓	不明鉄器(馬具？)		
164	3号土壙墓	刀子・刃部	5.0	—／4.2／1.1／—／—

耳環(cm)

No.	出土地点	材質	法量
			外径×内径×断面径
34	1号地下式横穴墓	銅芯銀箔張?	2.7×1.35×0.7
41	2号地下式横穴墓	銅芯金箔張	2.9×1.6×0.7
63	4号地下式横穴墓	銅芯金箔張	2.7×1.45×0.8
69	5号地下式横穴墓	銅芯？箔張	3.1×1.8×0.75
70	5号地下式横穴墓	銅芯金箔張	2.9×1.55×0.75
85	7号地下式横穴墓	銅芯銀箔張	3.1×1.7×0.75
86	7号地下式横穴墓	銅芯銀箔張	3.1×1.75×0.8
108	13号地下式横穴墓	銅芯金箔張	3.0×1.6×0.8
120	14号地下式横穴墓	銅芯金箔張	2.45×1.45×0.5
140	17号地下式横穴墓	銅芯銀箔張	3.0×1.55×0.7

第Ⅳ章　調査資料の分析と検討

第１節．堂ヶ嶋第２遺跡の全容

本遺跡より最終的に確認された遺構は、縄文早期の集石遺構２基、弥生時代中～後期の住居跡３軒、古墳時代終末期の消失円墳２基（ともに直径約14mで１基は地下式墓寄生型消失円墳）・地下式横穴墓21基及び土壙墓４基・住居跡２軒、中世の住居跡１軒、近世のピット群などである。

今回、本遺跡で確認された、地下式横穴墓が墳丘構築以降に古墳周溝から穿たれた円墳を地下式墓寄生型円墳と名付けたい（第Ⅲ章第４節）。地下式墓寄生型円墳と呼ぶ円墳は、円墳であることから確実に内部主体が伴わなければならない。また、円墳と地下式横穴墓の築造年代は、ほぼ同時期であったとしても地下式横穴墓が円墳より後でなければならない。つまり、円墳に対して地下式横穴墓が寄生している場合のみ用いることにする。

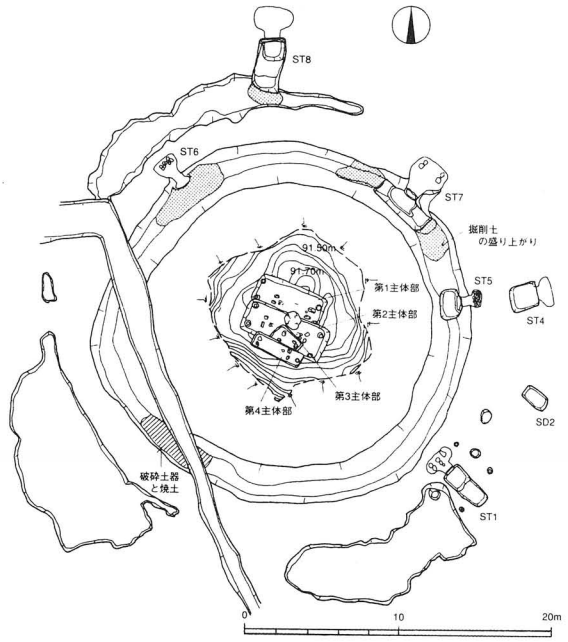


Fig. 108　牛牧１号墳と地下式横穴墓（1/250）
註（６）より転載

墳丘下に玄室を配する地下式横穴墓については古くからとり上げられ、喜田貞吉の寄生説[1]と坪井正五郎の墳丘説[2]が打ち出された。その後、田中茂は県内で確認された同様の例を13例上げ、「墳丘説はまだ仮説にとどまると思われるが・・・」とされながらも墳丘説の立場をとられている[3]。

堂ヶ嶋第２遺跡に確認された地下式墓寄生型円墳は既に墳丘を全て消失していたことから明確にはできないが、築造年代は周溝内の坏蓋から遡ってもTK43型式併行期に対応しよう。前章でも若干ふれたが、この時期の横穴式石室を伴う古墳は、墳丘のほとんどが削平されてたとしても、墳丘下層に腰石を据える掘り方が遺存するはずである[4]。したがって、この円墳は竪穴系埋葬施設を内部主体としていたと思われる。

この円墳と同様の例は、５世紀代では岡崎４号墳[5]（串良町）、６～７世紀代では牛牧１号墳[6]（高鍋町）・祇園原５・20・22・33号墳[7]（新富町）・国分１・２号墳[8]（西都市）などが確認されている。牛牧１号墳からはTK217型式併行期の竪穴系埋葬施設が切り合って４基（木棺直葬）確認された。但し、祇園原と国分に関しては既に墳丘を全て消失していることから地下式墓寄生型円墳とは断定できないが、聞き取り調査や周辺に同規模の円墳が群在していることなどから考え合わせると疑いないであろう。

これとは別に、地下式横穴墓を内部主体とした円墳や墳丘自体が地下式横穴墓の指標となる後背墳丘として築造された場合も考えられる。例えば、西都原111号墳[9]（西都市）、下北方７・８・９号墳[10]（宮崎市）、六野原10号墳[11]、野尻村２号墳[12]（大萩３号地下式横穴墓）、飯野村古墳の小木原古墳[13]・無号[14]（１・３号地下式横穴墓）・４墳[15]（101号地下式横穴墓）、真幸村１号墳[16]（島内１号地下式横穴墓）などがあげられる。

現在、宮崎県教育委員会により調査が行われている西都原111号墳下には４号地下式横穴墓が所在し、墳丘平坦面からは竪穴系埋葬施設と思われる掘り方が確認された。この掘り方上面からは４号地下式横穴墓より下ると比定される須恵器甕が出土しているようであり、内部主体を地下式横穴墓とした円墳に竪穴系

埋葬施設のみが寄生した可能性もある。この円墳には葺石が施されており、墳丘の時期はさほど下らないと予想される。但し、この竪穴系埋葬施設下に地下式横穴墓を遡る内部主体が所在する可能性も残る。

岡崎４号墳の例をみると、５世紀中頃に築造された円墳の周溝が、ある程度堆積した状態で地下式横穴墓の竪坑が穿たれていたとされ、この時期にも地下式墓寄生型円墳はある。したがって、下北方・六野原・大萩・小木原などの地下式横穴墓の築造及び使用年代は５世紀中～６世紀初頭であり、古墳時代終末期の本遺跡などの例よりかかなり時期が上るが、これら地下式横穴墓もまた、墳丘に寄生する可能性はある。但し、墳丘内に内部主体が確認されなかったもの、地下式横穴墓の竪坑が墳丘周溝により一部切られているもの(六野原10号)も存在することから全てを地下式墓寄生型円墳にはし得ないであろう。但し、墳丘下に玄室を配する地下式横穴墓は、周溝や墳裾から竪坑を掘削しており、また、墳丘中心を意識し玄室を墳丘中心側や墳丘中心から放射状に外側へ向け選地していることからも、墳丘と地下式横穴墓は同時か墳丘構築後に地下式横穴墓が寄生的に築造されたかのどちらかに該当するであろう。

現段階で墳丘に関しては各種指定をうけており、大半が調査をされていないことから、今後、調査が進展することにより、これら課題が一層明らかになることを望む。

地下式横穴墓には、単独で所在するタイプ(単独型)、環状構成・直線配置などある一定の規則をもち選地するタイプ[18](集合型)、指標となるような墳丘を有するタイプ(表象型)、既存の周溝を掘削し、墳丘下ないしは墳丘外側に玄室を配し墳丘に寄生するタイプ(寄生型)など選地にも多くのバリエーションがある。

本遺跡の地下式横穴墓はある一定の規則(方位や規模、構造、分布状況など)で築造されており、地下式墓寄生型円墳の周溝に竪坑を穿ち玄室を墳丘中心に向けて築造するタイプが４基(14～17-1号)、周溝から竪坑を掘削し玄室を外側に配するタイプ１基(13号)、単独で所在するタイプ11基(1～8、11・12・18号)、墓道がかなり長大化しそれに玄室が２基ともなうもの(9・10号)、長大な墓道をもち１基の主玄室と３基の小型の玄室を付設する横穴墓と折衷型ともいうべきタイプのもの４基(17-1～17-4号) が確認された。17号は、西都原台地上の酒元ノ上横穴墓群[17]と類似したタイプであり、これに関しては第３節で述べる。

調査区北北東隅には１号消失円墳が所在する。この１号消失円墳も１号地下式墓寄生型円墳とほぼ同時期に築造されたと予想される。但し、この消失円墳には地下式横穴墓が伴わず、地下式横穴墓が伴う高塚墳にも何らかの制約が働いていたと想定できる。

１号地下式墓寄生型消失円墳周溝から掘削されている地下式横穴墓は南から西にかけて４基、北東側に玄室を外に向けた１基が約50°で区画割りされた位置に築造され、選地の方法にも規制があるようである。

本遺跡の地下式横穴墓の築造及び使用年代は、出土遺物からTK209型式併行期～TK217型式古段階併行期頃に比定される。この時期の地下式横穴墓の玄室形態は、以前まで平入り長方形から楕円形に移る過渡期とされてきたがTK209型式併行期以降でも隅がしかりとした長方形プラン(７・８・17-1号)は存続しており、かなり新しい時期まで採用されるようである。

No.	平面プラン	TK209古	TK209新	TK217古	TK217新
2	隅丸長方形				
3	隅丸長方形				
9	隅丸長方形				
7	隅丸長方形				
8	隅丸長方形				
4	楕円形				
16	楕円形				
13	楕円形				
1	楕円形				
10	楕円形				
12	楕円形				
14	楕円形				
17-1	隅丸長方形				
15	楕円形				
17-2	楕円形				
17-3	楕円形				
17-4	楕円形				

Tab. 6　堂ヶ嶋第２遺跡地下式横穴墓の消長表

屍床に関しては、川原石で設けているタイプが多いが、縄文早期の集石遺構の焼石を転用しているもの(８号)や河岸段丘層を利用したもの(12号)もある。これらの違いが、階層差などを繁栄しているものと捉

えることもできるのではなかろうか。

閉塞方法は石か板閉塞と思われ、羨門部外側の床面に閉塞板をはめ込んだと予想される溝も確認されている。また、初葬時には板閉塞を用いるが、追葬時には川原石閉塞へと変化したと想定されるタイプ(2・17-1号)も確認できた。

地下式横穴墓の終焉については、今日まで調査資料が乏しく、あまり理解されていなかった。また、地下式横穴墓と折衷型とされる酒元ノ上横穴墓群がどのようなプロセスを経て誕生するのかは不明であった。今回の調査で、地下式横穴墓の竪坑は時期が下るにつれ降り口側が徐々に倒れていき、それに伴い長大な竪坑となり最終的には羨道ないし墓道ともいうべきものへと移行する。つまり、竪坑は玄室に被葬者を降ろすための穴から葬送儀礼の場としての「道」へと目的を大きく変容させたと思われる。

また、羨門部竪坑側に板閉塞を行った際、板を留める支柱をはめ込んだと予想される柱穴(1・4・8号)なども確認され、当時の人々の死者への意識も想像できる。

また、竪坑を囲むように配されていた柱穴(3・4号周辺)は、当初、竪坑をモガリの場として利用したおりの殯屋的な建物の存在の可能性も予想されたが、地下式横穴墓の竪坑のプランには一致しなかった。したがって、これら柱穴は調査区南側に拡がるピット群と同時期の遺構であると思われる。これらピット群からは陶磁器片や寛永通宝が出土し近世の柱穴と予想される。この柱穴群には近世の掘立柱建物跡ないしは柵列跡等が所在していたと予想されたが、今回は十分な検討できなかったことから割愛させていただいた。これら遺構は東西に長い配置をとるようであり、4号地下式横穴墓竪坑周辺に検出された柱穴も軸を同様にすることから、3・4号周辺の柱穴も近世の掘立柱建物跡の可能性が高い。

また、玄室内に供献された副葬品は、容器以外には鉄鏃や刀子、耳環(同芯金・銀泊張)が数個程度である。今回、玄室内にミニチュア土器が初めて持ち込まれている例(6号)も確認され大変興味深い。

第2節. 堂ヶ嶋第2遺跡出土の須恵器

堂ヶ嶋第2遺跡では、地下式横穴墓から計105点の須恵器が出土した。特に蓋坏H[19]については坏蓋38点、坏身37点が出土した。宮崎県では、古墳時代に遡る須恵器窯跡が発見されていないため、生産地の資料を中心とした在地の編年が組まれておらず、古墳や地下式横穴墓出土資料による編年が主流である[20]。

近年、6世紀末～7世紀代の須恵器編年は各型式の存続幅に地域色が強くみられることが指摘されはじめ、年代観など全国的に見直しが行われている[21]。

このような現状から、県内出土資料による須恵器在地編年は必要であり、遺跡内の出土須恵器を整理、検討するのはその基礎作業となろう。今回は、最も多く出土した蓋坏の分析を行う。

堂ヶ嶋第2遺跡から出土した蓋坏の口径に注目すると、坏蓋、坏身ともに分布域があり製作時の規格や蓋と身のセットなどを推測しやすい。器高との関係は坏蓋に関してはばらつきがあり、坏身に関しては口径が小さくなるにつれ、器高も低くなる傾向にある。本来なら形態的な特徴の他に調整などに注目して蓋坏を分類し考察すべきだが、今回は紙幅の都合もあり、口径の法量分布図に現れた分布域を基準に形態的な特徴を加味してⅣ類に分類した。

Ⅰ類　出土須恵器中では、最も大型の口径と器高を持つ。蓋は口径13.7～14.5cmで5点があり、坏身は口径12.3～14.3cmで6点がある。

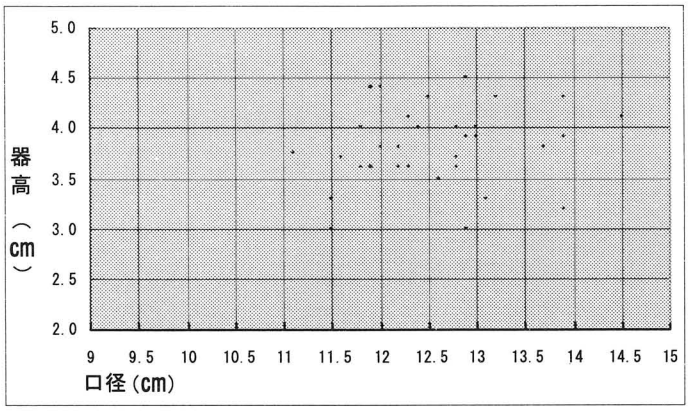


Fig. 109　坏蓋法量分布図

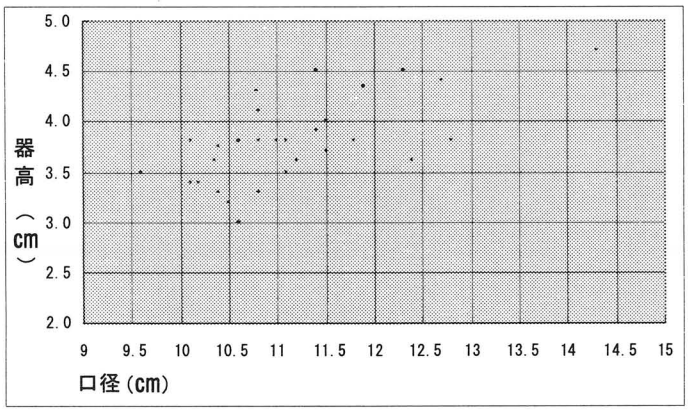


Fig. 110　坏身法量分布図

坏蓋

ＩＡ類　天井部からなだらかに傾斜し、口縁部で角度を変え、端部に至る。口縁は丸く作るものと内側を丸く突出気味につくるものがある。天井部は回転ヘラ切り離し後中心のみ不調整で天井部と体部の境を回転ヘラケズリする。精緻な胎土で焼成はやや軟質である。(48、93)

ＩＢ類　天井部からなだらかに傾斜し、体部との境が不明瞭で、口縁端部に至る。口縁端部は丸く作る。天井部の調整は回転切離し後中心のみ不調整で底部と体部の境を回転ヘラケズリし、胎土は精緻で焼成はやや軟質である。(36、37、47)

坏身

ＩＤ類　底部と体部の境が不明瞭で、受部までゆるやかに立ち上がる。口縁部はほぼ垂直に立ち上がるものと、やや内傾しながら立ち上がるものがある。受部は水平に伸びる。底部調整は回転切離し後中心のみナデで、底部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。胎土がやや粗く焼成が堅緻なものと胎土が精緻で、焼成がやや軟質なものがある。(52、95、166)

ＩＥ類　底部は扁平で、体部との境までヘラケズリが及ぶが、底部との境は比較的明瞭で、受部までゆるやかに立ち上がる。底部調整はヘラ切離し後中心のみ不定ナデし、底部と体部の境に雑なヘラケズリを施す。胎土が精緻で焼成が軟質なものと、緻密で堅緻なものがある。(38、39、167)

Ⅱ類　出土須恵器で最も多い一群である。全体的な特徴はＩ類の矮小化が進んだものであるが器高は維持しているものが多く、蓋は口径12.2～13.5cmの範囲に集中し、坏身は11～12cmの範囲に集中する。

坏蓋

ⅡＡ類　天井部からなだらかに傾斜し、口縁部付近で急に傾斜角度を変え端部に至る。口縁端部は丸く作る。天井部の調整は中心から回転ヘラケズリを施すものと中心はヘラ切離しで天井部と体部の境を中心に回転ヘラケズリを施すものがある。胎土は精緻もしくは緻密で２点のみやや粗いものがある。焼成は良好、堅緻なもので主体を占め、１点のみやや軟質なものがある。蓋でもっとも個体数が多い。(27、35、43、46、73、88、89、104、128、153)

ⅡＢ類　天井部からなだらかに傾斜し、体部との境があいまいでその傾斜のまま口縁端部に至る。口縁端部は丸く作る。天井部の調整は中心より回転ヘラケズリを施す。焼成は堅緻で胎土は緻密である。(75、90)

ⅡＣ類　天井部と体部の境が明瞭で、天井部両端から角度をつけて口縁端部に至る。天井部中心から回転ヘラケズリを施す。口縁端部は丸く作る。胎土はやや粗いものと緻密なものがあり、焼成は堅緻である。(５、42、44、74、76)

坏身

ⅡＤ類　底部から受部にかけての形態はＩＤ類に類似し、口縁部は内傾しながら低く立ち上がるもの、ほぼ垂直に立ち上がるもの、口縁基部は内傾し傾斜を変えて立ち上がり口縁端部を細く仕上げるものがある。底部調整は中心より回転ヘラケズリを施す。胎土は粗いものから緻密なものがあり、焼成も良好、堅緻なものと軟質なものが２点のみある。(31、49、50、51、77、91、154)

ⅡＥ類　底部から受部にかけての形態はＩＥ類に類似し、口縁部は、ⅡＤ類と同じ３形態がある。底部調整は、中心から回転ヘラケズリを施すものと底部と体部の境を回転ヘラケズリするものがある。胎土は緻密で焼成は良好～堅緻である。(40、64、78、79、80、81)

Ⅲ類　Ⅱ類よりも矮小化が進んだ一群で、蓋の口径は12cm前後に集中し、坏身の口径は10.5～11cmの間に集中する。

坏蓋

ⅢＡ類　天井部から体部へかけての形態はＩＡ類に類似し、口縁端部は丸く作るものと内側端部を丸く突出気味に作るものがある。天井部の調整は中心から回転ヘラケズリを施すもの、天井部のみ回転ヘラケズリを施すもの、ヘラ切離し後ナデを施すものの３種がある。(28、29、94、97、100、121、122、146)

ⅢＢ類　天井部～体部へかけての形態はⅡＢ類に類似し、口縁端部は丸く作る。天井部の調整は中心から回転ヘラケズリを施す。(57)

坏身

ⅢＥ類　底部から受部にかけての形態はⅡＥ類に類似し、口縁部は内傾しながら低く立ち上がるものと口縁基部は内傾し傾斜を変え立ち上がるものの２種ある。底部調整は中心から回転ヘラケズリを施す。(30、54、55、58、101、137)

ⅢＦ類　底部と体部の境が明瞭で立ち上がりがやや急傾斜で、口縁は内傾しながら低く立ち上がる。底部調整は中心より回転ヘラケズリを施す。(98、105、116)

Ⅳ類　最も矮小化が進んだ一群で、蓋の口径は11.5cm以下、坏身の口径は9.5～10cm前後に集中し、本遺跡では出土していないが、さらに小型のものもある。出土した蓋坏では、最も個体数が少ない。焼成は堅緻なものが主体を占める。

坏蓋

ⅣＡ類　形態的な特徴はⅢＡ類の矮小化したもので、天井部の調整はヘラ切離し後、雑なヘラケズリを施す。(45、143)

坏身

ⅣＤ類　形態的な特徴はⅡＤ類が矮小化したもので、口縁は内傾しながら低く立ち上がるものとほぼ垂直に立ち上がるものがある。底部調整はヘラ切離し後回転ヘラケズリを施す。(123、124)

ⅣＦ類　形態的な特徴はⅢＦ類が矮小化したもので、底部と体部の境が明瞭である。口縁部は内傾しながら低く立ち上がるものと低く立ち上がり断面三角形を呈すものがある。底部調整は底部のみ回転ヘラ削りを施すものと回転ヘラ切離しのものがある。(96、142、164)

分類してきた各類型を検討すると、Ⅰ類とⅡ類に関しては、地下式横穴墓内における副葬状況においてその前後関係が推測できる。２号地下式、３号地下式、９号地下式玄室内からⅠ類が出土しており、副葬位置はすべて玄室奥壁側の埋葬空間である。特に２号地下式については、前壁側の埋葬空間にⅡ類の蓋坏が、３号地下式についてはⅡ類、Ⅲ類蓋坏が副葬されており、初葬時の埋葬を奥壁側、追葬時に前壁側と

いった玄室内の利用を前提としたらⅠ類→Ⅱ類、Ⅲ類といった前後関係を想定できる。16に関しては例外で一段階古い型式である。Ⅱ類とⅢ類に関しては遺構の出土状況から前後関係を特定できる資料はないが、当該期の須恵器編年研究において指摘される[22]口径、器高の矮小化がみられ、さらにⅣ類への変化を考えてⅡ類→Ⅲ類を想定する。Ⅳ類に関しては17-２号地下式横穴墓において坏蓋Ｇがセットになり副葬されていることから、遺跡内出土蓋坏の最も新しい型式と考えられる。また、ⅣＦ類にみられる底部が狭く、体部との境が比較的明瞭で受部までやや急傾斜で立ち上がる形態は、Ⅰ類やⅡ類には見られない新しい要素である。

また周辺地域で出土している良好な須恵器蓋坏の資料と比較すると、Ⅰ類が常心原５号地下式横穴墓玄室内出土の蓋坏[23]と対応し、Ⅳ類が酒元ノ上横穴墓群1号墓道１－１号墓出土遺物[17]や常心原４号地下式横穴墓出土遺物[24]の型式と対応する。常心原５号地下式横穴墓は竪坑を深く掘削する本格的な地下式横穴墓であり、堂ヶ島第２遺跡の地下式横穴墓群よりも古い形態を呈す。一方、常心原４号地下式横穴墓は、地下式横穴墓の竪坑が横穴墓の影響を受け、墓道状に伸びた地下式横穴墓終末の様相を呈す遺構である。以上のことから、Ⅰ類→Ⅱ類→Ⅲ類→Ⅳ類の編年試案を考えた。また、それぞれの類型を陶邑窯跡群を中心とした編年に対応させると、16が例外でTK43型式まで遡り、Ⅰ類がTK209型式古段階、Ⅱ類がTK209型式新段階、Ⅲ類がTK217型式古段階、Ⅳ類がTK217型式新段階に対応するものと想定している。この作業はあくまで遺跡内の資料を、口径の分布域を中心に分類し、変遷を考えているため検討が不充分な点も多く、特にⅡ類とⅢ類の線引きにはさらに資料が充実した上で型式的な検討が必要である。また型式間の存続幅などは考慮しておらず、今後の課題といえる。

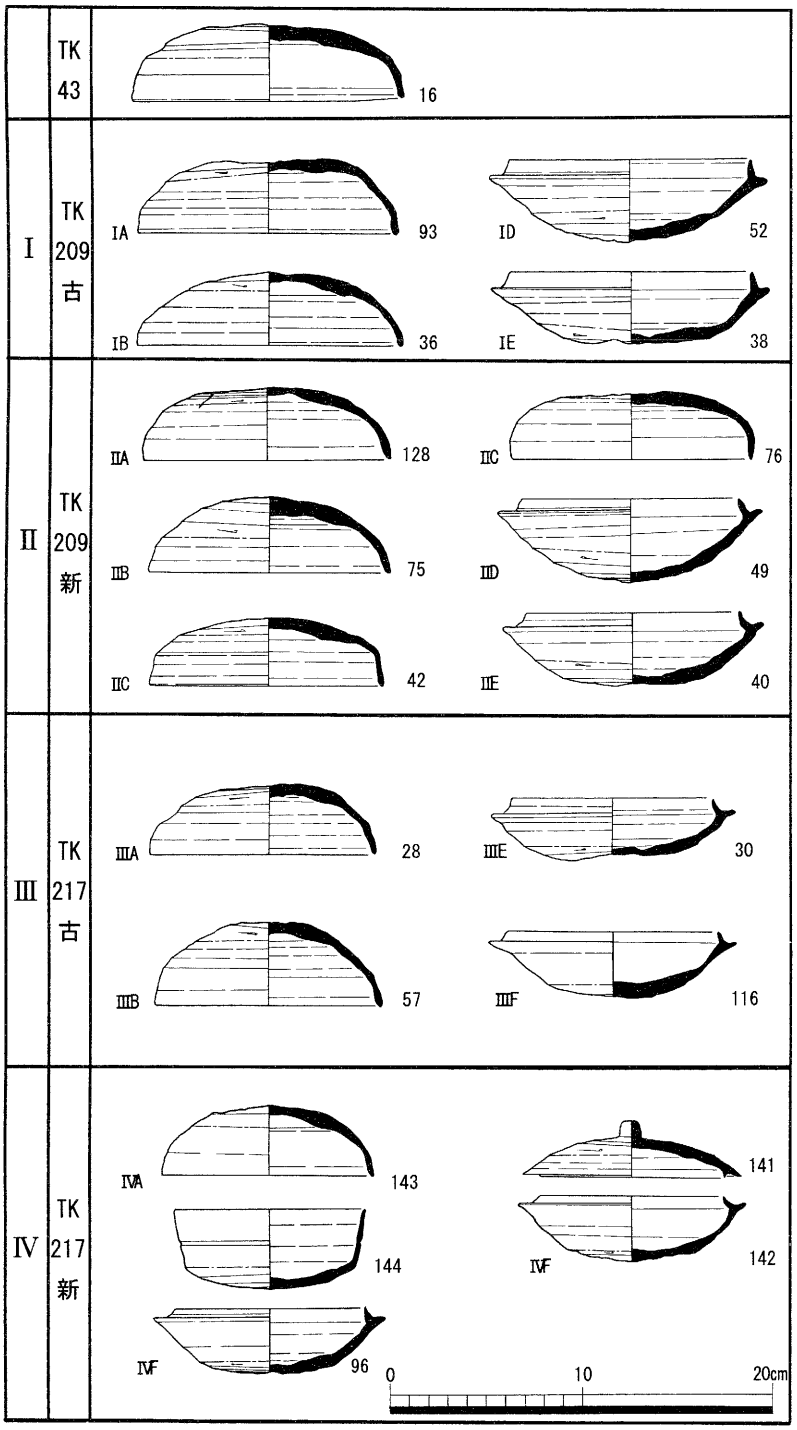


Fig.111　堂ヶ嶋第２遺跡出土須恵器編年試案

第３節．堂ヶ嶋第２遺跡の地下式横穴墓の構造

ここでは、今回、確認された地下式横穴墓を対象に閉塞方法、竪坑構造、屍床構造に着目する。

まず、閉塞方法については、本遺跡内で確認された閉塞法は羨門部に限定されたと思われ、竪坑に石蓋などはかけられておらず、また、粘土塊なども検出されなかった。したがって、羨門部板閉塞ないしは羨門部川原石閉塞である。羨門部板閉塞のものに関しては、板を羨門に立て掛けたのみのタイプと竪坑羨門側に幅20cm程の横方向の溝を掘削し、板をはめ込んだ痕跡が遺存しているタイプもある。板を立て掛けたのみの閉塞は、１・３～５・８・10・11・13・14・16・17-2・17-３である。また、板をはめ込む溝を掘削したタイプは２・６・７・９・17-１・17-４号である。羨門部川原石閉塞に関しては、羨門を石で塞いでいるタイプ(２・12・15・17-１・18号)が基本であり、竪坑に閉塞石が散らばっているようなものは確認できなかった。

溝をもつタイプともたないタイプの差異は、羨門部傾斜角に左右される可能性を予想したが、結果としてはこれに起因しているようではなく、時期差でもない。また、上記したように板閉塞転倒を避ける目的で横木を渡し、板押さえを行った可能性のあるものもある。但し、これらが確実に板押さえとして使用されたかどうかは更なる検討を要する必要がある。また、死者再生を恐れ頑丈に閉塞を行った可能性も示唆される。

次に石閉塞を行っているものは、板閉塞の痕跡を残すものが２・17-1号である。これは、追葬時に板閉塞から石閉塞へと閉塞法を変更したものとみられる。石閉塞への変更の理由は明らかにできないが、可能性として簡易に板を取り除けば追葬ができる板閉塞から密閉感を高めた石閉塞へ移行することは、最終埋葬時の封印的な意味合いも想定できるのではなかろうか。

次に、竪坑の構造について述べる。竪坑は今回、竪坑傾斜角(Fig. ７参照)というものを設定し、竪坑の深さと長さの相関関係を求めた。一般的に地下式横穴墓とされる竪坑は、四壁ともほぼ直に立つ。今回の調査で確認された中には、降口側がかなり倒れており、竪坑自体が長大なタイプや17号地下式横穴墓のように竪坑が6.36mと長く、竪坑というよりも墓道といった方が望ましいタイプもある。これらは竪坑墓道化型地下式横穴墓(３・４・８・10・11・12・17・18)と名付けたい。竪坑墓道化型地下式横穴墓の17号は、西都原台地上に所在する地下式横穴墓と横穴墓の折衷型とされる酒元ノ上横穴墓が大変似通った形状であるが、斜面に穿たれる横穴墓と地下に穿たれる地下式横穴墓と言う定義から考えると両者には形式差がある。

竪坑傾斜角を墳丘に寄生している地下式横穴墓以外でみていくと、TK209型式併行期から竪坑が長くなっていくタイプが出現する。したがって、本遺跡の地下式横穴墓はかなり短期間に竪坑の形状のみでも様々なバリエーションが存在していたようである。そこで、長大な竪坑へと変化していく課程が時期差として捉えられるかを検証する。地下式横穴墓は追葬されるものと初葬のみで使用が終了するものがあることから初葬時と最終埋葬時の２時期を各地下式横穴墓から抽出し検討を行う(Tab. ６・７参照)。築造時期＝初葬時として抽出し分析した場合、竪坑傾斜角は古い時期の方が立ち、新しい時期の方が倒れる傾向にあることが分かる。逆に、使用終了時期＝最終埋葬時として抽出し分析した場合は、各地下式横穴墓の竪坑傾斜角は混在してしまい差が現れない。このことから、竪坑は短いタイプ・長いタイプのいずれを採用するかは築造時には既に決定していた可能性が高い。これに関しては、竪坑墓道化型地下式横穴墓とした地下式横穴墓の竪坑プランをみるに追葬時拡張を行った痕跡が明らかにできないことからも予想される。確かに拡張時に、元のプランを意識して床面や側壁に段が付かないような掘削は可能かもしれないが、そのような必要性はないと思う。例えば、５号は追葬時に竪坑部を拡張したと思われるが明確な段差が認められる。

９号は９・10号竪坑とした長大な竪坑主軸に対して直角に交わり、羨門手前に1.8×1.8m程の不整形で

深さが20cm程の窪みがあり、玄室内の遺物もTK209型式古段階併行期であることから、単独で掘削されていた竪坑が10号を構築する際に改変されたと思われる。また、９号の右側壁羨門側から出土した遺物は、10号の遺物より１段階新しく、この埋葬時にはこの長大な竪坑を共有していたと思われる。また、17号に関しては、玄室内の遺物をみるとTK217型式新段階に比定されるが、玄室内がかなり荒らされていること、また、羨門部から土器片や鉄鏃・刀子などの鉄製品が出土したことから、玄室内の掻き出しが行われている可能性が高い。したがって、17-１号の築造年代はTK217型式新段階を遡る可能性もある。17号の竪坑には左側壁側に17-２・17-３号が、右側壁側には17-４号が築造されている。これら地下式横穴墓の時期はTK217型式新段階に比定され、17-１号を遡らない。17-１号と17-２～４号の関係については理解に苦しむが、玄室内に埋葬されていた被葬者を追葬時に出し、これら小規模な地下式横穴墓に改葬したか、17-1号に埋葬された人物の子供などを埋葬した小児墓的なものであろうと思われる。但し、これに関しては今回の調査では明らかにできなかった。

	TK209古	TK209新	TK217古	TK217新
２号	33			
９号	32			
３号	16			
１号		29		
４号		20		
８号		21		
７号		18		
12号			16	
10号			10	
平均角	27	22	13	

Tab. 7　地下式横穴墓初葬時と竪坑傾斜角

	TK209古	TK209新	TK217古	TK217新
２号	33			
９号	32			
３号	16			
１号		29		
４号		20		
８号		21		
７号		18		
12号			16	
10号			10	
平均角	27	22	13	

Tab. 8　地下式横穴墓最終埋葬時と竪坑傾斜角

次に屍床構造についてであるが、屍床はまず丁寧に川原石を敷いたタイプと雑に川原石を敷いたタイプ、また、屍床をもたない３タイプに大別できる。その中で、玄室羨門側に大きめの川原石を横１列ないしは玄室側に弧を描くように配し、それと玄室の中を小振りの川原石で充填する区画型（２～４・９・13・15・16号）、羨門側に列状に並べる列石型（１号）、中央部のみに屍床を設ける部分型（10・14・17）、無屍床型（５～７・11・12・18号）どに細別できる。また、区画型の中でも小振りな川原石の代わりに縄文時代の集石遺構の石を転用した転用型（８号）などもある。

屍床が丁寧に敷かれたタイプは使用時期が短期間で、雑なものは複数の時期に跨るようである。つまり、時期的な差異ではなく、追葬時の掻き出しや片付けを行うことにより、玄室内が荒らされたと解釈できる。

地下式横穴墓の竪坑は、埋葬の度に埋め戻されたと考えるのが、今までの通例であった。今回、竪坑墓道化型やそれ以外のタイプの竪坑を半裁し土層堆積状況を検討した結果、追葬痕跡を明らかにできたものは５号地下式横穴墓のみである。但し、４号地下式横穴墓の土層を観察すると竪坑埋土は流込みの可能性が高い。その理由としては、降口側から羨門に向かい流込みが確認されること、また、埋土の土質が他の地下式横穴墓と異なりブロック（土塊）などをあまり含まず、粒子が細かいことなどがあげられる。そう考えると竪坑は最終埋葬時には埋め戻される場合が多いが、竪坑が長大なものに関しては板閉塞を行い封がなされている程度であり、竪坑は開け放たれていたものも存在していたと予想される。墳丘に寄生する地下式横穴墓は周溝を墓道として利用した可能性が高く、各地下式横穴墓竪坑の埋土を観察しても周溝床面の高さまでは、アカホヤブロックやアカホヤ下層黒褐色ブロックが含まれた土で埋め戻されていることが予想されるが、上層になるに連れ周溝に自然堆積した流土で覆われていることが分かる。特に、16号に関しては、周溝の床面が竪坑東側になると竪坑の床面と同一レベルになることから、西側から東側にかけて周溝にスロープを付けるような状態で埋め戻されている可能性が高い。また、17号については、6.36mの長大な竪坑を埋め戻す労力を考慮しても、開け放たれた状態であったと思われる。17号の竪坑は羨門部から約２～3.8mで人為的に埋め戻された痕跡も確認されるが、全体的にはレンズ状堆積をなす。

第４節．地下式横穴墓の変遷課程と終焉

ここでは、先学の研究で行われてきた地下式横穴墓の変遷課程について考察し、地下式横穴墓の終焉について考えてみたい。

地下式横穴墓は現在までに数多く言及されてきた。その中で地下式横穴墓の誕生は、えびの市辺りの宮崎県でも内陸部に４世紀末から５世紀初頭に誕生した横口土壙墓が祖型だとされる[26]。これは、玄室内に土器供献が行われていないことから鉄鏃や周辺から出土した土器型式をもとに時期比定が行われた。これに続くタイプは、正方形プランの高田原１号[27]や西都原４号・六野原8・10・34号・下北方５号などが位置するであろう。高田原１号は玄室内にTK208型式併行期を遡る可能性もあるハソウが副葬されていた。また、西都原４号・六野原8・10・34号・下北方５号は妻入り長方形プラン有屍床タイプで玄室長が５ｍを越える規模を有している。これに続くタイプは、本庄地下式横穴墓群10・14・33号地下式横穴墓（旧宗仙寺８[28]・12・地蔵寺１号[29]）等の玄室平面形が縦長隅丸三角形プランが予想される。これらには、容器供献が認められないことから築造及び使用年代は詳細にできないが、５世紀後半頃に比定される。６世紀代になると平入りの平面形へと変化し、玄室は平入り長方形プラン・隅丸長方形プラン・楕円形プラン・不正形楕円形プランなどが誕生する。中でも古いタイプは、隅が角張った長方形に近いとされる。また、６世紀も終末になると、墳丘中には埋葬されない上位階層の墓から家族墓へと変化し、その結果、大量生産ともいうべき爆発的な増築が始まる。玄室平面形や竪坑の構築技法は頻雑化され、玄室平面プランは楕円形や歪な楕円形、竪坑は方形ないしは長方形プランで深さも深く丁寧に築かれていたものから浅く歪な形状の簡易なものへと変化する。

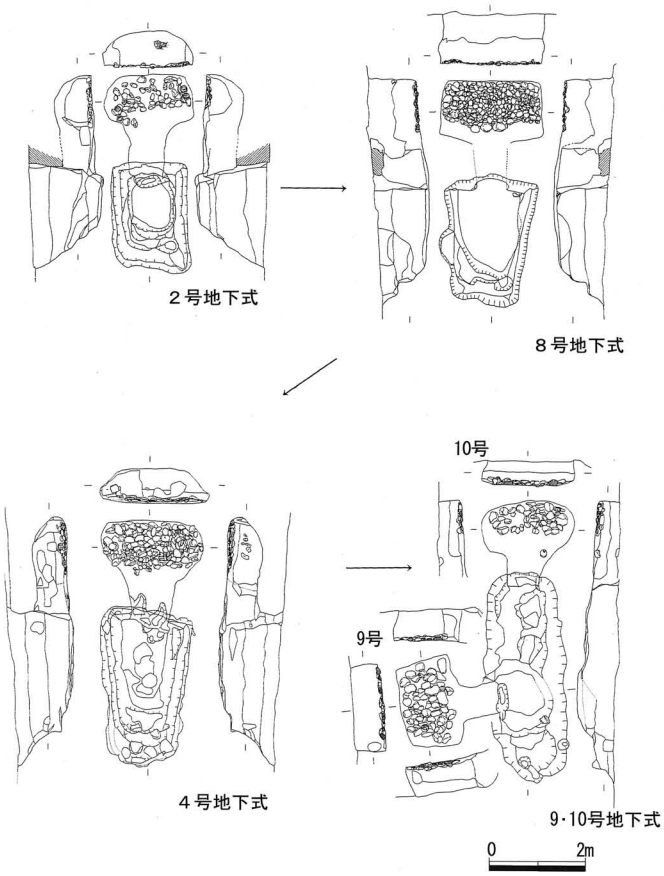


Fig. 112　堂ヶ嶋第２遺跡地下式横穴墓変遷推定図

No.	平面プラン	竪坑傾斜角	平均角
２号	隅丸長方形	33	25.0
９号	隅丸長方形	32	
５号	隅丸長方形	30	
８号	隅丸長方形	21	
７号	隅丸長方形	18	
３号	隅丸長方形	16	
１号	楕円形	29	19.0
４号	楕円形	20	
６号	楕円形	20	
12号	楕円形	16	
11号	楕円形	15	
18号	楕円形	9	
10号	楕円形	8	

Tab. ９　地下式横穴墓平面プランと竪坑傾斜角

今回、堂ヶ嶋第２遺跡で確認された地下式横穴墓は、６世紀末から７世紀中頃の短期間に竪坑の意味が、「被葬者を玄室内へ入れるために上から下に降ろす坑」から「追葬を行うにあたり墓前祭祀・追善供養などを行う道」へと変化していく過程を示す。生目地下式横穴墓群[30]（宮崎市）や崩先地下式横穴墓群[31]（日南市）などは竪坑が短く、旧来の形状のまま終焉を迎える例と推定され、横穴式石室や横穴墓の墓道の影響を大きくうけた地域が現在、地下式横穴墓の北限である県央の西都・児湯地域周辺であったと思われ

る。したがって、６世紀末から７世紀初頭の時期に豊前・豊後地域からの影響を受けたであろう地下式横穴墓の横穴墓化と在地型の地下式横穴墓を踏襲する地域が存在したと思われる。

このような過程を経て古墳築造が終焉を迎え、地下式横穴墓の造営も終焉を迎えたのであろう。

（第Ⅳ章註及び参考文献）

(1) 喜田貞吉『日向国史』上巻　1929

(2) 坪井正五郎「日向の古物遺跡」『史学雑誌』第十編第六号　1899

(3) 田中茂「えびの市小木原地下式横穴３号出土品について－地下式横穴と墳丘－」『宮崎県総合博物館研究紀要』第二輯　1974

(4) 筌瀬明宏「古墳墓壙構築過程の歴史的意義－筑前地域を中心に－」『福岡大学大学院論集』第28巻第２号　1997

(5) 串良町教育委員会「岡崎４号墳・１号地下式横穴」『串良町文化財調査報告書』(1)　1986

(6) 宮崎県埋蔵文化財センター「平成13年度　東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第64集　2002

(7) 宮崎県教育委員会「祇園原地区遺跡」『県営農村基盤整備パイロット事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　1996

(8) 筌瀬明宏「国分遺跡（国分地下式横穴墓群）発掘調査」『宮崎考古学会例会　発表資料』　2001.9

(9) 日高正晴「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』第43巻4号（日本考古学会）　1958

(10) 野間重孝「宮崎市下北方古墳群をめぐって－古墳周辺調査を中心として－」『宮崎考古学第二回研究発表会発表要旨』　1982

(11) 瀬之口傳九郎ほか「六野原古墳調査報告」『史蹟名称天然記念物調査報告』第13輯　1944

(12) 北郷泰道「大萩地下式横穴墓群」『宮崎県文化財調査報告書』第27集　1984

(13) 日高正晴「小木原古墳・地下式Ａ号墳」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1)　1972

(14) 石川恒太郎「西諸県郡飯野町大字上江小木原の地下式古墳調査報告書」『宮崎県文化財調査報告書』第11集　1966

(15) 石川恒太郎「えびの市小木原地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第15集　1970

(16) 瀬口傳九郎「日向の聖地伝説と史蹟」　宮崎県　1934

(17) 宮崎県・西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集　1996

(18) 北郷泰道「南境の民の墓制」『えとのす』第32号　新日本教育図書　1986

(19) 本稿で用いる須恵器坏Ｈ・Ｇの記号は奈良国立文化財研究所の用例にしたがう。

(20) 宮崎県内出土資料による須恵器編年の研究は、福尾雅彦「宮崎県内出土の須恵器」『古文化談叢６』1979、や長津宗重「井水地下式横穴墓群　市の瀬地下式横穴墓群　上ノ原地下式横穴墓群」『国富町文化財調査資料』第４集　1985　などがある。

(21) 『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東５　７世紀の土器－』古代の土器研究会等　1997

(22) 田辺昭三『陶邑古窯跡群』Ⅰ平安学園考古クラブ1966・『須恵器大成』角川書店1981、中村浩『和泉陶邑窯の研究』1981など

(23) 津曲大祐「外原遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第34集　西都市教育委員会　2003

(24) 西都市教育委員会『西都原古墳研究所年報』第18号所収　2002

(25) 本稿で用いた編年観は、田辺昭三1981を基本に、増田一裕「飛鳥時代須恵器の編年にかかる追試作業」『土曜考古』第19号　土曜考古学会　1995を参考にした。

(26) 中野和浩「小木原遺跡群　蕨・久見迫・地主原地区」『えびの市埋蔵文化財調査報告書」第４集　えびの市教育委員会　1989

(27) 面高哲郎・北郷泰道・管付和樹『国富町文化財調査資料』第２集　国富町教育委員会　1982

(28) 石川恒太郎「国富町本庄地下式二二号古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第14集　宮崎県教育委員会　1979

(29) 長津宗重「国富町遺跡詳細分布調査報告書」『国富町文化財調査資料』第３集　国富町教育委員会　1984

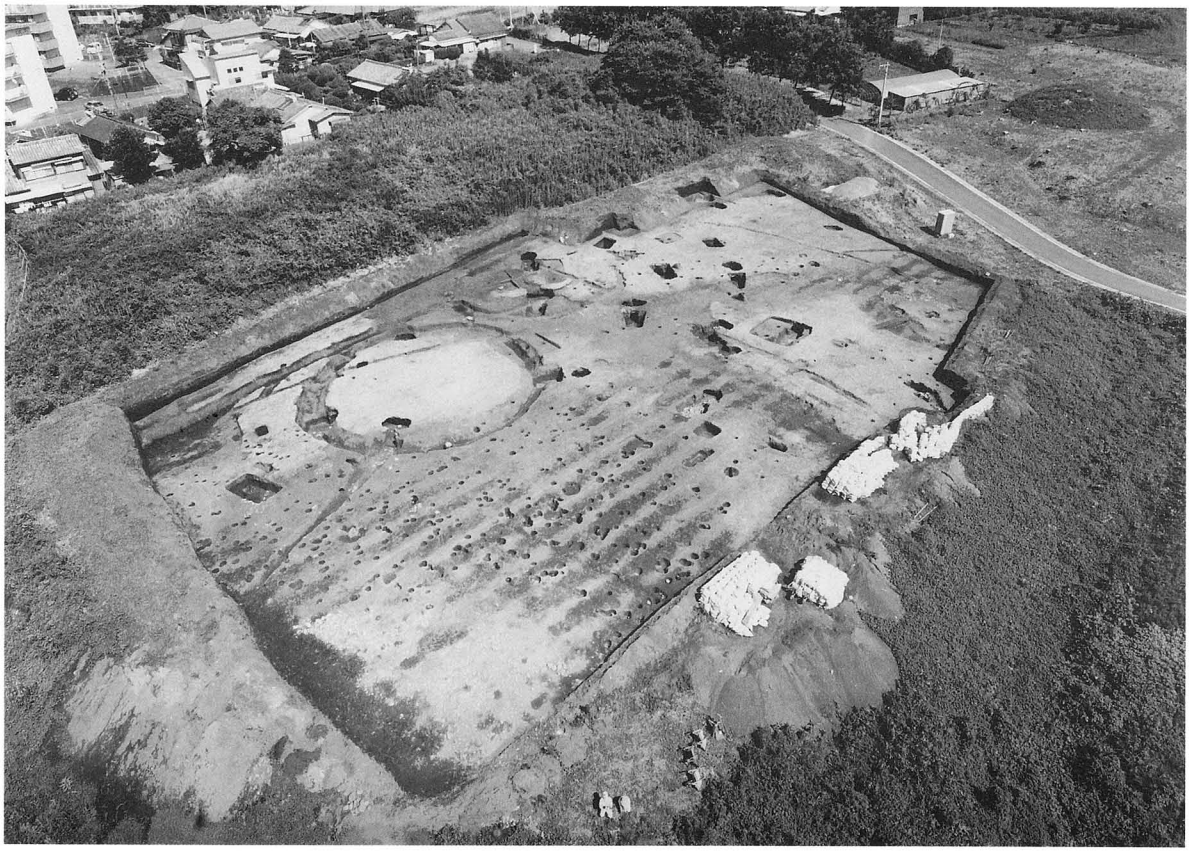
(30) 宮崎市教育委員会「生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書」『宮崎市文化財調査報告書』　1996

(31) 石川悦雄『崩先地下式横穴群』　宮崎県教育委員会　1993

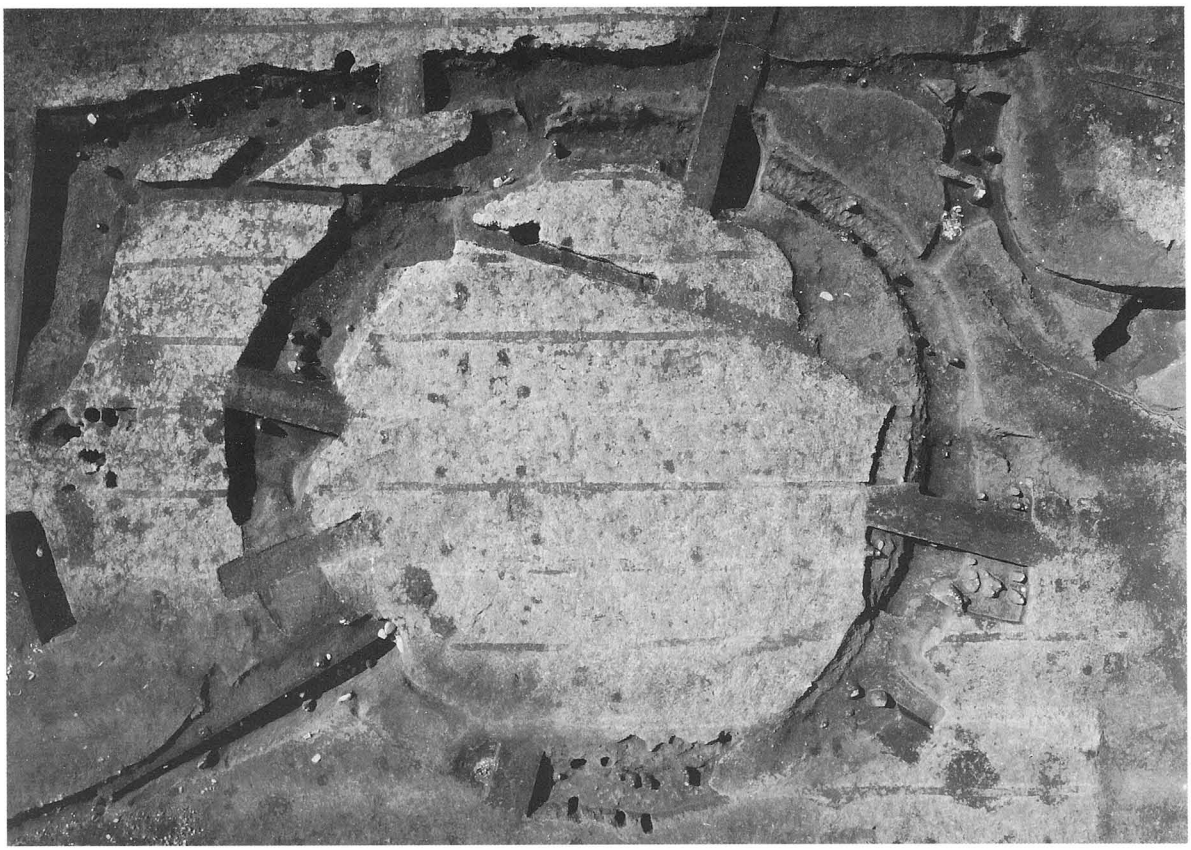
図　　版

(PLATES)

１．堂ヶ嶋第２遺跡全景と周辺



２．堂ヶ嶋第２遺跡全景



３．１号地下式墓寄生型消失円墳掘削状況

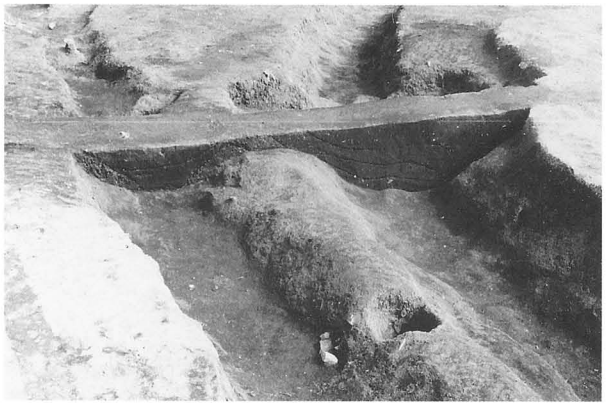
４．１号地下式墓寄生型消失円墳完掘状況

5．１号地下式墓寄生型消失円墳(検出状況)

6．１号地下式墓寄生型消失円墳周溝北東側土層断面

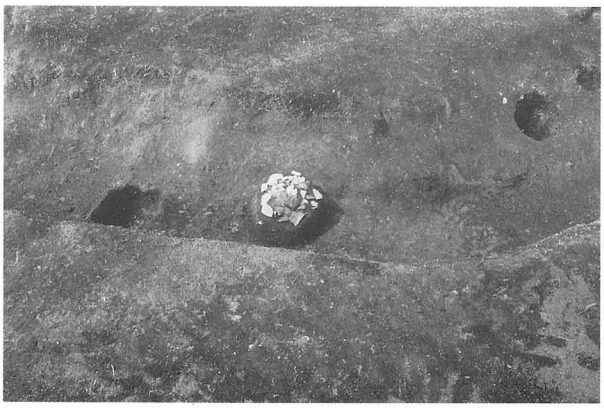
7．１号地下式墓寄生型消失円墳周溝南東側土層断面

8．１号地下式墓寄生型消失円墳周溝南東側土層断面



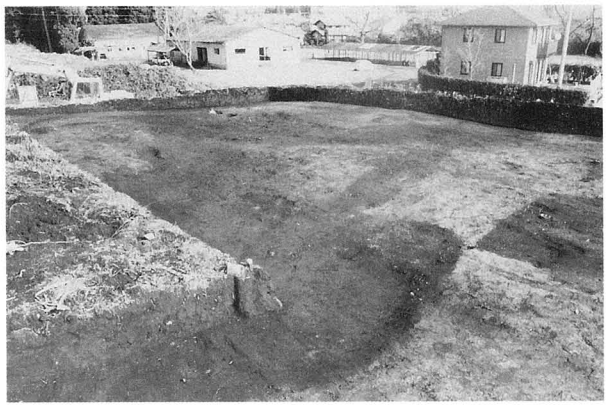
9．１号地下式墓寄生型消失円墳周溝北西側土層断面

10．１号地下式墓寄生型消失円墳周溝北西側須恵器破砕甕



11．１号地下式墓寄生型消失円墳周溝南東側土師器破砕甕

12．１号地下式墓寄生型消失円墳周溝南東側土師器破砕甕

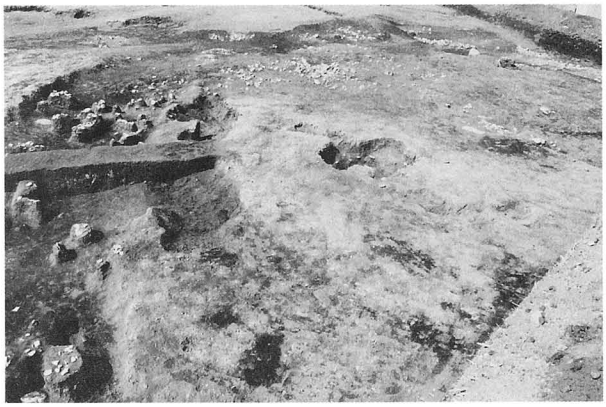


13. 1号消失円墳検出状況

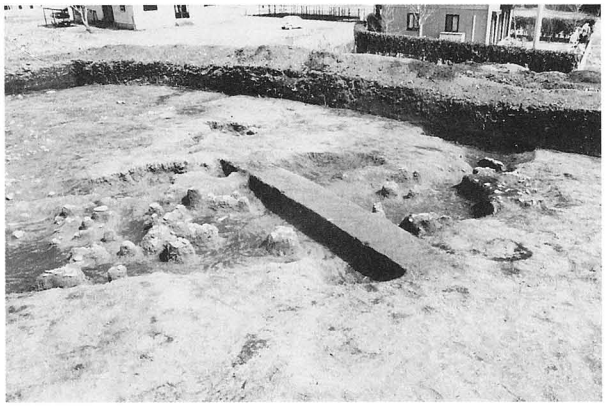
14. 1号消失円墳検出状況

15. 1号消失円墳検出状況

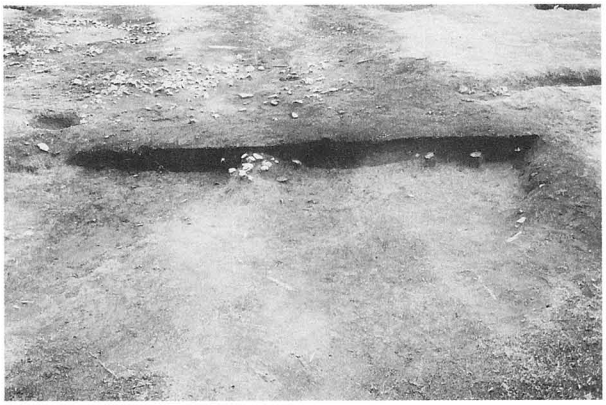
16. 1号消失円墳掘削状況



17. 1号消失円墳遺物出土状況



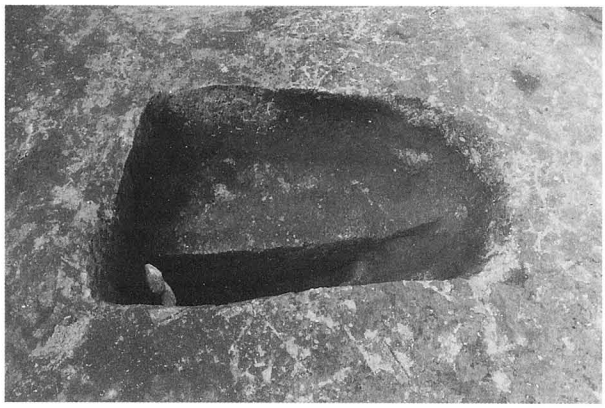
18. 1号消失円墳遺物出土状況



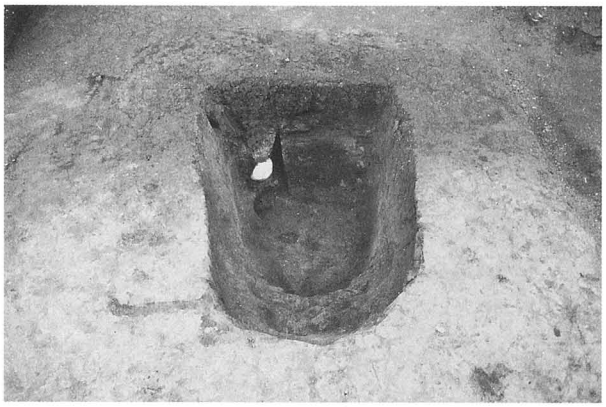
19. 1号消失円墳周溝南側土層断面

20. 1号消失円墳周溝西側土層断面

21. 1号地下式横穴墓玄室上検出状況



22. 1号地下式横穴墓竪坑半裁状況

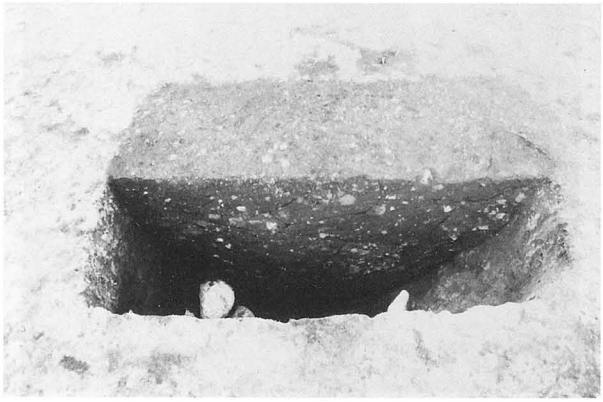


23. 1号地下式横穴墓竪坑完掘状況

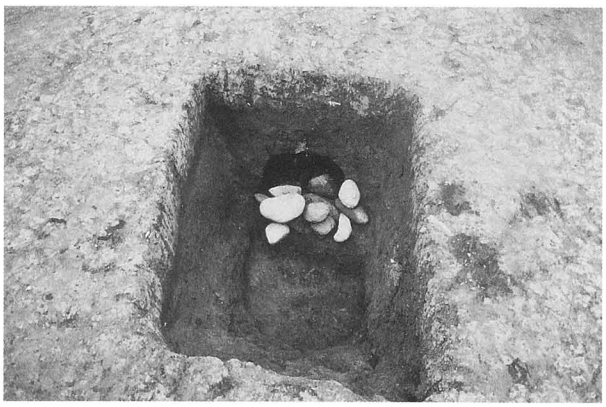
24. 1号地下式横穴墓完掘状況

25. 1号地下式横穴墓遺物出土状況

26. 1号地下式横穴墓遺物出土状況



27. 2号地下式横穴墓竪坑半裁状況

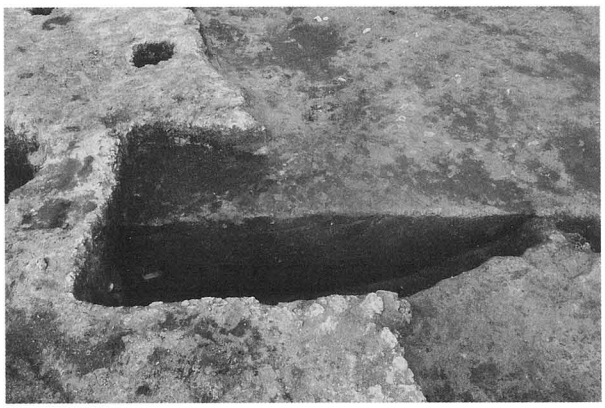


28. 2号地下式横穴墓閉塞状況

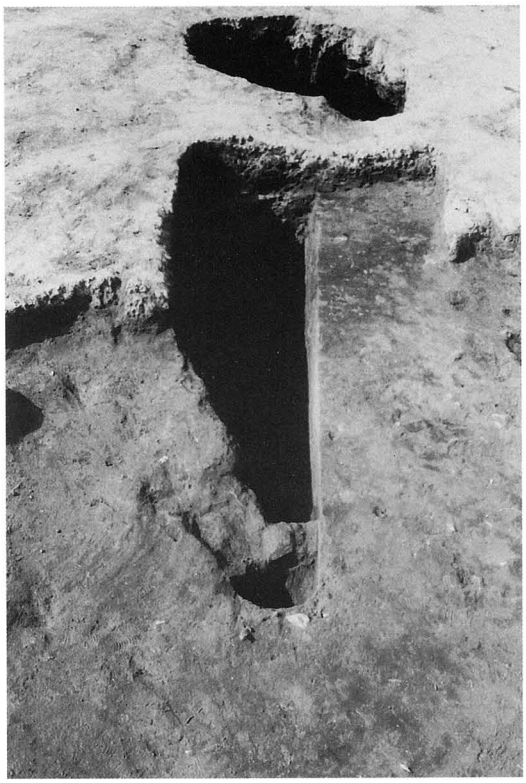
29.　２号地下式横穴墓竪坑完掘状況

30.　２号地下式横穴墓竪坑完掘状況

31.　２号地下式横穴墓(羨門から玄室を望む)

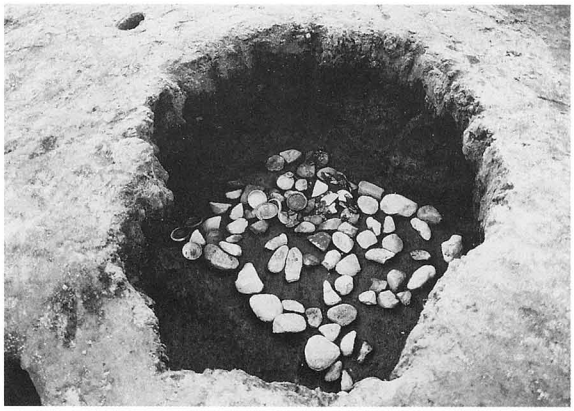


32.　３号地下式横穴墓竪坑半裁状況

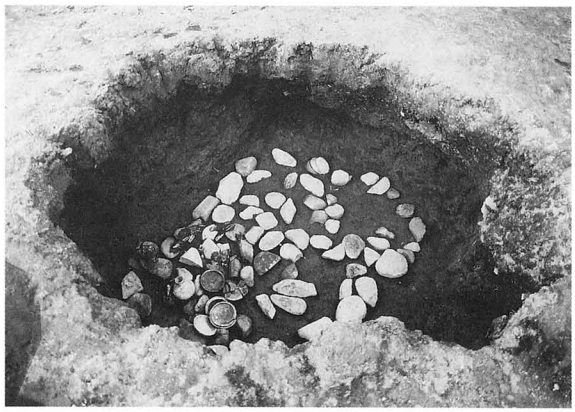


33.　３号地下式横穴墓竪坑半裁状況

34.　３号地下式横穴墓完掘状況

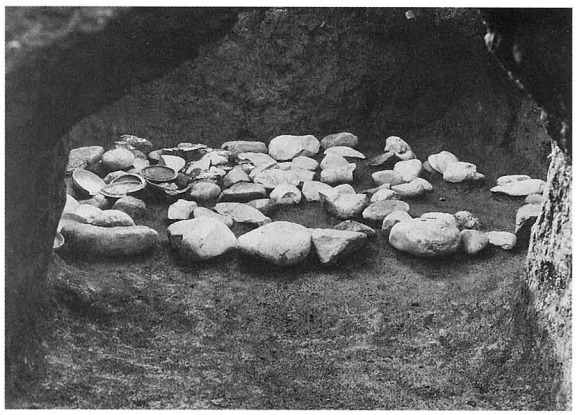


35. 3号地下式横穴墓遺物出土状況



36. 3号地下式横穴墓遺物出土状況

37. 3号地下式横穴墓(竪坑から玄室を望む)

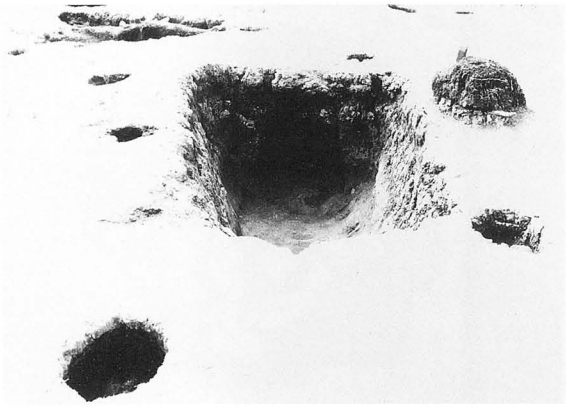


38. 3号地下式横穴墓(羨門から玄室を望む)

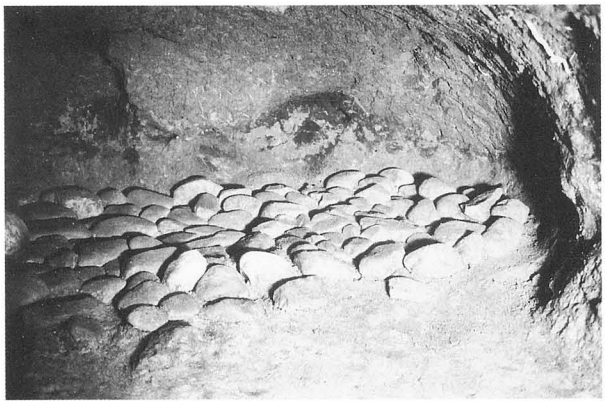
39. 4号地下式横穴墓竪坑半裁状況

40. 4号地下式横穴墓竪坑遺物出土状況

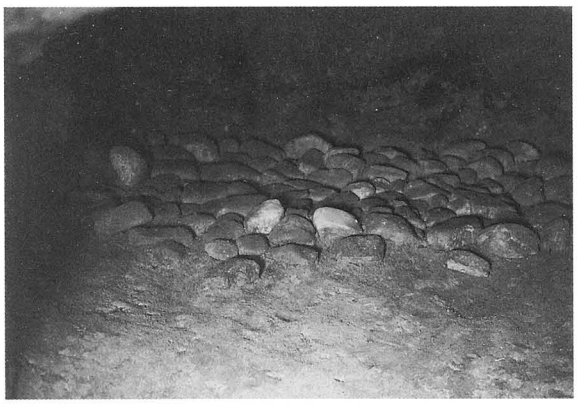
41. 4号地下式横穴墓竪坑土層断面



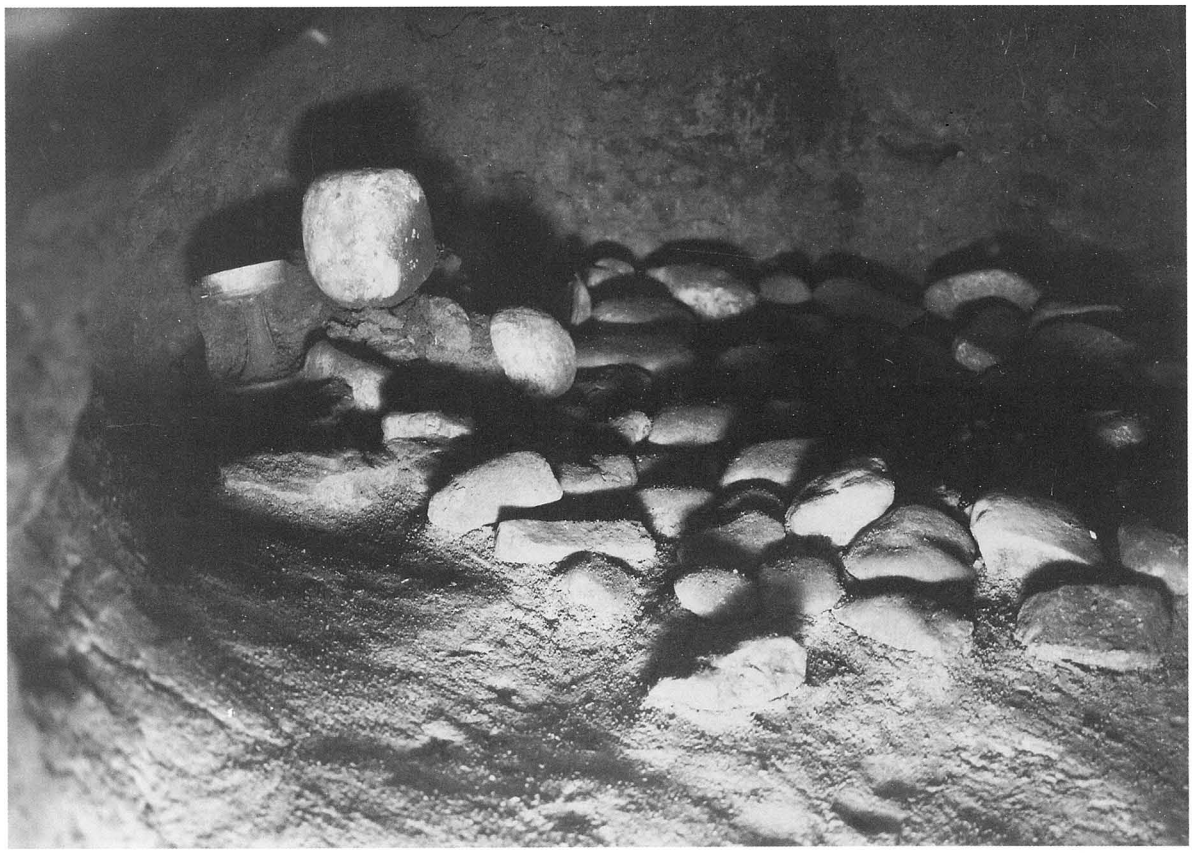
42. 4号地下式横穴墓竪坑完掘状況



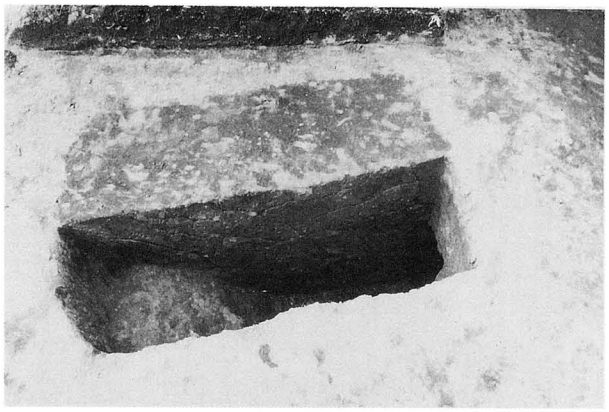
43. 4号地下式横穴墓遺物出土状況(右側壁側)



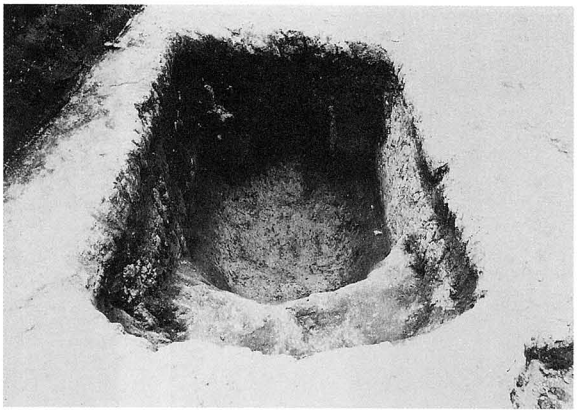
44. 4号地下式横穴墓遺物出土状況(中央)



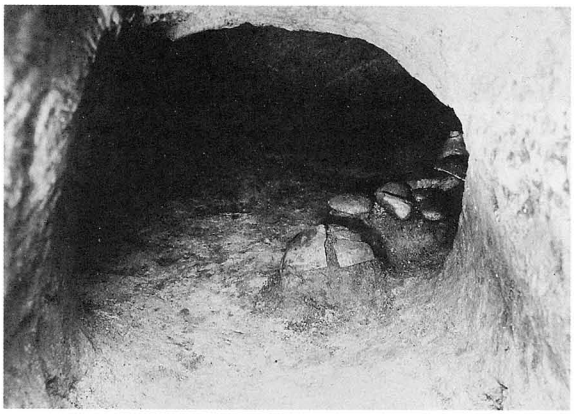
45. 4号地下式横穴墓遺物出土状況(左側壁側)



46. 5号地下式横穴墓竪坑半裁状況

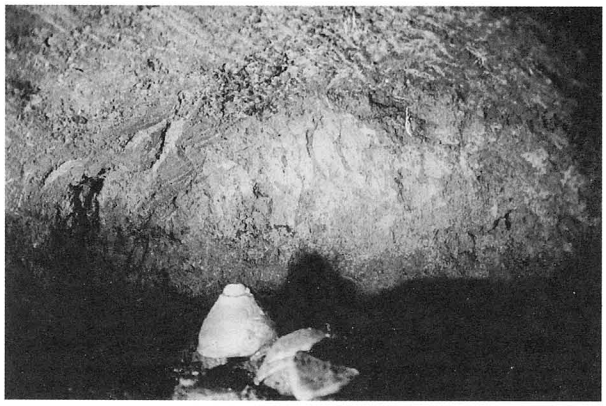


47. 5号地下式横穴墓竪坑完掘状況



48. 5号地下式横穴墓遺物出土状況

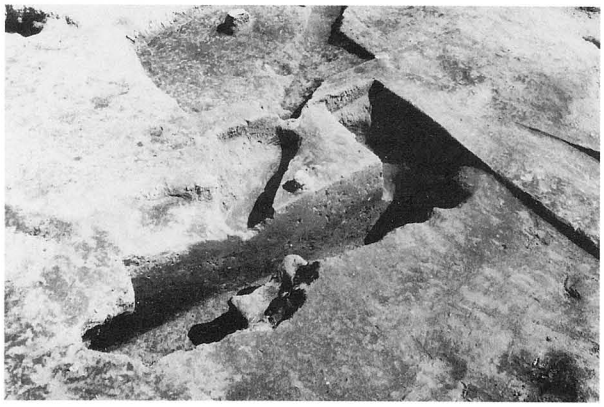
49. 5号地下式横穴墓鑿痕跡(右側壁側)



50. 5号地下式横穴墓鑿痕跡(左側壁側)

51. 5号地下式横穴墓鑿痕跡(左側壁側)

52. 6号地下式横穴墓半裁状況



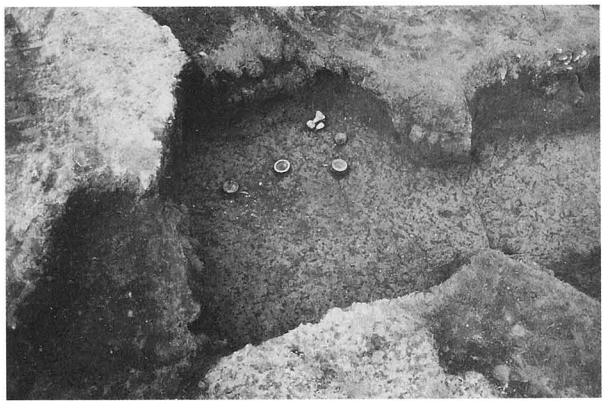
53. 6号地下式横穴墓半裁状況

54. 6号地下式横穴墓完掘状況

55. 6号地下式横穴墓遺物出土状況

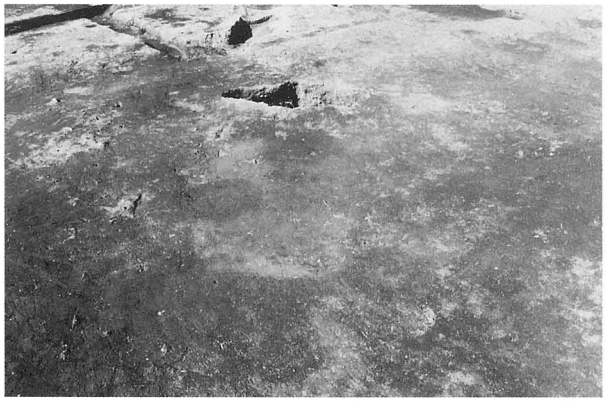
56. 7号地下式横穴墓遺物出土状況

57. 7号地下式横穴墓遺物出土状況

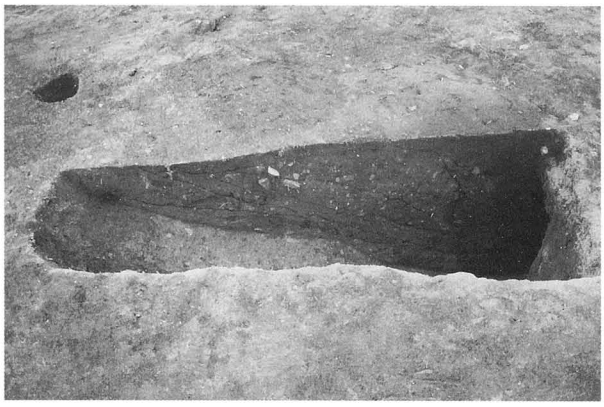


58. 7号地下式横穴墓遺物出土状況(右側壁側)

59. 7号地下式横穴墓完掘状況



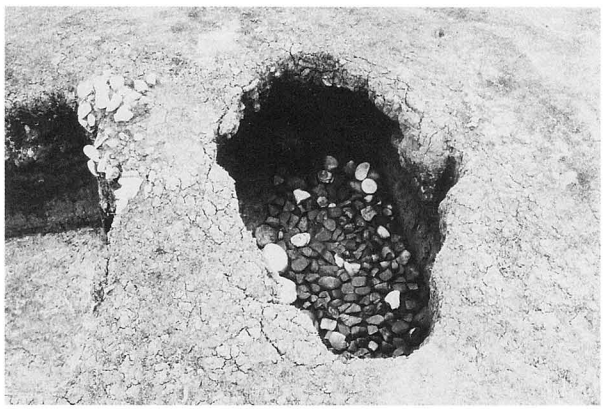
60. 8号地下式横穴墓検出状況



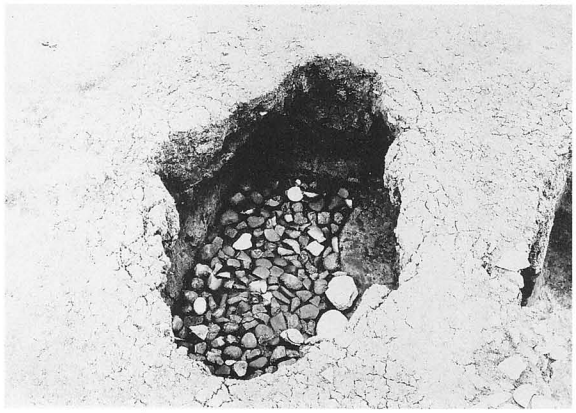
61. 8号地下式横穴墓竪坑土層断面

62. 8号地下式横穴墓竪坑土層断面

63. 8号地下式横穴墓(竪坑から玄室を望む)



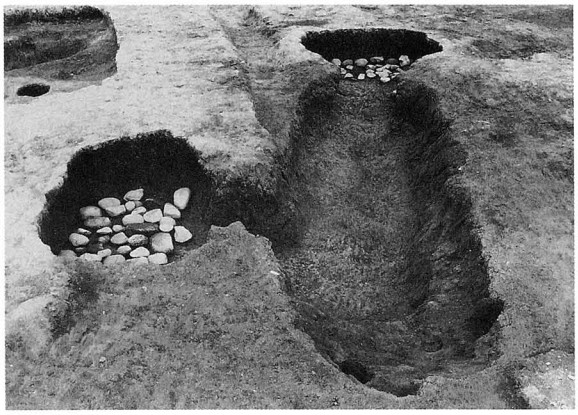
64. 8号地下式横穴墓玄室内状況



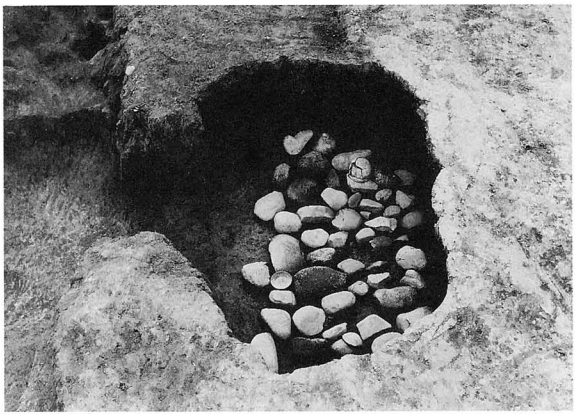
65. 8号地下式横穴墓玄室内状況

66. 8号地下式横穴墓完掘状況

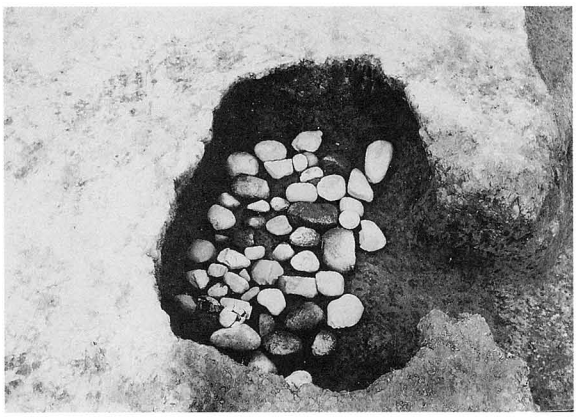
67. 9号地下式横穴墓玄室内土層堆積状況



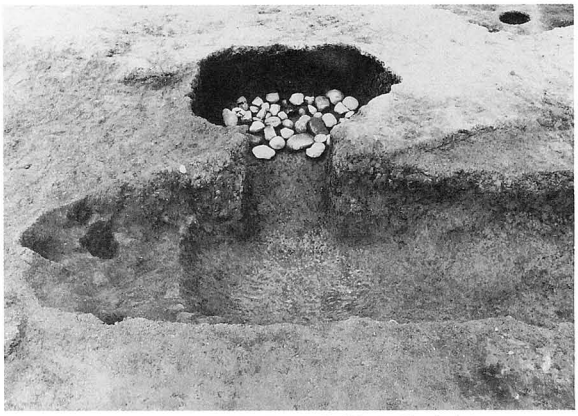
68. 9・10号地下式横穴墓全景



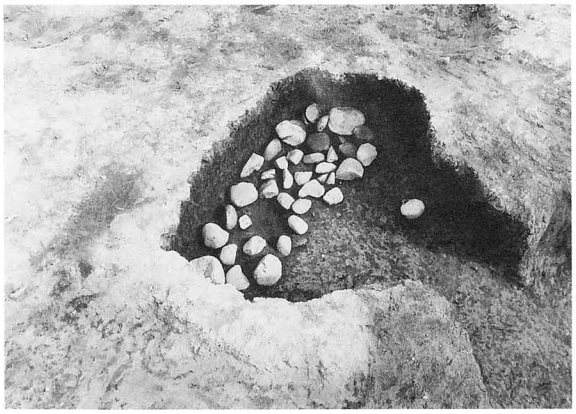
69. 9号地下式横穴墓玄室内状況(左側壁側)



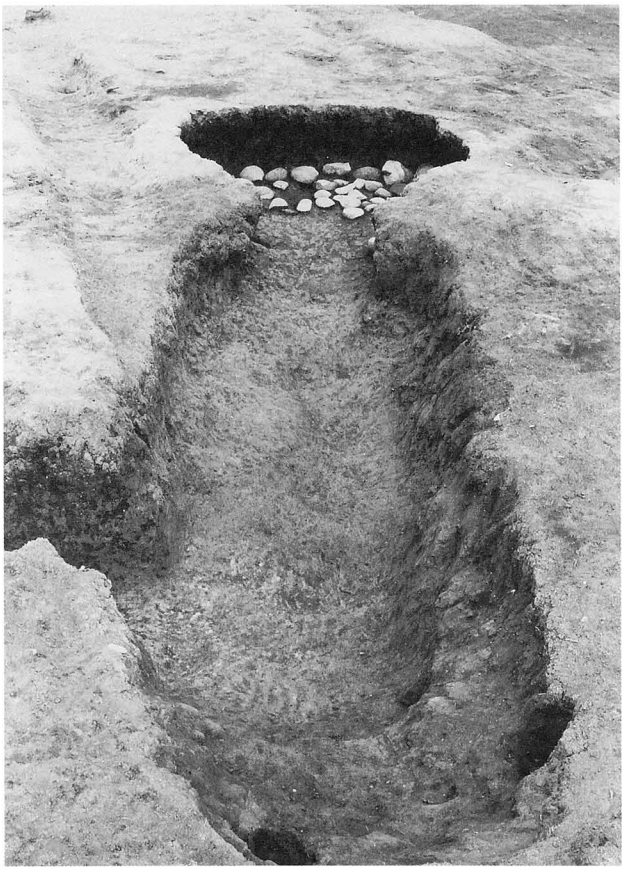
70. 9号地下式横穴墓玄室内状況(右側壁側)



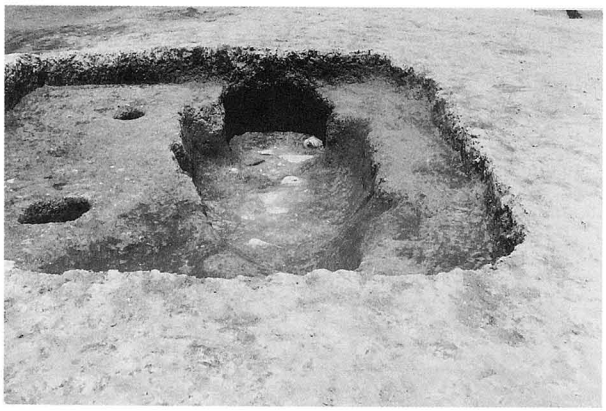
71. 9号地下式横穴墓全景



72. 10号地下式横穴墓玄室内状況(右側壁側)

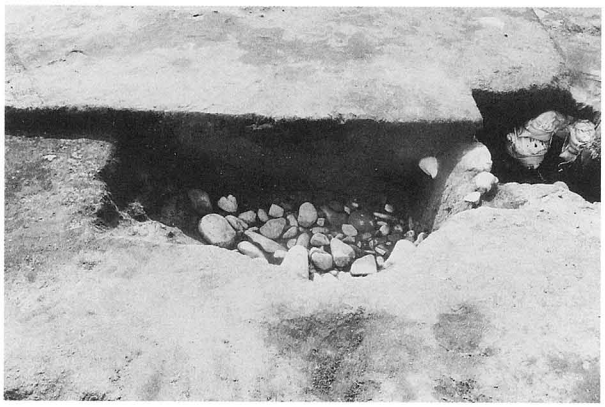


73. 10号地下式横穴墓全景

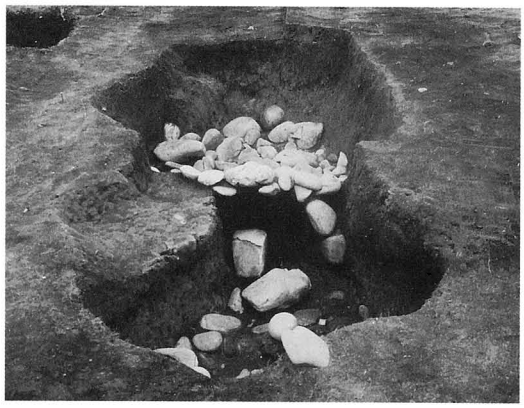


74. 11号地下式横穴墓全景

75. 11号地下式横穴墓全景

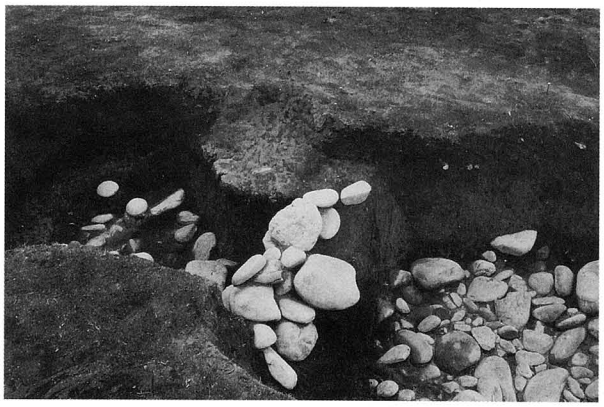


76. 12号地下式横穴墓竪坑土層断面

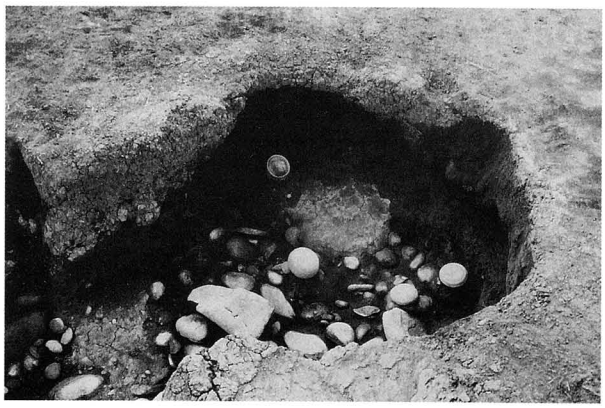


77. 12号地下式横穴墓閉塞状況

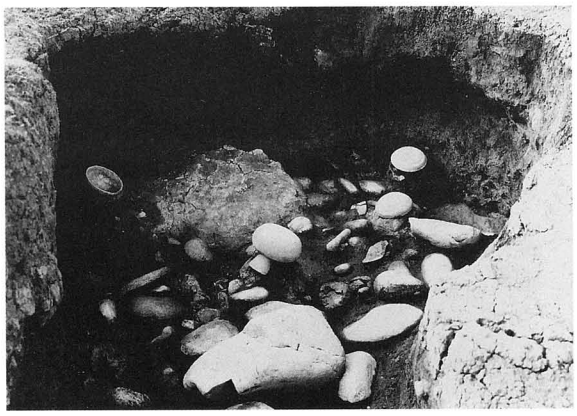
78. 12号地下式横穴墓閉塞状況



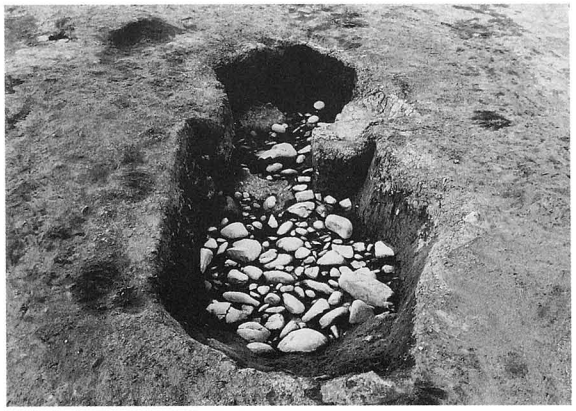
79. 12号地下式横穴墓閉塞状況



80. 12号地下式横穴墓玄室内状況



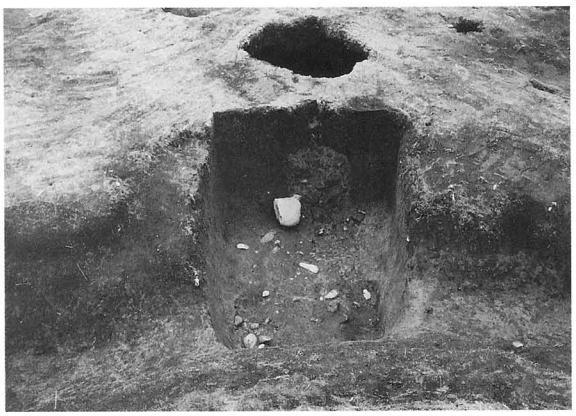
81. 12号地下式横穴墓遺物出土状況



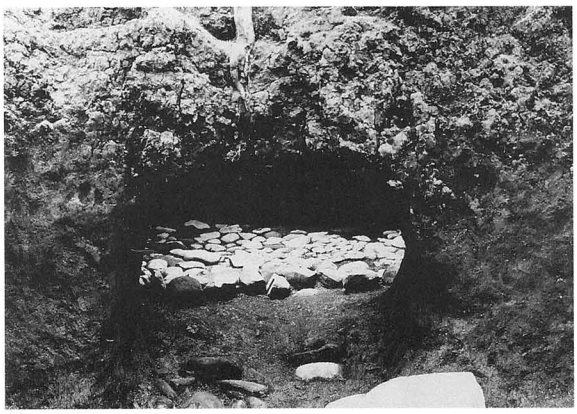
82. 12号地下式横穴墓完掘状況

83. 13号地下式横穴墓竪坑掘削状況

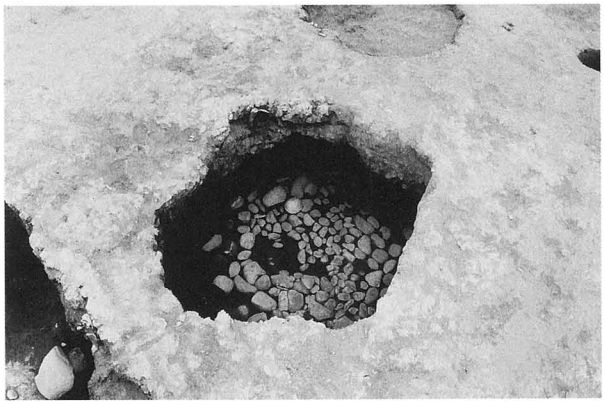
84. 13号地下式横穴墓竪坑半裁状況



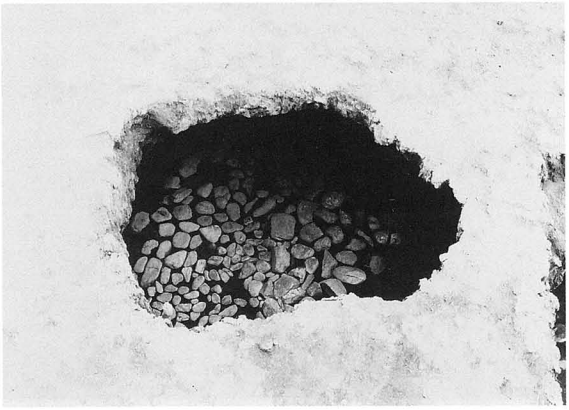
85. 13号地下式横穴墓全景



86. 13号地下式横穴墓(羨門から玄室を望む)

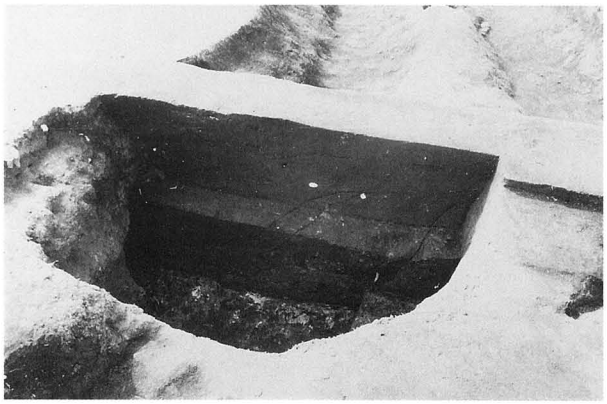


87. 13号地下式横穴墓玄室内状況(左側壁側)

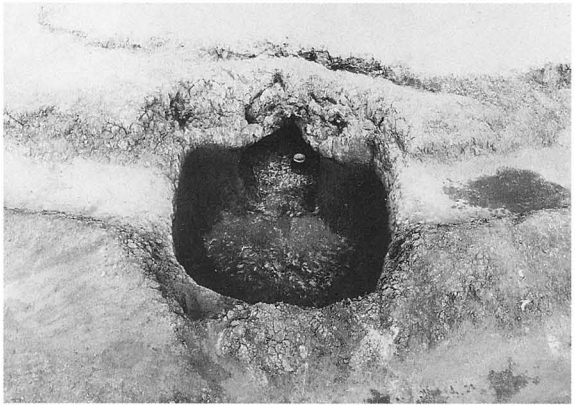


88. 13号地下式横穴墓玄室内状況(右側壁側)

89. 14号地下式横穴墓竪坑掘削状況

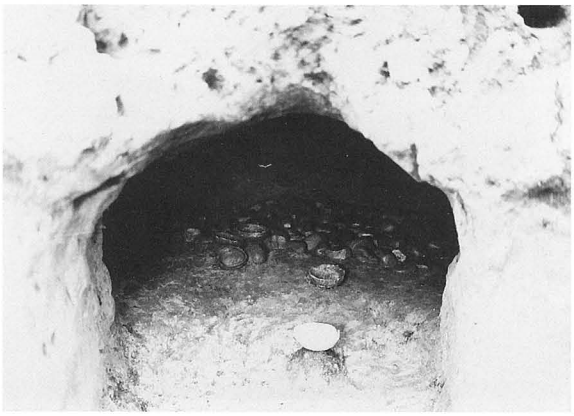


90. 14号地下式横穴墓竪坑半裁状況



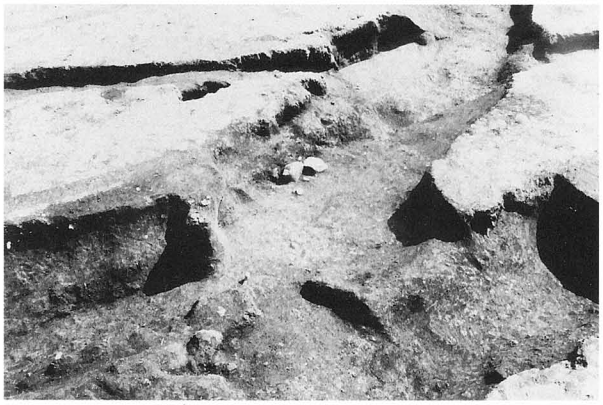
91. 14号地下式横穴墓竪坑完掘状況

92. 14号地下式横穴墓粘土層半裁状況

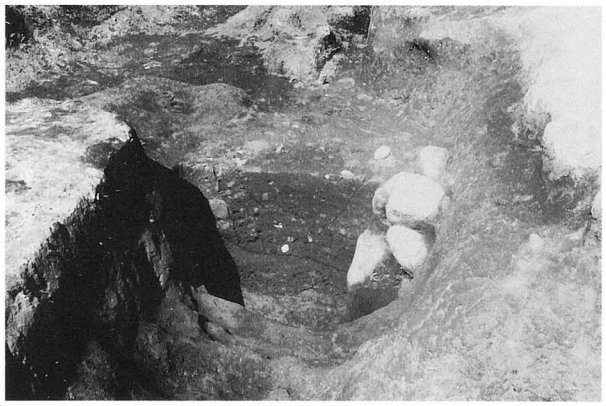


93. 14号地下式横穴墓(羨門から玄室を望む)

94. 14号地下式横穴墓玄室内状況

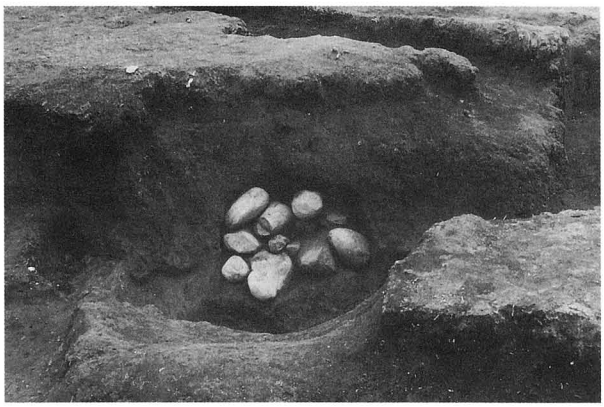


95. 15号地下式横穴墓検出状況



96. 15号地下式横穴墓竪坑土層断面

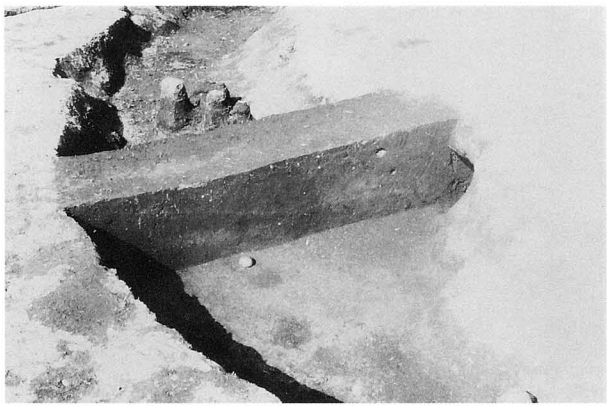
97. 15号地下式横穴墓閉塞状況



98. 15号地下式横穴墓閉塞表面除去後

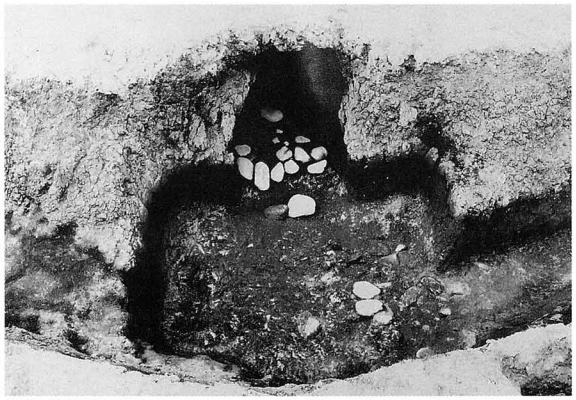
99. 15号地下式横穴墓完掘状況

100. 15号地下式横穴墓玄室内状況

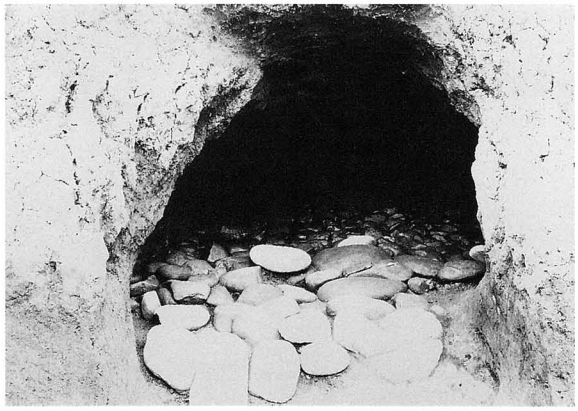


101. 16号地下式横穴墓検出状況

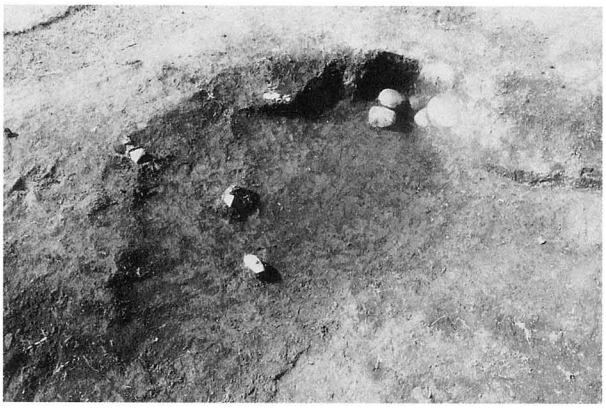
102. 16号地下式横穴墓竪坑土層断面



103. 16号地下式横穴墓竪坑全景

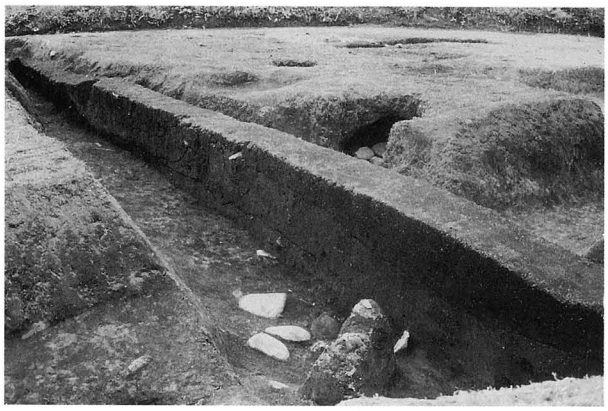


104. 16号地下式横穴墓(羨門から玄室を望む)



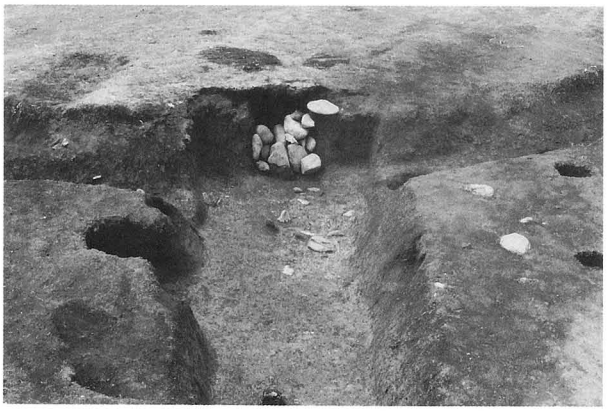
105. 17号地下式横穴墓検出状況

106. 17号地下式横穴墓竪坑半裁状況

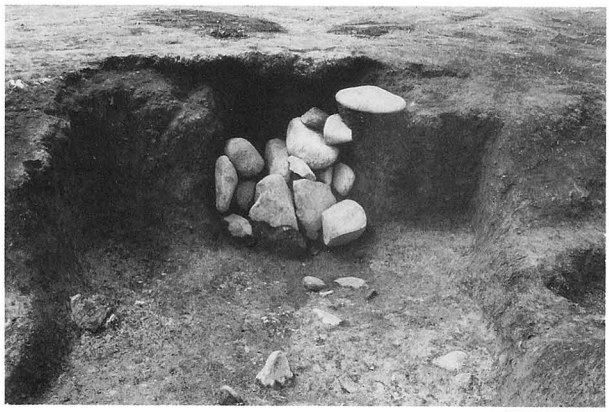


107. 17号地下式横穴墓竪坑土層断面

108. 17号地下式横穴墓閉塞前遺物出土状況

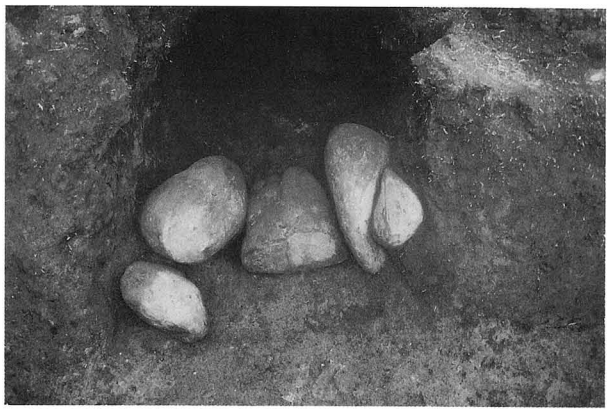


109. 17号地下式横穴墓竪坑完掘状況

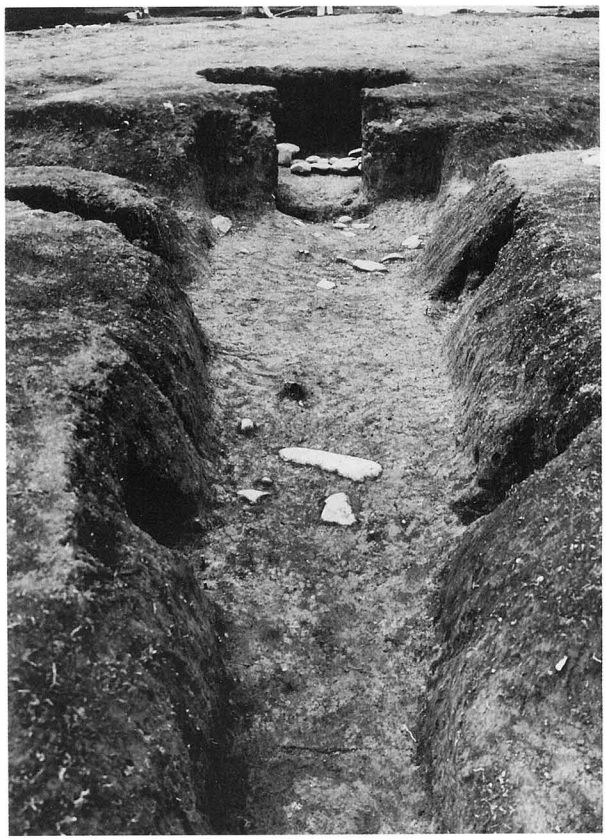


110. 17号地下式横穴墓閉塞状況

111. 17号地下式横穴墓閉塞状況

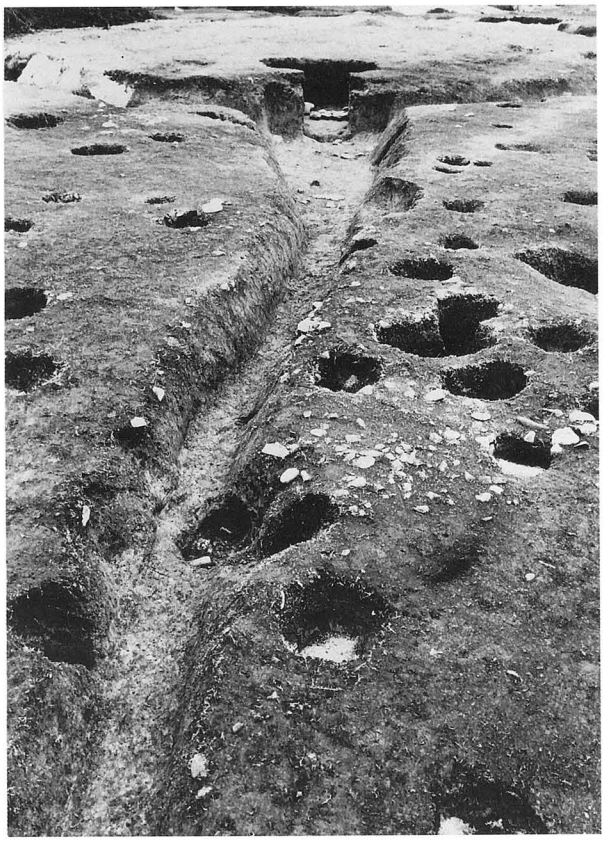


112. 17号地下式横穴墓閉塞基底石検出状況

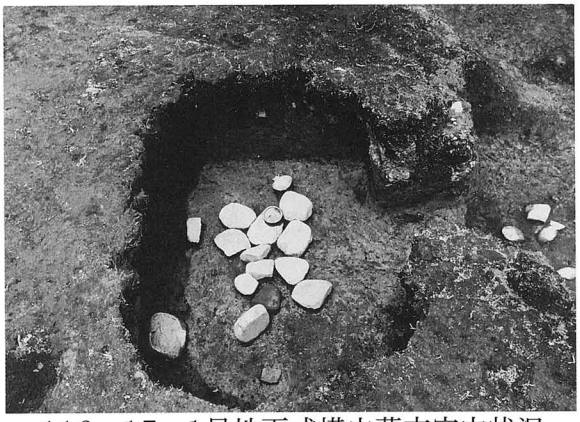


113. 17号地下式横穴墓(竪坑から羨門を望む)

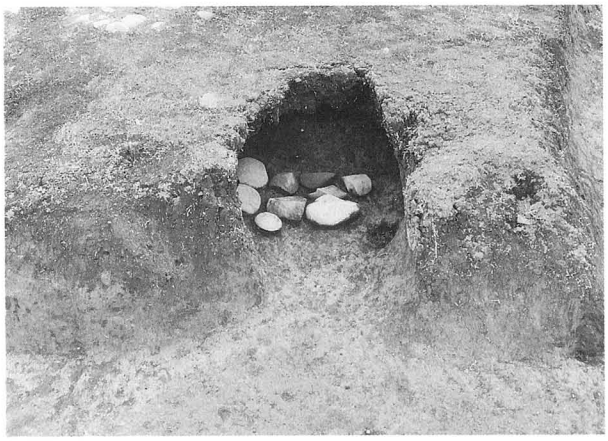
114. 17号地下式横穴墓(玄室側から竪坑を望む)



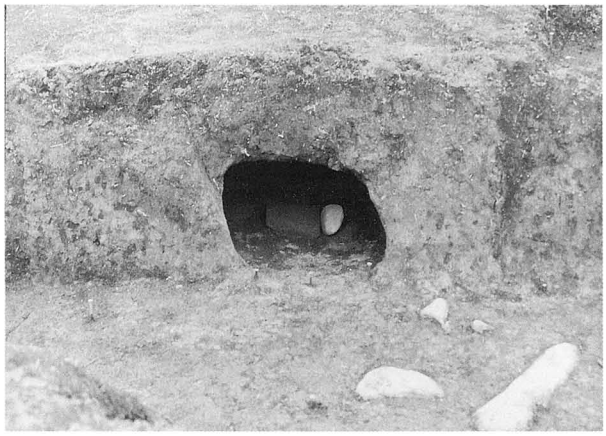
115. 17号地下式横穴墓全景



116. 17－1号地下式横穴墓玄室内状況



117. 17－2号地下式横穴墓(竪坑から玄室を望む)

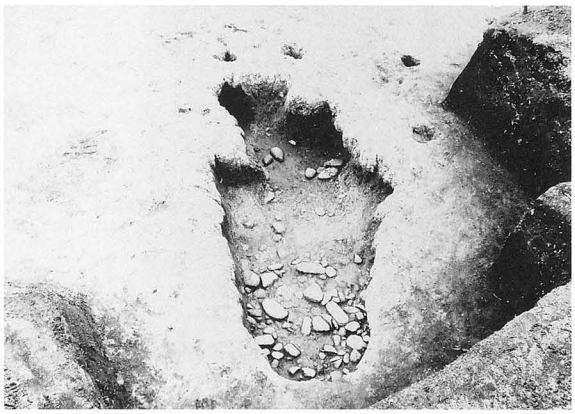


118. 17－3号地下式横穴墓(竪坑から玄室を望む)

119. 17－4号地下式横穴墓(竪坑から玄室を望む)

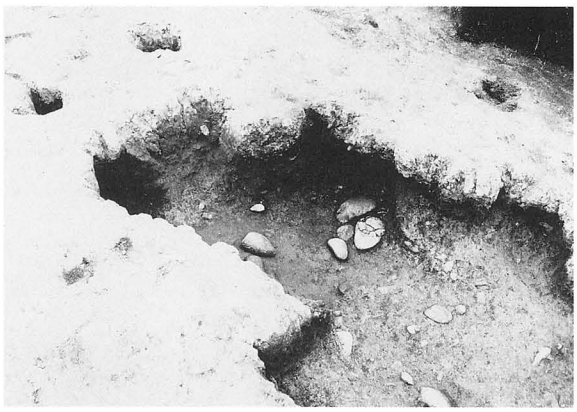
120. 18号地下式横穴墓半裁状況

122. 18号地下式横穴墓閉塞状況



123. 18号地下式横穴墓全景

121. 18号地下式横穴墓閉塞状況

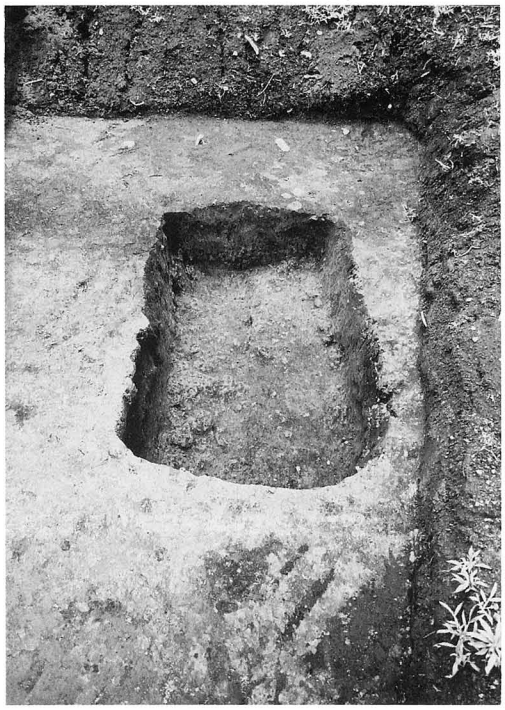


124. 18号地下式横穴墓遺物出土状況

125. 1号土壙墓半裁状況

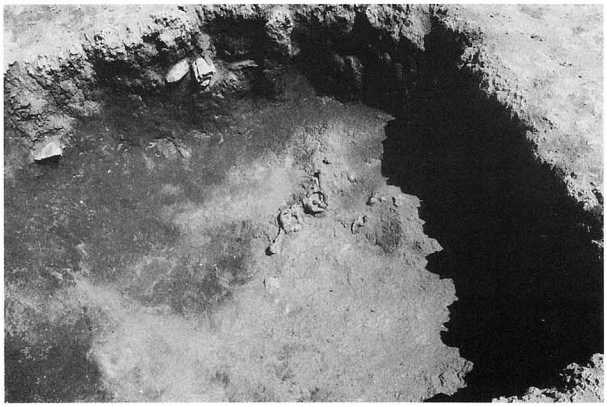
126. 1号土壙墓半裁状況

127. 1号土壙墓遺物出土状況

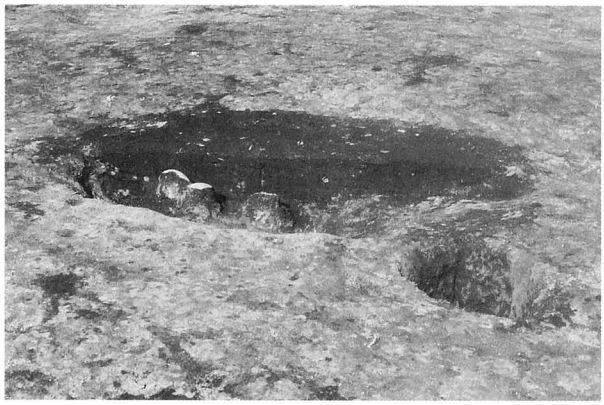


128. 1号土壙墓完掘状況

129. 2号土壙墓(馬埋葬土壙)全景



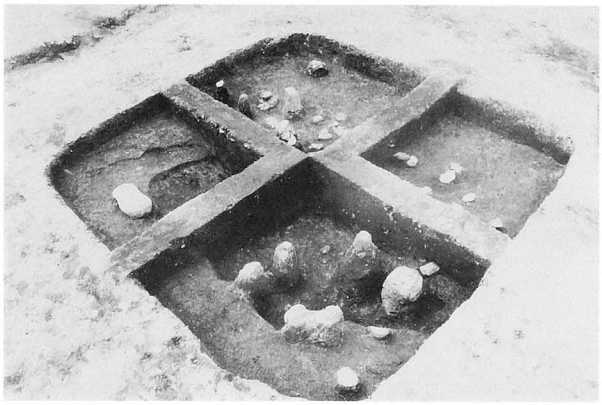
130. 2号土壙墓(馬埋葬土壙)遺物出土状況



131. 3号土壙墓遺物出土状況

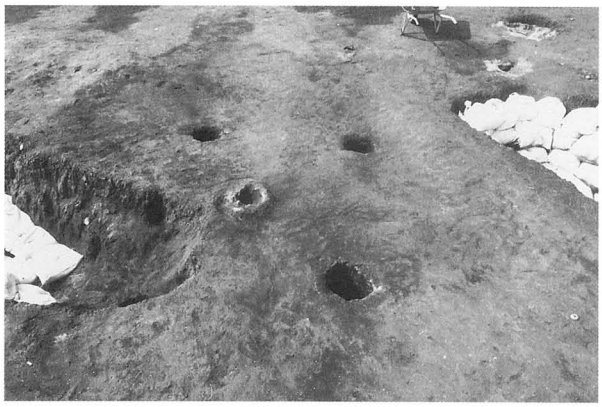
132. 4号土壙墓遺物出土状況

133. 1号住居跡検出状況



134. 1号住居跡遺物出土状況

135. 1号住居跡土層断面

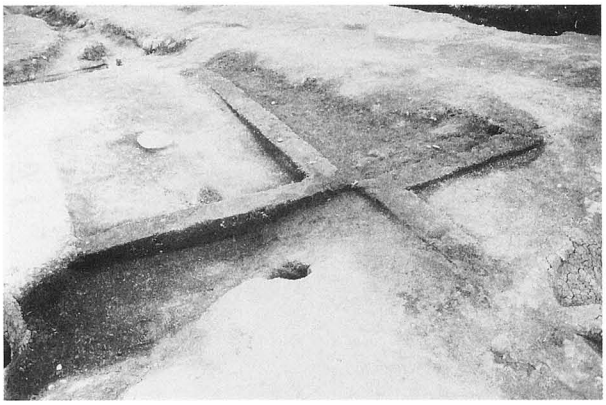


136. 2号住居跡全景

137. 3号住居跡遺物出土状況

138. 3号住居跡土層断面

139. ４・５号住居跡検出状況



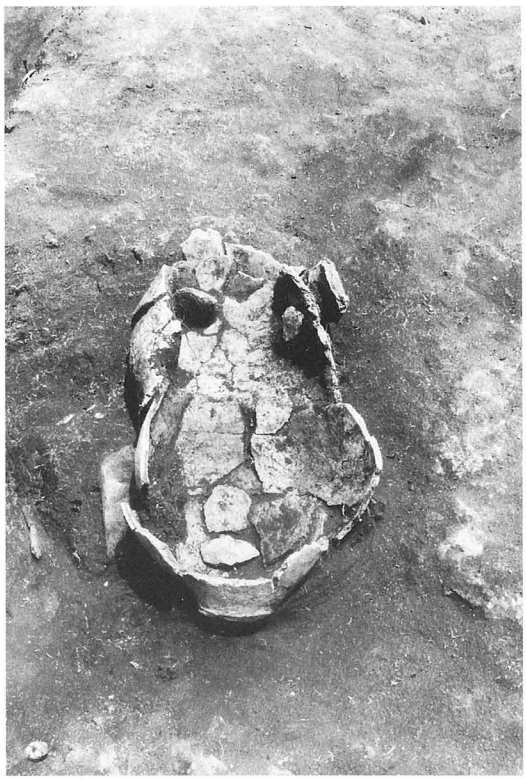
140. ４・５号住居跡掘削状況

141. ４・５号住居跡掘削状況

142. ６号住居跡掘削状況

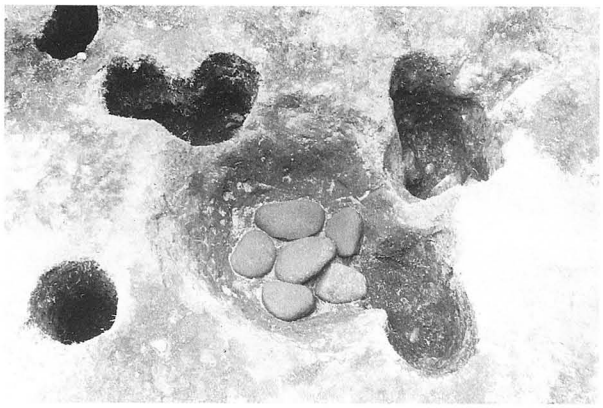
143. ２Ａグリッド合わせ甕出土状況

144. ２Ａグリッド合わせ甕上部破片除去後



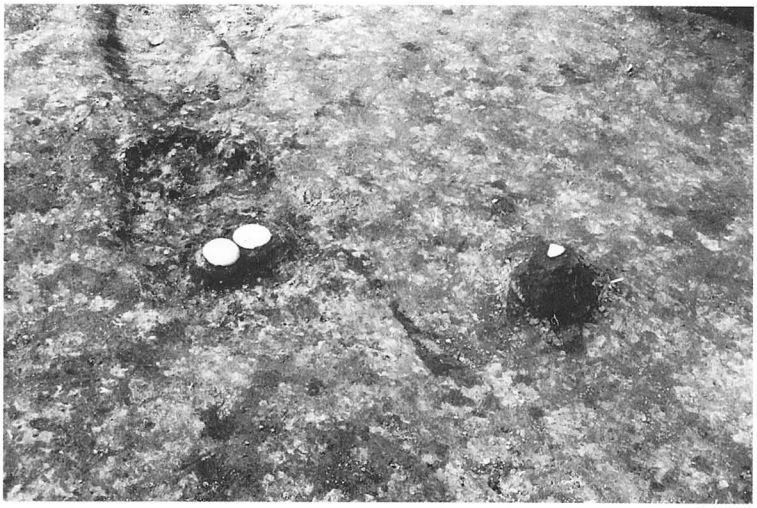
145. ２Ａグリッド合わせ甕上部破片除去後

146. １・２号集石遺構敷石検出状況



147. １号集石遺構敷石検出状況

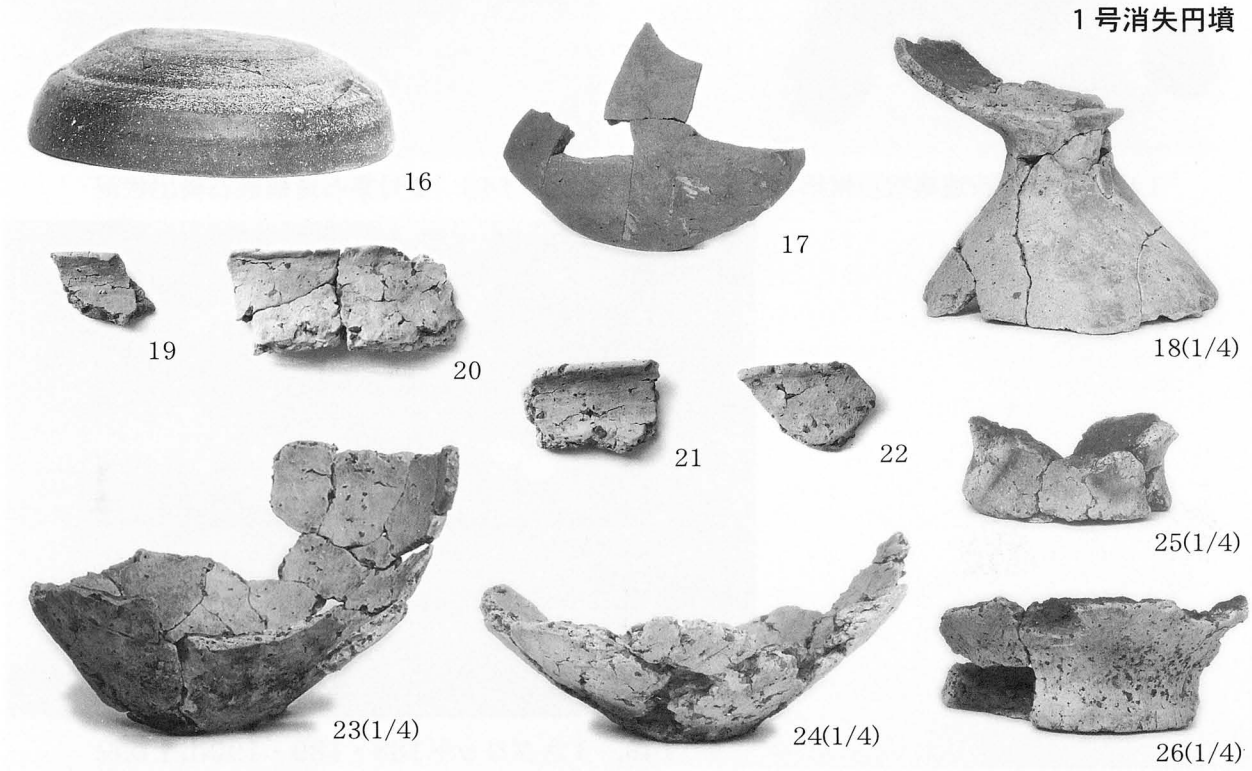
148. ２号集石遺構敷石検出状況



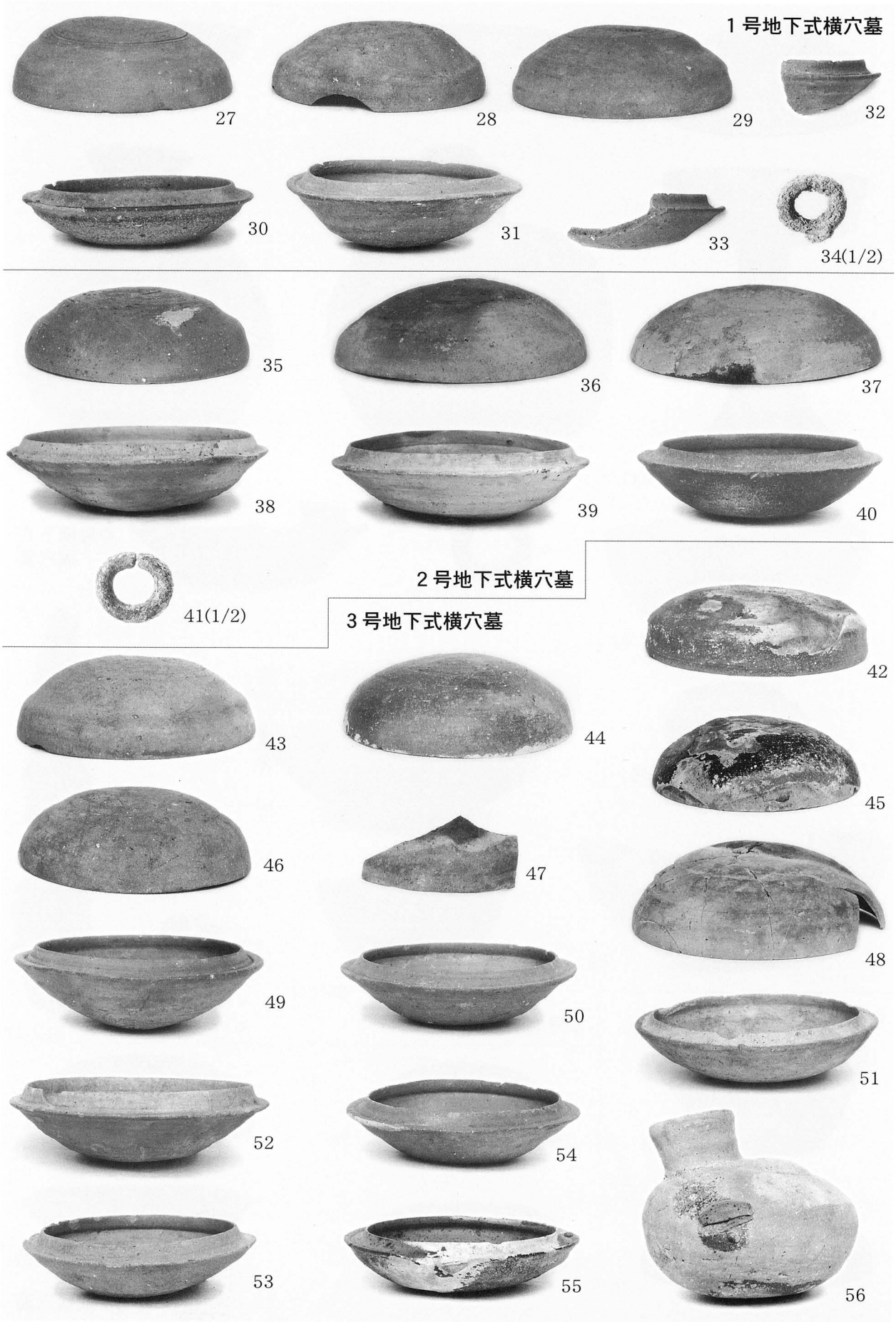
149. １Ａグリッド188・189・190出土状況
(写真左より188・189・190)

1号地下式墓寄生型消失円墳

1号消失円墳



※遺物のスケールは、指示以外は1/3



※遺物のスケールは、指示以外は1/3

※遺物のスケールは、指示以外は1/3

※遺物のスケールは、指示以外は1/3

104

105

106(1/2)

107(1/2)

108(1/2)

13号地下式横穴墓

109

111

113

110

112

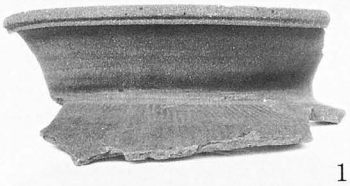
114

115

116

118

117(1/4)


119

120(1/2)

14号地下式横穴墓

121

123

124

122

125

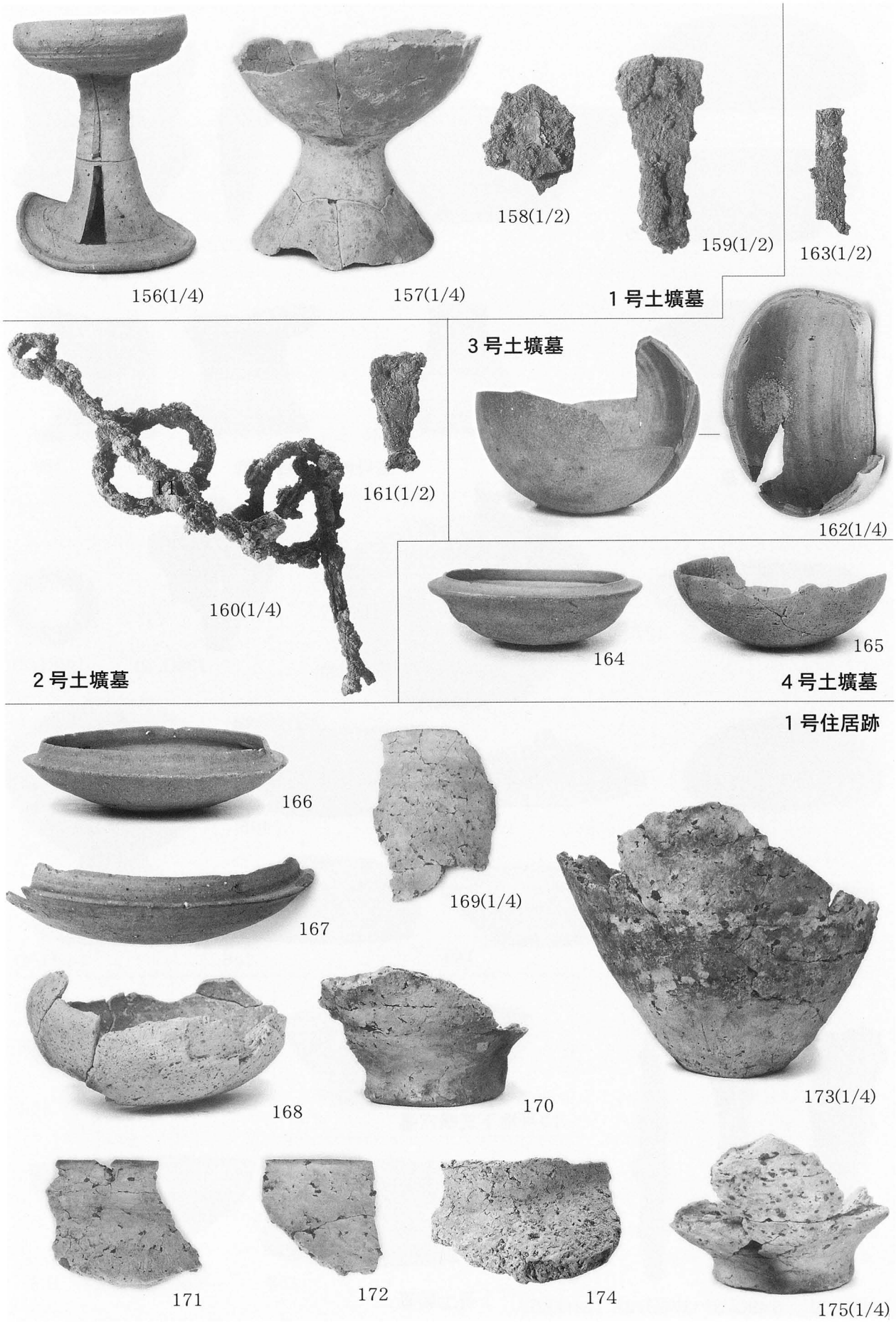
126(1/4)

127(1/2)

15号地下式横穴墓

※遺物のスケールは、指示以外は1/3

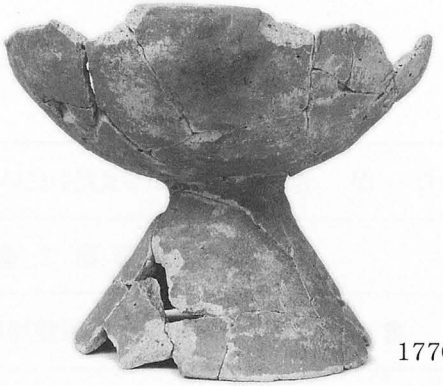
※遺物のスケールは、指示以外は1/3



※遺物のスケールは、指示以外は1/3

2号住居跡

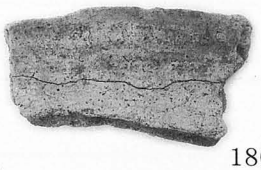
176(1/4)



177(1/4)

178

179



180

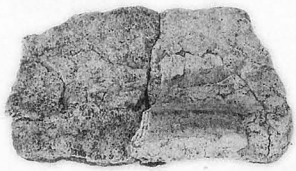
181(1/1)

3号住居跡

4・5号
住居跡

182

183



184(1/4)

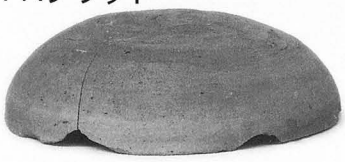
2Aグリッド

185(1/4)

186(1/4)

187(1/4)

1Aグリッド



188

189

190

191

溝1(SE1)

192

溝2(SE2)

※遺物のスケールは、指示以外は1/3

報告書抄録

ふりがな	どうがしまだいにいせき
書名	堂ヶ嶋第２遺跡
副書名	妻北土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第１集
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第３３集
編著者名	筌瀬明宏
編集機関	西都市教育委員会
所在地	〒880-8501　宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地　TEL 0983-43-1111
発行年月日	西暦　2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)
		市町村	遺跡番号				
どうがしまだいにいせき 堂ヶ嶋第2遺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおあざみやけあざどうがしま 大字三宅字堂ヶ嶋			X＝－98245.00 ～ X＝－98345.00	Y＝37675.00 ～ Y＝37740.00	2001.11.14 ～ 2002.07.21	3,000

調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
妻北土地区画整理事業に伴う発掘調査	墳墓 生活遺構	縄文～近世	集石遺構 竪穴式住居 地下式墓寄生型円墳 消失円墳 地下式横穴墓 土壙墓	弥生土器 石器 土師器 須恵器 鉄製品 耳環　等	

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第33集

「堂ヶ嶋第２遺跡」

平成15年３月31日発行

編集発行　西都市教育委員会

印 刷 所　㈲ 河 野 印 刷 所